THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

第三十一年第九號　第三百三十四號

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

日とのみ競ふ

マツダランプ



■……五拾燭光迄長型壹個金五拾錢……■

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目　電話新橋一九三・三二一二 長一〇五九

横濱出張所　横濱市伊勢佐木町一丁目　電話横濱一七一一

大阪出張所　大阪市西區阿部堀通一丁目五番地　電話長四一〇九五

御照會の節は此點線を切取りお送り下されば綺麗な説明書を差上ます

御住所

御姓名

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央大學學生募集

○法科大學（英法科 獨法科）

○商科大學

○大學豫科（英語 獨逸語）

○經濟科大學

○各科專門部（正科 別科）

○英語專修科

右學生を募集す○大學部入學は豫科卒業又は入學試驗及第者○專門部入學は中學甲種商業卒業又は入學試驗及第者○大學豫科入學は中學及甲種商業卒業又は同資格者とす○商科は午前八時より、法科には晝間授業の外別に夜學科の設あり經濟科も亦夜學にして孰れも午後五時半より授業す○九月二日及同九日入學試驗擧行同十一日より各科の授業を開始す入學受驗者は各試驗前日迄無試驗入學者は始業前日迄に申出らるべし又法科、商科十五名を限り**貸費生**とす貸費生志望者（資格は中學、甲種商業卒業及同資格者）は來る八月二十一日迄に申出らるべし○學則其他の規程は二錢郵券添附申込あり次第送付す

大正五年八月

東京神田錦町 **中央大學**



中央公論第卅一年八月號目次



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

日露協約の成立

我社多年の持論にして、幾度か意見を發表して當路の注意を促す所ありし日露同盟も今次の協約に由り愈々事實となりしは吾人の深く滿足する所にして、亦た當路の勞を多とするものなり、此問題に關しては日露戰爭以前より兩國提携の企圖あり、我邦に於ては故伊藤公山縣公夙に此の問題に着眼して謀るところありしも、露國に於ける獨逸系の勢力尙ほ旺盛にして所謂極東政策その滿潮時に在りしを以て、不幸三十七、八年の開戰を見るを餘儀なくせられしも、露國との戰爭は決して我邦の素志に非ず、今や時機到り這般の協約を見るに至り玆に我邦は露國をして自由に其傳統的政策を近東方面に行はしめ、露國は我邦をして極東に對する天職を盡すを得しめ、共に提携して北方支那の平和の支持に盡さんとするに至れるは獨り日露兩國の大幸なる耳ならず亦實に世界平和の一大保障といふを妨げず、獨逸は曩さに自ら中部歐洲に活動の餘地を得んと欲して墺太利を東方に進出せしめて巴爾幹に於て露と衝突するに至らしめ、更に露を誘ふて極東に進出せしめて我邦と衝突せしめたり、即ち今次の歐洲戰爭も前年の日露戰爭も同じく獨逸の姦計譎謀に因りて生じたる災禍にして、今や各國漸く獨禍の恐るべきを覺醒したる曉に當り日露協約の締結を見るは實に是れ自然の數と云ふべし、日露同盟は毫も日英同盟又は露佛同盟と牴觸することなく、協約文の內示に對しては英佛ともに十分の快諾を與へたるが如きは素より當然なりと雖も亦た甚だ喜ぶべしとなす、吾人は更に一歩を進めて、近き將來に於て日佛間類似の協約を締結し、遂に四國同盟の成立を見るに至らんことを希望するものなり。

中央公論



八月號
第卅一年第九號
第三百三十四號

歐洲戰爭と世界の宗教問題

（一）

今や戰雲暗憺として歐洲の天地を籠めて人生の悲慘を極め世界各國孰れも戰爭と戰爭の噂を以て滿つるに際し、印度の詩人ラビンドラナス・タゴール氏我帝都に入り印度の使信を說き日本文明の精華を論じ以て大に我邦人に警告するあらんとするは亦以て頗る之を珍重するに足れり、想ふにタゴール氏の意見に對しては世間必らず是非の論なきを得ず、其近世科學に對して殆んど之を呪咀するが如き口吻ある、又は我邦の勃興を以て大に東洋の誇となすが如きも同時に西洋文明の模倣を卑下し新日本を解して一模倣に過ぎずと見做すが如き傾向ある、印度の文明と社會を理想化し其亡國の淵源を究むるを努めざるの嫌あゑ、槪して氏の所說は天地自然の大勢力に打勝ちて人間の理想を實現し以て眞正の文明社會を地上

に築立てんと欲するに非ず、寧ろ天然自然に順應追隨しつゝ心を靈界に離脱して安心立命の地を求めんと欲するに在るものゝ如く、厭世の色彩亦た濃厚なるものあり、其極端なる主張は吾人の與せざる所なれども、世擧りて名利に狂奔し國家又は人種の利害の外に別に仁義公道あるを忘卻せんとし、殊に富貴成功の外別に心神を悠遊すべき樂地あるを忘却せんとする今日の人情に向つてはタゴール氏の來遊は蓋し一種の淸凉劑たるを失はず、氏の如きは殆んど印度に非ざれば產すべからざる人格にして、卑俗なる唯物思想に囚はれたる現代に向つて精神界の實在を具體的に示現するものと謂ふ可らずや。

今次の歐洲戰爭は廣く根本的に其原因を論ずれば人類種族の生存競爭の結果なりと云ふべく、更に事實に就きて觀察すれば巴爾幹に於けるスラブ及びチウトン兩民族の勢力の競爭に起因し、獨逸國と英佛露各國との霸業の衝突に激發せられて遂に今日の慘狀を呈するに至れるものなり、別語之を云へば世界の元始以來到る處に行はれし民族間の生存競爭が今や國家と國家との間に於ける競爭と變形し、近世科學の發見を借り來り一層の酷烈痛慘を加ふるに至れるものなり、即ち元始の狀態と今日と形式は稍々異なれども實質を同ふし、若しも生存競爭の根本に溯ぼれば人類の思想感情は元始時代の如く、道義の說、文明の理想頗る喧々たりと雖も人間の實質多く變化し居らざるを示す、往古には山野に跋扈する猛獸を退治して安定の居住を開きしが、今や野蠻の民族を退治して文明の地域を拓くと稱す、然れども同じく文明先進國と稱する諸國の間亦た嫉視競爭の結果今次の大戰爭を惹起するに至る、文明人の面皮を一重だけ剝げよ必ず野蠻人を見んと云へるは誠に克く事實を穿つものに非ずや、獨逸人の全世界に向つて誇稱する文明即ち「クルツウル」の如き科學應用の一點に於ては殆んど天下無敵の觀あれども道義觀念の

應用に至りては遙かに英佛に及ばざるが如し、然かも英佛とても其國民的運動の動機は國家權勢の保持の外に出でずして、從來歷史上に印蹟し來れるものに就て觀れば其今日の隆々たる國勢は多くは他の民族の死屍窮骨を以て築上げらると云ふも妨げず、彼等が今日道義を說き公法を論ずる所以のものは偶々國家老成の結果とも見るを得べく、ロックフエラ、カーネギ輩も其巨大の資產を作るまでには有らゆる殘忍酷薄の手段を取りしに關はらず、一たび巨大なる資產の基礎成るや乍ち大慈善家と化し全世界より平和明神として崇拜せらる、英佛の今日亦た大に之に類するものなからずや、然らば東洋諸國は如何、曰く印度、支那、又たは我日本、若しもタゴール氏に言はしむれば精神界の事に於ては遙かに西洋各國に卓越するものあるが如く理想化せらるゝも、事實果して然るや否や、人道の脚地より觀て東洋諸國は果して西洋に比して博愛慈善の事業に富み、政刑の法寬大にして民人の幸福を擧ぐることを得たるや否や、又は國と國との關係に於て常に正義公道を把持するを得たるや否や、斯く自問自答せばタゴール氏と雖も自ら思ひ半ばに過ぐるものあらんなり、遺憾ながら吾々東洋人は前古聖賢の敎によりて博愛仁義の訓を聞くことあるに關はらず近世に至り社會實際の道德思想に於ては多くは之を泰西文明の敎に待てり、病院なり、貧兒院なり、社會的救濟なり、政道の改善なり、戰時規定の條約なり、其他非戰論、仲裁條約皆な是れ歐米人士の提唱に係り、我東洋人士は之を先づ歐米人に聽きて後に古賢聖の敎に是正すと云ふの順序を踏む、然れば世界各國一長一短の相違あるを免れずと雖も何れの國も未だ人道の理想に達せざるや遙に遠し、國家觀念を缺亡し外來の强國に庇護せられて僅かに社會の治安を保つを以て足れりせばイザ知らず、苟も民族獨立の意地を有し且つ國勢の隆運を期するに於ては他の國家との衝突をば免

る可らず、民族的物慾の發動亦た此間に雜はりて益々事態を繁多險惡にして、人道の理想と逆行倒歩する傾向を免れず、是れ世界各國志士仁人の最も深憂とする所にして、殊に世道の支持を念とする宗教家の責任に歸すること多し、故に吾人は今次の歐洲大戰爭の發端より其必ず世界の宗教家より深大の反應を惹起すべきを豫期し常に注意を怠らずと雖も未だ曾て人意を强ふすべき程の反應としては世界何れの方面に於てゝ之を認むること能はず頗る遺憾の念に堪へざる折から、タゴール氏の來遊に接し其自信に富める使信を聽く、仔細に評論せば其論或は完膚なきに庶幾らんも、其淸淨を愛し博愛を唱へ、弱肉强食の世情を痛歎するの精神に至りて大に吾人の同情を惹くものなくんばあらず、我邦の宗教家は耳に歐洲戰場の慘憺を聞き目に精神界の示現としてタゴール氏に接す、果して何等感奮興起する所ありや、否や。

（二）

服を轉じて歐洲方面に向へば今次の戰爭開始の後ち各國宗教家の態度に關し一瞥に價するものなきに非ず、蓋し開戰中に於ける彼等の行動言說を以て多少戰後の狀況を推測すべき材料となすことを得べければなり、今より二年前開戰當時のことなり、獨逸有數の宗教家學者等連署して一の宣言を發し獨逸開戰の理由を以て止むを得ざる自衛防禦に外ならずと辨明し英佛露の開戰の理由を以て獨逸の隆々たる盛運を嫉視して之を亡ぼさんとするに在りと力說せしことあり、而して之に對し英佛側に於ては大に其反駁に努めたるは讀者の記憶に新たなる所なるべし、此關係に於て獨逸學者中の最も著名なるはハルナク教授とオイケン教授の二人にして、倫理學者として後者の盛名は我讀者の夙に知れことならん、即ち若

しも今次の戰爭開始せられざりしならばオイケン教授は昨年あたりには我邦に渡來し大に我が倫理觀念の向上に資するあらんと期し我國人亦た一般に深く期待する所ありたればなり、ハルナック教授に付ては我邦に於ては恐らくオイケン教授ほど一般には知られざるも、歐米に於ける彼が盛名は寧ろより以上に在りと云ふべく、其の古代基督教に關する造詣識見に至りては卓然として多く比儔を見ず、斯る知名の學者の言説は自ら重きを成さゞるを得ざる譯合なるが、ハルナック教授は前顯英國學者の辨駁に對し左の如く答辨せり、曰く

「英國は我儕（獨逸）を亡滅すべき日の來れるを信ずるならん、英國は何故に我儕を亡滅せんと欲するや、此れ我儕の勢力、活動及び繁榮を忍ぶ能はざればなり、此れ以外には說明の仕方あらざるなりと、

又其後獨逸軍隊の暴行世界の批評に上るや、ハルナック教授は曰く我が義俠心に富み道德堅固なる軍隊に向ひ暴行ありと云ふは全然之を誣ゆるものなりと、是により察すれば平生識見の超邁を世に知られ頭腦の冷靜を特色とする流石の大學者も一たび國難に際して愛國狂熱に驅らるゝや殆んど市井の凡人と擇ぶ所なきを知るべし、佛國ニームの牧師バブートなる人今次の戰爭に由り同じく基督教を奉ずる諸國が互に深仇を懷きて相攻伐するの慘狀を慨し一の共同宣言書を起草して之を獨逸帝室牧師ドリアンデル氏に送りて其署名を求めしことあり、其宣言書の趣旨中には各國開戰の理由、其是非曲直に對しては一切之に言及せず、偏へに戰爭の慘狀を述べて基督教の同胞主義に則とり、機會ある每に敵人にも慈悲を施すを忘れず勝者は敗者を虐げず、勝者たる權力を濫用せず、一日も速に此戰爭の終息して地上に天國の開けんことを懇禱熱祈すべしと云ふを趣意とせり、然るにドリアンデル氏は之に答へて曰く我儕

は該宣言者に署名するを欲せず是れ世間或は獨逸軍が毫末にて暴虐の振舞ありとの疑を生ぜんことを恐るればなり、我軍の號令嚴肅にして、戰員外の敵國人民に損害を與へざるは言を待たずして、殊に此種の宣言を爲すの必要を見ずと云へり、此等の事情よりして觀れば獨逸側に在りても、又は英佛側に在りても其國の宗教家學者殆んど一人を除かず皆な自國を以て正義に與みし反對側は不義不正の脚地に立てりと爲すを知ると同時に、自らを義とし他を不義とする一段に於て獨逸の方最も熱心なりと云ふ可きに似たり、英佛に在りて獨逸の軍國主義を惡むこと甚だしけれども其國家の過去現在の實情に對し稍々自反の態なき能はず、今次開戰の止むを得ざりしを遺憾なりとし、戰爭の試練を經て人情亦た頗る清めらるゝ處あり西歐文明の精神的方面爲めに大に向上するあらんことを希ふが如き多少其の謙讓を示すものにして、獨人の傲然自らを義として横柄を極むると對照して寧ろ殊勝の觀なしとせず、若し過去の歷史に就て論ずれば英や佛や曾て今日の獨逸の如く國勢の隆々たるに增長して横暴を逞ふして省るを知らざりしことなきに非ず、唯だ今にして前非を悔ひ心に忸怩たるものあるに似たるは獨逸に對し一日の長ありと謂ふ可きか。

羅馬法王は全世界の人類に對し精神界の權威を以て任ずるものなり、法王ベネデクト十五世が今次の戰爭に對し如何の態度を採り如何の影響を及ぼすべきかは頗る興味ある問題なり、法王が先般一書を米國大統領に送り平和調定のことを謀りしことあるは當時の外電之を報じたる如くにして、若しも時機一たび熟せば兩交戰國の間に斡旋して平和克復を成就せんものは必ず羅馬法王と米國大統領たるべきは何人も疑はざる所たり、蓋し米國大統領が私情よりせば獨逸に對するより英佛に同情すること多しと猜せ

らるゝが如く、羅馬法王の同情は英佛に對するより寧ろ獨逸に傾くこと多きに似たり、是れ英國は新敎國として平素法王の覺芽出度からざるは言を待たざる所、佛國は舊敎國にして最も法王の同情を惹くべく思はるれども第三共和政治の創立以來兎角法王政府との關係面白からず、殊に近年宗敎と政府の關係を絶ちてナポレオン以來のコンコルダットを破棄してより益々法王の激怒に觸れしものゝ如し、故に法王は世界中に於ける最愛の子たる佛蘭西よりも寧ろ宗敎改革の淵源地たりし獨逸に同情あり、蓋し現在の獨逸は南方一圓舊敎に歸依して最も忠誠なる耳ならず。北方の新敎諸國と雖も現皇帝に代表せらるゝ以上は法王の怒を買ふに慣せず、寧ろ皇帝は法王の勢力を世界政策上に利用せんとし法王亦た獨逸の勢力を利用して敎權の擴張を謀らんとし、双方功利心に驅られ互に相結托せんとするものゝ如し、故に法王が佛國に對するより多くの同情を獨逸に注げりと斷定するも必ずしも根底なき誣言と云ふ可らず、斯くてウイルソン氏とベネデクト十五世と互に開襟協力して和議に斡旋せば兩交戰國に取り頗る滿足なる仲介たらんこと察するに餘あり、但し戰爭は今正に闌にして和議を論ずるの尙早きは吾人の遺憾とする所なり、吾人は今羅馬法王は獨逸に同情ありと云へり、然れども是寧ろ私事のみ、法王の公けの態度は昨年一月に各交戰國の信徒一般に向つて發せし訓詞により知る可し、其訓詞に曰く

若しも神が我儕に此の痛苦なる不幸（今次の戰爭）の終止を早むるの働きを爲さしめ給はずば我儕は少なくとも其悽慘たる結果を緩和し得んことを祈るものなり、神意を開示するの職責を荷へる我儕法王は玆に改めて何人と雖も、其如何なる辭柄に由るに關らず、正義に反し暴行を敢てす可らざることを宣言するを以て本分なりと思惟す、而して双方孰れの側に於て行はるゝも凡ての不義不正を敢然排斥せざる可らず、然ればとて法王職を以て双方孰れかの味方たるの必要を見ず、法王は今の恐怖すべき戰鬪に對し全然不偏不黨たらざ

るを得ざればなり。

イエス・キリストの代理にして總てのカトリツキ教徒の共同の父たる羅馬法王は凡ての交戰者に對し平等の寛仁を施さゞるを得ず、双方孰れの國内にも彼の子たるもの多數ありて其靈魂の救はれんとは彼に取り平等の要感たり、故に法王の脚地よりせば彼等を分離する各種の利害に關してよりも寧ろ彼等を連繋せる共同の信仰あることを記憶するを必要なりとす、若しも然らずして利害衝突の渦中に投ずるにも至らんか法王は平和を將進する能はざる耳ならず却て宗教に對し嫌惡怨恨を惹起し教會内の平和一致を破壞せらるるの危險に陷らん。

吾人が茲に法王の訓詞を引用して讀者の注意を促がす所以のものは他なし羅馬法王は地球全般に亘り一億八千萬人の信徒を有する教會の主長なるが故なり、大凡世界に宗教の門派多しと雖も未だ一團體にして一人の統轄に服するもの天主教の如く多數なるものあらざればなり、今この羅馬法王は獨墺にも佛蘭西にも多數の信徒を有し英國の如きも愛蘭土の大半は舊教徒なり、然れど法王として今次の交戰各國に對し其孰れか正義にして孰れか不正義なるを判斷し又は孰れか比較的に正義にして孰れか比較的に不正義なるかを公然言明するは頗る其迷惑とする所なるべきも、條約を故なきに破棄して隣邦の中立を犯侵し、公法を無視して無辜の非戰闘員を殘害するが如きは法王の職責上必ず之を非責して其所謂正義の何物たるを示さゞる可らず、然らずして只だ空漠たる正義排斥の一句を宣して止むは法王自身亦た某强國の怒を恐れて正義を踏むを憚りたりとの非難を免る能はざるべし、是實に吾人が法王の至高至上の宗教的位置に對して甚た慊たらざるの感を爲す所以なり、獨逸の神學者、倫理學者、宗教家等は極端の愛國熱に驅られて自國の辯護に偏僻し、羅馬法王は教會内の紛糾分離を慮りて最も簡單明了なる是非の斷案を下すを敢てせず、其跡同じからずと雖も正義人道に純忠ならざる心事は多く擇ぶ所なしと謂はざるを

得ず、歐洲基督教の倫理的權威亦た甚だ振はずと謂はざる可けんや、說を爲すものあり大戰爭の殘害益々甚だしきに從ひ交戰各國孰れも頗る宗教に對する熱心を增加しつゝありと、蓋し是れ或は一面の現象ならんか、我邦の如きも日露戰爭時に於ては神佛の信心頗る活氣を呈せしやの觀あり、佛國の如き一方自由思想の普及著るしきも一般には舊信仰の基礎容易に動かざるあり、今次戰爭の進行と共に敎會に參詣し、護身符を崇敬するの風を加へたりと云ふ亦た是れ事實なるべし、人力盡きて生死の境に立つや自ら神佛に祈り天地に號泣するは人間自然の情なり、殊に一朝大戰亂終息し各國民其張詰めたる肩を緩め徐ろに過去を追懷し前途を望まば、戰死せる父や子、夫、兄弟、親友は呼べども返らず人生の悲慘身に浸み渡らん時多くは期せずして宗教に依り其慰安を求めんこと想像に餘あり、白耳義、西北部佛蘭西、ガリシヤ、ポーランド等最も多く戰禍に罹りし地方にありては必ずや一般に信仰復活の觀あるべしと云ふは蓋し空想に止まらざるべきか、然れども直接に戰亂に遭遇せざる英佛の地方、又は戰敗の餘益々敵國を怨み復仇の精神勃興すべく思はる獨逸人、更に又た戰爭の爲め多大無限の利益を收め、富國强兵を以て歐洲を凌駕せんとする北米合衆國の如きに於て世俗的、物慾的氣習は從前に比し一層の濃厚を加へ偶々精神的運動の起らんとするも或は之を壓倒し去らんとするの恐れなき能はず、特に合衆國に於ては其富力の激增は益々該國人の自負心を增長し、一方には平和論を唱ふるものあるべく、壯嚴偉雄なる大寺院は到る處に建立せられ以て精神的文明未だ全く痕を絕たざるを誇るべしと雖も、唯物的傾向は益々昂上し、到底此方面よりして世界の人心を一新すべき宗教的大運動の起るべしとは思はれず、然らば則ち東洋は如何、タゴール氏は日本に對する印度の使信を論じ又た日本特有の精神を說きて、西洋文明の昭

眾方面を照するもの即ち東洋に在りと高調せり、果して然る乎、印度に於ては古來精神界の研究最も盛にしてウパニシャットの哲學あり、リグウイダの宗教觀あり、遁世苦行の流行あり、宗教として印度教、佛教の如き大宗教の起るあり、以て優に世界に向つて大に誇るに足れるも、近世の印度は精神的文明に於て特に西洋をも凌駕するを得るや否や、若しも民人貧愚にして物質的文明の恩惠に浴せざるを以て却て精神的文明に上進せる表證なりと云ふを得ば、印度人は必ず西洋人の持たざる一種の高貴なる生命を持てりと推論することを得べきも、物質上の發達と精神上の發達とは必ずしも兩立し難きに非ざる耳ならず、物質上の貧弱は必ずしも精神上の富强を意味せず、宛も是れ肥滿强大の肉體を持てるもの必ずしも俗惡の人たらざるの如く、又た瘦軀倭少の人必ずしも聖人君子たらざるが如し、想ふに若しも現代の印度にして果して西洋文明の缺點を補ふに足るべき精神上の生命あらば必ずや社會の現狀の上に歷々其證表を呈し來れるなるべし、然るに社會上に於て毫も斯る優越せる生命あるを示さゞる耳ならず、苟も人道博愛の趣意に基ける施設に就て見ば、其敎育たり、醫療施藥たり、饑饉救濟たるに關はらず悉く範を西洋文明に取らざるはあらず、否な其多くは西洋人の努力と寄附金に由り維持せらるゝ奇怪なる現象あり、之に由りて察すれば西洋人は印度人に對し獨り物質文明に於て優れる耳ならず精神文明に於ても亦た一日の長ありと云はざる可らず、若失れ精神界の問題を專門主一となすべきことを指示するを以て印度の使命なりと云はゞ是れ一理なきに非ず、然れども其實行に至れば西洋は却て印度に優り日本の如き亦た敎を印度に仰ぎつゝ寧ろ出藍の譽ありと云はざるを得ず、即ち稱して印度の使信と云ふもの果して何等具體物を指すことを得る乎、然れば印度にして若しも精神界の問題に付て世界を指導すべきもの

ありとせば是れ其過去の成績を通ほして爲すを得るに過ぎずして、現在の印度に於てはブラモ・ソマーヂあり、アリヤ・ソマーヂあり其他幾多の改革運動あるも概ね皆な局部的の運動に止まり未だ以て世界の人心を一新すべき著明のものあるを聞かず、我日本の精神と云ふが如きタゴール氏の指摘せる如く一種優美纎巧なる心的特徵あるは事實なり、是れ凡神敎佛敎哲學の間接の產物とも云ふを得べく、又た我大和民族本來の精神的傾向の表現とも謂ふを得べし、其倫理的に顯はるゝや天地と人間に對する同情となり君父に對しては忠孝となり朋友に對しては信義となる、此精神上の特質は如何にもタゴール氏が言ふ如く西洋の豪健强猛なる奮鬪的文明の爲め動もすれば壓迫され易く、之を保養發達するは吾人の一日も忘る可らざることたる論を待たず、然れども所謂我が特質は寧ろ美術的の資性に富み、倫理又は宗敎上には世界を指導すべき程の元氣ありと思はれざるを遺憾とす、之を要するに今や全世界を擧げて物質的文明の風靡するに委せられ、印度は往古を通じて精神界の問題を呈供し、日本は其優美纎巧の心的特徵を有すと云ふに過ぎず、曾てピユリタン主義の上に建てられた、北米合衆國も次第に唯物的文的の進步に遭ふて、精神界の凋落を見んとし、英や佛や獨や露や大戰爭の渦中に在りて各國唯だ戰勝を期して奮鬪するの一事ある耳、各國の學者宗敎家は各その國に殉して一種の戰鬪員と化し去り、卓然として萬國の上に立ち上帝の代理を以て任ずる羅馬法王亦た政略に拘泥して一世を指導するの大訓を發すること能はず、人道の前途亦た甚だ暗憺たらずや。

（三）

然れども今次の大戰爭一過し歐洲の各民族徐ろに回顧反省の機會に接する時遂に何等覺醒の效果なしとせんや、歐洲列國は既に經濟實業の方面に於て一大革命の起るべきを豫期し聯合諸國の如きは經濟會

議を開催して前途の經綸に怠りなきを示せり、政治思想の上に於ける變動の如き吾人が前號評論せるが如く頗る顯著なるものあるべきは疑を容れず、獨り人生最高至上の精神界に於て何等影響なくして止まんや、抑も今次の大戰爭は基督教の一大恥辱たるは如何に辯明に努むるも遂に拒む可らず、從來歐米國民常に口を開けば其文物の光華燦爛を語り以て基督教の優秀を證明し得たりとなせしが、今や同族殘害し骨肉相喰み千古の大慘局を現出しつゝ果して何の顏色ありてか異教民族と相見んや、玆に於て彼等の先覺者は必ずや一般に宗教上一大革新を行ふの必要を認め大に計る所あるべきことと想像するに足れり、何となれば若しも歐米の精神界にして更に一段の刷新を見るに至らずんば基督教の優秀も之を唱ふに由なき耳ならず、歐米の文化亦た羅馬希臘の後を追ひ破滅に歸するの日遠からざる可ければなり、然れば宗教刷新の必要は何人も之を認むる處なるべきも、さて其實行に至らば幾多の障碍其前途に横はり之を一掃して目的を達せんこと決して容易の業に非ず、其障碍として概ね三個あり、一に曰く十九世紀後半の唯物的論説の結果、宗教の理論的根底破壞せられしこと、二に曰く現世的傾向の益々增長せること、三に曰く國家的感念の益々昂騰せること、即ち是なり、理論的根底の破壞は知識階級をして宗教に遠ざからしめ、現世的傾向の增長せるは即ち世間的利害の緊累の繁多を意味し自ら幽冥界の問題に遠ざからしめ、又た國家的感念の昂騰は即ち國家を至上權威と爲すものにして、宗教の獨立を困難ならしむ、第一の影響する處は殊にプロテスタント各派に取り甚だしく、第二はカトリック教會に取り打撃を受くること最も多し、現に今次の戰爭に際し羅馬法王が各國信徒の國民的向上の孰れにも同情する能はざる位置にあるが如き以て其窮狀を察するに足れり、而かも國家感念の昂騰は新教に取り一面最も便宜なるも、其甚だしきに及べば却て宗教を國家維持の一具と見做すに至りて宗教の威權生命を自滅せしむるに至

る、獨逸の新教に就て見るに、ハーナック、オイケン等の大儒すら愛國狂熱の上に卓越して之を指導する能はず却て滔々俗流の間に漂々たるが如き以て教權墮落の狀を觀るべきなり。

今次の大戰爭は自ら歐洲文明に一大缺陷あるを爆露したり、其缺陷は主として道義制裁の薄弱なるを意味す、玆に於て戰後大に宗教の勃興を觀て人道の益々高く標致さるゝに至らんことと有識者の孰れも希望する所なるも、實際の問題としては前段云ふ如き困難あり、歐米の宗教は果して戰後の機會を利用し一大復活靈動を開始するを得べきや、人生の流離顚沛に遭遇して悲觀的に宗教に入るが如きは即ち五、六世紀、暗黑時代の光景を繰返さんとするものにして吾人の觀んことを欲するものに非ず、吾人の觀んことを欲するものは今の國民的文明の大勢に併行して之を指導誘掖すべき權威ある宗教の勃興にあり、現代物質的文明の一大缺陷を塡補し得べき倫理生命の向上普及に在り、歐米文明の安危存亡は一に繫りて此精神的刷新の實行如何に在りと謂はざる可らず。

歐米宗教界に對する豫想已に斯の如し、東洋方面に向ひ却て多くの希望を屬すべきか、我邦の現情は各宗とも何れも頗る落寞の光景を呈し、歐洲の戰爭に由り果して幾許の刺動を受くべきや甚だ疑問なり、佛教各派依然として沈睡の中に在り、其何の日に覺醒すべきやは豫想の外に在り、基督教亦た概して勇往邁進の元氣なく、社會の一方に蟄居して微々たる光を放つのみ、元來我邦にては現代文の弊も歐米に於けるが如く甚だしからざるが故に其缺陷も彼れが如く甚だしく現はれず、假令歐洲の戰爭に刺戟せられて警發することあらんも、其覺醒の程度も亦自然に薄弱ならざるを得ざるべきか、然れども極東の一方に隔離して宇內の大勢を達觀するを得べき位置に在る我邦は或る意味に於て最も便宜の脚地に立てりとも見るを得べし、此外に於て支那は例外として多少世界精神界の前途に對し刷新の先導として屬望すべ

きは獨り印度の一國ある耳、印度は古來宗敎の國にして多く敎界の偉人を出だしたり、今の世界の危機に際して果して救濟の淵源を此地に求むるを得べきが、タゴール氏の如き暗に此般の印度人民の自負自信を代表するもの丶如き意氣なきに非ざるも、事實果して然ることを得べきや否や、吾人を以て之を觀れば印度人民の中に世界革新の源泉を求むるに就ての一大困難は彼等が現代世界の最强の傾向たる國家觀念に同情し能はざるに在り、印度は亡國にして國家なく其人民中民族的觀念あるなく、獨り宗敎と階級制度の庇蔭に棲息するを知れる耳、彼等の多くが我明治時代の改革を以て歐米の模倣と見做し、國家改造、新日本建立の國民的大運動を理解せざるは、彼等尙ほ亡國の思想を脫せざるを證す、彼等にして一たび民族的又は國民的覺醒の域に入らんか彼等必ずや階級制度を一掃し宗敎的障壁を撤退して以て國家統一の基を築くべきなり、一たび此の大精神を發揮する曉に於て初めて我日本の維新改革の理想を解するを得べきなり、獨り我邦に對して耳ならず歐米諸邦に對しても該諸民族間に欝勃たる國民思想を了解せざれば彼等を救濟す可らず、何となれば國民思想を無視する宗敎は到底現代に發達する望あらざればなり。

斯の如く觀察し來れば人類精神界の前途益々悲觀すべきが如きも、大凡物窮すれば必ず通ず、皇天もし人類に幸せば救濟の運動必ず各地に起るに至らん、世界同憂の士は宜しく此大戰爭に驚醒せられ其揆を一にして起ち、人道を支持し文明の弊を救ひ以て世運を一新するの功を立つべきなり。

政變近く來るべきや否

七月初旬大隈首相辭意を内奏し、寺内伯加藤子を後繼者候補として推擧せりとの說一たび傳はるや、

政府筋に於ては頻りに現內閣基礎鞏固にして辭職の要なきを辨じて風說の打消しに努むる所あり、幾許もなく世間の噂も漸く沈靜に歸し、偶々日露協約の發表あり、引續き文武大官の論功行賞ありて、皮相の見を以てせば隈閣の基礎如何にも安定にして容易に動搖するとなかるべく思はるれど、果して然るや否や、玆に注意すべきは首相が辭意を內奏せるは六月二十三日に在りと云ひ、此事に關しては曾て首相自ら其事實を否定せるを聞かず、若しも內奏の事なしとせば世論囂々たるに際し首相の一言直ちに物議を沈靜し得たるべきに、遂に然ることなく、却て各大臣、書記官長等をして區々にして頗る聞き苦しき辯明をなさしめざるを得ざるものありき、平素新聞記者等に對して爲せし放談は勝手次第に取消して憚らざるも首相も此事許りは流石に取消し能はざるに似たり、今や世間にては一時政變問題の議論を中止するも、必ずしも內閣の基礎安全なりとは見做さず、恰も黃梅雨期の長き陰鬱を忍びて快晴期の近く來らんとするを待つが如く世人は日々に政變に對する天氣豫報を待つものに似たり、今次の論功行賞の頗る徹底せるが如き亦た以て內閣の終末を暗示するものと見做すべき節なきに非ず、寺內伯の歸京後自邸に籠居し寂として消息なき自ら何物をか待つことあるに似たり、若しも十數欠員の貴族院議員の新任を聞くこともあらば則ち政變の愈々迫れるを知るべきなり。

有體に云へば在野二十年の苦節に由り贏ち得たる大隈首相の人望も在野二年間の失政、無責任に由り今や殆んと盡果てたり、偶々日露條約の成功を以て其末路を飾るを得るは天老首相を憐みて退身保安の機會を與ふるなり、更に我日本に幸して歐洲戰局の終りに臨み有爲有能の新內閣を與へんとするなり、其何人に由り組織せらるるに關はらず、吾人は其必ず民心を統一し帝國進運の大機に投して國家百年の大計を定めて遺憾なからんことを期待せんと欲す。―(七月十七日稿)―

公論

國民意識と國家政策

早大教授 大山郁夫

一、國民意識の本體

大方の人は一生に少くとも一度は——而して大抵は青春期に於て煩悶時代を經過するものである。で、有らゆる煩悶の對象の中で、我等を最も嚴肅なる瞬間に投入するものは、靈に從はんか、肉に從はんか、の難問であるが、之に對する最後の解答を與ふる一刹那が、かのマクベスが弑逆の決意をなした不幸なる一夜の如く、屢ば我等の生涯の運命を支配する一大廻轉期となるものである。無論人間は意思に依りて自己の行動を決することが出來る生物であるから、前の企畫を後の熟慮で覆すことも出來ないではないが、或る危機に際して採つた一度の態度が、かの蒼海を漕ぎ分けて行く水夫を死の淵に誘ひ寄せたサイレンの美聲の如く、不用意の間に我等を魅し去つて、我知らず際限なく一定の方向に直進突入せしむることも少なくはない。

されば古來東西の大詩人や大戯曲家が、或る重大なる誘惑の來る瞬間に起る人間の心靈の中に行はるゝ苦闘を描くは、尋常一般のことである。「新約全書」の掉尾の大作たる「默示錄」の著者が、其靈活なる想像力を以て描ける天使と惡魔との大葛藤は、人生のドラマ

の中心點をなせる人の心の奧底に潛む善玉惡玉の永遠の鬪爭を象徴するものではあるまいか。人性の統一は單純より成れる統一ではなく、複雜より成れるそれである。否、單純には統一の必要はなく、統一と云ふ事それ自身が既に、その對象の複雜を前提として居るのである。由來「統一」と「均一」との兩者ほど、其名の相似て其實の相違きものはないのである。此人性に關する平凡なる眞理は、我等が國家國民の政治問題を論ずるに當りても、常に念頭より離すべからざるものである。

世に「獨逸魂」を説く者は極めて多い。無論此語は獨逸人自身が盛に用ゐる Die deutsche Seele の飜譯であるが、それが果して何を意味するものであるかは、之を説く者に依つてそれ〲見解を異にする。或る者は獨逸魂は、かの悠長な、氣樂な、平和的な、好意的な性質を指示する Gemüthlichkeit と云ふ他國語に飜譯することが出來ない獨逸語に盡きて居ると言ふ。戰

前に出版せられたる英國のドーソンと云ふ有名なる獨逸通の著はした『近代獨逸の進化』(Dawson, W. H. "The Evolution of Modern Germany," 3rd ed. London, 1911) の中にも、獨逸人は元來その性質が平和を愛する樣に出來て居るが、それにも係らず近年軍備擴張に熱中し出したのは、臆病者の空威張りと同じく、周圍の諸强國に平和を攪亂せられることを過度に神經に病むより來つたものであると説明して居るかに記憶する。併し乍ら現今に於ては世人は一般に、獨逸魂とは軍國主義的精神の結晶であつて、世界の平和を攪亂する主勢力であると考ふるを以て普通とする樣である。或は前兩説の折衷を試みて、獨逸聯邦の南部の諸州、即ちバイエルンや、バーデンや、ヴュルテンブルグや、エルサス、ロートリンゲンなどの氣風は、實際至極悠長で、平和的であるが、北部諸州、殊に普魯西の氣風が、尙武的軍國的である。處が新獨逸帝國建設以來、普魯西が其全版圖の中堅となり、盟主となるに至つてから、此普魯西氣質が全獨逸の特質の如く看做され、又事實

上幾分さうなり來つたのであると述べる者もあるやうに見受ける。或は又第十六世紀の宗教改革の主動力たる精神的自由主義、及び第十八世紀末より第十九世紀初頭へ掛けてのカント、フィヒテ、ヘーゲル等の理想主義が獨逸魂の精髓であると主張する者もあれば、さうではなくて最近の物質主義、機械主義、唯利主義こそ獨逸魂の本領であると論ずる者もある。更に又此最後の兩說を混成合一して獨逸魂の變遷を說き、獨逸が曩昔の理想主義と浪漫主義との上に蹲踞して居つた間は、思想上に於て世界に限りなき恩惠を及ぼして居たが、第十九世紀に入つてより此軌道を脫出して唯物主義に趨り、ショッペンハワーの厭世哲學に醉ひ、ニーチェの强者道德觀に動かされ、ヘッケルの唯物的一元論を讃歎し、トライチュケや、ベルンハーヂの軍國主義に鼓舞せられ、フリードリッヒ大王やビスマークの覇業を謳歌し、帝國主義の權化たる現皇帝維廉二世の脚下に拜跪するに及んで、獨逸魂は漸次墮落の淵に步を進め、遂に不幸なる今次の大戰亂を惹起して世界を蠹毒するに至つたのであると論ずる。昨年の出版に係るミュアヘッドの『戰亂及び獨逸哲學』(Muirhead, J. H.—"German Philosophy in Relation to the War." London, 1915.)は、明に此要旨を敷衍し、又マッケーブは更に其近著『歐羅巴の精神』(Mc Cabe, Joseph.—"The Soul of Europe, 2nd ed. London, 1915.)に於て其將來を豫測して、獨逸は今回の戰役に一敗地に塗るれば、茲に始めて元の出發點に立歸り、全獨主義の迷夢より目覺め、戰爭讃美の狂想を一掃し、其本來の面目たる Gemüthlichkeit を尊重し、藝術、學問、及び商工業の平和的戰場に於て、刄に衂らずして凱歌を奏することを計るに至るであらうと言つて居る。

好戰的氣風や、平和的傾向や、理想主義や、自由主義や、官僚主義や、軍國的帝國主義は、古羅馬の名將シーザーや、史家タシタスが日耳曼民族の生活を寫出したる昔より、二千年後の今日に至るまで、同民族の政治史上及び文化史上に、交互に相消長隆替しつゝ表はれ出でたる現象である。我等が單に其近世史を尋ねて

も、第十三世紀頃より醞釀形成し掛けた民族的意識の目覺めが始まり、其結果として時勢の要求と相容れざるに至つた神聖羅馬帝國が次第に其權威を失墜し、第十五世紀に及んで皇帝カール五世の治下に於て、一時燈火の將に滅せんとする際に見るが如き光輝を放射したのを一期として、それより急速に崩壞潰裂を始め、次で第十六世紀に於ける三十年戰爭の終結と共に、墺國の領域以外に於ては全く其實權を喪失した時よりこのかた、獨逸の國内は多數の封建諸侯の割據に依りて、四分五裂の慘狀を呈した。然るに其頃より東方の境壞なるブランデンブルグより頭角を擡げ始めたホーヘンツォルレルン家が出でゝ普魯西に君臨し、久しく陰忍して徐々に將た確實に國力を養ひ國勢を伸ばし、第十九世紀に於ては獨逸同盟内に於て墺國と覇權を爭つたが、勝利の榮冠は遂に普魯西の頭上に落ち來り、一八七〇—七一年の普佛戰爭に於て佛蘭西を一蹴して、往年のイェナの戰敗の仇をセダンで討ち、玆に普魯西が盟主となつて新獨逸帝國の建設に及び、それより更に急速に國勢を振興しつゝ、以て今日に至つたのである。其間此國は數百年に渉つて數奇を極めた運命を嘗め盡くし、而して其都度所謂獨逸魂は、樣々な形式を取つて發現し、或はゲーテ、シラーなどの浪漫的思想及びカント、ヘーゲル、フィヒテの理想主義となり、或は一八一三年の解放戰爭（Befreiungskrieg）の際に爆發した愛國心となり、或はシュタイン、ハルデンベルグの行政刷新となり、或は一八四八年の自由要求の聲となり、或はビスマークに依つて代表せらるゝ鐵血政策となり、或はダールマン、及び其弟子たるトライチュケ、及び其又弟子たるベルンハーヂ將軍の軍國主義となり、遂に現皇帝に依りて着手せられ、或る程度に實行せられた帝國主義となつた樣な次第であつて、其間を縫うて走つて居る一條の骨髓的精神たる國民主義の自覺は終始一貫して渝らないが、其表現は多岐多端に渉り、時には前後甚だしき矛盾撞着の觀を呈して居ることさへある。國民心理の經過の研究は決して容易の業ではなく、我等をして常に際涯なき迷路に立たしむるもの

である。

獨逸國民の經驗した所は、嚮て他の諸國民の經驗した所である。個人の意識内容が複雜である如く、國民の意識内容も亦極めて複雜であつて、或る一時代に在りて或る國民中に或る一思潮が社會全般の思潮の特徴をなせるが如く見えるのは、幾多の思潮の横流し縱貫して居るうちに、當該思潮が特に際立つて國民内部の最も強き精神的要求に共鳴し、將又其外部の環境上の有らゆる社會的政治的諸勢力の配置に順應し得る地位に在るが故に、それが最も旺盛なる生存權を主張して一代を風靡し、宛然獨立獨歩せるが如き觀を呈するのであるが、一朝其國民の外部的環境上の諸勢力の權衡が動搖し、それに連れて國民の當面の内部的要求が變遷する時には、又國内の社會思潮の主流も此大勢に從つて推移するものであるとは言ふまでもない。獨逸の浪漫主義乃至理想主義、及び軍國主義乃至帝國主義も、英國の島國主義（Insularism）及び海外支配主義も、佛蘭西の中央集權主義及び自由平等主義も、露西亞の獨裁主義及び虚無主義も、合衆國のモンロー主義及び平和主義も、支那の帝制主義及び共和主義も、皆常に當該國民の意識の内部に兩々相聯繫して潜在するのみならず、更に他の幾多の大小の思潮と交互錯綜して、共存駢立し、機に臨み變に應じて、當該國民の當面の内部的要求に適合し外部的環境に最も善く順應する能力を有する思潮が、一時勝を制して他の幾多の思潮を壓服し、中心勢力としての生存權を主張するに至るのであるが、時として二三の思潮が對等若くはそれに近き勢力を示して相拮抗扞挌し、紛糾雜糅の狀態を呈すると、恰も明治初年の頃より、殊に二十七八年戰役頃までの我國の思想界の如きものがある。是れ個人の場合に於ける精神的煩悶の狀態に相應して居るものであつて、我國は今日と雖も尙ほ此國民意識の無中心的煩悶時代を全然通り過ぎて居ないことも亦周知の事實である。

二、國民意識の統一と均一

一　政治は最初及び最終に於て國家の生の衝動（Lebensd-

range）を基點として出發し、國家內に現存する精神的及び物質的材料を處理按排し、之をして最も善く國家の當面の內部的及び外部的環境に順應せしめ、更に餘力を以て國家的生存の前途に適好なる新環境を創造（若くは之に適好ならざる既存環境を改造）し、以て國家の生存の目的の遂行を確實にするための國家意思を決定し實現することを謂ふのである。而して各國家が其對內及び對外政策に依つて既存の環境を改造し、若くは新環境を創造し得る能力は、現在の國力の程度に相應してそれ〴〵範圍の廣狹を異にするを免れないが、結局それには一定の限界があつて或は國家の視線の達せざる邊より、或は國力の及ばざる處より意外の變動が其內部的及び外部的環境の上に起生し、或は國內の革命內亂の勃發となり、或は國外の同盟聯合協商關係の更始となり、或は世界列强の均勢の動搖となり、其都度國家は斯の如く激變したる環境に順應しつゝ生存條件を充足すべく國家政策を立て直さゞるべからざるの餘儀なき運命に立ち至ることもある。時としては斯の如き環境上の激變が、國家の興亡衰頽の危機となることさへあるは、東西古今の史乘の的確に證明する所である。

國政の樞機に參する政治家が、國家の生存の目的のために國內に現存するあらゆる物的及び心的手段を處理するに當つて、最も苦心を要するは、國民意識統一の事業である。言ふまでもなく、各個の獨立國が今日の世界政治の舞臺に於て、對內對外上、完全に其主權を主張し、獨立の國家意思を有效に行はんがためには、國內の物質的資力の集中、及び國民意識の統一を必要とする。けれども茲に注意すべきは、「統一」と「均一」と相異點である。此兩者の區別は一見極めて簡單の樣であるが、事實に於ては屢々相混同せられ易く、殊に我國の爲政者輩に依りて最も極端に同一樣に取扱はれ居るを見るのである。彼等は國論統一の名の下に言論の自由に對して立憲國にあるまじき不當の制限を加へ、尚武的氣風振作の口實を楯にして、建全なる國家的觀念の發達に益あつて害なき平民的自由思想の傳播を

抑壓し、國民全般の思想を國民中の或る狹きサークルより出でたる思想樣式の鑄型に箝め込まんとするが如き手段に依りて國論の均一化を試み、之れを稱して國論の統一策と呼んで居るのである。我等は言論自由尊重を政綱の一に加へて產れたる現內閣の下に於て、或は軍閥の使嗾に依りて一種の偏狹なる軍國主義的思想が、殆ど强行的に地方靑年間に施され、或は內務當局の手に依りて單なる一片の法制を楯として、國家的生存上の必要以外に言論自由の抑壓が行はれるゝを視て、之を聖代の不祥事と見るものである。或は斯かる現象を以て現內閣內部の滑稽なる不統一を反映するものとして、打興じつゝ觀望して居る人々もあるが、我等は幾ら首相以下現內閣を組織する個人々々に敬意と好感とを有するとも、之を一場の笑劇として見物するには、其事が餘りに重大なるを思はないで居られないのである。

前にも述べた如く、國民意識の內容は極めて複雜なる諸要素の抱合であつて、又通常それが複雜な程國民の文化生活が豐富と活氣とを加ふるものであるのみならず、同時に國家の環境の變化に對する順應力を增大するものである。故に若し國民の文化を以て國家の生存條件の一となすとの前提を是認せば、信敎及び言論印行集會結社等の自由は、一方に於て近代生活に於ける個人解放の氣勢に伴ひて起りし(或は其根柢をなす)個人格尊嚴の意識より生じたる要求であるが、他方に於ては同時に、此高尙なる要求を尊重し、國家の生存條件を害せざる限りに於て之を許容するは、却て國家の生存條件その物を擴大充實する結果となるものであることを認めねばならぬ。

『失樂園(パラダイス・ロスト)』の作者として不朽の名を得たる英國の詩人ジョーン・ミルトンは、その『言論自由論』(Areopagitica: a Speech for the Liberty of unlicenced Printing. 1644.)に於て、敢然として言論自由の神聖を唱道し、『我に我良心に從つて自由に知り、言ひ、且つ議論する自由を與へよ。他のあらゆる種類の自由に超えて。』と叫んだ。彼に取つては言論の自由は、人格內容の一部で

あり、個人的生存權の一要素であつた。我等は這般の個人的立場より發せられたる言論自由尊重論を十分に諒解し、且つそれに共鳴することを得ると同時に、猶太人の種で和蘭に生れ、其思想言論によりて同胞の排斥と政府の迫害とを併せ贏ち得たるスピノザが、其苦き經驗を根據として、國家的立場より言論自由の必要を高唱し此自由を確立するは國家的結合の安固のために缺くべからざるものであると述べた主旨を體得し、我等の言論自由の要求に公私兩方面の動機の存在することを主張するものである。我國の當局者が、心靈の最奥底を迸り出づる神聖なる人格上の要求を省察するの同情なく、國家の最高善を顧慮するの智徳なく、古來の哲人思想家の敎訓に耳を假すの雅量なく、藩閥全盛時代の遺物たる一片の法制を以て天下の公論を律し、而も一方に於ては國家の文化生活に百弊ありて一利なく、且つ其販路の廣汎なることに依りて最も烈しき害毒を社會に傳播する卑猥極まる挑發的低劣文學（若し之を文學と謂ひ得るならば）を載する定期刊行物の存在を看過し乍ら、却て國民の文化生活乃至政生活に直接の交渉ある言論若くは述作の公表をば、思想及び藝術の本質に對して盲目である所の低級なる鑑識眼、若くは傳統的權勢を把持する少數の特殊階級の利害に阿る偏頗なる判斷を以て濫りに檢察批議し、國家權力を笠に着て溫良なる公民の精神的自由を束縛するは我等の眞實の國家的精神に不當の負擔苦痛を課するものに非ずして何ぞや。我等は近時頻々として起る發賣禁止問題に對して、言ふべからざる反感を有して居る。素より個々の場合に就て言へば、時として當局者の措置に有理な點を認めねばならぬことはある。當局者は國家生活の安寧と秩序と風紀とを維持する番人であるから、如何に言論自由尊重の精神に鼓舞せらるゝとも、眞實に且つ直接に國家生活に有害なる言論が行はれた場合は之を取締らざるべからざる義務を有して居ることは、我等と雖も之を認めざるを得ない。けれども近時の發賣禁止問題に關聯する事件に就ては、大抵は當局者が國家に對する義務心の命令に依りて行動し

たものと見るべきよりは、明に或る特殊階級の意向を顧慮して國家權力を濫用したものと見るべきである。殊に當局者が公開裁判に於ける辯論の記事、及び一國務大臣の巴里經濟會議に關する談話を掲載したる新聞紙に發賣禁止の制裁を課した事件の如きは、國家權力の濫用も其極度に達したものであつて、現政府に同情を有する者をしてすら顰蹙に堪へざらしめた。これが憲政思想及び政治道德の一層進歩して居る國若くは時代に於て起つたことであらうならば、そが輿論の上に齎らした反響は如何であつたらうか。我等は我國の政治が、一般國民の合理的意思實現及び其倫理的要求充足のために行はれて居るのか、但しは或る少數の特殊階級の利益に適合する樣に出來て居る我國憲政の現狀を維持せんがために行はれて居るのか、と云ふ問題に逢着して深き疑惑の五里霧中に彷徨するを感ぜずには居られない。大正の聖代に於て斯の如き時勢遲れの權力濫用を敢てして、我等の如き國家の良民をして斯の如き不快なる疑惑を懷かしむる當局者は、自ら其不明のために社會的不安の種子を蒔いて、其神聖なる公安維持の義務を裏切つて居るものではあるまいか。單種の階級的利益に依りて統治せらるゝ國民は不幸である。

國民意識統一の政策は、國民意識均一化の方針とは、單に相一致しないのみならず、互に相背馳するものである。何となれば統一と云ふ其事自身が、其對象の複雜なる構成を前提として居るからである。我等の了解する國民意識の統一とは寧ろ、先づ國家の生存條件を完全に充足するための政策の根本的中心原則を確立し、直接に此原則に牴觸せざる限りは、國民意識內容を構成する各部分の存在の權利を認容し、以て之をしてそれ〳〵其處を得て自發的に十分なる發達を遂げしめ、各自その特徵を發揮して全體の完美に貢獻せしめ、斯くてその全部が相結合して、調和あり、節度あり、秩序ある渾一體を形づくること、猶ほ艶陽三月の天、千紫萬紅とり〳〵に、一花一草各々其特色を示し乍ら、相寄り相集り、渾然として全一の春の野の錦を織りなす

が如くならしむるものを謂ふのである。是の如くにして始めて國家存立の意義全く、又國內の諸階級も各々其處を得て安んじて其分を守り、貴族は貴族、平民は平民と、各々其職掌を盡くし其使命を守り、知識階級も、勞働階級も、地主も、商工業者も、職工も、農夫も、皆それ〴〵國家の大を成し美を增すに於て等しく貢獻する所あることを自覺するに至るべく、其上尙ほ國法に依りて各階級及び各個人の國家に對する要求を有效に開陳する途を疏通及び保障し、其合理的要求と認めらるゝものは直に採つて以て國家政策の上に具體化する樣にすれば、治者被治者間の關係が權力的たるよりは寧ろ倫理的となるに至り、部分と全體との間に一脈の共同利害關係が發生成長し、從つて政府の各施設が害惡視せらるゝよりは寧ろ必要視せられ、國家を呪咀する者が縱し全く跡を絕つに至らずとも、何等の實質的危害を社會に及ぼすことを得ざるまでに其數と勢力とを減じ、延いて無政府主義及び其他の一切の危險思想が其存在の根據を失ふに至るべきである。由來各種の危險思想は、官憲が權力を濫用して撲滅（！）的手段を手嚴しく行へば行ふ程、益々反動的に陰に其氣勢を强むるものであることは、我國の短き憲政的生涯に於て一再ならず經驗した所である。若し斯の如き國家生活上の悲劇的經驗も、尙ほ未だ我當局者に寸毫も政治的寬容の必要を敎ふるに足らなかつたとすれば、他の如何なるものも彼等を啓發することが出來ないであらう。

三、國民意識均一化の弊害

余は前既に國民意識統一の必要、及びそれと政治的寬容の精神との交涉點を說いた。今や進んで其反面たる國民意識の强制的均一化の弊害及び危險を指摘せねばならぬ。

第一、國民意識の强制的均一化は、究極に於て不可能なるのみならず、其極端なる實施は、却て常に其目的たる國論の統一その物を破壞するの結果を生ぜずんば已まぬものである。國民意識の均一化と云ふが如き

不自然なる事を要求するものは、概ね國內一部少數の傳統的支配階級の利益保全の便宜的政策であつて、而して當該支配階級は、或る種の閥族（藩閥とか、軍閥とか、財閥とかの如き）より成るを常とする。是は我國の憲政生活に於ても、屢ば其例を見た所であり、又現に見つゝある所である。併し乍ら民衆が多少の程度に於て目覺めたる所に於ては、少數の支配階級は、縱しや巧みに法制の陰に隱れても、將又傳習の楯に護られても、到底久しく自階級のみの利益のために國民意識を均一の狀態に維持し得るものでなく、而して現代の趨勢は、無限に民衆の目覺めを促しつゝあることは、各國に於ける著しき事實である。戰爭繼續中の臨時的必要より生じたる各黨聯合內閣の存立を見て直に、各交戰國の國民意識均一化は時代の要求なりと斷ずるは、戰後に來るべき政治思想及び政治生活の大動搖を豫測すること能はざる淺見者流の事のみ。歷史の進行は時には一日も猶ほ千秋の如く、時には千秋も猶ほ一日の如きものがある。されば一時の表面的事實を捉へて無邊際の未來を推すことは、斷じて非科學的である。

姑く我等をして二三の實例に就きて、少數支配階級の國民意識均一化の努力の、大抵は徒勞に終るべき運命を有するものなる事を證明せしめよ。獨逸帝國統一の後、ビスマーク公が時代の流行を趁うて海外發展を畫策せざりしは、彼が帝國の全版圖を擧げて普魯西化し得る程度に其領土の擴張を止めんとしたがためであることは、史家の說く所ではないか。彼は是より先墺國獨逸聯邦に驅逐したりしのみならず、一時はバイエルンをも聯邦內に受け容るゝことをさへ躊躇したと傳へられて居る。而して獨逸帝國領內の普魯西化の事業は、彼が宰相たりし時以來の傳統的政策であり來つた。けれども獨逸帝國が其結果として贏ち得たものは、果して何である乎。北獨逸と南獨逸との間の思想感情の扞挌齟齬は、果して之に依りて調和し得られた乎。又領內の波蘭人及び、丁抹人は、帝國の統治の下に脫服して、不平怨嗟の聲を絕つたであらう乎。將又エルサス・ロートリンゲンの住民は、其本來の主權の下に復歸し

たことを自ら慶して、緊切なる共同利害關係の紐帶に依りて帝國に結び附けられたであらう乎。何人と雖も此等の明白なる質問の前に立ち、言下に『否』と答へ得ぬ者はないであらう。更に眼を轉じて獨逸の同盟國たる墺太利――拔群の武力によりて無意識に自滅の墓を掘る强者の末路の悲哀を象徴する老大國――を見れば如何。此國は嘗て劍を以て征服したる幾多の異民族をして、ハップスブルグ家の忠良の民たらしむべく努力し、權力陰謀共に施さざるはなく、用ゐざるはなかつた。けれども此等の被抑壓諸民族は、押せば膨れ突けば跳ね、匈牙利（マギアール）民族にしても、ボヘミヤ（ツェツク）、クロアチア、ルーマニア、ルテーン、スロヴァク等のスラヴ系諸民族にしても、將又伊太利民族にしても、墺太利の獨逸民族を仇敵視して、何れも擧つて國内紛擾の素因を作り、轉た老帝フランツ・ヨセフの鬢髮をして頻年白霜を加へしめなかつたものはないではない乎。又近く我國の新領土たる臺灣及び朝鮮に於ける、武斷的同化政策も、其必至的運命たる悲喜劇に終りつゝあることは、具眼の旅行者が實見を甚礙として我等に傳ふる所である。併し是は獨り我國の經驗たるに止まるのみではない。過去若くは現在に於て、他の多くの諸國民中にも亦、同樣の運命を繰返したものがある。英國の新英蘭植民地、印度、南亞等に於ける、西班牙葡萄牙の中米及び南米に於ける、土耳古の巴爾幹半島に於ける、合衆國の非律賓群島に於ける、皆既に歷史の審判を受け了りたるか、若くは今正に受けつゝある所である。獨り優勝民族對劣敗民族の關係に於て然るのみではない。國内政治の各部分に於ても亦、坐ろに人をして、單なる國家權力の濫用を以てしては、畢竟匹夫の志も奪ふべからず、民の口も箝すべからず、一寸の虫にも侵すべからざる五分の魂のあるものなる事を悟らしめるものがある。露西亞の專制的威力を以てしても、尙ほ且つ社會のどん底に蟠屈する虛無思想を勦滅することは出來ない。自由主義を標榜する英國さへ年來愛蘭問題に手古摺つて、今や漸く最後の讓步に依つて解決の途を發見せんとしつゝある。

官僚萬能の普魯西も、社會民主黨の跋扈と波蘭人の秘密の勢力とを如何にともすることが出來ない。我國における傳統的權力の府たる藩閥の陰陽兩方面の壓制も、覺に民論の向ふ所を如何ともする能はずして、心ならずも各政黨をして今日の地位と勢力とを作らしめたではない乎。或る特殊階級より出づる國民意識の强制的均一化の努力は、縱し一時幾分の效果を擧ぐることがあらうとも、終極に於ては何の得る所なきに了るのみならず、却て國家生活の統一その物に多大の妨害を與ふるものであることは、理論上及び實際上、明白に擧證し得らるゝことである。

第二、國民意識の强制的均一化が、縱しや國家生活の統一を害することなくして實行せらるゝことを得、且つ永久的效果を擧げ得るとするも、斯の如きことは決して喜ぶべきことではなく、必ずや國民の文化生活の停滯及び貧弱を伴ひ來るべきものである。ハーバード・スペンサーが其著社會學原理（"Principles of Sociology"）に於て說いた社會進化の法則は、社會が單純なる原始的狀態より複雜なる分化的狀態に移り、同時に散漫なる非有機的狀態より統一ある有機的狀態に進むものであることを敎へた。素より過去が貴重なる遺產として後代に貽したる知識を受繼いだ現代の我等は、スペンサーの學說を悉く承認する義務を有しないが、彼が立てた此社會進化の法則には一面の眞理を寓することを認めざるを得ない。少くとも我等は此學說を破壞するに十分なる根據としての一般的適用性を有する證憑を持たないことを自白せねばならぬ。此立場よりして我等は、國論の單純化乃至國民意識の均一化の試みを以て、國民の文化生活を退化せしむる結果を生ずるものであることを危ぶまざるを得ないのである。

第三、國民意識の內容が全然固定的に均一化せられた曉には、國家の其環境に對する順應力が著しく減退すべきものである。國家の內部的及び外部的環境は、決して固着的靜止的のものではなく、流動的轉變的のものである。かの一般學術上の進步及び思想上の變遷や、經濟界の動搖や、同盟聯合協商關係の推移は、絕

えず各國家の環境の上に著大なる變化を惹起するものであるとは、言ふを須たぬ所である。而して各國が此間に處して永遠に其生存の條件を完くせんと欲すれば、此刻々移り行く環境に自由に順應することを行らぬ樣にしなければならぬ。故に一身を以て國家指導の任に當る政治家は常に自國の完全なる生存に適好なる新環境創造の努力を弭めてはならぬと同時に、その國家の力を以て如何ともすること能はざる環境上の變化に對しては、一々能働的に之に順應する道を講じ、以て國家をして生存の權利なき不適當者の地位に墮つることなからしめねばならぬ。然るに國民意識內容の單純は、國家の其環境上の變化に對する順應力を減殺するものである。古來國家的環境上の變化に對する順應力の缺乏したがために、悲劇的最後を遂げた國民は、一々枚擧に遑がない。一時榮華を極め富强を誇りし大國が、一朝脆くも內亂外寇のために或は潰裂し、或は滅亡した歷史上のローマンスは、概ね皆此埒外に出ずるものではないのである。夫の前世界に於て並びなき優秀動物として大地に跳梁跋扈した巨大なる爬蟲類が、一朝環境の變化に遭遇して之に順應する道を知らず、空しく枯骨を地下の岩石層中に埋むること茫々數萬年數十萬年、漸く近年に及びて中生代の地層中より發掘せられ、所在の博物館に珍藏せられ展覽せらるゝが如き自然界の大現象は、人類の歷史に於ても常に反復せらるゝ所である。無形の歷史の博物館裏に陳列せらるゝ人物及び國民の殘骸遺骨は、一時は皆多少の程度に於て雄强を以て鳴り、一代を風靡したものであることは比々として皆是ならざるはない。强者は亡びずと思ふは、歷史の教訓を無視する僻論である。即今强者と謳はるゝ者と雖も、顯はれたる若くは潜みたる環境上の變化を看過し、若くは之に順應する道を誤るときは、早晚必ず滅び行く。獨逸國民の有らゆる方面に於ける優越、殊にその軍事上の優越は世界の驚歎に餘る所である。而も此部分に於ける該國の異常の發達が、却て獨逸をして戰後の國際的環境の上に於ける不適者たらしめ、未來の歷史の博物館裏の化石動物たらしむることがな

いであらうか。此問題はタイムが解決するであらう。只我等は我國の一部の有力者が、其優越の社會的の地位を利用して殆ど强制的に我國靑年の思想を軍國的に――寧ろ獨逸風に――均一化せんとする企畫をなせるを見聞して、國家生物學上の見地より寒心に堪へないのである。

四、軍國主義と平和主義及びそれと國民意識內容との交涉點

戰後に於ける國際政治の中心思想は何であるべきかの問題は、既に世人が興味を以て注意して居る所であるが、大體の觀察は二派に分れて居る樣である。其一は戰後は久しく從來の國際政治を支配し來つた軍國主義的傾向が一層濃厚に趣くであらうと言ふ意見であつて、其二は戰後は世界政治の中心思想が一廻轉期に遭遇し、平和主義が勝利を得るに至るであらうと云ふ觀測である。余は今此兩派の議論に對して是非の批判を試みやうとして居るのではない。併し乍ら前論の行掛り上、此兩個の主義と國民意識內容との交涉點を研究せねばならぬ義務を感ずるのである。

國民意識の內容は極めて複雜なる要素の抱合であることは、既に度々說いた所であるが、今便宜上其構成要素を、普遍的分子と個別的分子との二つに大別して見やうと思ふ。此分類は本文構想執筆中の當座の思ひ附で、まだ精細なる熟慮と實證とを經たものでないだけに、御粗末千萬のものであるけれども、余は大體の上に於て、見方に依れば國民意識內容の構成要素は斯の如く分類し得と信ずるのである。其所謂普遍的分子とは組織ある國民生活が開始せられてから以來の有らゆる時代と場處とに共通するものを云ふのであつて、ざつと言へば、四海同胞主義の思想の如き、或は所謂國際心（International mind）と稱するものゝ如き、若くば主權と自治との基礎觀念の如きは、之に屬するものと見て可からう。又其個別的分子は、時と場處とを基礎として、或る時代の特徵をなせるものと、或る場處の特徵をなせるものとの二つに細別することが出來る。而して或る時代の特徵をなせるものと云へば、歐

羅巴の近世紀の初頭に於ける君主專制政治擁護思想の如き、又は現代に於けるデモクラチック・ムーヴメントの根柢に横はれる自由平等思想の如きものであつて、或る場處の特徴をなせるものと云へば、一々之を列擧すれば際限がないが、二三の例を擧ぐれば、當該各國民の社會的傳統、歷史的過去、及び地理的環境に依りて產み出だされたる國民的特徴、國民的自我心、國民的自負心、竝に國民的膨脹慾の如きはそれである。而して或る一時代に於ける或る一國民の國民意識なるものは、右の如き複雜なる諸要素の一定率の配合によりて組成せらるゝ渾一體であることは言ふまでもない。

重ねて斷つて置くが、右の分類は余が今試驗的に作つて見たもので、余は決して之を以て最終的(ファイナル)のものと思惟するほど大膽な者ではない。——が、余は大體に於て斯の如き見方をすることも出來ると信ずるものである。そこで當面の問題の軍國主義及び平和主義を國民意識內容中の以上の諸要素に引當てゝ考ふる時は、大體に於て我等は、平和主義が其普遍的分子を根柢として立ち、軍國主義が其個別的分子を基點として出發して居ることを認めざるを得ないのである。蓋し平和主義は常に四海同胞主義の思想に即し（多少の例外もあるが、今之を絮說することは本文の目的と關係がないから省く）、各國家の主權と自治權とを尊重することを以て其精髓となせるに反して軍國主義は其表面上の口實が如何であるにせよ、其裏面に於ては概ね、國家の自衞上の必要以上の軍備の要求、及び他國家征服若くは侵略の企圖を包含し、兼ねて國民的膨脹慾の最も率直なる表現たる帝國主義と相纒綿結合して居るからである。而して如何なる國民の間に於ても、平和主義及び軍國主義の何れかの一方が、單獨孤立的に行はるゝことは極めて稀であつて、兩者は大抵の場合に於ては共存して社會に流布し、相互に補償作用をなすこと、猶ほ貨幣制度に於ける金銀複本位の如きものである。只國民意識內容中の普遍的分子が優勢を占むる場合には、平和主義が一時軍國主義を壓倒したる外觀を呈し、之に反して其個別的分子が優勢を占むる場合には、軍

國主義が一時平和主義を征服したる樣式を示すのである。只一方の主義のみが、他を犧牲として發達する時は、國家の其環境上の變化に對する順應力が減退し、而して斯かる國家は或る政局上の激變に際して、脆くも瓦解崩落して、所謂歷史の博物館裏の化石動物となるに至るの運命を見るに至るのである。

五、戰後國際政治の中心思想

然らば戰後の世界政局に於て各個の國家政策を支配する中心思想は、從前の如く依然として軍國主義であるであらう乎。將又此形勢は一廻轉を遂げて平和主義が一般に世に行はるゝに至るであらう乎。換言すれば各國家の國民意識に於て、其個別的分子が何時までも在來の優勢を維持するであらう乎。將又其普遍的分子が之に代つて其地位を襲ふに至るであらう乎。現代の國家社會學は今尚ほ幼稚の域を脫せずして、我等をして相當の自信を以て總ての國家現象の將來を豫測することを得しむる程度に達して居ない。加ふるに今回の戰亂に於て獨墺側が全勝するか、勝敗相半ばするに及びて交綏するか、若くは全敗するかと、軍國主義及び平和主義の前途を卜知する上に於て、先決問題を構成するものであるけれども、戰局の前途こそ眞に不可解であつて、專門の軍人さへ常に誤算を重ねて見當違ひの豫測を屢ばして居ることは、人の知る所である。

併し乍ら第十九世紀の後半期の半ば過ぎより世界の流行兒となつた帝國主義の進步の結果、軍國主義は次第に全盛期に入り、今や其絕頂に達して居る時ではあり、且つ從來平和宗の本山と見做され來つた北米合衆國さへ、昨今は高度の軍備擴張熱に浮かされて居る折柄であるよりして（縱し合衆國に於ては、戰亂勃發以來急に暴利を占めた軍器彈藥製造者連が、陰に陽に此流行の魁となつて居る形迹あるも）、大多數の人々は此現象が無限に繼續するものと見做して居る如く、軍國主義の思想は戰後益す世界を橫行濶步するものであると主張し、平和主義の流行を豫言する少數の人々を以て、濫りに空理空談を語る狂愚の徒として批難して居る。我等は我等の尊敬する諸先輩中に、大正の青年を

前に置いて、殆ど軍國主義者に非ざれば人に非ざるかの如き口吻を漏らせる人々あるを見て、奇異の感に打たれざるを得ないのである。

乞ふ、我等を以て漫に不可測の未來を揣摩するの愚を學ぶものと誤解せざれ。けれども我等は戰後に於ける平和主義の流行を豫言する者を以て、悉く沙上に偶語し空中に樓閣を畫く者と見ることは出來ないのである。國民意識内容の構成要素たる普遍的分子と個別的分子とは、國民の内的要求と國家の外的環境との均衡の動搖に依りて、毎に交互隆替消長しつゝ進むものであることは、世界の過去の歷史が之を證明して居る。更に一層具體的の立場より之を見れば世界列國の大多數者たる平民階級は、既に戰前に於て軍備の負擔に氣息喘々の姿を示して居たが、今日に於ては歐洲に於ける交戰各國民が其益々加はり行く重量の下に呻吟苦悶して居ることは、戰場より海山萬里を隔てゝ、而も交戰國の一であり乍ら却て戰爭が與ふる恩惠の餘瀝に均霑しつゝ多分の物質的利益をさへ領し得て居る我等（廣き意味にての）の想像の及ばぬ所であらう。試みに獨逸のカール・ラデック(Karl Radeck)の計算に係る世界主要諸强國の陸海軍費の表に就て、その戰前なる一九一一年に於ける支出額のみを檢しても、實に次の如き巨額の數字を示せるを見るのである。

國名／金額	總額（單位ハ獨貨馬克）	一人割り（單位同上）
獨逸	一、二五九、〇二九、〇〇〇	一九・一六
英國	一、四五二、四八三、〇〇〇	三二・一四
佛蘭西	一、〇五二、一一一、〇〇〇	二九・五六
露西亞	一、二八五、三二八、〇〇〇	八・三七
墺太利	五四八、八〇〇、〇〇〇	一〇・五五
伊太利	四七二、五八三、〇〇〇	一三・五八
合衆國	一、〇九四、〇二〇、〇〇〇	一一・一八
日本	三八七、二四五、〇〇〇	七・四九

軍國主義の負擔も亦決して輕いと謂ふことは出來

ぬ。右年度に於ける我國の支出額は、概算上英國に及ばざることと總額に於て實に十億六千五百五十八萬五千馬克（邦貨約五億三千二百七十九萬二千五百圓）、一人割りに於て二十五馬克（約十二圓五十錢）、獨逸に足らざることと總額に於て八億七千百七十八萬四千馬克（約四億三千五百八十九萬二千圓）、一人割りに於て十二馬克（約六圓）である。而も國富に比例すれば此等の二國に比して、我國の負擔の苦痛は寧ろ重くとも輕い氣遣ひはなかつたであらう。兎に角我國が軍閥及び之に雷同する一部の積極的侵略主義論者の夢想を實現せんがために、他の數個の强國に匹敵するだけに軍備を增大せんことは當分不可能であらう。夫の貧國强兵論者のロジックも、思ふに此嚴格なる事實を掩ふることは出來まい。若し夫れ一九一一年以來、各國の軍備が更に長足の躍進をなしたことは、世人の記憶に新たなる所であり、殊に戰爭勃發以來其甚しきを極め、且つ益々極めつゝあるは無論の事である。戰後財政上當然疲弊すべき（疲弊せぬと云ふ論者もあるさうであるが！）歐洲列國が、再び軍備擴張競爭に入らぬ樣に、互に協約を定め其實行手段を工夫するに至るかも知れないと云ふ想像は、全然之を不當と呼んで排斥することが出來ないのである。加之、少くとも列强の軍備擴張の一原因を構成する海外植民地經營は、英獨二國の從來の經驗に徵すれば、必ずしも收支相償ふものでないとは、事實と統計とによりて證明せられて居る（Howe, Frederick C. — "Why War." New York, 1916, Ch. XXI.）ことさへある。

次に考ふべきは、現代の各國家に於ては、軍事外交の方面は、大抵は元首の大權の下に統括せられ、事實に於ては少數の爲政者に依りて決定せられて居るので、一切の國務中デモクラシーの精神に背馳すること此部分ほど甚しいものはないことである。而も一朝有事の曉には常に戰線に立ちて生死を賭して力戰する者は平民で、又其の後方に在りて過當の戰費を負擔するものも亦、自國を束縛する密約默契等の內容若しくは其存在の事實をすら全然窺ひ知ることを許されざる多

數の平民階級である。言ふ迄もなく戰費は主として公債及び增税によりて支辨せられるが、公債も結極は元利支拂の期限が早晩到來するものであり、又增税は概ね國内の貧者富者の別なく略ぼ均一額を負擔する間接税即ち消費税の引上げに依りて行はるゝものであることは、我が國民が既に日清日露の兩戰役に關聯して經驗した通りである。而も我國民は明治三十七年の帝國（臨時）議會が議決した非常特別税の負擔を、今尚ほ離脱して居ないのである。嘗て佛蘭西の群衆心理學者たるル・ボンは、消費税は實際惡税には相違ないが、民衆を瞞着するには最適好のものであると述べたが、現代歐羅巴の數國に於けるが如き目覺めたる民衆は、さう何時までも如上の非（アンチ）デモクラチックの狀態を默過することが出來るであらうか。我等は戰後に若し久しく酣睡の境に在りし各國々民意識の普遍的分子が再び醒覺し、其結果平和主義の思想が流布するが如きことあらば、或は此邊の消息が其直接の刺戟となるのではなからうかと思ふのである。

我等は豫言者の看板を掲げて生活して居るものでないから、戰後に於て果して在來の軍國主義が愈々益々繁昌すべき乎。抑も亦平和主義が新に氣勢を高むべき乎、の疑問に對し、責任を以て確答を與ふる義務を有しない。併し乍ら世上の一派の軍國主義者が、平和主義者を以て漫に妄誕なる空理空想を語る者と速斷し、之に無禮なる輕侮若くは嘲罵を加ふるを見聞して、彼等の不遜を憎むか、若くはその暗愚を憫まざるを得ないのである。若し夫れ彼等の或者が、其現社會に於て有する優越なる地位を利用して、國論統一の美名に隱れて、積極的に國民意識の强制的均一化を企畫するを知つては、之を輕々に看過することを得ないのである。歐洲大戰亂は各國民に敎ふるに、今日の世界に於ては最早各一國が同盟聯合の局外に立ちて、獨力で地球の表面に行旅征戰することの不可能若くは至難なる事理を以てした。故に今後の國政指導者は、益々國家の環境の推移變遷に留意して、國家政策をして自由自在に之に順應することを得しめなければならぬ。戰後の世界政

局に於て列强の國民意識內容の普遍的分子が新に優越的地位を獲得するにしても、將又其個別的分子が一時在來の優越的地位を維持するにしても、刻々變動流轉の波に揺らるゝ國際的環境に處しては、如何なる場合に於ても國民意識の固定均一は、當該國家をして危殆に瀕せしむる虞あるを免れないのである。

我等は國家の文化生活及び政治生活發展進步のために、國民意識の異個の統一を欣求するが故に、我國の爲政者が今少し眞面目に被治者たる國民一般の衷心の合理的要求を省察參酌して、國家の獨立的生存の條件を傷けざる限り、其對內及び對外政策の上に、政治的寬容の精神を遺憾なく發揮するの雅量と明智とを示すに至らんことを切望して已まぬものである。

（大正五——七——四）

女を何うしたらよい乎

（併せて救世軍及び島田三郎君一流の士に質す）

茅原華山

一　如何にして女を男の手に取戻さん乎

世界は一大鎔鑛爐に爲つた、何物も鎔解せずにはやまぬ、焔々たる熱火が燃えてゐる、この火勢が漸くに日本の方に向つて進みつゝあるにも拘らず、日本人は太平を粉飾し祥瑞を謳歌し、歡樂の舞踊を踊つてゐる。

この兩三ヶ月間、偶然の事から私は女の研究を始めた、それは斯うだ、東京で或友人の家を訪ねた、五十圓以上二百圓以下の收入のあるのを中流階級といふさ

うだ、して見れば彼れの家は疑もなく中流階級の中若くは上に屬するのである。私は夫が終日奔走に衣食して、時々溜息を吐いて居る傍らに、妻たるものはいかにも元氣よく書生や、下婢や乳母を叱咤してゐるのを目睹して、我々は更に新しい視角から女の問題を考慮せねばならぬといふことに氣が附いたのである。

それから外にも二三軒見舞ふた處が、孰れも同様の現象があつた、中には妻が子には神田の親類に行くと稱して、子に留守を預からしめて活動寫眞を見物してゐた處を、その子に認められて、家庭で一風波を起したといふ至で時事新報のポンチにでも有りさうなこともあつた。

或青年の家に若い女が遊びに來る、それが處女ならば兎も角、人の妻がある、それも一人ではない、夫が生活を稼ぎに外に出た後、遣つて來るのである、知らぬは亭主ばかりなりといふ川柳は決して陳腐ではないと思はざるを得なかつた。

幾多の學生が言つて居つた、素人下宿では其處の主婦に愛せらるゝ場合が多い。學生が好んで素人下宿を求めるのは之が爲めだといふ。

『新しい視角』から女の問題を考慮せねばならぬといふことは、最早いかにして女の社會地位を高めねばならぬとか、いかにして女をして社交上の主人たらしめねばならぬとか、新夫婦は舅姑と別居せねばならぬとか、男女を結び附けるものは唯だ『愛』なるのみとかいふのではなくして、如何にして一旦解放された女を男の手に戻さうかといふのである。

二　無道德の生活

英國に『國家主義は女の大敵である』といふことがある、何故に國家主義、軍國主義が女の大敵であらうか、我々は從來の如く、國家主義、軍國主義が女の大敵であるから、國家主義には反對せねばならぬ、軍國主義を剿滅せねばならずと唱へて滿足すべきものではない、我々は先づ他の反面を窺つて見る必要がないであらうか、若し國家主義、軍國主義が女の大敵であるとしたならば、其處には國家主義、軍國主義が男子の

味方であるといふ意味が含んで居らぬであらうか。

そして若し國家主義、軍國主義が女の大敵であるとしたならば、個人主義、世界主義は男の大敵であるといふことに爲りはしまいか、そして若し個人主義、世界主義が男の大敵であるとすれば、それは更に女の味方であるといふ意味が含んで居らぬであらうか。

人間の生活は或中心を立て、之に集中する團體生活をするか、又は個々に離散して自治の生活をするか、此二者の外に出ないといへる、一は國家生活であつて、一は社會生活――個人生活、世界生活、自治生活である、ニイチエが道德なるものは個人が團體生活を爲して、個人を以て團體生活の理想を時間的に實現せんと努力する場合でなければ發生せぬといつたのは、慥かに動かすべからざる眞理が伏在してゐる、日本國民は今や無理想無目的無使命無天職の生活を爲してゐる、極めて無意味な――國家として民族として極めて無意味な生活を爲してゐる、蓋しこれは日露戰後、日本の經國家が戰勝の後、更に新に更に大なる使命と天職とを國民に開發せしめ國民をして更に新に更に大なる理想と目的とに向つて勇猛躍進せしむることをしないで、徒らに國民と共に戰勝の酒に醉つたからであるは、詳しく論ずるまでもなからう、國民に理想あり目的あり使命あり天職あつて此岸より彼岸に達せんとする慾望の燃ゆるが如きものあらば、人間は始めて昨日の事も考へる、明日の事も考へる、唯今日の事のみ考へるのは横の生活に滿足するので、即ち物質生活に墮せざるを得ない、不斷に明日を開拓して行くといふの覺悟があつて、人間には鍛錬が生じ節制が生じ、克己が生じ他愛が生じ、横の生活が縱の生活と爲り、始めて精神生活なるものがあり得る。

故に無理想、無目的、無使命、無天職の生活は民族に中心がなくして個々に離散した生活である、人間が個々利害得失に由りて離合集散するのであるから、其生活は明に無道德の生活である、イムモーラリズムの生活である。

三　無國家と國家、無政府と政府

男も過去の一切から解放された、國家からも寺院教會からも道德習慣からも因襲傳說からも解放された、私は敢ていふ、偶像破壞主義は殆ど其目的を達したのであると、男が既に過去の一切から解放されたならば、獨り女のみが過去の一切から解放されないで居るといふ譯には行かない、男は或は言ふであらう、男は自由である、然しながら女は自由であつてはならないと、去れど現代の女は果して唯(イ)といつて引き下がるであらうか、但だ女は男よりも保守的である、從つてその解放が男よりは聊か後れるといふだけである。

男女が一切から解放されたとすれば、我々は今一度國家に集中して新なる道德生活を始めるか、若しくば今日の勢に順つて自治の生活をするかといふ岐路に立つてゐるではないか、切言すれば State or No-state (國家か然らずんば、無國家か) (Government or No government (政府か然らずんば無政府か) といふ岐路に立つてゐるではないか。

私は極めて虛心平氣で考慮して見るに、「無國家無政府の生活」には解決の可能ない幾多の問題がある、其中最も解決し難い一の問題は女を何うするといふのである、自由戀愛、宜ろしい、然らば子を何うする、避姙をする、宜ろしい、人類の滅絕を何うする、否、所謂國家又は社會として哺育せしむる、宜ろしい、それでは人間から一切父たる本能、母たる本能を取り去るのではないか。

無政府主義者は曰く、最善の政府は、最惡の政府なり (The best government is the worst) と、無政府主義に在つては、成程最善の政府がその大敵であらねばならぬが、無國家無政府の生活は、女を何うするといふ一點から觀ても、全然物質生活である、今日生活である、自然慾求を其縱にするに任かすといふ生活である、人類を滅絕せんとする生活である、然らずんば人間から父子の親母子の愛を撥無する生活である。

私は無國家無政府の生活も日本國民の境遇として或は我れ知らずに之に向つて闖入せねばならぬことのあるのを否む譯には行かぬ、幕府の末造、原忠事が「天下

本自ら自然の大勢あり、冥々の間に順環し、往々にして人の意表に出づ、或は知つて制する能はざるあり、或は知らずして之に順ふことあり」と言つたのを記憶してゐる、然しながら私は可能ることなら日本民族の一員として日本民族が今一度國家生活に入らんことを冀ふものであるといふことを告白する、男が國家の理想の爲めに一身を献げる、女は男を透して國家の理想を實現する、これで始めて男の手に女を取戻せるのである、男女が始めて歡樂を超越する。

四　國家主義と無國家主義との混同

曩きに私の筆が迸つて矢島楫子老婦人に及んだのは、私ながら少しく御無禮であつたといふ感じがする、私は一々改めて老婦人に御答へすることを好まないのみならず、私は老婦人が終始一貫婦人矯風事業の爲めに献身されたことを感謝せねばならぬと思ふ、私は道ふ、國家があつて始めて道徳があるのである、國家の根柢は道徳である、そして其道徳なるものは必ず先づ劒と爲つて顯はれると、故加藤弘之博士はその功利主義の立場からして、國家道徳を肯定され、それから人道を忘想であると言はれたさうだが、私はメイン氏が其古代制度史に於て述べたが如くに、人類は進歩するに從つて人類は皆同胞であるといふ自覺を生じたといふことに同意する、故に私は國家道徳を肯定すると共に人道をも亦肯定するものであるが、英米の思想の感化を受けたものは、國家主義と個人主義、立君主義と共和主義、軍國主義と平和主義、道徳主義と法律主義とを混同して、一方では國家主義を言ふかと思へば、他方では軍國主義を排し、一面では道徳主義を唱へるかと思へば、他面では法律主義を執つてゐる、蓋し國家主義と英米主義とは其根柢に於て兩立せぬものがあるといふことを知らないのだ、英國は立君共和國（康有爲の所謂虚君共和）であつた、個人主義の國であつて、その個人主義が國家主義と合流しなかつた、平和主義であつたから軍國主義ではなかつた、法律主義、打算主義であつたから道徳主義でなかつた、英國が歐洲戰爭で俄かに國家主義と爲れば、從つて軍國主義と

爲つた、從つて道德主義と爲つた、遂に王室中心主義を叫ぶものがあるに至つたは、最も注意すべき現象ではないか。

決して此に矢島老婦人を駁するのではないが、老婦人は女德を伸張するのが其中心の目的であると告白しながら、年々帝國議會に向つて有婦の男が姦通した場合、妻に親告し得るの權利を與ふべしと請願するは、道德主義と法律主義とを混同して居るのではないか、私は決して法律無用論を主張するものではないが、夫婦の關係は日本に在つては長く道德の關係でありたい、英米の如くに法律上の契約に爲らないやうにしたいと望んでゐるものである、民事と刑事との相異はあるが、既に夫婦の關係は『人生の樂は心を相知るに在り』、長く道德の關係でありたいとすれば、有婦の男が姦通した場合、妻に親告し得る權利を與へんよりは、寧ろ有夫の女が姦通した場合、夫の之を親告し得る權利を取り去れと、願した方が老婦人の矛盾を取り去るのではないかといふのである、道德の關係を以て成立したものは又道德の關係を以て解決するのが當然ではないか。

五　救世軍及び公娼廢止論者に質す

警視廳が近ごろ公娼の獎勵と私娼の撲滅とに向つて手を下したのは、主義に於て私は贊成を表する。

私は此に救世軍及び所謂公娼廢止論者たる島田三郎君一流の士に質問せねばならぬことがある、私は現存の公娼制度其物を直ちに完全であるとするのではないが、世若し娼婦にして根絶すべからずんば公娼は私娼に勝さるとするのである、これは人權問題でなくして國家政策である、救世軍の山室大佐以下の熱中は私も亦之を認識するに躊躇するものではないが、時に一たび公娼の自由廢業を遣した所で、それが幾何人權の伸張に裨補ありとするか、人權の自覺なき娼婦は、適ま游蕩子の利用する所と爲るに過ぎないのではなからうか。

人權若くは人道といふやう抽象論を立脚點として公娼を廢止せんといふが、私娼なるが爲めに現代の青年

間に惡疾の蔓延實に甚しきものあり、陸軍の當局者は今年徴兵檢査に際し呆然として自失したといふ事實を看過するに何ぞ、プラグマチストの見地からいへば、時に一たび公娼をして自由廢業せしむるよりは、先づ現代の青年間に於ける惡疾の蔓延を少しにても防遏するに努むるが、寧ろ事に親切なる經世の一事業ではないか。

且つ人權といふも公娼制度のなきは唯英米を然りとす、佛國には公娼あり、獨逸は何時にても私娼を捕へて之に監札を渡して檢徴するの制を取る、私は日本國民が更に大に人權に自覺せんとを欲するも、人權といふは要するに法律主義の産物である、女も亦生活せざるを得ず、苟も國家が一々生活を與へ得ざる限り、春を賣つて生活せんとするものを生ずるを防ぐべからず、人權論者は故に私娼を放任するも公娼を禁止せよといふ、是は英米の個人主義に徹底せんとするものである、故に此運動を推極すれば無國家無政府主義である、私は個人主義と國家主義との合流を理想とするものである、此場合國家が之に干渉して私娼を公娼と爲し惡疾の蔓延を可及的少くせんとする政策を執るに贊成せざるを得ないではないか。

六　藝妓も亦同胞である

島田君一流の士は藝妓を排斥すること實に甚しい、私は現代の藝妓には、何の興味をも有たぬものであるが、藝妓をして御大葬御大典に參列せしむべからずと主張するが如きも、亦全く英米主義に中てられたのではあるまいか、藝妓は現代に於ては其實賣春婦であるかも知れない、然しながら彼等も亦我々の同胞である、若し藝妓を卑しとしたならば、我々は獨り彼等を惡むのみならず、併せて彼等に同情せねばならない、苟も一點彼等を憫み彼等に同情したならば、彼等をして悔悟するの餘地を與へて遣らねばならない、御大葬御大典に際し、其一隅に參列するの光榮を有せしむるは、これ彼等に悔悟の餘地、悔過遷善の餘地を與ふる所以ではあるまいか、藝妓をも亦人間として日本の同胞として取扱つて遣るといふが國家の恩典である、英米人

は階級觀念實に熾んにして、各階級の間に同情がない從つて理解がない、姦通の如き自在に行はれながら一旦賣春婦と爲りたるものをば Outcast と爲し Outlaw とし、毫も悔悟の餘地を與へない、從つて一旦賣春婦と爲つたものは倒底墮落するのである。島田君一流の士は日本の藝妓、娼妓を驅つて盡く英米の賣春婦たらしめんとするものではないか、御大葬御大典に參列せしめまいとするは、彼等から悔悟の餘地を奪つて了うとするのではないか、彼等を人間として同胞として取扱はないといふのであるから、唯徒らに彼等を惡んでそして彼等を憫み彼等に同情することを得ないのである、島田君一流の士の主張をして實現せしむれば、日本は更に新なる穢多を造るのである、新にアウトカストを造るのである、全然社會に齒せられざるものを造るのである、社會をして彼等をして悔過遷善せしめないで彼等を社會から抛げ出さんとするは、資本家をして勞働者と分離せしめ、民族をして平民と分離せしむる英米の階級思想の心でなくして何ぞ。

七　妻、娘の社交を警戒す

島田君一流の士は妻、娘の社交を奬勵するのである、藝妓を排斥すれば、自然此に到るべきは論理必至の展開であるが、それも亦英米の模倣といふの外、多くの價値のない議論ではありますまいか、妻、娘の社交を奬勵したのは伊藤公井上侯の鹿鳴館時代からの遺風であるが、鹿鳴館時代に於て既に公と某貴族の令孃との事を云々するものがあつた位で、畢竟するに英米に於て妻、娘の姦通私通が盛んに行はれるが如く、日本の妻、娘の姦通私通を奬勵するものではないとは誰か斷言し得るものぞ。

日本人には深くも慮らずして『女を臺所より解放せよ』と稱へるものがある、女を臺所家庭から解放して社會事業に從はしめよといふのであらうが、これは一面女をして歡樂の女たらしむるものであることを忘れてはならぬ、私も封建時代の女の位地が理想だといふのではない、時として社會事業に從はしむるにも異議はないが、愛國婦人會を見よ、其總會の爲めに費すも

の十二萬圓、救恤の爲めに費すもの十一萬圓、愛國婦人會なるものは事實に於て歡樂婦人會と爲つた、勿論是を以て直ちに日本婦人の社會事業を否定する譯には行かないが、苟も日本人の心あるものは『花の日』だなど稱して夫人令孃が俄に商賣人と爲つて路上に花を賣るに顰眉してゐる、英米人は生れながらの商賣人で、女まで商賣本能を有してゐるから、こんなことを遣るのであらうが、いかに商賣主義の時代だからといつて、日本の夫人令孃が花賣りと爲り、これは或場合には、精神的賣淫と爲るとまで評さるゝ必要はないではないか、バザーといつて、所謂日本の貴夫人令孃が商賣本能を發揮するに急なる歐米の婦人と伍して、番頭小僧の眞似をしなくつても可いではあるまいか、日本國民が白耳義の國民を救恤するには自ら日本の法あり、演劇や音樂に娛樂して始めてその餘錢を與ふることを爲さずと斷然拒絕するが可いではないか。

◎島田君一流の士は公娼に反對し、藝妓に反對しながら、其實、日本の夫人令孃を驅つて盡く藝妓たらしめんとするものではないか、國家生活の光より觀れば、女の王國が家庭に在るのは動かすことが可能ない。

八　觀道總監にも質す所あり

私は救世軍及び島田君一流の士が私の此疑問に對して親切なる解決を『中央公論』紙上に於て與へらるべきを豫期し、最後に私は決して警視廳の處置が必ずしも一々其當を得てゐるものでないことを一言せねばならぬ、警視廳は何故に既存遊廓の外東京市中に散在せし私娼を驅つて新に一遊廓を造らざりしか、幕府の歷史を觀るに、吉原の現出したのは江戸生活の必要からであつて、そして之を一所に集中するの必要からであつたのは明白なる事實である、大正の東京は最早明治の東京ではない、況してや江戸の往時に較すべきではないとすれば、更に一遊廓を造つて私娼の散布を防遏するの手段を取つた方が妥當ではなかつたであらうか、若し遊廓の數多きに過ぐとすれば、或遊廓と合せしめて新遊廓を造つても不可はないではないか。

私娼をしたものでも固より正業に遷へるものもあら

うが、彼等に適當なる生活――正業を與へない、そして又良人に從はしめなければ、彼等は宛も黴菌を散らすが如く東京市中に散らん、花の師匠、琴の師匠、義太夫の師匠、三味線の師匠、茶の湯の師匠の家にして新娼家と爲るものが寡くはないといふ、銘酒屋が轉じて料理屋と爲り、其醜業を繼續するものが寡くないといふ、是の如くんば彼等は反つて良家の女を誘つて彼等の群に投ぜしむることがないとはいへない。

警視廳――日本政府は久しく法治國なるものに過まれて來た、法罰なるものは德罰なるものが之が根柢を爲すのでなければ、所謂民免れて恥づるなしといふを に爲る、始めは法律に觸れなければ可いといつた、中には法律に觸れても露現せねば可いと爲つた、終りには法律に觸れても賄賂の用意があれば可いといふことに爲るのは解り切つたことである、國家は道德より成る、道德は劍より成る、民族をして國家の使命天職を開發せしめ、之れに向つて一意民族を集中せしむるにあらずんば、道德なるものは蕩然として地を拂つて去る、今は其時である、それから自今以後の國家は民衆保護に力を擧げねばならぬ、民衆に生活を與へる工夫がなければならぬ、殖民地を取るも一策、工業を興すも一策、勞働保險法を定むるも一策、而して道德的國家は勤儉主義の國家である、人、物質慾を縦にすれば、百圓の月收あるものも百五十圓乃至二百圓を消費しても足らず、之に反して人、若し道德精神に支配さるれば、百圓の月收あるものも五十圓にして餘りあらんとす、凡そ此等を内容とする新國家主義が大に勃興するのでなければ、徒らに官憲の威力を以て臨むも、私娼を撲滅することの容易でないことは自明の理である、併せて劍道に熱中する警視總監に質す。

朝鮮統治の眞相

(吉野博士の批評に答ふ)

朝鮮總督府中樞院書記官長 小松緑

吉野博士は本誌六月號に『滿韓を視察して』と題する長文を發表せられたが、其研究の剴切なる其斷案の警拔なる、未だ多く覩ざる所にして感服の外はない。但し博士が其の「はしがき」にことはられた通り、「朝鮮視察の主たる目的は、日本の統治に對する朝鮮人の批評を聞くにあつた。」といふので、十數名の朝鮮紳士を訪問して、聞き得たる談話と之に對する感想とを述べられたに過ぎぬのである。固より十人十色の批評に對し一々辯解するは、愚かなわざではあるが、博士其の人が裏書したり又は朝鮮人の批評より離れて斷定せられた事柄にして、餘りに間違つて居る部分に付いて一言の辯明を試むるのは、必ずしも無用の勞ではあるまい。博士も亦世人と共に朝鮮人側の批評を研究せらるると同時に、日本人側の立場をも聽き取らるるとは、學者として決して厭はるる譯はあるまい。凡そ何事に依らず、其の眞相を詳悉するには必ず兩面の觀察を要することは言ふまでもない。否らざれば如何なる明智達識の人でも偏見に陷るの虞れがある。片言に依りて判斷すべからざるは必ずしも訴ばかりではないと思はるる。併し吾輩は朝鮮人を向ふに廻はし、彼等と討論を試みて吉野博士の裁斷を求めむとするものではない。吾輩は寧ろ朝鮮人の辯護者である。唯々博士の視察談に由りて惹き起された一問を攻究して相互に新領土の開發に寸毫たりとも貢獻することを庶幾するに外なら

ぬのである。尤も吾輩の領分は朝鮮のみであるから滿洲の部分に言及せざるはお斷りするまでもなからう。

第一に博士は「斯く一方には國家の威力を示し、他方に於ては土民に物質上精神上の滿足と及び其發達の機會とを與へて居るのであるから、朝鮮民族の同化は十分に出來ないまでも其統治の事業に於て決してまごつく譯はない筈である。然るに今一々朝鮮人に親しく會つて其言ふを聞いて見ると豈圖らむや今尙ほ日本の統治に對していろ〳〵の不平を言ふ者が案外に少くないやうである。」と言はれた。甚だ失禮な申分かは知らぬが、博士の此のお話は前後矛盾の態がある。施政上何か手落があるから、土民が不平を言ふと曰はれるなら、腑にも落ちやうが、物質的及精神的の施設が十分であるのに、不平があるといふに歸著するから、結局朝鮮人が無理を言ふ譯になりはしまいか。案の如く其の不平の第一の事例として「道路の建設」を擧げられた。即ち道路に要する「土地の收用に報償を與へなかつたり、或は殆ど沒收に近き處置をしたりする」のと、漫りに夫役を課するといふ二點に在る。是は誠に六ヶ敷い問題で、斯かる不平は如何なる仁政を施いたとて、絶滅すべきものでない。夫役は勞力を供給するのであるから、輕重はあつても苦痛は必ず伴ふのである。一體勞力を無賃で使ふといふのは文明式でない。然らば之を廢止すればよいのだが、さすれば本職の工夫を使用せねばならぬ。其の賃銀を拂ふべき資源はやがて租税に求めねばならぬ。さうすると納税の負擔が增すのは自然の成行である。ところが貧困の極に陷つて居る朝鮮僻陬の窮民には、此の負擔を分つことが出來ぬ。是に於て夫役に對する不平は忽ち重税の苦痛に移つて、而かも一層劇烈となるであらう。又土地の收用に付ても不平は止む時はなからうと思はるる。市街地の如き直に實損を及ぼすべき方面に於ては、相當の代價を支拂ふのであるが、田舍に至ては必ずしも左樣に行かぬのである。博士自身も言はるる通り「朝鮮の田舍には支那と同じやうに從來道路らしい道路はなかつた。」田畑をも踏みならして通路とした所もある位だ

から、零細な土地を多人數の百姓より收用するのに、一々代價を協定して居つては、一丁の道も容易に出來ぬのである。故に田舍道では沿路の住民が道路敷地を寄附する古來の習慣になつてゐつた。其は強制であらうといふ人もあるかも知れぬが、決してさうではない。朝鮮の舊時では、所謂普天の下王土に非ざるはないのであつて、人民の方でも地を耕すか家を建つるか、單に占有の事實あれば乃ち所有地となるといふ慣行であつたから、斯かる便宜な方法で收得し來つた土地を公共の爲に寄附するのは當然と心得て居つたのである。然るに段々浮世が開けるに隨ひ、他人や他村の者が使用する道路に自分たち許り寄附するのは不當だなどと言ふ者も出てくるのは是非もない次第である。さりとて其の要求通りに代價を拂ふたら此の方面の不平は止むとするも、其の財源は矢張り租税に俟たねばならぬから、不平は方面を代へて出現することであらう。抑も道路は産業の開發にも人文の普及にも缺くべからざる機關であるから、併合後實に經費一千萬圓を投じて總延長三千餘里に亘る道路を改修し了り、豫定道路網の過半に達したのであるが、是は一等、二等道路で三等以下の小道路は此の經費以外で各地方で經營して居るのである。夫役獻地は重に此等の小道路改修の場合である。公共といふものの畢竟沿道人民が自己の便利を圖るに外ならぬ。よしや不平はあるにもせよ、其は一時の事で永久に恩惠に浴する時分には、政府の難有味を感ずるであらう。

第二に博士は「權利の保障といふやうなことについては、內地人も朝鮮人も平等である。此の點は公平である、けれどもその保障せらるる權利其物に至つては決して平等でないと言つて不平を言ふ者がある。」とて官民共に朝鮮人を輕蔑する傾があることを指摘せられた。此の點は吾輩も至極御同感で、苟も朝鮮統治の皇謨を奉體するほどの者は官民の孰れを問はず、新附同胞をいたわつてやらねばならぬ。されば朝鮮總督は新政實施以來しばしば內地人の自重を促がし朝鮮人を待つに同胞の情誼を以てし、決して倨傲の態度あるべか

らざることを戒められたのであるが、內地人は一日の長たる故を以て後進なる朝鮮人を扶掖誘導するといふので、多少威張る樣にも見え、又實際威張る者もある。他方に於ては朝鮮人も段々威張り出してきた。京城の或活動寫眞館で朝鮮人辯士が口上を終つたときに、見物中の內地人少年の云つた言葉が癪にさはつたとて、此の辯士がいきなり舞臺から飛び降りて少年の頭をなぐつたことがある。これは小供が上手だなど云つて、からかつただけで何の惡意もないのだが、朝鮮人がひがみごころから輕蔑されたことと早合點した例である。內地人にも惡い奴があるとすれば、朝鮮人も同じことで、惡い奴同士では不平もあらうが、併し惡い奴は双方ともに極く少いのである。少いから好いといふ譯ではない。之を根絕するを得ば、此の上もない。そうまで行かずとも、多數の物の解つた內鮮人間にはおい〳〵意思も疏通するであらうから、急速でなくとも漸次に融和同化の目的に近づきつゝあることを疑はぬのである。

同じ官吏でありながら內鮮人間に差別があることを、博士は不思議に思はれる樣である。是は全然同等にしたくても目下の所到底できない事情がある。博士は「文官高等試驗は朝鮮人に之を受くることを許されて居ない。故に朝鮮人のみに適用すべき特別の試驗規則でも作らない以上は朝鮮人の高等官になる見込は絕對にないと言はねばならぬ。」と述べられて居るが、是は博士の聞き違ひか思ひ違ひであらう。文官高等試驗規則には帝國臣民たる今日の朝鮮人を除外してないから、無論朝鮮も文官高等試驗を受くることを許されて居る譯である。唯現時の朝鮮人中には事實上之を受くべき學識資格を有する者が稀れなのである。朝鮮人は既に述べた通り當然文官高等試驗を受け得るのであるが、之を受くる資格ある者が少いから、特別任用の途を開き、相等の學識經驗ある者より詮考に由り高等官に任用することになつてゐる。されば博士の言はれた「朝鮮人の高等官になる見込は絕對にない。」といふのは大間違ひで、何より證據は現在道長官五人、道參與

官十三人、事務官一人、郡守二百十八人、判事二十七人、檢事十人、警視九人、敎官四人、土地調査局監査官二人といふ多數の朝鮮人高等官がある。博士は朝鮮人の高等官は少いとか甚だしきは朝鮮人檢事は一人もないと言はれたが、以上列記した數字は博士の誤算を打消して餘りあるであらう。又朝鮮人判任官は高等普通學校卒業以上の學識ある者は勿論試驗に由り適當の人物を採用しつゝあり、其の數は中央地方を合して內地人の六千百六人に對し朝鮮人四千五百三人であるから、朝鮮人は餘り官吏に使かはぬとの想像は、頗る正鵠を離れた觀察であると申すより外はない。

　博士の言はるゝには「郡守には皆朝鮮人を採用して居るが、鮮人の長官たる所には必ず次席に有力な日本人を置いて、此日本人をして實權を握らしめて居る。」とある。前段は事實に相違ないが、後段は「實權」の解釋次第で然りとも否らずとも曰へやう。又「此不謹愼なる次席官吏の專恣橫暴に憤慨して、恨み骨髓に徹するど叫んだ郡守も少なからずあるといふことを聞いた。」と云はれたが、斯の如きことは獨り朝鮮に限らず、內地の郡にも絕無ではないが、朝鮮に於て此の弊の特に著しく目立つ事情がある。そは現代的地方行政を實施する今日に在りながら朝鮮人郡守は現代的敎育若くは經驗を有して居らぬ所から、稀には逆に其の部下たる內地人書記に指導を受くる奇態を生ずることがある。內地でも屬僚政治といふことがあつて、往々下僚が上司を凌ぐ流弊がないではない。朝鮮に一層此の弊を醸す事情が存して居るので、博士の怪みを受けたのは、誠に遺憾至極である。併し內地人書記が何の隔意もなく其の職責を盡さむとする熱心の餘り、料らずも上官の憤慨を招く場合も少くはない。吾輩は一面に於て內地人書記を戒飭して其の分を守らしむることを願ふと同時に、一日も早く內地人書記を手足の如く使役するほどの器量を有する朝鮮人郡守を得ることを切望して止まぬのである。

　博士は尙いろ〳〵の不平の例を列擧した後ち、「朝鮮人が日本の統治を、日本側が思ふ程に、難有がつて居

ないといふことは、實は當然の話である。」と言ひ、又「如何に從來虐政に苦んだとはいへ、一轉して外國の支配を受くるといふことは、獨立國民たるの自尊心と相容れない。」と言ひ、結局「異民族統治の理想は其民族としての獨立を尊重し、且其獨立の完成によりて結局は政治的の自治を與ふる方針とするに在りと云ひたい。」と斷案を下された。そして「統治さるゝ民族に不平があつたからとて、それを非常に氣にかける必要もない。」とあきらめの好いことを述べられて居る。さういふ博士は大分に朝鮮人の不平を氣にかけて居らるゝやうであるが、氣にかけるもかけぬも、人々の度量にまかせて、別問題としやう。併し朝鮮人は從來虐政に苦んだが、外國の支配を受くるのは、其の獨立國民たる自尊心と相容れぬから、政治的の自治を與へて其の獨立心を尊重するの方針を執るのが異民族統治の理想であるといふ、博士の斷案は吾輩の了解に苦しむ所である。斯の如きは我が朝鮮統治の方針として當て嵌らぬのは勿論、斷じて韓國併合の本旨と相容れぬものである。併し吾輩は博士の此の結論を辯駁する前に、博士の出發點即ち此の結論に到着すべき前提から攻究せねばならぬ。

博士は「現に印度や埃及やは英國の統治の下にあれ程よく開發し、統治上には英國は隨分骨を折つて居るのに、土民間の獨立的風潮は益々盛んになるではないか。比律賓は米國の施政の下に頗る廣汎なる自由を與へられて居るけれども、獨立思想は依然として衰へない。米國では異民族の同化といふ事は不可能なものと諦めたのか、最近は比島に獨立を附與せむとして居る。」と言はるゝのが、吾輩の意見と根本的に相異る所である。博士は疑もなく我が朝鮮統治を以て英米の殖民地統治と同一視して居らるゝが、實は其の間に雲泥の大差が存して居る。彼に在りては地勢懸絶するのみならず、博士が異民族と言はるゝ通り全然人種を異にして居る、其の上に古來の歷史上何等の關聯もない。我が朝鮮との關係は之と反對で、第一地疆密接して僅かに一衣帶水を隔つるのみ。第二に日鮮人の祖先が北から

降つたとするも南から移つたとするも、同族であつたに違ひはない。神功皇后、桓武天皇さへも朝鮮王族の血統を引いて居る事を日本側の史籍に明記して居るではないか。第三日鮮間の歴史は三千餘年に亘りて存續して居る、離合集散はあつても絶縁はして居らぬ。先づ此の三點より觀察するも、英米殖民地の統治を持ち來りて我が朝鮮を律せむとするのは、不倫無稽の甚だしきものと斷定せねばならぬ。其の結論の正鵠を失するのは當然のことで少しも怪むに足らぬ。吾輩が朝鮮を同化し得るといふのは、其の之を同化し得べき要素が具備して居るからで、博士の出發點とは全く其の方面を異にして居る。博士は獨立思想を喋々せられるが、朝鮮は決して純然たる獨立の國家ではなかつた。時に或は日本の節度を受け又多くは支那の正朔を奉じたのである。韓國として暫く獨立となつたのは、日本の擁護と保障とに外ならぬ。即ち日本が之を支那の屬隷たる關係より離脱せしめたに過ぎぬ。其は從來支那の使節を迎へる處にあつた迎恩門を、獨立門と改めた事實でも證明さるるであらう。されば朝鮮の有識者より言へば、支那の暴政の下に苦しむよりも日本の文明的施政の下に生命財産の安固を保障せられ、博士の所謂「物質上精神上の滿足と及び其發達の機會とを與へ」られる方が遙かに幸福であらねばならぬ。況して支那との關係は宗屬の差別を免かれなかつたが、併合後は日本の屬邦ではなく、直ちに日本帝國に成り上つたのである。卑近の例ではあるが、裏店住の奉公人が、一躍して歴とした豪家の養子となつた樣なものである。實子養子を眞の同胞として融和同化せしむるのは、困難の事業でも、是非とも遂行せねばならぬ。それには朝鮮人を繼子扱にして何時か離緣して獨立生計を立てるのが、當然なるかの如く言ひふらすのは、淺慮の甚だしきものではあるまいか。又養子の方より見るも、裏店住ひに慣れた自墮落なくらし方を改めて富豪相當の家風に從はねばならぬから、多少の窮屈は覺悟しなければならぬ。時々實子が我物顔の振舞も癪にさはるであらうが、併し一方は父祖の積善の餘慶でよい日の下に生

れたのと、他方は父祖の放埓から貧弱の極に陥つてから、更に僥倖にして成り上つたのであるから、幾分か遠慮勝ちであらねばならぬ。一方は誠意と愛情とを以てし、他方は不平やひがみを言はずして、始めて和氣靄々たる一家團欒の樂境に達し得るのであらう。

要するに朝鮮人の同化を不可能ならしむる事情は一も存在しては居らぬ。若し之を妨ぐる何物かゞあるとせば、それは朝鮮人を異民族と云ひ、殖民地土民と云ひ、終始不平を懷く者と推想じ、到底同化すべからざる民族と斷定する人々であらねばならぬ。宗任でも義家の誠意には敵する能はず、復讐の心を翻へして無二の忠臣となつたではないか。朝鮮人中能く併合の本旨と其の後の施政の實行とに感服して、既に忠良なる帝國臣民として恥ぢざる者が多いのである。僅許りの不平黨の言ふことを聞いて朝鮮人全體を律するの妥當ならざるは勿論である。彼等はさぞ博士の贔負に牽き仆されて迷惑することであらう。

朝鮮に於ては内鮮人は勿論、一切の在留民に對し、非常に言論の自由を拘束して居ることは公知の事實であると博士は佐んで居らるゝやうである。博士は「就中朝鮮人の言論行動に關しては、事實上非常に拘束を加へて居る。そこでさらでも日本に對して不平なる朝鮮人は、更に反感をそゝられて、遂に一部鮮人は走つて極端なる危險思想を抱くに至つた。」と言はれるが、是は失禮ながら原因と結果とを顛倒した論法であると申されねばならぬ。博士も詳述せられた通り不平朝鮮人にして浦鹽、米國西海岸に在つて諸種の陰謀を企つる者が少くはない。彼等は博士の恐れらるる如き「往々暗殺などといふ極めて陰險なる手段に出づる」と同時に煽動的の記事論説を掲載せる新聞雜誌を各地より朝鮮内に流布して、所謂「危險思想」の傳播に勉めて居る。そこで治安の維持人心の鎭靜を圖らむが爲に、言論の取締が始めて必要となつたのである。されば、言論の取締が危險思想を激成したのではなく、危險思想が言論の取締を餘儀なくしたといふのが、眞相である。博士は此頃始めて朝鮮に來て、所謂土民の不平を

聞かれたから、是は併合に對する反感であると思はれるのは無理もないが、實は不平を言ふ者は遠く保護時代若くは其の以前より排日思想を懷く者であるから、博士の所謂言論の取締を嚴重にせぬ時分から博士の所謂危險思想が存在して居つたのである、何よりの證據は併合以前に於ける伊藤公の暗殺と李完用の襲撃とである。是れ即ち吾輩が博士の論法を以て原因結果の顚倒であると言ふ所以である。

右は唯々朝鮮人側の言論取締であるが、内地人に對しても過酷であるとの批評がある。事實其の通りであることを否認せぬが、其の理由は多言を要せずして明かである。内地の如き秩序井然として居る上に讀者の知識が進歩して居る處では、如何なる詭激の言論でも、之を放任して公衆の判斷にまかして置いて差支がない。それさへ時には風俗壞亂又は治安妨害の廉で處罰を加へた事實が往々ある。朝鮮では新政實施以來日尚淺くして人心の歸向未だ全く平穩なりと謂ふべからず、内地に於ては何の害もなき記事論說でも朝鮮に在ては意外の反響を來すべき虞れがある。言論の取締が朝鮮に於て概して嚴重であるといふのは、誠に止むを得ざる次第であるが、併し是は決して永久の方針ではない。朝鮮の進歩が將來内地と同樣の程度に達すれば、固より十分なる言論の自由を與へて然るべきことであらう。

世人動もすれば朝鮮統治を稱してサーベル政治などといふが、流石に吉野博士は精透なる觀察眼を放つて其の效果をも認められたのは感心の至りである。博士曰く「朝鮮人は決して未だ十分に日本の統治に心服して居ないのみならず、内心却つて不平を抱いて居る者が相當に多いと見ねばならぬ。それにも拘らず朝鮮人をしてグウの音も出させず、内地人が何處へでも内地同樣に入り込んで、些かも危險を感ぜざるを得るのは、一に朝鮮に於ける憲兵制度の賜にして、あれ丈けに憲兵網を全土に張つて、公安の維持に一糸亂れる所なからしめたのは、何といつても寺内總督の偉大なる組織的手腕の結果であつて、我々は實に之を見て敬嘆

するの外はないのである。」と先づ公安の完全なる狀態は認められたが、隴を得て蜀を望むといふのは此處で、「只玆に起り得べき一つの問題は、秩序の維持はあり、而かも住民の幸福は如何といふことである。」と論步を進められた。舊韓國の混沌たる暗黑界を一變して秩序を回復し、一面には從前の如き役人の橫暴や苛歛誅求の弊を絕ち、他方には强盜火賊の災を妨ぎたれば、昔は生命財產の安固などは夢想だにせざりし朝鮮人に取りては、此の上もない幸福であらねばならぬ。然るに博士は「住民の幸福如何といふこと」が考へられてない樣な口吻を洩らされたのは不思議である。博士は「政府の組織、敎育の振興、產業の開發、殊に最も人の憂へたるところの秩序公安の維持、此等は殆んど皆立派に出來上つた。然し此等の仕事は多く皆表玄關の修飾にして、之より更に內地人及朝鮮人の實質的の利益幸福を進めるといふ所謂お勝手元の改良が必要である。」と切言せられたが、新政實施以來玆に僅々五六年に過ぎぬのに、博士は「產業の開發」、「敎育の振興」、「秩序公安の維持」以上に何を望まるるのであらうか。此の外の實質的の利益幸福とは果して何物を指さるるのか。具體的に何も示されぬから、吾輩は甚だ其の眞意を窺ふに苦しむ。をこがましいが、「實質的の利益幸福」とも見得べき、又「お勝手元の改良」とも云ひ得べき部類を略擧しやうが、若し博士の一粲を博し得ば幸ひである。

既往六年間に於ける農耕の改良からして、農產物の總額は當初の一億五千萬圓が倍加して、今日では三億圓となつた。其の直接の利益幸福は、從來往々饑餓に迫るか否らざるも木葉草根をも食料に採つた貧民は絕無となりしのみか、貯金が、貯金契とか副業契とか稱する方面で八十萬圓、郵便貯金が百六十萬圓を算するに至つた。此の數は朝鮮全土の總額であるから誠に些少ではあるが、六年前には無かつたといふ事實より考へれば、人民の生計に餘裕の出來た事が推し測らるるであらう。又韓國時代には年々防穀令といふ法律を發布して穀物の輸出を禁じ、我が公使はなぜ米を日本に

賣らせぬかといふて抗議をしたものである。然るに近來は毎年二三百萬圓の米を内地に移出し、内地では倒まに朝鮮米の移入を防止せむが爲め移入税を復活しやうといふ説がある位で、實に今昔の感に堪へぬ。穀類の改良增殖の狀亦以て卜知すべきで、是は博士の所謂「お勝手元の改良」に入れても不足はなからうと思はれる。水産物は六年前に年額六百萬圓を出でなかつたのが、今や一千萬圓を超え、鑛産物も七百萬圓内外より一千二百萬圓に增加し、工業製作品も六年間の首尾を對照すると年額一千五百五十萬圓より二千九百五十萬圓となり、商事會社の投資額は八千五百萬圓より一億四千萬圓に增加した。此等は朝鮮人ばかりでないから、博士の所謂「内地人及朝鮮人の實質的の利益幸福を進めるといふ所謂お勝手元の改良」に加へたいのである。此の外鐵道の一千哩といふ朝鮮には便利過ぎる設備や、慈惠醫院、濟生院などの施療救濟機關を持出したら際限がないから、先づ一斑を擧げて賢明なる博士及世人が之に由りて全豹を察せらるる料とするに止める。

博士は朝鮮に於ける官吏萬能の狀態を喋々と述べられたが、其の中最も事實を誤れるの甚しきものを鳥渡訂正して置きたい。博士は何處から聞かれたのか「朝鮮政府は會社銀行等の内規にまで干渉し、其の使用人の給料は必ず官吏の俸給の振合により、決してそれを超過するを許さない方針である」と言ふて居られる。

此の方針の解釋として博士は不思議な推斷を下された。内地では會社員が同格の官吏よりも數層倍多き給料を得て居るが、若し朝鮮で此の例に依らしむると收入の多い會社員が自然官吏を凌ぐの恐れがあるから、官吏を第一位に置く爲に會社員をして官吏以上の生活の出來ない樣に會社銀行員の給料に餘計な制限を設けたのであらうといふのが、博士の斷定である。是は非常に間違つた觀察であるが、博士の如き學者一片の人が斯かる誤想に陥るのは無理からぬ事情がある。それは官吏は收入の全部が公表してあるに反し會社銀行員は表面の給料だけ公表して手當賞與は内密になつて居

るからである。博士より〻慧眼な觀察者は却つて朝鮮の或會社の總裁が總督以上の收入を受けて居るのを非難して居る。吾輩は徳義上會社銀行の内幕をあばくことを避けるが、博士の見られた表面の給料例へば會社銀行の總裁社長の年給六千圓とすれば政務總監の年俸と同額であり、又理事の四千圓は各部長官の五千圓より少いが、官吏の方は只四割の加俸あるのみに反し、會社銀行員の方は大抵倍額である。（普通手當と在勤手當とあるものは三倍以上となる）官吏の賞與は年俸の一割乃至二割を出でぬを常とするのに、銀行會社員の方は年給の十割乃至二十割である。或會社の如きは年給三千圓の專務取締役が一萬圓の賞與を得た位であるから、朝鮮に於ても、商事會社の職員は官吏より數倍の收入あること、決して内地と異なる所ないのである。それのみならず、銀行會社員の社宅と之と同格の官吏の官舍とを比較したら、一見して雲泥の差あることを了解せらるゝであらう。其の差といふのは博士の想像せらるるが如き官吏萬能の徵象ではなく、却つて反對に官吏の方は長屋で會社員の方はお屋敷とも云ふほど違ふ。些細な事ではあるが、博士の警拔なる觀察中餘りに見當の違つた所であるから、一言して置くのである。

博士の觀察中之より甚だしく事實を誤つて居るのは、財政獨立と鐵道との關係である。博士曰く

予は朝鮮の現狀が、近き將來に於て財政的獨立を許す程度に達して居るや否やを明白に知らないが、只汽車に乘りて半島を縱斷して得たる一片の感想に基いて論ずるならば、利用者が少いからとて食堂車も寢臺車も連結して居ないやうな貧弱な民度では、財政の獨立などといふ事は以ての外の話であるまいかと思はるる。

觀察の奇拔も茲に至りて極まれりと言ひたい。大抵の朝鮮視察者は概ね朝鮮に過ぎたものは鐵道であるといふほどで、其の然る所以は朝鮮が歐亞交通の要路に當つて居るから、鐵道の設備も世界的にせねばならぬからである。然るに博士獨り此の鐵道を貧弱呼りせら

るるは不思議千萬である。併し博士の貧弱と言はるるのは、京城新義州間の汽車に寢臺車は無論のこと、食堂車の設備もないといふに歸著する。即ち一を以て十を推すの一貫した博士一流の觀察法である。此の事はクダ／＼しく說明する必要もない。京城新義州間は、他の線路より比較的乘客が少いのは事實であるが、列車は一日に往復四回で、晝行の分には勿論寢臺車はないが、食堂車はある。夜行のには普通の寢臺車はないが、寢臺は一二等車中に出來る設備がある。其の上一週往復二回は滿洲直通の汽車があつて、是には寢臺車も食堂車も連結して居る。貧弱どころか頗る贅澤なもので、鐵道を視察する人は、財政獨立のむしろ遲きを感ずる位である。こんな貧弱な鐵道で財政獨立などはお話しにならぬと言つた人は、恐らく博士一人であらう。

獨立會計を完成せむとあせるから苛斂誅求の弊に陷るは明白で、是が即ち「多少の見識ある朝鮮在留者」が、獨立會計の虛名が禍をなして、「朝鮮では關稅が減法に高く、地租などの割當も甚だ不當であるといふて居る。」とは博士の了解せらるゝ所である。是に至りて吾輩は辯明をする勇氣も出なくなる。苟くも多少の見識あるほどの人は、こんな荒唐無稽な話を博士にする筈はない。關稅が減法高いとはなんのことを言はるるか、朝鮮では舊韓國稅率を併合後十年間据え置くことに帝國政府が決定せられたから、關稅だけは今日も依然舊率を繼續して居る。之を日本の一般關稅に比すると其の減法安いのに驚きこそすれ、減法高いなどと言ふのは鷺を烏と呼ぶよりもお話にならぬ申分である。併し是は「多少見識ある在留者」の言つた事を博士が取りつがれたのだらう。吾輩は之を博士の罪として責むる譯ではないのは勿論である。又地租の割當が不當であるとの事も甚だ了解に苦しむのである。博士は內地との比較を取らないから解らないと言はるゝから、鳥渡地租の比較を取つて見るに、內地では田一反步に付一圓六十六錢五厘であるに對し朝鮮では只の三十三錢二厘である。畑一反步に付き內地四十四錢一厘、朝

鮮十七錢六厘である。これでも朝鮮の地租は不當であらうか。無責任の言說をなす者を多少見識ある者と想像し、其の忘想を根據として朝鮮を批評せらるゝのは、自他共に益なきのみならず、容易ならぬ誤解を一般世人に流布することとなる。博士の一考を煩はしたい所である。

博士は更に敎育問題を提起し、いくら朝鮮人を敎育しても、同化は出來ぬとか、朝鮮人の開發を計ると言ふことは、世間に對する表向きの義理合上之を言ふに止め其の實は何處までも彼等を愚にする方が宜いといふ者もあるとか、悲觀的の方面の意思を代陳せらるゝかと思へば、全然朝鮮人を敎育しないならば格別、苟くも朝鮮人に相當の敎育を與ふると言ふ以上は、中に政治法律を學んで日本の統治を批判する位の者の出來るのは當然で、自分の悴ですら多少敎育を與ふれば、親爺の行動を批評するに至るではないかなどと、頗る樂觀的の自說を述べられる。朝鮮人同化の可能なること、彼等を敎化して文明の域に進め相一致結合して帝國前途の隆昌を圖るのが唯一最良の方針であること等に付ては前に卑見を述べ盡したから、重ねて呶々を要せぬが、敎育すると我が悴でも親爺の批評をもするといふ博士の意見には誠に御同感である。親爺の批評でもする位の見識がなくては悴としても賴み少いのである。暴戾の淸盛でも重盛の諫言を聽いて我に子ありとて喜んだに違ひない。併し馬鹿悴の暴評は固より論外である。されば總督府は朝鮮人の敎育には頗る熱心で、併合當時僅か百校を出でなかつた普通學校（朝鮮人小學校）を、こゝ五六年間に四百校に增加したるのみならず、高等普通學校（朝鮮人中學校）をも增設し又從來法律經濟を敎授する京城專修學校の外工業傳習所、醫學講習所を改善して、工業專門學校、醫學專門學校に昇格した位である。中々朝鮮人を愚にするところでなく、益々其の智能德性を啓發して之を賢明忠良なる帝國臣民たる地位に誘導することには餘力を殘さぬのである。此の點は博士の安心を願つて置く。

博士は宣敎師との關係に付、日本官吏の對宗敎觀念

乃至政策が根本の禍をなし居ると言はれるので、多分宗教に對する心得方でも垂示せられることと樂んだが、結局安息日問題に過ぎなむだので、少しく失望したのである。宣教師の側から見れば、如何にも安息日の勞働は大問題であるかも知れぬ。併し日本は未だ基督教國にならぬのみか、有らゆる宗教の外に超然として内外の各宗に對すること、所謂一視同仁である。我國の日曜日は唯々一六屯宅を一週一日の休日に改めただけのことで、耶蘇教國の所謂安息日ではない。されば日曜日でも勞働してはならぬといふ觀念のないのは當然で、之を咎むる方が無理である。假りに一六を休日とした時代に、宣教師等がなぜ毎日曜に安息せぬかと抗議したら如何であらう。朝鮮には儒教も佛教も中々盛んで、基督教の信徒は、全人口一千五百萬の中僅に三十五萬内外である。不時の風雨の爲め、川が漲る、道が壞れる、橋が流れる、人夫を出し、夫役を徴發して急場を防ぐのに、安息日に、人間の勞働は基督教の宗義に反するとて、此等の慘狀を傍觀して好いといふのか。日曜日に人を使ふのを禁止せむとする基督教信徒の横暴も甚しと言はねばならぬ。基督教信徒は式日に御尊影を拜することを教義に反するとて拒絶したものもある。現に新年祝賀式に基督教會學校の代表者が招待されたが、參列して御尊影に禮拜するは、偶像を崇拜すべからずとの教義に反し、といふて禮拜を拒めば不忠呼ばはりをせられるから、教會學校は除外して呉れる樣にと、アンダーウードと云ふ宣教師から吾輩に賴んで來たことがある。吾輩はそんな事では基督教は決して日本に擴まらない。御尊影を禮拜するのは、基督教の所謂偶像崇拜とはてんで違ふ。凡そ崇拜とは吉凶禍福の司配者として神に祈るの謂ひである。吾々が御尊影に禮拜するのは、直接に至尊に咫尺して祝意を表し奉ると同じ心で遙拜するのに外ならぬ。頭を垂れて禮するのは、東洋の慣習で長者でも友人でも同じくお辭儀といつて垂頭の禮をする。御尊影に對しても唯々此の禮式を一層丁寧にするだけのことで、何も神や佛を拜む樣に手を合せて祈る譯ではない。結局國民とし

て當然の敬禮を爲すに過ぎぬ。宗教の儀式とは全然沒交渉である。決して之を混同すべきでない。外國人たる宣教師は我至尊に忠誠を盡す義務もあるまいから、御勝手次第だが、朝鮮人は帝國臣民だから、基督教信者になつたからとて、國民たる義務を免かるるものでない。此の邊の道理を明かにせぬと基督教の本義に悖り其の傳播上容易ならぬ支障を生ずるといふ旨趣を懇諭したところ、アンダーウードは如何にも御尤である。實は教義と俗禮との區別に付き、朝鮮人ばかりでなく、自分等とても貴下の如き明晰なる考を持つて居なかつた。お蔭で能く解つたといふて、其からは此の旨趣で基督教信徒を訓諭して居る。併し是は一例に過ぎぬので、平民主義の米國や加奈陀から朝鮮へ傳道に來た宣教師が、往々日本の國體を無視した言動に出るのは無理もないことである。今までは詰まり意思が疎通せぬ所から、誤解も謬想も多かつたのだが、近頃はおい／＼宣教師等も政府の方針が解つたから、博士の心配せらるるやうな感情の疎隔などはない筈である。

宣教師ばかりでなく、基督教信徒ばかりでなく、一般の人民中にも不平分子は極く少數である。全人口一千五百萬の八割を占めて居る農民の如きは、其の生活が次第に安樂に成りゆくのを喜んで居るので、大部分は併合の實行さへ知らぬものがある。彼等は朝廷が金氏（新羅）であらうが、王氏（高麗）であらうが、李氏（韓國）であらうが、將た總督府であらうが、餘り關心しては居らぬ。其の痛切に感ずる所は、政治の善惡である。博士の歷訪されたのは所謂多少の教育を得て親爺の行動を批評する「自分の悴」であつたらう。是は博士の恠まれぬごとく吾輩も深く心に懸けぬ。唯々博士が此の次に朝鮮に來られる時は、「案外に日本の統治を有り難く思はないもの」ばかりでなく、廣く胸襟を開いて各方面の內鮮人にまでも、觀察の範圍を擴められたいのである。併し博士の今回の視察は、よしや盾の一面だけにもせよ、之が爲め尠からぬ世人の注意を喚起せられた功勞に對し吾輩は朝鮮の進步發達を希ふ一人として茲に謹んで感謝の意を表するのである。（完）

南北妥協の支那

法學博士　吉野作造

（一）

袁世凱の死去が妥協の大勢を導いた事、又大勢が妥協に在るに拘らず、妥協の功を収むる迄には幾多の波瀾あるべき事は、本誌七月號に於て「内外時事評論」の記者も既に之を豫測した。其後今日に至る迄の一ヶ月間の形勢の推移は、果して豫測の通り、波瀾重疊を極めて居る。けれども其跡を細かく解剖して見れば、底を流るゝ大潮流の依然として妥協といふ一定の方向を變轉しないことは、何人にも明かに看取せらるゝ所であらう。

今此事を詳説せんとするのであるが、之には先づ妥協運動の當事者となつて居る諸勢力の態度を一々調べて見るの必要がある。

第一に、無能ながらも諸外國より中華民國の表面の代表者と認められて居る黎大總統は如何と言ふに、彼は厭くまで南方の主張に對して誠意を披瀝して居るやうである。今日まで新聞に表はれたところ二三を擧ぐるに、彼は六月十二日弭兵休民の急を説いて、派出軍隊に一律停戰を命じた。十七日には上海、漢口等の要地に從來多數の秘密探偵を派遣しあるの事實を暴露し改めて其弊害の甚しきを説いて、各省長官に其取締を嚴重にすべき旨を訓令した。同日又彼は袁世凱の幽屏する所たりし章炳麟を釋放し、叮重に之を取扱ひ、更に上海より其夫人を招いで引渡すといふことを公表した。此等は皆最も明に彼が誠意を以て時局の解決を計るに志あることを語るものである。只惜むらくは、彼は今日支那の時局を解決すべき唯一最上の勢力者ではない。時局解決の鍵は寧ろ南方革命派と北方段内閣と

の掌裡にある。この兩者の反目暗鬪は、黎氏の誠意を以てするも之を奈何ともすることが出來ない。只彼の誠意が兩者の反目の極端に走るを避け、否少しなりとも之を緩和し、兩者の主張をして幾分接近せしむるに與つて力あつたことは、之を認めざるを得ない。

次に南方革命派の態度は如何。此中にも雲南の唐繼堯の一派、肇慶の岑春煊の一派、上海の唐紹儀の一派並びに國會議員等の一派等色々の派があつて、其各々の意見にも亦多少の差がある。故に一概に之を約言することは六つかしいけれども、併し大體誤りなしと思はるゝ所の彼等全體の考といふものは、先づ北京政府に向つて舊法舊制の復活と帝政元兇の處罰とを要求し之によつて北方がどれ丈け自分等に讓歩するの意なるかを測定し、其結果によつて徐ろに自派を政界の中心たらしむるに適當なる處置を執らんとするに在るやうだ。兎に角彼等は段祺瑞を頭目に戴く北方の勢力の侮るべからざること、到底之を無視するを得ざることを熟知して居る。從つて彼等は此際一擧に北方の本壘を乘取る能はざることを覺悟して居る。そこで彼等は、差當り北方に對抗して次の三つの方法を執ることにした。第一に彼等は已に妥協の時機に入つたに拘らず、少しでも南方の根據を固め、且つ少しでも之を擴張し以て一つには遙かに北方を威嚇し、又一つには北方に對する交渉の上に幾分でもより有力なる後援を與へんことの策略を講じた。此目的を以て彼等は比較的抵抗力の少い方面に向つて實力の確立擴張を計つたのである。六月より七月にかけて、新聞紙上の矢釜しい問題となつた廣東事件、四川事件、湖南事件及び海軍獨立事件の如きは、畢竟之が爲めに起つた事柄である。廣東事件といふのは、龍濟光を追ひ拂つて廣東全省に亙る實權を南方の手に收めんとする運動である。龍濟光が曩きに陸榮廷の强迫に抗し得ず、心ならずも廣東省の獨立を宣言したことは、前號にも說明されてある。然し彼はもと袁世凱の忠實なる幕下であり、且つ曩に袁の意を迎へて隨分革命黨員を殺した經歷があるから假令今南方に加擔して一時北京政府に弓を引いても、

革命黨中の一部の者より蒙るところの個人的怨恨は之を奈何ともすることは出來ない。之れ彼が思ひ切つて革命黨側に身を投じ得ざる所以である。故に彼は一時勢に屈して南方に加擔しても、實權を肇慶の軍務院に引渡すことを肯んぜず、却つて堅要無二の觀音山に防備を堅うして、赤手空拳の岑春煊をして懊惱焦慮措く能はざらしめたのであつた。斯くして南方の氣早の連中の間には、龍濟光の處分といふことは疾くより腦中に描かれてあつたものと見える。遂に六月初旬李烈鈞の部下張開儒の率ゐる軍隊が、韶關に於て、龍の部下朱福全の凌辱を蒙り、月の半ば過ぎ遂に兩者の衝突を見たるを機として、南方派の龍濟光に對する積憤は暴發した。龍濟光も亦六月廿一日獨立の取消を宣言して其旗幟を鮮明にした。於是南方の猛將李烈鈞は遂に月の廿四日大軍を率ゐて龍濟光の討伐に向ひ、茲に即ち所謂廣東事件なるものが發生したのである。直接の原因は何れにありとしても、兎に角龍濟光を驅逐するにあらずんば、廣東は未だ實質上南方派の根據とならないから、斯の事件が起つたのである。而して此事は南方派全體の勢力の消長に大なる關係あるが故に、上海の唐紹儀、梁啓超、溫宗堯、王寵惠の輩までが、廣東省の統一保全の爲めを名として、龍濟光の罷免を北京に求めて居る(六月廿六日)。本月一日に至り岑春煊も亦形勢觀望の態度を改めて討伐に向つたといふ事である。十一日軍務院が、新たに獨立した李鼎新に部下の三軍艦の廣東派遣を要求したといふ報道の如きも、皆南方が如何に廣東の向背を重大視して居るかを證言するものである。四川事件といふのは、首鼠兩端の周駿を排斥して、四川全省を確實に南方派の手に收めんとするの運動である。周駿は前號にも引合に出された如く、初め蔡鍔の擧兵に内應して直に重慶を南軍に捧ぐべきを約しながら、寢返りを打つて甘んじて北京の制を受けた人物である。勢に附いて自己の功名をなすに急なる彼の性格は、やがてまた彼をして四川都督たらんとするの野心を起さしめて、六月廿三日彼は遂に陳宧との間に妥協の約をなすに至つた。然し兩方ともさる者、

いよ〳〵となると互に勢力を爭つて讓らない。此時に方り南方派の意を迎へて、統一和平の途を急ぎつゝありし北京政府は、陳、周兩人に上京を命じ、新たに蔡鍔を四川將軍に任じて此問題を解決せんとした。けれども周は厭くまで四川に根據を据ゑんとして上京を肯んじない。そこで蔡鍔は病を推して周駿排斥の兵を進め、七月上旬より着々成都に迫るの態度をとつたのである。次に湖南事件といふのは、湯薌銘を追うて湖南の首府長沙を南方の制令の下に置かんとする運動である。湯薌銘は上海に於ける文治派の一方の旗頭湯化龍の弟であるけれども、之れ亦龍濟光と同じく、先きに激しく革命黨を迫害窮追した經歷があるので、假令今日南方に加擔しても滿足なる地步を其間に占め難い懸念がある。そこで彼の態度は、初めから極めて曖昧であつた。又曖昧である丈け、彼に對する反感が南方の人々の間に頗る强烈となつた。彼は大勢に壓されて、一旦湖南の獨立を宣告したけれども、彼に湖南を托することは、決して南方人士の安んじ得るところではない。そこで南方は遙かに廣西の陸榮廷を招いで、其兵力によつて湯を追はんとしたのであるが、陸の軍の未だ長沙に迫らざるに先つて、曹繼梧、程潛、唐蟒の徒が、內部より亂を起して湯化龍を追うた。其後此等の連中が自ら都督と稱して反目暗鬪し、長沙は一時無政府の狀態に陷つた。恰度日本から上海に歸着した黃興を差し向けて經めようと言ふ說もあつたやうであるが、結局德望全省に遍き老儒劉人熙を推戴して、兎も角も動搖を鎮定するといふことになつた。混沌たる狀態は今尙全く收まつてはゐないけれども、然しどの途湖南が南方派の手に歸したこと丈けは疑がない。終りに海軍獨立事件は六月廿五日に實現した。此日第一艦隊の殆んど全部は、李鼎新を戴いて護國軍加入の旨を發表し、加之其加入の原因をば、新總統の下に於ける北京政府に時局收拾の誠意がないからと言ふことに歸し、暗に南方を助けて北京に當らんとするの決意を示した。此海軍の獨立には、莫大の金を遣ふて唐紹儀、谷鍾秀等が熱心に盡力したといふことであるから、之

れ亦彼等が北方に對抗して南方の威容を示す爲めに執つたところの手段に相違ない。以上の四つが主なるもので、其外陝西に於ても山東に於ても、夫れ〴〵多少の運動を試みて居るやうだ。要するに、廣東、四川、湖南が雲南、貴州、廣西と共に、確實に南方の勢力の下に歸するといふことになれば、如何に烏合の衆なるの嫌ありとはいへ、又如何に兵備上財政上大に缺くるところありとはいへ、南方は北方政府にとつて優に一敵國たるを失はない。妥協の時機に入つて而かも南方が巧みにこれ丈けの事功を擧げたのは、決して凡庸の手腕ではない。

第二に彼等は飽くまで舊國會の絶對的主權を主張し一歩も此點については讓らざらんと努めてゐる。動亂勃發以來上海に集つた舊國會議員の一團が、袁世凱に味方した所謂『附逆者』を除外し、七月十日を以て自ら上海に國會を開きて國政を議せんとして居つたことは前號にも述べられて居る。一體民國二年十一月のクーデターによつて追ひ拂はれた議員の大多數は、國民黨又は進歩黨に屬する人々で、其領袖連は即ち今度の革命運動に密接の關係を有するのである。故に舊國會を其儘復活し、舊國會議員をその儘集めて、之を國政論議の中心主體とすることは、即ち實權を南方に收むる所以である。尤も當初の豫定の如く、之を政府所在地とは遠く離れたる上海に開くのでは、聊か長鞭馬腹に及ばざるの感なきに非ざるが、袁世凱の死んでからは、彼等は開催地を北京に移すことに改定した。されば段祺瑞が亦袁の故智を學んで民力を以て威嚇するの態度を執らざる限り、北京に於ける國會の開催は政府にとつて確に非常な煩累でなければならぬ。故に北方派の希望としては國會などは急いで之を開きたくない。少くとも舊國會を其儘開くことには同意したくないのである。それでも兎に角、共和制擁護を標榜して起つた以上、段内閣は其宣言の體面上から言つても、嫌々ながらも早急國會を開かない譯には行かない。併し之を開くにしても舊國會議員を其儘召集するといふ考は無かつたのであるが、この點も段々南方派の勢に壓され

て、遂に同じく六月二十九日、舊約法復活の命令の公布と共に、政府は臨時約法第五十三條により國會を召集し、本年八月一日より繼續開會を命ずる旨を發布するに至つた。是れ既に南方派の一大勝利である。然るに之にも拘らず舊國會の重なる連中は猶之を以て滿足せず、更に北方を急追して此命令に反對の意を表し、『政府が第五十三條を援用するのは誤りである。臨時約法の下に於ては政府に國會召集の權限がない。我々は國民の代表者として、自ら集會する權能がある』と言つて政府の召集命令の僣越を高調して居る。加之彼等は更に改めて全國に散在する議員に向ひ、七月卅一日までに北京に來るべきことを通牒し、參集者の定足數に充つるを待つて、適宜開會すべき旨の宣言を發した。斯くて彼等は飽くまで政府に對する自家の優勝的地位を力說してやまない。定足數に達する丈けの頭數を揃へ得るや否やについては、餘程懸念されて居るやうではあるが、兎に角上海に集つて居つた連中は、最近續々勢ひ込んで北上して居るやうである。日本に遊んで居つた者で急に歸國して北京に向つた者も少くない。

第三に南方派は又北京政府の誘ひに應じて代表者を派遣し、妥協交涉の折衝に於て其主張を固執せしめて居る。南方の頭目は、梁啓超の如き、唐紹儀の如き、夫々代理人を派遣して居るが、重立つたもので自身北京に出馬したものは湯化龍である。彼は舊進步黨の領袖として最も黎元洪と近かつた丈け、或は進んで此任に當つたのかも知れない。北京の態度に十分安心の出來ぬ際としては、此人を派遣するは最も其人を得たるものである。而して彼は黎とは容易に意見の合致を見たやうであるが、段に對しては頗る嚴格な態度をとり、南方の輿論を固く執つて容易に讓步の色を見せなかつた。六月の末には更に范源濂、谷鐘秀、段汝驪、張繼等の北上するありて、陰に陽に南方主張の貫徹に努めしめて居る。南北折衝の表面上には支那流の辭令的粉飾は盛に交換されて居るけれども、然し彼等の實際の態度を注視するに、殆んど、毫末も、重大な點に於て北方に讓步するといふ風は見えないやうである。それ

丈け北京政府は南方との折衝に隨分骨が折れるものゝ如く見ゆる。

終りに北方に於ける實際の勢力の中心たる段祺瑞の態度を見よう。彼は元來純粹なる官僚系の出身ではあるけれども、袁世凱の帝制運動に反對したといふ點に於て、南方派の一部とは一時何等か多少の脉絡はあつたらしい。けれども今となつては彼の勢力の根據は矢張り北方の官人に在るのだから、全然南方に奔つては、孤立無援の一軍人に終らざるを得ない。そこで彼が甘んじて北方派に擔がるゝに至るのは自然の勢である。然し彼が今現に北方派の頭目と擔がれてをることの意味は、張勳や倪嗣冲などの如く、厭くまで南方に對抗するといふ頑固一點張りの考に出づるのか、又は大勢の已に南方にありとは氣附かぬではないが、勢已むを得ず北方の連中に擔がれて居るのか、此點はよく解らない。彼は決して大勢を洞察し得ぬ凡才ではない。が、然し赤手空拳を以てして急遽南方に奔らねばならぬ程時勢も切迫してはゐないし、又死物狂ひになつて息込んで居るところの北方派を見捨てる譯にも行かぬ所からして、今の態度を執つて居るのであらう。袁世凱に縋つて功名富貴を獲んとした北方の連中としては、今や死ぬか活きるかの境目にある。成敗の數如何に拘らず、彼等としては最後まで南方派と戰はねばならぬ立場にある。之を無視するといふことは、段にとつては極めて困難である。それも北京に居る文官丈けならば、まだしも、其外に軍人も澤山居る。更に少し南に下つては張、倪の如き猛者も居る。現に張勳の如きは六月十六日長文の密電を段に送つて、輕卒に舊法舊制を復活するの非を論じたとの事である。後に述ぶる如く、段が舊法復活に關して一旦湯化龍の意見を容れながら後其言を喰むに至つたのは、主としてこの張の後押しに依ると云はれてをる。倪嗣冲の如きは、南北妥協の交渉の眞最中に張文烈以下十二名の革命黨を銃殺し、尚多數の仲間を捕へて投獄し、最も露骨に南方に對する敵意を表示した。此事は六月廿四日安徽の舊議員管鵬の北京に致せる彈劾によつて明かである。斯う

いふ連中に擁せられて居るのだから、段祺瑞の南方に對して容易に讓歩し得ざる所以も亦之を諒としなければならぬ。されぱと言つて彼はまた、全然北方の勢力を恃んで南方に武力的壓迫を加ふるといふ樣の無謀な男でもない。彼は時局收拾の功を一手に收めんとしてあらはれた政治家である。而して今日の大勢に於ける所謂「時局の收拾」とは、北方のワイワイ連に餘り厄介な不平を起さしむることなくして巧に南方の要求を容れるといふことに在る。露骨に南方の要求を斥けるは內外より時局收拾の誠意がないなどと責めらるゝ。斯かる片手落の批判は不公平であるとは思ふけれども、勢なればまた致し方がない。茲に彼の苦心がある。又彼は此重大なる責任の地位に據つて將來に於ける自分の地步を固めんとする野心もあるが故に、如何に苦しいからといつて、其職を抛つといふやうなこともしない。そこで彼として採るべき手段は、先づ南方聽從といふ大勢に從ひつゝ、尙出來る丈け北方の地步を擁護防衞するといふ態度の外に出で得ない。出來る丈け北方の面目を保護して、而かも大勢に押されて段々と行く處に落ち行くといふのが今日の彼の狀態で、宛かもいやだ／＼と愚痴りながら、大男に引張られて行く駄駄ッ子の樣な姿である。駄々を捏ねるのは、單に自分の感情を卒直にあらはすといふとの外、部下に對する面目としても一應は文句をいはねばならぬとの必要に出づるといふ點もあるのであらう。兎に角彼は今日まで實はいろ／＼苦肉の策を廻らして居るのである。今その重なるものを擧げて見やう。

第一に彼は南方派に對する北方の反抗的勢力を見せつける爲めに、いろ／＼の反對同盟を作らしめた。例へば上海で國會議員が集るといへば、北京でも一つには上海派から排斥された議員を糾合する爲め、又一つには態度曖昧なる議員の上海に赴くを妨げ、以て出來得べくんば上海に定足數を得せしめざる爲め、別の議員團を作らしめたる如き、又他日いよ／＼國會が開けた時、有力なる政府黨を作らうとの魂膽を以て、右の連中を中堅とし、更に其範圍を擴張して、時の內務總

長王揖唐の肝煎の下に、同德會といふ一政治團體を組織せしめしが如き、又やゝ後れて、段祺瑞の新内閣で内務總長に擬せられた許世英をして、湖北安徽出身の官吏を集めて、國家學會（表面は學會なれども實際は政治團體なりといふ）なるものを組織せしめしが如き、之れである。獨り文官許りではない。七月三日の北京發電によれば、薩鎭氷、蔣作賓、程璧光、靳雲鵬、哈漢章等の將軍連も亦、別に軍人同德會なるものを起したとある。之れ亦南方に對抗する爲めに張つた虚勢に相違あるまい。七月十二日の北京發電には馮國璋、張勳、李瑞、王占元、張懷芝、張作霖、龍濟光、倪嗣冲等の將軍連は、黎元洪、段祺瑞に打電して、新政府に對する南方側の傲慢なる態度を非難したとある。之も恐らく北京政府に操られての芝居であらう。事情を知つて居るものは、斯んな事にはビクともしない。只之によつて我々は、北京政府の如何に南方を牽制せんが爲めに苦心して居るかを想像するのみである。

次に北京政府はまた頻りに外國の借款によつて、北方の實力の涵養を計らんと試みた。若し之が成功したならば、南方にとつては眞に恐るべきことであつたらう。なぜならば、支那に於ける勢力の競爭々奪は、一面に於て其の擁するところの金の高によつて決まるを常とするからである。借款とは少し趣が違ふけれども、段は先づ以て列國に鹽税剩餘金の交附を迫つたのであつた。之はやつとのことで成功したけれども（六月卅日）、其金高は僅に三百五六十萬元に過ぎない。而かも此中から軍隊の給料やら未拂外國顧問の給料等を支拂ふと、殘額は僅かに六十萬元位に過ぎない。且此中から袁世凱の國葬費などをも出さなければならぬといふのであるから、政府に殘る額はどの途大したものではない。されば折角の剩餘金交附問題の成功も、實際に於ては何等北京政府の實力に加ふるところがなかつたやうである。そこで支那政府は頻りに借款を得んとしたのであるが、之は列國の牽制によつて出來なかつた。今日支那に金を貸し得る國としては、日本と亞米利加との外にはない。然るに日本は當初より英・佛・露

と共同の歩調を取り來つて居るから、後に說くが如き理由で、單獨に借款の要求に應ずるといふことはしない。亞米利加には斯かる拘束がないので、支那は頻りに此方面に運動を試みたらしいので、從つて所謂米國借款なるものは、從來頻繁に新聞にあらはれたのである。然しながら紙上の聲言徒らに盛にして、實際成立したものは殆んど言ふに足らぬのである。元來支那では所謂政治借款は必ず五國銀行團によらざる可らざるの公約あり、而して米國は此團體に加はつて居ないから、米國の提供し得る借款は專ら經濟借款に限る。然るに之とても暗に列國の牽制があるので、新たに問題を起すことは甚だ困難である。豫々懸案となつて居つた運河改修工事の借款丈けが、最近やつと支那政府と米國インターナシヨナル・コーポレーションとの間に出來たやうだ。然し之も金高が僅かに五六百萬元位に過ぎず、其使途も制限されて居るとのことである。之では何等北京政府の實力に加ふるところがない。されば借款に關する報道が近來頻繁に現はれたに拘らず、北京政府の財政困難は依然として減じない。從つて實力を以て南方を壓するといふことは、今のところ不可能である。是れ止むなく口舌を以て徒に虛勢を張つて居る所以であらう。

更に段政府はまた南方をして其主張を撤回せざるを得ざらしむるの目的を以て、南方のよつて以て口實とする所のものを取り去る手段を講じたのであつた。即ち勢窮つた上のことゝはいひ乍ら、六月二十九日、我より進んで舊約法の復活を公布し、同日更に內閣の組織に大改革を加へて南方派數名を入れたるが如き之れである。此事は尙次に委しく述ぶるが、要するに敵の言ひ分を我れより進んで實行し、敵をして其の主張を押し立つるの口實なからしめんと計つたのである。併しながら、もと／＼南方の意見に屈してやつたとは云ひ度くないのだから、同じくやるにしてもやり工合が奇麗でない。ソコデ折角の處置も南方より好意を以て迎へられず、却つて誠意の存在を疑はれて、今のところ只無報酬で敵の爲めに働いた形に了つて仕舞つた。

今後更に段一派は如何なる工夫を廻らすか知らぬが、今までのところ、どれも之れも其功を奏せず、着々として南方派に引張られて居るやうである。

（二）

南北妥協の交渉は湯化龍と段祺瑞との會見は初まつた。尤も湯化龍と相前後して、梁啓超の代理人も段祺瑞と會見したと云ふ事であつたが、此方は世間でも餘り重きを置かなかつたし、又實際上大した結果を生じて居ない。湯化龍は六月十五日を以て北京に着いた。彼は必ずしも正式なる南方の全權代理と云ふ譯ではあるまい。然し事實上南方頭目を代表する意味に於て、特に黎元洪の招きに應じて北上したものなることは疑ない。彼は先づ十八日の朝黎元洪に敬意を表し、午後に至つて段祺瑞と會見した。それより日を隔てゝ數回の會見を重ねたのであるが、此會見に於て最初に問題となつたのは、舊約法復活の方法に關してゞあつた。此頃には大勢はもはや餘程進んで、舊約法の復活といふ其事には殆んど一人も反對する者はなかつた。張勳ですら相當の手續を以てする舊約法の復活には異議がないと云ふ意見を發表して居る。尤も一部には舊約法は餘りに大總統の權限を制限し、實際に之を運用するは却つて國家に利あらずと云ふやうな說があり、此點よりして舊約法の復活に反對するものもないでは無かつたが、然し南方派とても、必ずしも全部が舊約法の內容そのものを悉く是なりとするものではない。袁世凱に蹂躪された共和制の面目の爲めに兎も角も舊法を復活すべしと主張するのであつて、必ずしも復活した上で之を其儘永く實行すべしと云ふ譯ではないやうだ。尤も舊約法を復活した上で更に適當なる改正を之に加ふべきや否やは自ら別問題である。一般の輿論の傾向に察するに、約法改正と云ふやうな面倒な手續を採らず、直に正式の憲法制定を急がうと云ふに在るやうにも思はれる。何れにしても舊約法を復活すべしと云ふ事に就ては最早異論はない。唯如何なる方法に依つて共復活を見るべきかに就て、南北の異見が一致しないのである。段祺瑞の意見に據れば舊約法を復活するに

は先づ袁世凱の作つた新約法を廢止せなければならぬ。而してこの新約法は兎も角も參議院の決議を終た正當の法律であるから、之を廢止するには其手續を鄭重にする必要があるとて、南方の要求するが如き一片の命令を以て之を廢すべしとする說に反對して居る。法律を變更するに命令を以てするを得ずなどゝ云ふ効力比較論も援用されたやうだ。之に反して湯化龍の意見は、舊約法は不法の法律（即ち新約法）に依つて一時其効力の停止せられて居るのであるから、其不法の法律を廢止さへすれば舊法は當然其効力を回復すべきものである。而して合法に成立したるに非ざる新約法は、所謂「法律」でないから、之が廢止には大總統の一片の命令の布告を以て足ると主張するのである。斯くて段と湯とは南北を代表して大に論爭したのであるが、實は此爭は單に新舊兩約法の効力の爭に止まらず、延いて又南北兩派の中華民國の政治的主體としての正潤の爭でもあるので、裏面に中々重大の意義が伏在する。從て段は容易に湯の意見に屈しなかつた。所謂「鄭重なる手續」を固く主張して、各省會議の決議を以て始めて新法の廢止を實行せんとの提議を撤回しない。六月廿日頃の電報は、一旦段遂に湯の說を容れたりと報じたのであつたが、二十二日に至り彼は俄然として其態度を變じ、白々しくも各省文武の長官に通電を發し、命令を以て約法を復活するの非なるを說き、他に良案あらば願くば敎を垂れよなどゝ空嘯いたので、湯は大に段の食言を憤つたと傳へられて居る。斯くて段、湯の交涉は一旦破裂の姿となり、二十六日湯は北京を發して上海に向つた。然るに此日偶々上海に於ける海軍獨立の警報が政府に傳はつた。此報道は著しく北京政府を驚倒し、其結果急に其態度を改めしむることになつた。實は此時まで漸次各省に獨立を取消すものが殖えて居つたのみならず、雲南貴州の火元にまで獨立取消を迫らうといふ勢であつたのに、今海軍が故らに北京政府の態度を難じて獨立の旗を擧げたとあつては、之を機會として又獨立の火の手が擴がらぬとも限らない。折角晴れ掛かつた空が又曇り出したので、小心なる

段政府は大に狼狽へたものと見える。時にまた上海の議員團よりも更に嚴重なる要求もあつたので、二十七日の夜俄かに國務院會議を開き、遂に我から進んで舊法復活の命令を發すべき事を決議し、二十九日更に案文を議定して、即夜大總統申令として之を公布したのである。其大要に曰く、北和團體は首として民意を重んずる。民意の存する所は唯それ憲法のみ。而して憲法の成るは專ら國會に待つが、我中華民國の國會は、三年一月停止以後兩歳を超えて未だ復た召集せられず、今や開國五年になつて憲法未だ定まらない。大本立たずんば庶政進行するに由なし。依つて速かに國會を召集し、憲法を定め、民意に協つて國本を固むべきである。唯憲法未だ定まらざる以前は、其成立までの間、姑く民國元年三月十一日公布の臨時約法を遵行せしむ。二年十月五日宣布の大總統選擧法も亦憲法の一部として有效なるべし云々といふのである。之に由つて見れば、北方の意氣込はどこ迄も南方の要求に從つて斯く處置するのではない、正式の憲法の出來上るまでの間、假りに舊約法を行ふのであるといふ見解で、袁世凱の作つた新約法の合法不法に就ては何等言及してゐない。從て此命令丈けでは之を機會として南方が解決せんとした南北正潤の問題も解決せられないので、從て事實に於ては南方の要求が容れられたるに拘らず、南方側は決して北方の處置に滿足はしなかつた。況んや豫め何等通告することなく、出し拔けに之を公表したるに於ておや。この南方無視の態度は、自ら南方をして段の誠意の存在を疑はしめ、却つて幾分時局の拾收を困難ならしめた傾がある。

(三)

舊法復活に次で爭はれた問題は、内閣の役割である。元來之は段、湯の交渉の際にも問題となつたらしい。南方派段の腹では、政府丈けは自分の方で之を占め、南方派には閣外に立つて自分達の經營を助けて貰ふといふ客分の地位を與ふる位の積りであつたらしい。併し之には外部にも反對があつたし、又内部の北京にも反對があつた。中にも黎大總統はそんな事では時局解決の始

末が着く者ではないと云ふ考であつたやうだ。黎が南方に對して餘りに腰が弱いとて段の辭表を呈したのは(六月二十日)、此等の點に基因すると云はれて居る。其辭表は固より許されなかつた。將來此地位を踏臺として副總統にも大總統にもならうと云ふ野心の段に、眞實辭職の意なかりし事も亦疑はない。斯くて彼はとにかく、舊法復活問題に對して當初執つたと同じやうな强硬な態度を、此問題に對しても執つて來た。而して此態度はまた舊法復活問題の場合と同じやうに、海軍獨立の報に驚かされて急に一變した。六月三十日の內閣大改造が卽ち之れである。卽ち彼は自ら國務總理を以て陸軍總長を兼ね、南方の唐紹儀、孫洪伊、張燿曾を招いで夫れ〳〵外交、敎育、司法の總長に任じ、更に之に自己並びに黎の幕下若干を加へて新內閣の顏揃を整へた。此中に純帝制派と認むべきものは先づ一人もないが、併し南方派は少くとも三つの點に於て此內閣改造に不滿であつた。一つは南方派の入閣がたつた三人に過ぎない事、二は內務、財務、交通等の要職が北方派に依つて占められた事、三は此人選については豫め南方に何等の打合せをせず、出し拔けに任命を發表した事である。中にも豫め南方に協議しなかつたと云ふ點が、前の舊法復活の場合と同じく、北方派に眞に南方を敬重するの誠意なき證憑なりとして、最も高く不平の聲が擧げられた。從つて世間では初めから南方派は其就任を承諾しないだらうと評判して居つた。果して唐、孫、張の三名は頑として就任を拒んだ。今日に至るまで約半月の間、幾度か當事者間に電報の交換があり、幾度か友人の勸誘を受くるあり、中にも南方を代表して北上した張繼など迄が、三氏に上京を勸めたるに拘はらず(八百長だとは思ふけれども)彼等は頑として今仍ほ其態度を改めない。七月十二日、段は汪大燮を閣外に轉じ、內務總長許世英を其後任として交通部に移し、此內務總長の椅子に孫洪伊を据ゑ、更に南方の一領袖范源濂を抽いて敎育總長に擧げ、以て更に南方の意を迎へんとしたけれども、それでも唐、孫等は依然として北上を肯じない。斯くて內閣役割の問題は今日

會行惱んで居る。

内閣組織の行惱が段の一派に取つて如何なる意味を有するか。段は兎も角も時局收拾の功を一手に收めんとして起つた人である。然るに時局の始末を付けんとするには妥協の方法に依らざる可らざる以上、彼は是非とも南方派の入閣承諾を得るに成功しなければならない。南方派を除外して內閣を組織するのでは、時局の收拾でも何でもない。故に今のやうに南方の入閣承諾を得るに行惱んで居つては、彼の手で未だ十分に纒りが付かないといふ譯であるから、內に於ては天下人心の歸嚮が定まらず、外に在つては肝腎の外國の後援を得る事が出來ないといふ事になる。早い話が、差當り入用な金を借りる事が出來ない。目下段の最も困つて居るものは金である。外國の財閥は、貸すには貸すが兎に角南方と打合せをつけて天下統一の端緒を開いてから來いと云つて待つて居る。故に段としては、いやが應でも唐、孫一派の入閣を見るに成功せなければならぬ。若し之に成功するを得ずんば、彼は時局收拾の任を完うせざるの責を引いて國務總理の地位を抛げ出さねばならぬ境遇に陷る。今迄あれ丈けの地歩を占めて來たのに、俄に功名の地を一擧に抛棄するといふ事は彼として最も苦しい所である。そこで彼は如何にもして兎にも角にも一應南方側の入閣を承諾せしめんと焦つて居る。如何に段が此點に焦慮して居るかは、七月十四日の北京電報が、將來內閣の役割を定むるに就ては南方と協議を遂ぐる事にすべしといふ宣言を段は發したと報じた事によりても分る。十三日の申令が突如豫て南方派の要求して居つた帝政元兇の處罰を公布したるが如きも、亦同樣の趣意に出づるものであらう。併し彼は斯くても猶は飽く迄南方に屈したいふ襤褸を出すまいと力めて居る點は、あり〳〵見える。それ丈けまた彼は南方側から內兜を見透かされて居るやうにも思はれる。

然らば唐、孫の一派は結局段內閣に入ることを承諾するだらうか。今の所最も强硬の態度を執つて居るものは唐紹儀であるやうである。彼がかくも强硬なる態

度を執つて動かざるは、素と彼自身の發意に出づるや、或は南方派全體の要求に從つての事なりやは、予の明確に知らざる所なるも、兎に角彼は上海派の首領であり、又今度の南方革命運動に初めから最も深き關係を有する一人である丈け、彼の態度は大に全體に重きをなすことは明である。彼が頑として動かない以上は、孫でも張でも、或は范でも、彼に背いて又彼の意に反して北京政府に入るといふことはあるまい。其反面に於て又假令他の二人が極力入閣を拒んだとしても、唐紹儀一人が入閣したと云ふ事であれば、或は一應は收まりがつくかとも思はるゝ。然らば段をして兎も角も時局收拾の名を爲さしむるか、或は恨を吞んで引退せざるを得ざらしむるかは、殆んど唐一人の態度によつて極まると云つても差支がない。然らば此際に於て唐紹儀の立場を研究するといふ事は、極めて肝要なる問題である。

唐紹儀は、最初入閣の勸誘を受けた時、或は自分は久しく實業界に入つて政治に遠ざかつたとか、或は目下經營してゐる保險會社の仕事が忙しくて政治に手を染めるの餘裕がないとか、いろ／＼の理由を擧げて辭意を表し、又此際外交の局に當るものは餘程の英物でなければならぬのに、不肖余の如きは其人に非らずなどゝ皮肉つて、斷乎として、段の勸誘を斥けた。然らば彼に全然政界に乘り出づるの野心はないのかと云ふに事實決してさうではないと思ふ。もと／＼彼は政界に於て名を爲したる大野心家である。此野心あればこそ彼は初めから雲南の革命運動に少からず肩を入れたのである。而して予の最近に得たる情報に據れば、彼は心密かに乃公出でずんば此難局を奈何せんとの抱負を有し、大に自重して居るといふ事である。又公平に觀た所、內外に折衝して北京政府を纏めて行く實際の手腕家を當今に求むれば、何人も先づ指を第一に彼に屈せざるを得まい。若し果して此大確信と此大自重とあるが故に彼が容易に起たないのだとすれば、想ふに彼は段の窮迫して其地位を投げ出すのを心密かに待つて居るのであるまいか。この觀察をして當れりとせば、今

日の南北折衝の形勢は、當に段と唐との間に行はるゝ暗默の政權爭奪の戰と云うて可い。唐が出るか段が引くか。南方が負けるか、北方が勝つか。袁の死によつて一旦戈を戢めた南北の戰爭は、玆に一轉して段、唐の無言の掛引きに顯はるゝこととなつたのである。何れにしても一方が他の一方を壓倒せずんば熄まざる質の戰爭であることは同一である。唯此戰爭に於ては、段には進んで他の意思を動かさねばならぬと云ふ弱味があり、唐には默つて動かずに居れば可いと云ふ强味がある。更に段に對しては、何時迄も愚圖愚圖して居るなら金は貸さぬぞといふ外國よりの自然的壓迫があり、又早く始末を付けねば軍務院は撤廢しないとか、獨立の宣言は取消さないとかの內部よりの壓迫がある。七月十二日張繼が總統府政治顧問の任に就いたといふが如きも、黎の名を以て更に有力なる牽制の手が段に加はるを意味するものであらう。之に反して唐には、不本意ながら段の勸請に應ぜねばならぬといふ內外の壓迫を蒙る憂がない。最近唐は極めて日本と接近して居るといふ事であるが、日本とて今更支那の內政に干涉し、段の依賴を受けて彼に北上を勸めると云ふやうな事もしまい。

尙序でに之に關聯して帝制派處罰の問題を說明して置かう。將來の見せしめの爲めに帝制主張者を處罰すべしとは、南方派當初よりの要求であつた。然しながら處罰者の範圍及處罰の方法程度に就ては、南方派に於て初め明瞭した考は極つてゐなかつたやうだ。時局の進むと共に、漸次此問題も具體的に論ぜらるゝやうになつたが、最近に於つては、此點に於て明かに二つの考のあることが明になつた。一つは極端說で、即ち孫逸仙派の主張する所である。中にも山東の居正の如きは非常に廣き範圍を指定して之を悉く處罰すべしと要求して居る。然し之は極めて少部分の意見で、他の大多數は皆穩健說を抱いて居る。即ち其範圍も出來る丈け狹きに制限し、徒らに苛酷の條件を以て追窮するを不可とするのである。併しこの孰れの派に屬するを問はず處罰の決定は新國會の決議に待つべしとする北

方一部の意見に對しては、均しく皆斷乎として反對の考を取つて居つた。南方派は寧ろ帝制元兇處分の實行を以て、北京政府がどれ丈け南北妥協の問題に對して誠意を有し居るかを測定する標準と爲すべしと觀て居つた。否帝制元兇處罰の實行が、南北の眞の融和を議するの先決問題であるといふ位に考へて居つた。從つて彼等は此問題に就いては相當に强硬なる意見を表明して居つたのである。然し此事の解決は實は北方に取つては極めて困難であり又苦痛である。否、殆んど不可能といつてもよい事は言を待たない。故に此問題は實際上一番後廻しにされて居つたが、前に述ぶるが如き事情で、遂に十三日の申令を以て段内閣はヤット此問題に對する解決案を發表したのである。只右の如き事情であるから、此解決案の極めて微温いものであることは固より言ふを俟たない。即ち此申令に據れば楊度、孫毓筠、顧鼇、梁士詒、夏壽田、朱啓鈐、周自齋、薛大可の八人だけを法に照らして處罰するので、其餘は一概に寛免すと云ふのである。去年の暮の雲南討袁檄文以來帝制元兇は十三人と極つて居たのに、其中五人を許し、已に天津、上海、香港等支那官權の手の及ばざる地域に逃げて了つたもの丈け八人を處罰の目的物とし、而かも倪嗣冲、段芝貴、張勳等の如き呑舟の魚を逸したのは、些か元兇處罰の名あつて其實を失つた嫌がある。それでも此處まで持つて來たのは、張繼の非常なる盡力の結果であると云ふから、今の政府の力では此問題の此以上の解決は餘程困難であらう。中にも地方にあつて兵力を擁する者の處分の困難なるべきことは、前號にも詳しく說かれてある。然し微温いながらも此問題に手を着けた丈け、如何に段祺瑞の立場が苦しいかといふことは分る。然しそれでも唐紹儀は容易に動きさうにない。

(四)

終りに「南北妥協の支那」に對する日本の態度を論じて置かう。

支那の動亂に對する日本の態度は初めから嚴正中立を以て一貫して居る。尤も北方を袖にして大に南方を

たといふ説もあつたけれども、之は袁世凱と日本との關係が兎角圓滿を缺いて居つたといふ在來の事實と、日本の一部の有志者が南方の爲めに物質上精神上多少の援助をしたといふ事實とから起つた好事者の推測であらう。日本國家としては、固より嚴正中立であるべき筈である。

凡そ外國の内事に對しては常に必ず無干渉の態度をとるべきことは、本來當然の原則である。然し我國が支那の動亂に對して嚴正中立の態度を維持したといふことは、實に初めから何等の困難なしに行はれたことではない。なぜなれば當初嚴正中立といふことは、支那と關係ある諸外國の一般の通論ではなかつたからである。支那は從來表面は何といつても事實に於ては列國の同情の下に立つて居つた國で、殊に袁世凱の治下に於ては、列國との交渉は極めて密接であつた。從つて列國の支那に對するは、他の純然たる獨立國に對するとは、些か趣を異にして居つた。即ち彼等は、支那に對しては動もすると何や彼と世話を燒きたがる。そこで去年の暮新たに南方に動亂が起つて袁政府の大に困憊するを見るや、彼等は忽ち袁を助けて動亂を鎭定せしめんとした。此考は、彼等が平素袁世凱を買ひ被り、支那の和平を維持するものは彼を措いて他に其人なしと盲信して居つた丈け、强烈であつた。然るに若し其際此考に從つて袁を直接間接助けたとすれば、動亂の蔓延は一時或は之を治め得たであらうが、結局に於ては時局をして益々紛糾せしむる結果を見たであらう。是れ天下の人心は已に袁を離れて居つたからである。此事は西洋人にはよく分らない。西洋人は只一時の事のみを觀て袁を助けやうとする。而して此大勢を妨げて辛うじて彼等をして嚴正中立の態度を執るに同意せしめたものは一に我國の力である。之も歐洲の天地が平和の時であつたら、かく易す〳〵と日本の主張が容れられたかどうか解らない。歐洲戰爭に忙殺されて、日本の主張に列國が聽從せねばならなかつたのは、支那にとつても物怪の幸であつた。斯くして始めて諸外國は一致して嚴正中立の態度を執ることとなつた。

爲めに動亂の火の手は一時盛に擴がつたやうであるけれども、我々は之を以て却つて支那の根本的和平の爲めには幸福であつたと信じて居る。

列國の此態度は、袁世凱の死によつて復た少しく動搖した。それは彼等は袁を以て支那唯一の大政治家と買ひ被つて居つた丈け、彼の訃に接して非常に失望し、彼が死んでは最早や支那は暗闇だと考へたからである。而して彼等は嚮導者を失つた支那は今後は之を列國の共同監督の下に支配して行くの外はあるまいといふやうに考ふるに至つたらしい。結局に於て之を列國の共同監督の下に置くのであれば、差當り中央の政局に當るものゝ何人たるかは、其の問ふところではない。只表向きの當局者に、出來る丈の助力を與へて一日も早く紛亂を治むるが得策である。斯ういふ考からして列國は黎元洪、段祺瑞を押し立て、彼等をして速に時局を收拾せしめようといふ考になつた。その爲めには直接間接大に彼等に助力すると云ふ譯になつた。時に恰も段祺瑞の方から、更に熱心に鹽稅剩餘金交附の要求があり、更に其外に多額の借款の申込があつた。此申込に對して列國は譯もなく應じやうといふ態度を示した。此事に關する細密の消息は我々外間の者には固より十分ハッキリ解らないのであるけれども、然し夫の五國銀行團に新たに米國を引入れんとした計畫の如きに見ても、此間の消息はあり〳〵と窺はるのである。前にも述べた如く、經濟借款は各國自由に之を取極めるとに差支はないけれども、政治借款丈けは必ず所謂五國銀行團に交渉しなければならぬことになつて居る。政治上の目的の爲めに起さるゝ重大なる借款には、各國單獨の拔駈けの功名は許さない。此約束に加つた國は、初め日・英・獨・佛・露・米の六國であつたが、後米國は現大統領ウイルソンに至り、之を以て支那の內政に干渉するの端を開くものなりとなして脫退した。之より五國銀行團と稱するととなつたのである。然るに目下歐洲戰爭の際とあれば、獨逸は勿論のこと、英・佛・露共に支那に資金を供給するの餘裕はない。支那に多額の資金を供給せんとすれば、是非共米國を誘はねばならぬ。さうい

ふ必要から、英國は駐支各國公使に對つて、米國誘引の提議を出したものらしい。こは一部の人の言ふが如く、必ずしも、獨逸が已に聯合者の一人としては有名無實だから、其補充の意味で米國を誘ふたといふ譯のものではなからう。目下手の空いて居る日本獨りに甘い汁を吸はれてはといふ嫉妬から、換言すれば日本ひとりに支那で跋扈さることを牽制するの意味で、米國を誘ふたと見るべきでないことは勿論である。予は英國の提議の主たる原因は一に米國を入るゝにあらずんば支那に思ふ存分の助力は與へられないといふ考であつたと觀る。從つて予は米國誘引の根本の原因は、新政府を助けんとする列國の强き決心にありと信ずるものである。然し萬一此考が實現すれば一方には非常に結構な樣ではあるが、他方には爲めに支那が早晩列國の共同監督の下に歸するの惧があるので、之は支那にとつては勿論、東洋の一國としての我日本にとつても容易ならざる大事である。加之、新政府に直に十二分の助力を與ふる事に依つて根本的に時局の收拾を全う

し得べしとするのは亦正當の見解ではあるまい。事情を知らぬ人の考としては一應尤もの樣ではあるが、實際は却つて支那の時局を益々紛亂せしむるの恐がある。なぜなれば、之が爲めに北方は大に力を得て、延いて南方に對して屈服を要求することとなり、爲めに益々南方の反抗を激成すべきを以てゞある。そこで日本は表面はどういふ理窟を取つたか知らぬが、兎に角極力此事に反對したらしい。少くとも日本は列國に向つて如何に助力を與へても北方は到底南方を屈する能はざるべきこと、寧ろ南北の双方に暫らく何等の助力を與へず、かくして兩方を窮迫せしむることが、寧ろ速に南北を妥協せしむる所以なること、いよ〳〵南北の妥協が完成して天下の略ぼ一に歸するを俟つて、初めて有形無形の援助を與へた方が有效にして又有益なるべきこと等を熱心に力說したものと思はるゝ。此主張は結局幸に列國の同意を得たものと見えて、支那は、今日のところ、亞米利加から多少の經濟的借款を得たるの外は、殆んど之といふ大した金錢上の助力を何處か

らも得てゐない。斯くて北方は目下大に財政に困つて居る。南方も亦固より同樣で、ツマリお互に虛勢を張つては居るが、窮迫の餘り一歩〳〵互に接近しつゝあることは、今日爭ふべからざる支那の實勢である。

此頃一部の論者の間には、日本が近頃急に南方に冷淡になつた、支那の時局に對する日本の方針は、袁の死と共に急變したと難ずる者がある。成程日本が南方に對し最近特に冷靜の態度をとつて居ることは事實であらう。然し之は嚴正中立の主義を一層嚴格に守らんとする事の當然の結果であり、少くとも、列國に迫つて獨り北方に對して多大の援助を與へざらんことを要求した事の當然の道德的義務といふべきであらう。從來とても國家として日本が南方側と何等特別の關係はなかつたと信ずるのであるが、假りに最近急に手を引き締めたとしても、列國の北京に於ける積極的活動を阻止する爲めには、是亦止むを得なかつたといはねばなるまい。從來密かに多大の援助を與へて居つたのが、急に態度を變へたといふのなら、まだしも問題になるが、從來とても大した密接の關係がないのであるとすれば、最近特に著しく冷靜の態度が眼につくとしても深く之を咎むべきではなからうと思ふ。尤も日本朝野の某々個人々々の支那南方派の誰彼に對する個々の態度については、予の見聞して居る事實丈けについて云つても、大に議すべきものがないではないやうだ。餘りに日本人の態度に眞實がなさ過ぎると思はるゝ節も少からずある。けれども全體として日本政府今日の態度は甚しく正鵠を失してはゐないと信ずる。只予は此上にも當局者に對して、支那の時局の推移には常に細心の注意を怠らず、常に滿を持して放たざるの自重を存し、一旦機到らば疾風迅雷の勢を以て突進するの用意あらんことを希望せざるを得ない。支那の時局は今のところ醉歩蹣跚の姿ながら、兎に角フラリ〳〵と大勢の命ずる方向を誤らずに辿つて居るやうだ。遠からざる將來に於て兎も角も天下一に歸するの時は來よう。此時に際して我が當局者は、果して如何にして支那を列國共同の監督の網より救はんとするや。又如何にして能く中華民國有識者の誠意ある信頼を贏ち得んとするや。之れ我々の讀者と共に刮目して觀んと欲するところである。(六月十五日記す)

公娼私娼問題

▽私娼撲滅の方針を評す

救世軍大佐　山室軍平

今度の警視廳の所謂私娼撲滅斷行には私も贊成である。私が殊に所謂と言つたのは、千束町、神明、郡代邊りに巣窟を構へて、世間から私娼と呼ばれて居る者を、私は元來準公娼だと思つて居るからである。之を廢娼論者たる私から言へば、明かに一種の公娼である。彼等は無論撲滅されなければならない。又存娼論者の側から言つても、一廓を設けて其地域內にだけは娼妓を置く事は許すが、所謂私娼なるものゝ存在跋扈を許す理由はない。だから廢娼存娼何方の見地から言つても、所謂私娼は當然處置されべきものであつた。然るに今日に至つて今更の如く遽かに私娼撲滅などゝ騷ぎ出すのは、寧ろ遲きに過ぎた憾がある。然し世には爲すべき事の爲されて居ないのが澤山あるから、設ひ遲くても此擧あるは喜ぶべきことで、殊に當の責任者たる丸山保安部長の如きは、鋭意之が爲めに盡力して居られると言ふに至つては、寔に感謝せざるを得ない。

然し乍ら翻つて今度の所謂私娼撲滅が、果して如何なる程度、如何なる範圍にまで斷行されるかと觀る時、私は遺憾ながら大なる不滿を懷かざるを得ない。何となれば警視廳が其勦滅の手を伸す處は、唯僅かに集團を成す私娼——私の認めて準公娼とする——に極限されて居て、寛大にも藝妓と稱する私娼を全く閑却し默許して居るからである。彼等藝妓の殆んど悉くが、千束町の私娼の如く神明前の私娼の如く、毎日公々然として賣淫を營んでゐることは、世間で何人も知らぬ者のない事實である。所謂私娼撲滅を聲明せる警視廳は、當然彼等藝妓の上にも亦一大斧鉞を下さなければならない筈である。然るに折角の美擧も唯徒らに銘酒屋方面の私娼の範圍に止まるやうでは、如何に撲滅を斷行したからとて到底片手落の取締たるを免れない。聞く所に據れば、最近某高等官が市內の一警察署長に對して、「近頃は取締りが嚴しいと聞くが、どうだ我々の行先に祟られるやうなことはないか」と訊ねたら、「御心配には及びません。迚も其處までは手が屆きませんから。」と答へたさうだ。金に飽かして大びらに藝妓と名づける私娼を玩弄び、殊には西も東も分らない小學兒童の如き少女を傷けて得々たる、今の世の所謂貴顯紳士の醜行醜聞は其の儘に默認され、食ふに困つて已むなく醜業を營むやうな貧民窟の賣笑婦のみが續々檢擧され、警察や監獄に曳かれると言ふのでは、所謂私娼撲滅もなかなか滿足し得る狀態に在るとは言へない。

警視廳が私娼撲滅を楯に、公娼に對しては種々懇切なる便宜を與へて其擴張奬勵を促がすが如き奇怪なる措置に就ては、論議する點が澤山ある。即ち今度公娼に對してなされた改正に就て考へると、幾分の喜ぶべき處置がないでもない如く見えるが、其の實は矢張意に滿たぬこと許りであるのは殘念の至である。

第一に張店の禁止は可いと思ふ。此事は前年今の愛知縣知事松井茂氏が未だ警視廳に居た時、既に此案を立てゝ總監に提出せうとした刹那に地位を去るの已むなきに至つたので、其儘立消となつた。それから十數年も經つた今日、疾くに然うなつて居るべき筈の事が、漸く實現されたのである。遲くはあるが、兎に角張店を禁じて人間の賣物を棚ざらしにする奇怪なる弊風を矯正したのは結構である。然し乍ら其代りにバアを開くとは何事であるか。嘗て板垣退助伯が内務大臣であつた頃、遊廓制度を研究し、廓内では一切飲食物を禁ずべしといふ結論に到達した。如何にも尤もである。或人々の劣情を汲さん爲めに是非遊廓が必要であると假定しても、何も酒を飲んで不攝生な眞似をさせ、素面では出來ぬ痴呆た所業をさせるまでの設備をする必要が何處にあらう。若し眞顔ではそんな痴呆けた眞似が出來ぬと言ふなら、爲せないまでの事ではないか。然るに臺屋なるものがあつて飲食物に暴利を貪つて居たのが不都合だとあつて、新に貸座敷業者に飲食店を兼業させ、飲食物を求めに這入つた人々を娼婦が誘惑するやうに仕向けて、從來に無い設備を許可したのは如何云ふ意味なのか。若し然うでもしなければ遊廓が繁昌しないと言ふなら、それこそ國家の風敎の上から見て是程慶賀すべき事はないではないか。なぜ之を自然の成行に放任して置かないのであるか。

次に娼妓の外出を前より自由にした事は可いと思ふ。今迄は親の病氣見舞か、本人が病氣で廓外に轉地療養する必要ある外、外出は許されなかつた。爲めに娼妓は貸座敷業者に束縛され、廢業の出來ぬやうになつてゐた。救世軍で取扱つた限りでは、娼妓の數は洲崎の方が吉原より少ないのに（二と三位の割合）、數年來廢業する者は丁度其反比例を示して居る。重なる理由は吉原に在る驅黴院は其廓内の娼妓許りを收容するに反し、洲崎のは便宜上市内各所の私娼をも入院せしめて居るから、少くとも洲崎の娼妓は嫖客又は貸座敷業に關係ある雇人以外の私娼から、多少外部の社會の話を聞く機會がある。之が洲崎に廢業の多い理由の一つである。唯是位の些少の相違ですら斯くの通りであるから、況んや今後娼妓が外出の自由を得、外界の空氣に觸れることが多くなり、貸座敷業者も前程束縛が出來なくなれば自ら廢業もし易くなる。從て貸座敷業者も廢業の恐れある者に多くの金を貸すのは危險だから、前借の高も少くなるであらう。若し然うなれば之は喜ぶべき現象である。私から言はすれば、公娼制度の最も惡い點は前借金を許してあることである。名は前借金であるが實は舊時の身代金である。即ち奴隷購入の代價である。昔ながらの人身賣買である。若し前借金を無くすることが出來れば、其時こそ理想に近い取締りも行はれやうといふものである。

けれども外出の自由も、一面から考へれば、又弊害がある。昔は娼妓

で歌の一つも詠める者も居たが、今は文字も讀めず自分の名前も書けないやうなのが、三割四割を占めて居る。殊に東北の前年の凶作地の邊から無智困窮の女を連れて來て、彼等を吉原、洲崎の廓内に置くやうなのが多い。そこで彼等の知識は岩手縣あたりの田圃と吉原洲崎の廓内の事に止まつて、客が何を話しても更に其話相手になれない。處で今度の警視廳の遣り方が、彼等に日本橋を見せ日比谷公園を見せ上野淺草を見せて話の種を仕入れさせると言ふ親切な計らひであるとすれば、之も幾らか折角衰へ掛けて來た遊廓に景氣を付ける所以となるだらう。如何か此方の功能は餘り現はれないやうに希望する。

花魁道中や仁和賀と言ふやうなものは禁ずると聞くが、是は固より然さもあるべきことである。序でに酉の市にも改良を加へて貰ひたい。あれも亦醜業者の一種の示威運動になつて居るのだから。假令迷信とは言へ熊手を買つて家に飾る風習が、或る頭の古い人々の間に尙行はれて居るものとすれば、熊手を年の市の門松や七五三飾りと同じ樣に銀座邊りの街頭にでも商なはせて、酉の市を利用して遊廓の示威運動になさせぬやうに、絕體に遊廓と切り離させなければならぬ。それから各門の開放である。從來吉原は大門が一ケ所だけ開放されてゐたのみなるに、各方面から出入を自由にさせる爲めと稱して數多の門を開放したのは何の意味か。閉ぢて置いても濟んだものを何故開けて迄其便宜を圖るのか、私は其理由を知るに苦しむ。

次に建築規則の變更である。從來は三十坪以下の家屋を建てさせず煉瓦、石造、塗屋に限つたものを、今度は木造を許し三十坪以下の家屋を許すことになつた。元來貸座敷の家屋は見窄らしい程可いのである。宏大な建物を構へて居ると、仰ぎ見る人をして如何か工面が出來たら、恁んな立派な處でせめて一夜の遊蕩を試みたいといふやうな邪念を起させるのは宜しくない。此點から見て家を狹小にするを許したのは可いが、然し是を機會に僅な資本で小屋掛のやうなものを作り、幾軒となく淫蕩を勸誘する家を新設させて事實上遊廓の大擴張をするのは不都合である

之を根本的に言へば、公娼は時勢に遲れた制度で、何處の國でも衰微に傾き、日本も既に其兆候を呈しつゝあるに、今や警視廳が人工的に皮下注射を試みてまで之を保護せんとするは由々敷誤謬である。一體公娼が國民衞生に益あるやうに思ふのが間違で、其事は吉原洲崎の驅黴院長が何人よりも能く知つて居る。現に最近花柳病講習會の席上、彼等の一人が、「目下東京には六千人の娼妓が居るが、彼等の年期は大概六年だから一年に千人宛出代るものとすれば、東京の遊廓は每年千人宛の花柳病傳播者を廓外に放つて居るのだ」と言つたに徴しても知ることが出來る。眞似のやうな檢黴をなし、申譯許りの治療を試みて、何の衞生に益する處があらうか。而かも一週唯一度の檢黴で、娼妓は每週七八人乃至二三十人の客に接するのである。假令檢黴の功があつても、それは最初の一人だけで、後の六七人乃至二三十人は檢黴があるから大丈夫だと思つて實は不測の危險に突き落されて居る。而かも最初の一人者でさへも一向確實のことは分らないと言ふに至つては、公娼は人を欺いて花柳病の

險に陥いれる故も無悪なる制度と言はれても仕方がない。

之を風紀の上から見ても、花々しく公娼の存在を許すから自然密娼までが時を得顔に蔓るのである。公娼の存在は政府が男子の不品行を公許する意味で、又婦人の貞操切賣りを國家が一種の營業を認める所以である。それで風紀の刷新を圖り國民の品性の向上を望むのは、それこそ木に縁つて魚を求むるものである。

然らば如何すれば可いか。私の持論からすれば、先づ公娼を廢せよ。公娼を廢するのみにて其以上に何の爲す所なしとしても、尚今日よりは優つて居る。十の公娼を亡ぼした爲めに、必ず十の密娼が生ずるものではない。恐らく二三の密娼を出す位で已むであらう。或はそれさへも發さぬかも知れない。徒然草の兼好法師が云ふ通り、「心は必ず物にふれて起る」のである。盃を見れば飲みたくなり、剣を取れば斬りたくもなるのである。公娼が存在を許されて居ればこそ、それに誘致されて淫蕩に沈湎する者も出て來る、無ければ無しに濟むものが多いのである。實例は群馬縣に見る事が出來る。群馬縣は公娼が無い爲に私娼も殖えては居ない。公娼が認許されない位だから私娼迄も恐れ憚るのである。該縣の醜業婦の總計は附近の各縣に比して遥かに鮮少である。從て衛生上に於ても、群馬縣の花柳病者の數は附近の各縣に比して最も少ない。公娼が根絶すれば密娼が殖えるとか、花柳病が蔓延するとか言ふは畢竟癡人の空想で、事實が之を反證して居る。例を外國にとる迄もない、諸君の目前に在るではないか。なぜ殊更に此絶好の實例に目をふさいて、飛んでもない公娼奨勵などの愚策を採るのであるか。

然し乍ら一歩進んで言へは唯公娼を廢止するに止まらず、更に進んで種々の方面に爲さねばならぬ事が澤山ある。公娼廢止の後には私娼の取締りを勵行する。取締つても尚生ずる私娼があれば、それは盜賊を禁じた後の盜賊の如く法網を潜ぐる違法者に過ぎない、及ぶだけ傍から檢擧して處罰するが可い。又貸座敷業類似の者を捕へて嚴重なる處分を與へねばならぬ。日本で貸座敷業者が選出されて市會府會の議者たる如きは何と言ふ愚劣破廉恥な事であらう。英國邊りでは婦人に醜業を營ませ其アタマを撥ねるが如き者は、獸類と看做し人非人の取扱ひをなし笞刑を行ふ事になつてゐる。我國も須らく然うあるべきである。

其他政府が率先して女子の職業を奨勵し、職業紹介所を設け、又無料花柳病院を設立して、一方では私娼などに接觸することの危險なる事を世人に警戒して置いて、扨一方では其病毒に感染したものは無料で治療してやるやうにする。現今の公娼制度に於ける如く危險を安全と欺いて人を危地に陷れる代りに、危險を危險と明言しそれでも尚身を過まる者があつたら治療救濟してやつた方が餘程親切で又有效な方法である。又民間の事實としては婦人救濟事業を盛んにし、獨身女生の監督寄宿舍を建て、停車場や船着場に於ける「旅客の友」事業を奨勵し、一方廓清會の如き團體が大に貞操上の社會教育を施すと同時に、教育上からも力めて一夫一婦の倫理を少年子弟に鼓吹するのみならず、神の前に隱れたるに戒むる所あらしめる、活ける宗教を傳播する。是等各方面の運動に上

下析俟ち官民互に協力して盡瘁したならば、以て頽廢せる風紀を匡正して國民の思想及び生活を健全純潔にする事が出來るに庶幾からう。

▽歐洲諸國に於ける賣淫取締制度

某醫學博士

賣淫者を取締といふことがあれば、從つて其取締の上に、賣淫者の檢査といふことが必要である。そこで西洋の方では取締といふことと換言すれば檢査といふこととについて議論が分れ、監視廢止派即ち換言すれば、廢娼論派と、監視存置派即ち換言すれば、存娼論派との二つに分れて互に議論を闘はして居る。

今其實際について見るに、其取締法として法律で規定して居る場所もあり、其實施方法などについては法律でなしに、行政官に委任して居るところもある。先づ獨逸では之は刑法の中で法律で決めて居る。醜業を營むものは拘留に處するのが原則である。又衛生上でも公共の風俗を紊し、警察規則に違犯したものは拘留となつて居る。それから醜業を媒介したものは一ケ月以内の禁錮、罰金は百五十マルク乃至百六十マルク、同時に市の名譽權利を失ふ。佛國の方では花柳病を他人に感染せしめたものは一ケ月乃至五年の禁錮、罰金は十六フラン乃至三千フラン、一ケ年以内の再犯者は十六フラン乃至二百フランの罰金、又六日乃至二ケ月以内の禁錮である。前の方は病氣を傳染せした證據を要するが、後の方は只賣淫したといふ丈けでよい。英國では此監視を廢止したので、今は何等の制度がない。それは即ちヂョセフイン、ブッドラーなどは檢査は婦人に對する侮辱だといふので、所謂排娼論者の說が勝を占めたのである。彼の有名なる矯風會のゲンコリーなども廢娼論であつた。伊太利も一部取締を殘してゐる處もあるが、大體は廢止した。それから葡萄牙國、これも罰則も取締法もあるやうだ。又和蘭のアムステルダムでは娼樓は廢止し、ホテルの名前で遣つて居るやうだ。西班牙は拘留處分があり、其他範を佛國に取つて居るらしい。丁抹は九十日間位禁錮する。それから瑞典は放浪者の取締規則に準據して取締る。それから那威は之は主もに衛生上の側からの見地によつて規則が出來て居るやうだ。之も處によつて取締制度が存在して居る。詰り衛生規則を主として居るので、罰金か三ケ月の拘留といふことになつて居る。それから匈牙利では一ケ月以内の拘留。露西亞も法律規則を作つて居るらしい。初めは警察的に遣つた。一八九〇年犯罪豫防の法律發布された後、商業的賣淫は法規違犯としてゐる。然し或る處では警察の手に委して居る所もあるらしい。ルーメニアには一八九三年衛生規則として發布され、それで取締つて居る。それからセルビアでも監督法があるやうだ。檢査も皆やられて居る。

私が直接に最も委しく調べたのは伯林と墺國との事である。一九〇二年伯林で發布された取締規則は最も周到を極めて居るが、今に要點を言ふと、つまり賣淫するものを第一、第二、第三の三階級に分つて、第一級に屬するものは年齡二十四歲まで、娼妓の登錄後一年未滿のものを言ふので

して報告をした。其要旨は一所に集めて監視をすることの不必要を論じ、妓樓の撤廢のことを論じた。其頃に伊太利の精神病學者のロンブロゾーが、人類學の專門から賣笑婦に先天性のものあることも論じた。それから露西亞の彼得堡の梅毒專門のタルノフスキーが、賣笑のことについて大論文を書き、同じく監視法に反對した。近頃になつて佛國のフヒアウもブラシユコーの説を賛成した。コンスタンチノープルの醫學者のデューリングも、大分長い論文を書いて、監視法の不必要を論じた。ブロッホは一九〇八年に其事について大きな論文を書いて、同じく監視法の必要でないことを論じた。

全體此賣笑といふものは、性質上絶滅し得べきものであるといふ意見からして、ブロッホなどは論を立てゝ居る。これまでの賣笑の歷史を見ると、ずつと昔人間の出來た初めには、人間がさう澤山出來なんだから一つの婦人が多くの男子と交接した、今の娼妓のやうな狀態があつたに違ひない。ところがそれが少し進歩してから、一つの婦人をさう大勢の人が交接しないやうに、いくらか其關係が限られて來た。けれども夫れはまだ夫婦と、いふ狀態ではない。夫婦といふ狀態が出來たのは、其から大分後の事で其前には今云つたやうな狀態であつた。それが殘つて居るから、それで賣笑といふものがある。それだからして賣笑といふものは、今日から言へば一つの社會現象であつて、病的の現象であるけれども、内部に入つて其由來を考へて見ると、今のやうに性慾の發動のずつと初めにあつた男女區別のつかない時代の遺物と思はなくてはならぬ。今日からいふと、色々な社會の關係もあるから、今日の賣笑婦が、すぐそれから來て居る譯ではない。經濟上の關係、本人の傾向もあるけれども、然し賣笑の本を尋ぬれば、原始時代にあるところの人を定めずに關係する狀態が殘つてゐるのである。其發育の狀態を見ると、その關係は何うしても漸次に限られて來る。次第に一夫一婦となりつゝある。宗教上の考、社會上の考、政治上の考、教育上の考、倫理上の考が變つて來つて、性慾の關係は一夫一婦に局限されて來る。故に歷史の上から考へて見ると、其時代の男女の關係は即ち其時代の倫理關係一歩進んで其時代の文明の反映と見てもよい。故に娼婦の跋扈した王朝時代や鎌倉時代などには名高い人が娼妓に接して居る。今日では多少あるが今日は王侯貴族は威張つて吉原などへは入らないから段々其範圍が限られて來た。故に賣笑と云ふものは全體の傾向から考へると、次第に絶滅し得るものであると思ふ。故に之を取扱ふ上に於ても、單に之を片一方から見ては實に要領を得ない。例へば衛生なら衛生から丈け見ては不可ぬ。種々の方面から研究しなくつてはならぬ。種々といつても大抵極つて居る。即ち醫學、衛生學、教育、經濟、法律と云ふやうな方面からいろ〳〵研究をしてみなければならぬ。然し全體から云ふと漸次廢絶し得らるゝものに違ひない醫學者の中には之は人間の性慾本能なる故何處かに曝露するだらうと云ふ。そりや性慾を洩らす事はあるでせう。然し妓樓を持つて營業をして居るものと性質が違ふ。何うしても妓樓を持つて營業をすることはなくしなくてはならぬし、又なくし得る見込がある。それについて監視する、一所に集めて衛生上の監視すると云ふ事はブラシユコーなどの論じた如く役に立たぬ。妓樓を拵らへて娼妓を置くと云ふ事になればどうしても人身賣買が初まる。一所に集まると身體の變化もする。女が男のやうな身體になる、聲が男のやうになり、乳が出なくなる。又は性慾以上の製造所になる。性慾以上と云ふのは人の身體を痛めて滿足するか、或は痛められて滿足する。又同性情交といふやうな性慾以上のものを拵へることになる。だから一所に集めて置くのは衛生上醫學上宜しくない。それ故に醫學上から云へば、何うしても妓樓は廢めて了つて公娼でも私娼でも營業として之をやつて居るのはすべて之を處置しなくてはならぬ。

取締規則のあるのとないのとは、どれ丈け違ふかと言へば、矢張り自然に違ふので、墺國の花柳病の大家フインゲル、バウムガルテンの出して居る衛生週報にも、風紀警察の方面からの監督と風紀と取締とを以て、此賣淫を豫防せんとするは誤りだと書いて居る。又取締規則の原則としては、風紀といふ側よりは、衛生的の監視に代へた方がよい。そしてなる丈け密賣淫者の方に應用して、取締規則が兎に角あれば、花柳病を認めると病院に入れる。其期間でも他人に傳播することを豫防する。花柳病の統計は詰り蔓延の尺度になるんだから、さうすれば花柳病豫防法をして居る所と、して居らない所との尺度として見られる。即ち嚴重な檢査をして居る所の獨佛の軍隊であると、どちらも十數年の間に、獨は千人に對して二十六人、佛は四十二人、ところが我國及び墺國は六十一人を見るではないか。檢査を止めた伊太利は八十五人、英國は百七十四人もあるではないか。だから取締論者は一般に衛生上の取締を遣つた方がよいと言つて居る。風紀の方から取締つて行くといふことになれば、如何によい方法を拵へても、詰り空文になる。湯上りの白襟を禁ずるとか、左褄を取るを禁ずるとか、小六つかしい風紀を矢釜しく言つたところで到底出來ないから、衛生の方から取締を拵へた方が手つ取り早いだらうと思ふ。そして衛生的の監視を主にした方がよからうと思ふ。然し獨逸でも花柳病は傳染病だから官廳に屆出でしろといふことを命じたけれども、それは行はれない。那威では大分衛生的の方の法規を矢釜しく言つて居る。例へば花柳病者と密接の關係ある、傳染の恐があるものは衛生局で檢査する、或は專門醫について、診斷を受けて其診斷書を出させる。傳染の危險ある間は其患者に受診せしめる。或は治療を受けて居る醫者の證明を出させる。又醫者は衛生局長に自ら治療した花柳病及び其治療經過を報告する。それから梅毒の子供及び其疑のあるものには、乳母に哺乳せしめない。それから産婆も出産の時に梅毒の懸念あるものは報告しろとか、宿屋などでも酒などを賣る處で女を使つていかぬとか、二十一才以下の女を下婢にしてはいかぬとか。之は政府の衛生局の命令で入院せしめる。而して梅毒の時は政府の負擔、其他は各自の負擔といふやうなことが書いてある。先づ此位のお話で御免を蒙りませう。

▽學問上より見たる娼婦問題

醫學博士 文學博士　富士川　游

公娼私娼の問題は性慾問題の中心問題であつて、文明史から言ひましても、餘程興味のある問題であり、又學問上からも十分研究しなくてはならぬ問題である。然しながら不思議なことには、此賣笑のことが學問上に研究されたのは、極く近頃で、千八百三十六年佛のパーレン、ブシヤトレが、大きな賣淫の歴史を書いた。之が抑々學問的の初めで、それからいろ〳〵方々で此事について隨分書物も出來、研究も出來たが、然しながら極く新らしい研究は、千八百九十二年に伯林の花柳病の專門家ブラシユコーが、伯林醫學會に賣笑問題について、專門の方の研究から

して報告をした。其要旨は一所に集めて監視をすることの不必要を論じ、妓樓の撤廢のことを論じた。其頃に伊太利の精神病學者のロンブロゾーが、人類學の專門から賣笑婦に先天性のものあることも論じた。それから露西亞の彼得堡の梅毒專門のタルノフスキーが、賣笑のことについて大論文を書き、同じく監視法に反對した。近頃になつて佛國のフヒアウもブラシュコーの說を賛成した。コンスタンチノープルの醫學者のデューリングも、大分長い論文を書いて、監視法の不必要を論じた。ブロッホは一九〇八年に其事について大きな論文を書いて、同じく監視法の必要でないことを論じた。

全體此賣笑といふものは、性質上絕滅し得べきものであるといふ意見からして、ブロッホなどは論を立てゝ居る。これまでの賣笑の歷史を見ると、ずつと昔人間の出來た初めには、人間がさう澤山出來なんだから一つの婦人が多くの男子と交接した、今の娼妓のやうな狀態があつたに違ひない。ところがそれが少し進步してから、一つの婦人をさう大勢の人が交接しないやうに、いくらか其關係が限られて來た。けれども夫れはまだ夫婦といふ狀態ではない。夫婦といふ狀態が出來たのは、其から大分後の事で其前には今云つたやうな狀態であつた。それが殘つて居るから、それで賣笑といふものがある。それだからして賣笑といふものは、今日から言へば一つの社會現象であつて、病的の現象であるけれども、內部に入つて其由來を考へて見ると、今のやうに性慾の發動のずつと初めにあつた男女區別のつかない時代の遺物と思はなくてはならぬ。今日からいふと、色々な社會の關係もあるから、今日の賣笑婦が、すぐそれから來て居る譯ではない。經濟上の關係、本人の傾向もあるけれども、然し賣笑の本を尋ぬれば、原始時代にあるところの人を定めずに關係する狀態が殘つてゐるのである。其發育の狀態を見ると、その關係は何うしても漸次に限られて來る。次第に一夫一婦となりつゝある。宗教上の考、社會上の考、政治上の考、教育上の考、倫理上の考が變つて來つて、性慾の關係は一夫一婦に局限されて來る。故に歷史の上から考へて見ると、其時代の男女の關係は即ち其時代の倫理關係一步進んで其時代の文明の反映と見てもよい。故に娼婦の跋扈した王朝時代や鎌倉時代などには名高い人が娼妓に接して居る。今日では多少あるが今日は王侯貴族は威張つて吉原などへは入らないから段々其範圍が限られて來た。故に賣笑と云ふものは全體の傾向から考へると、次第に絕滅し得るものであると思ふ。故に之を取扱ふ上に於ても、單に之を片一方から見ては實に要領を得ない。例へば衛生なら衛生から丈け見ては不可ぬ。種々の方面から研究しなくつてはならぬ。種々といつても大抵極つて居る。即ち醫學、衛生學、教育、經濟、法律と云ふやうな方面からいろ〳〵研究をしてみなければならぬ。然し全體から云ふと漸次廢絕し得らるゝものに違ひない醫學者の中には之は人間の性慾本能なる故何處かに曝露するだらうと云ふ。そりや性慾を洩らす事はあるでせう。然し妓樓を持つて營業をして居るものと性質が違ふ。何うしても妓樓を持つて營業をすることはなくしなくてはならぬし、又なくし得る見込がある。それについて監視する、一所に集めて衛生上の監視すると云ふ事はブラシュコーなどの論じた如く役に立たぬ。妓樓を拵らへて娼妓を置くと云ふ事になればどうしても人身賣買が初まる。一所に集まると身體の變化もする。女が男のやうな身體になる、聲が男のやうになり、乳が出なくなる。又は性慾以上の製造所になる。性慾以上と云ふのは人の身體を痛めて滿足するか、或は痛められて滿足する。又同性情交といふやうな性慾以上のものを指へることになる。だから一所に集めて置くのは衛生上醫學上宜しくない。それ故に醫學上から云へば、何うしても妓樓は廢めて了つて、公許でも私許でも營業として之をやつて居るのにすべて之を嚴罰しなくてはならぬ。

綠蔭親書

英文武士道 新渡戸博士著 四六判上製價金壹圓 送料八錢

折にふれ 新渡戸博士著 四六判上製價一圓廿錢送料八錢

銀と藍 日向きむ著 四六判美本價八十五錢送料八錢

國語百談 日下部市太郎著 四六判上製價七十錢 送料八錢

リンコーン物語 櫻井鷗村著 菊判上製價一圓廿錢送料十二錢

歐洲見物 櫻井鷗村著 菊判上製價一圓七十錢送料十二錢

肉彈（一名旅順實戰記） 陸軍歩兵大尉櫻井忠温著 菊判上製定價八十錢 送料八錢

シェイクスピア

東京帝國文科大學講師 齋藤勇著

四六判天金函入△價二圓五十錢 △送料八錢

私の識つてゐる範圍だけでも沙翁に關する著者は約二十種許りある。併し一冊ご沙翁の眞髓を會得することは能きない。奈何しても四五種を併讀しなければ駄目で、劇曲其物の梗概すらも識ることが能きないのである。然るに本書は他書を併讀するの煩もなく、書一本能册で沙翁を理解し、彼の劇曲全部の梗概を會得する事の能きるやうに書いてゐるから、沙翁研究家に取りては無二の寶典たるべく、本書を讀誦すれば、沙翁通となることは容易であらう（帝國文學）

銃後（肉彈姉妹篇） 陸軍歩兵大尉櫻井忠温著 菊判上製定價一圓五十錢送料八錢

出版目錄（往復はがきニテ申込次第進呈）

遞信省通信局長 田中次郎著

郵便物語

好評

本書は著者が十七年間の實驗を基礎となして文學的に叙述せる通信物語にして本邦嚆矢の著作なり本書の初版が發行即日に賣切れ直ちに再版せるに徴するも如何に本書が有益なる著作なるかを知るべきなり

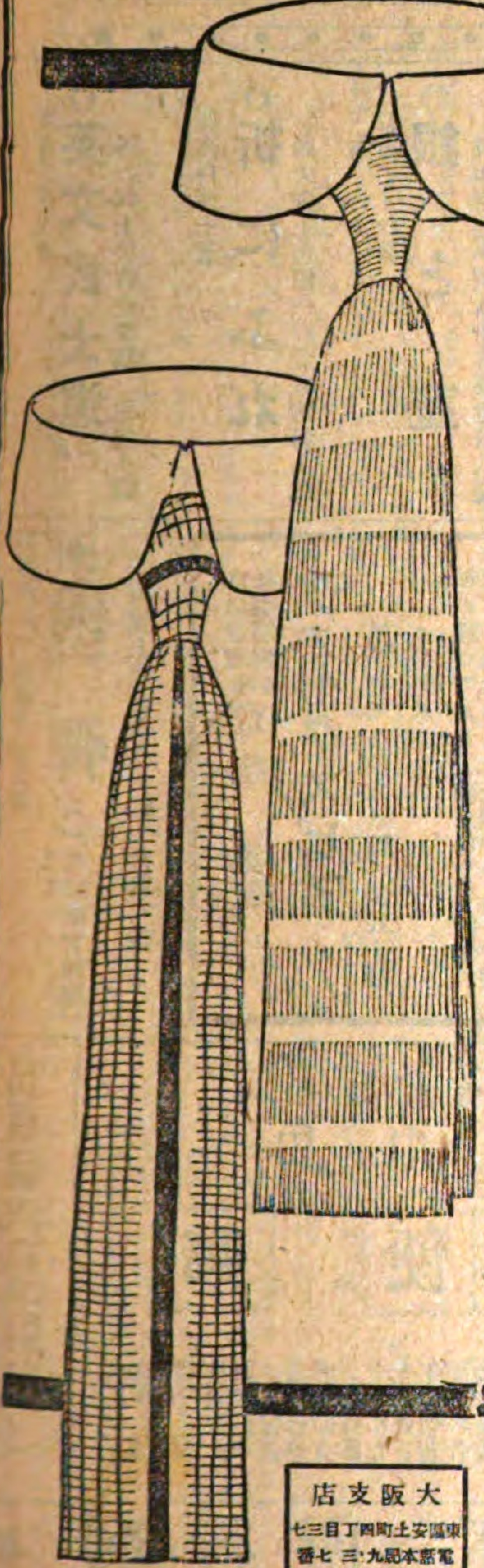
再版

出版目錄（往復はがきニテ申込次第進呈）

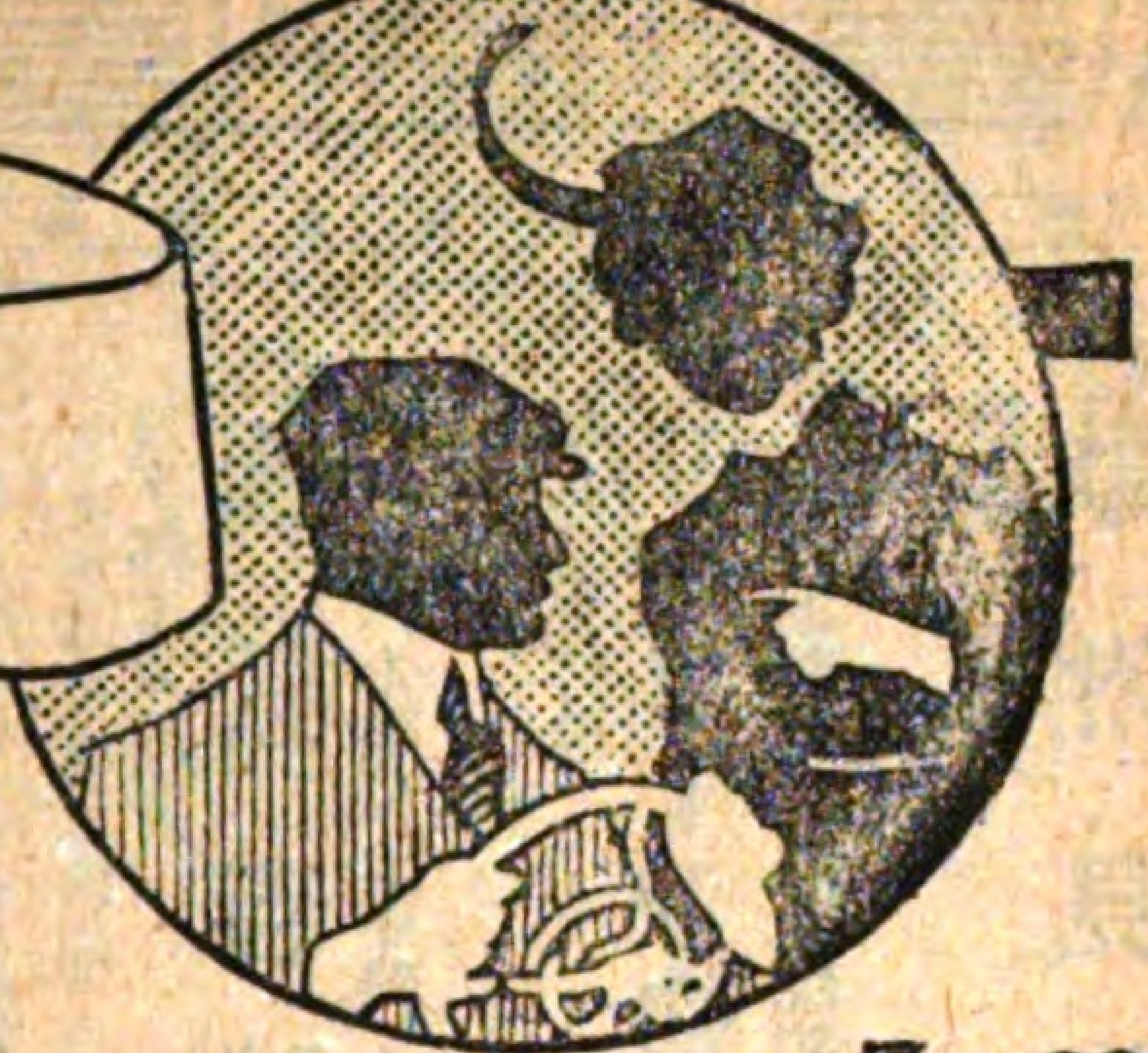
發行所 丁未出版社

東京麹町三丁目 振替東京七八四七

（中付一の一）



清快の象徴たる洗濯可能（ウオッシユエーブル）ネクタイ



登録商標

洗濯保証

輕い着物を着て愉快に活動の出來る季節となりました。清新。爽快。潑剌。鋭氣の充ちた若い新しい季節となりました。此季節を代表する生氣ある輕い清い新らしい壯んなる精神を象徴する洗濯可能（ウオッシユエーブル）ネクタイの新柄が取揃ひました。皆様御覧下さりませ。本年の新製品にはリボン式も筒織式も御座います柄行色合は現代の流行を更に洗練しました瀟洒なる逸品揃いで御座います。染織は堅牢でリボン式の内には皆様をあつと言はせる優秀なるものも御座います其れで價が低廉です一日も速く御注文下される樣願ひます。

□リボン式洗濯可能（ウオツシユエーブル）ネクタイ　自金五拾錢至壹圓五拾錢

□筒織式洗濯可能（ウオツシユエーブル）ネクタイ　自金拾八錢至金八拾錢

(中付一〇二)

東京本店
日本橋區通壹町一五
電話濱花二一〇一四番
振替東京九七四三三番

南文蔵商業部
赤帽印ネクタイ發賣元

大阪支店
東區安土町四丁目三七
電話本局九三・七番
振替大阪一九一九番



支那第三革命情話

翡翠の耳飾

大窪逸人

▲

「第三革命」といふ語の、感じが好いために、斯の革命は必ず成る——と、晩餐の始まるごとに、必ず強く悦んで、老酒の觴を淸く乾しては、直ぐ朗らかに一觴一詠するのを、夜の慣らはしのやうにしてゐた未だ若い人、湖北省隨縣の出、姓は『彭』、名は『可生』、號を『靜涵』と呼ぶ、年二十八、彼彭可生は第二革命沒落以來の純革命黨員の一人であつた。

陳其美君の頭蓋骨が未だ暗殺の彈に遭はぬ前、今日か、明日か、陳君一派が熱中しつゝある上海獨立の日が、惧を帶びて人々の念に懸かつてゐた。その三月から四月へかけての、春の最中ごろには、第三革命の前途の望漸く多く、從つて黨人の籍に自身の名を新しく連ねに來る者も、日に日に數繁くなつてゐた。さうして、『彭可生』の名は、黨人達の間に、次第に大事がられるやうになつてきた。

彭可生その人は、第二革命の後に、巴里に亡命生活の一組に入つて、社會學を自修し專攻してゐた傍に、爆彈手製の黃色藥の、調合と壓搾と濕度の保持法等に就いても、其等の手法に餘程委しく傳習してきてゐた。

革命の撥亂そのものゝ爲には、社會學の發達史を縷々しく敘述した幾册の佛文よりも、爆藥を練る成分に就いての化學方程式を解析し綜合して記しつけて置いた幾葉の紙片の方が、彭君の現在にとつて、爭はれず大切なものになつてゐた。その紙片を綴り輯めた備忘錄の中に化學方程式のページの間に挾まれて、キャビネ型の寫眞が一葉、彭君の坐右を常に離れずにゐた。

其の寫眞は半身像の、美しい人のであつた。さも麗かさうな前額にかけて、眞中から雙方にゆつたりと梳きわけた、垂髮のさきが宛らに臈闌けて、稍ふくよかな靄々とした頰を斜めに掩ふてゐる艶やかさが、映寫の上にも綠を帶びて寫つてゐた。さうしてうつとりと眩しいやうな瞳の風情と共に、髮と瞳とが冴えるほどの調和の好さを現はしてゐた。その髮と瞳との心ゆくばかり好く照應した趣を、また恰も好く載せた白絹の高い襟もとに、碧いろの餘り描くはない墨の痕が、「凰」と書き、少し離れて其の下に、「瑞雲」と、それは然し未だ稚い一線一抹が、たど〳〵しさうに纖く危げに認めてあつた。

時は未だ袁總統俄かに殂落するに及ばず、段祺瑞君が主宰する北方の强は、其の結束漸く堅さを思はしめ、之れに對する革命の新潮高く薫つて、時局は南北武力の解決に、默移せんとする極めて鋭敏な一時であつた。其の大勢の前途を眺めて上海の革命各派は、從前動もすれば互に疎隔せんとする彼と此との氣脈を通ずるよ頗る密に、其の聲息も亦殆ど好く通じて、そこに一段の氣勢を添えてゐた。その爲に「上海獨立」の聲々は、佛蘭西租界の一角から、英租界に流れ支那街に響き、その界隈は宛らに恟々として、人の心は時と共に鋭くなり、夜ごとの警備は街上の銃劍の光を綴つて、輪の響も寂しく疎に聞こえるやうに成つてゐた。彭可生は佛蘭西租界の木立の深い南陽街の鼎祥里なる路次の奥に晝夜を舍かず常に三階の一室に籠居して、爆藥の練成に腐心し且つ忙殺されてゐた。

▲

鳳胎を割き、鸞脯を採る、その太牢の美味を前にし

て、更に一陶の酒を呼べば心愈々溶々――誰も彼も既に溶々と心を融いて、黒檀の圓い大きなテーブルの周圍から、各自に長い象牙の箸を引いたり、差したりして、そこに鮮鮰銀絲の膾、香芹碧澗の羹、廣東料理の庖刀に粋を蒐めた種々を、堆たかく盛りあげた大小幾つかの鉢の上に、箸と箸とが擦れあふては、『好喫々々』の賞讚の聲々が、絶斷なく誰彼の唇からテーブルの上に齊しく擴がつてゐた。主人は一人、客人は五人、猶ほ近く侍る兩鬢の濃い梳髮の際から、頻りに芳芬を迸る妝の妓――姑娘八人。宴は夕に始まつて既に六時間餘りを過ぎ、主も客も姑娘も漸く亂酔の境に浮き沈みしてゐた。

或は雙膝の上に姑娘の輕い全身を深く擁へて、蟬の翼のやうな薄絹の上から、兩乳の上を押さへながら、一片の脂を柄の繊長い銀の小匙に抄ふて、姑娘の唇に移し與へ、或は白絹の脊に麗かに垂れた姑娘の繊い柔かな辮髪の尖を、我が口に銜みながら、鴉片を含む雪茄の煙を吸ひ入れては、透明の高粱酒の嚥下と共に其の喉頭の爛れに親しみ、或はテーブルの眞下に低く踞跼して、姑娘の靴を探り脱つた末に、その纏足の甲高い布の臭を嗅ぎながら滿面を伏せては其に接吻し、或は左手に長く伸ばし生やした爪を揃えて、姑娘の襟もとに挿入れ、其處に濃厚な脂粉を爪の奥に掻き剝いでは、熱く沸る老酒の觴に漾よはせ、或は自ら胡弓をテーブルの端に立てゝ、帛を裂くやうな律の調を、强いて變調に奏でながら、吃々と獨り笑つた。

狎れに狎れつくしても、尚ほ未だ何れにか果敢なく足らざるを省はしむる情ごゝろを、何うにもして必ず滿たさうとするやうに、總ての妝疾く崩れはてた姑娘達は、自分の專惱する男と飽くまで引き添ひ縺れ交はしつゝ、テーブルの周圍に二人づゝが離合しながら、故意と仄暗くした瓦斯のマントルを濃綠に染めた幽婉な光の下に、疾や眞實の戯れを肯じてするまでになつてゐた。歌吟笑呼も既に已に歇むで、それは旦に夜讌の高潮に畢りつくして、總ての末は各自の寢臺に、垂帳の蔭に、笛型の煙管、アルコールランプ、銀の小壺、

ぢり〳〵と焦げつく鴉片の濃い煙と共に、昏睡の暖い夢と夢とを濃に乘せて交はすばかりが、宴後の深更に殘されてゐるのであつた。さうして、曈々たる朝日が午すぎの線を過ぎるまで醉後眠餘の半睡狀態に逍遙し續けるのではなくては、彼等は宵を過ごすのに、身を措く手段に我と悶えて、果は獨りで喫み獨りで昏睡すべき、黑褐色の濃い鴉片を藏めた銀の小壺ばかりと幻に添寐しなければならないのが常習になつてゐた。

夜讌旦に高潮の境に騰りつくして、容易く痺れ果てた官能は、只だ一つ最後に殘された方向にのみ一途に奔つた。

只だ其處に男の數に比べては、二人の姑娘が餘分になつてゐた。その若い一人は胡弓の響と拳を打つ叫聲とが縺れて湧きあがる宴の中途から、その室の片隅の長椅子の上に、空しく腰を卸してゐた。さうして、獨りで雪茄に親しむでゐる他には、テーブルの周圍と徒に懸け離れて、凡てが他々しい姿態のまゝ、讌脂を差してはゐない鮮かな唇を噤みがちに、恰も現界に超絶したやうな際だつて昂い氣色に包まれてゐた。分けて純白の絹の上衣が室内に瀰漫する濃綠の微かな光を柔く受けてゐる爲に、その姑娘の全部には、寧ろ肅ましいやうな氣配が懸かつてゐた。併し其の表情の眞相を視分ける爲には、テーブルの位置が遠すぎてゐて、それは綠の光りの彼方に只だ淸麗な面の、白い輪廓を仄かに識別することが能きるに過ぎなかつた。また誰も彼も此の姑娘の存否には、餘り深く氣を措いてゐなかつた。

猶ほ他の餘分になつてゐる別の一人の姑娘は、テーブルの圓い周圍に添ふて、其處此處と大きな膝、纖い膝の間に造作なく介まりながら、老酒の銀瓶を擧げたり、洋火の炎を嚢の端に移したり、其等の纖かい所作を、テーブルの上の所々に、點を打つやうに左右に綴つて、且つ其の間に此の姑娘は極めて佳い聲を斷續させて、玲々と節に任せて我と自然に唱つたりしてゐた。さうして、時々に強く痙攣する眼の下の筋肉が、中毒した鴉片の惱みを歴々と現はしてゐた。

やがて最後の新しい悦樂の時が臨た。

悄然と蒼黝い面をした中老の男が、戸口に垂れた綠色の帳を片方に柔く排いて、極めて徐かな歩調をして入つて來た。テーブルの正面に大きく頰杖をついてゐた主人の傍に、近づいて行つた其の男は、主人の潤い領を鈍く瞰下しながら、靜かな聲で、總ての用意の出來たことを報らせた。さうして、その靜かな聲は、テーブルの周圍の者達に恰も新しい福音を啓し示したやうに、誰も彼も其の聲の終ると同時に、新しい力を帶びて蹣跚と起ち上つた。さうして流されるやうに室内を歩み始めた。それは客と姑娘との二人づゝが、肩と腕と胸と、夫々樣々の態に縺れつ解れつして、奥の戸口の方に、斷々に續いて行くのであつた。そこの戸口の傍に添ふて、長椅子が一つ、その上に餘分になつてゐた若い姑娘が、今までと同じく依然と腰を卸したまま、一切と厭み離れて、獨り冥想に潜むでゐるやうに、垂髻の下に瞳を俯せてゐた。さうして其の傍を客と姑娘との六組の群が、縺れつ解れつ過ぎて往き、軈て戸口の帳から消えて了ふまで、彼女は凝然と姿勢を澁かさずにゐた。

猶ほ餘分になつてゐた別の一人の姑娘は、是も獨り殘されたテーブルの上に、頰杖を少時くついてゐた。さうして、主人に用意の出來たのを報らせにきた中老の男の手に扶けられて椅子を漸く離れた。男は頻に幾片かの殘肴を貪り滿たしながら、姑娘は瞳をあげて四邊を見まわしながら、その二人は男の入つて來た戸口から、靜かに寂しさうに帳を排いて出て往つた。

室内に全く孤り殘された若い姑娘は、纎い手頸に穿めてゐる黄金の腕輪を、交る〳〵脱しとつて衣嚢に藏め、同じ衣嚢から復た新しい雪茄を抽き出して、其の尖を姑く瞶めてゐた。

その傍の戸口から、客の一人が再び現はれてきた。彼は今しがた擁へて往つた姑娘と離れて、獨りで室に入つて來た。戸口に垂れた帳は、綠の厚い天鵞絨で出來てゐる爲に、その前に佇むでゐる彼の白麻の支那服が、稍劃然とした輪廓を映しだして、右指に挾むで垂れ

てゐる雪茄の火が、膝の側に一點の紅を添えてゐた。彼は、長椅子の上に俯向いてゐる姑娘を一瞥すると、鋭い聲を沈めて、

『霞雲閣』と、呼びかけた。

姑娘は左手を擧げて、額のうへの垂髮を分けながら、男の方に振向いて、默つてゐた。

『儞獨で何を做る料想なのだ』と、男は更に訊ねた。

其には應へずに、

『洋火を貸して下さい』と、今まで默つてゐた姑娘が言つた。男は喫みさしの雪茄を、姑娘に徐かに與へた。さうして、

『何時儞は鐲子を脫したのだ。さうだ、歸り手份を始めてゐたのに違ひない。尙且儞は近來每も酒を喝まない。あゝ理會つた、彭可生が這の家に來ないから。然し彭は來ることが能きない。他は現在非常に忙しい。彭の指は黑く燒けてゐた。さうして、朝から夜まで白い衣僕を脫ることが能きずにゐる。儞が他に會ふのは、他們の事業が成功か敗盡か、了然と明白つた時の事だ。不是々々、彭は儞を忘れてゐるだらう』と、男は姑娘が雪茄から雪茄へ火を移してゐるのを、眺めながら言ひ續けた。

『何故に』と、姑娘の霞雲閣が男を仰いで訊ねた。

『我が想ふのに、儞と彭可生との契は未だ淺い。尙且他は自己を警護しなければならぬ奴だ。何うして這の三馬路の街まで、危險を冒して出て來ることが能きやう。彭にとつて現在が最も貴重な然うして最も冒險な時ではないか。他は儞を想出すことは必ず無い。暇もない。』男は斯う言つて了ふと、衣嚢から純白な絹手帛を左手に摘み出して、哈々と高く笑ながら頰を拭いてゐた。彼は少からず醉つてゐるらしかつた。

霞雲閣は默つて雪茄を吸ふてゐた。男の嗅覺は、霞雲閣の雪茄の薰が極めて佳いのを、圖らずも氣に留めた。さうして、是も默つて霞雲閣を少時く瞰下してゐた末に、後の帳を劃くやうに忽ち烈しく排いて、其の室を出て行つた。

帳の外に細い廊下が延びてゐた。廊下の左右兩側に、

幾つかの扉が何れも堅さうに閉ぢられてゐた。廊下の末に勾配の急な階段が續いてゐた。男は廊下を通り拔け階段を極めて靜かに降りて、其の家の裏口に出て來た。裏口の大きな厚い板扉には、荒削りの太い閂が架けてあり、其の傍の低い椅子の上に、半白の辮髮を卷いてゐる底下人が、天井の梁木から吊下げてある仄暗い油燈の下にうつ〳〵と睡つてゐた。

「えい、門を開け」と、男が聲をかけた。

底下人は忽ち眼を開いた。自分の直ぐ傍に佇むでゐた男を認めると、彼は寧ろ活潑に椅子を離れて、閂に兩手を掛けた。猶ほ一度男の顏を瞶めた末に、閂を脫し取つて板扉を肩で押し開いた。

男は其の底下人の黑い掌に、二十錢銀貨を一つ摘むで與いた。戶外に出ると、晨ちかい初秋のやうな空氣を、急に悅んで吸入した。

男の出て來た其處は、上海の三馬路の裏街になつてゐた。その家は、「棠花樓」と謂ふのであつた。

▲

第二艦隊司令官の饒懷文君は、始め密かに陳其美君に屬いてゐた。其の艦隊が楊子江を南京から下つてきて、上海の江南機器局の直ぐ傍に、猶ほ吳淞砲臺の前の沖にも、何れも靜かに錨を下してゐた時に、上海獨立の擧は、陳其美君の手の裡に最も好く編まれてゐた。

其の事に參じてゐた黨人の誰彼は、「上陸してきた饒懷文に、「確かに必ず」と陳其美が辭色を決して內應の實行如何を尋ねかへした時、同じく饒が「確かに必ず」と答へかへした」と聞いて、近い前途を皆齊しく欣んだ。欣びはしたものゝ、然も一片の懷疑の思は、誰にも胸深く潛むでゐた。その懷疑心は事の決行前に於ては每に當然の感情であつた。「饒懷文の異意は？」「想見沒有一定的」黨人の誰も斯う呟いた。

▲

「M報」と謂ふ支那新聞の社に、「任慶來」と謂ふ政治記者が勤めてゐた。M報は國民黨系の新聞であり、任慶來君は國民黨に曾て籍を置いてゐた。

棠花樓の裏口から、晨ちかく出て行つた男は、其の

日の午後に、純白の支那服を眞黒な洋服に更めた姿を、M報社の門前に現はして、任慶來君に面會を求めてゐた。

小狹い應接室の、小型なテーブルの横に、二人は膝と膝とを觸れながら、共に頭を低くして、彼一句、是一句、短い語ばかりで話し交はした。その中途に、

「それから」男が任君を促がした。

「少くとも八十萬元」任君が徐かに言つて、男の顏を視た。

「杭州の中交銀行からは?」

「徴收して了つた。其を現在使つてゐる」

「他の富豪からは?」

「獨立してから漸く一週間、未だ少し早い」

「然らば不能ではないか」

「あゝ不能。然し玆に唯だ一つ」

「教へ給へ」

「銅鑛が有る。擔保にしやうと言ふのだ」

「所有主は?」

「死亡した寡婦、さうして、踪跡不明の長女」

話は、浙江省の獨立後に、更に西隣の江西省の蹶起を促す爲に、一混成支隊を浙江省内で新しく編成して、江西省に進入しようと言ふのであつた。其の時の江西省には、楊子江に沿ふ九江の附近にこそ、約五營の張勳軍が屯してゐたけれども、元來の江西軍の中堅である第六師團は、既に湖南省方面に輸送されて、雲貴兩省聯合の蔡鍔軍の別働隊と對抗してゐる爲に、江西省に殘つてゐる李純將軍は僅かに一混成旅團を、省の主府南昌城に駐めてゐるのに過ぎなかつた。且つ一方には、李烈鈞將軍が廣西省から北上して、江西省に對する進擊を企てゝゐた。斯くて浙江省内に新しく編成すべき前述の一混成支隊が、更に江西省に進入することは、李烈鈞氏の江西入に對して、まさしく有力な協應であり、同時に微力なる江西省の李純將軍に對しては、其の逡巡せる獨立を促がす爲の痛切な脅威法であつた。さうして、之が一混成支隊を浙江省内で新しく編成し、且つ將來の軍事行動を維持する爲には、少く

とも八十萬元の資金が、其處に要求せられると言ふのであつた。其の八十萬元の調達方法に就いて、M報社の應接室に、任慶來君が答へ、晨に棠花樓から出てきた男が幾度か質問を重ねてゐるので、其の二人は嘗て日本に留學時代の同窓生であり、且つ同じ江西省に生立ち、さうして、何れも李烈鈞將軍の少からぬ恩顧を受けた仲であつた。任君の答を綜合すれば、そこに次のやうな物語が成立つのであつた。

　八十萬元の借款に對する擔保として、吾等が提供し得る擔保は、銅の鑛山である。その銅鑛は浙江省の杭州の西南にあたる五曳山の麓に隱れてゐる。その五曳山の麓からは、錢塘江が東に流れ、楊子江と並行して海に注いでゐる故に、鑛坑の採掘後は舟楫の便によつて、其の銅塊を海岸に運び出すことは容易である。銅鑛の屬する全地域は、始め「王明容」と謂ふ杭州の富限者が有つてゐた。王明容は既に病死した。さうして、南曳山の麓に隱れてゐる銅鑛の所有權は、其のまゝ王明容の第二の如夫人にあたる「文萠」と謂ふ麗しい中年の女に讓られた。文萠は長く貞節を持し、王明容との間に生れてゐた「王綾」と謂ふ少女一人に侍して、杭州の瓊華街の邊に住むでゐた。王綾は母にもまして麗しく生れてゐた。「瓊華街の王綾」の名が、杭州の西の界隈に若い男女の脣に讃へられて上るとき、王綾は恰も十三歳の夏になつて、母の文萠が苟且ならぬ病に憑かれた。王明容の生前にこそ正夫人も六人の如夫人も、天宮街の宏大な同じ邸の中に睦しく起臥してゐたけれども、王明容の死をうけて、寵嬖次第に分散して了つた後には、其の各自の消息は素より全く失はれ、文萠の病朝夕を測り難きまでに危篤を告げてゐても、天宮街の正夫人からも、將た舊識の誰彼からも、問候の轎子を瓊華街の文萠の家門に寄せて來る者は一人もなかつた。また文萠その人の素性に就いては杭州に知るものはなく、何れは流離の末を王氏に拾はれて、その「文萠」の名さへも王氏が一夕の夢の裡に偶々命けたものらしく、斯くて文萠と王綾と、美しい母子は瓊華街の邊に、疾く涙の多い世の寂しさに包まれてゐ

た。母の文萠は分けて深い寂しさの底に横たはりながら、そのまゝ寂しく目を瞑ぢて逝つた。さうして、その後暫くにして、王綾の行方は瓊華街に失はれ、その麗しかつた少女の姿は、杭州に誰も認める者もなかつた。

南曳山の銅鑛は其のまゝ所有權の存在を失なつて、官憲の手が王綾の名と共に其の總てを保管してゐる。若しも王綾の現在の踪跡を索めあてゝ、吾等が彼女の所在に會ふことが能きたならば、銅鑛は必ず吾等の手に移すことが能きるのであり、また彼女も吾等によつて、必ず彼女自身も知らないでゐる幸福な機會を、愕きながら捉むことになる。算ふるに彼女は今年十七歳になつてゐる。美しい王綾は大きな銅鑛を知らずに有つてゐる。

「さうして、我れは瓊華街で王綾を見識つてゐる。小さな麗かな顔を覺えてゐる。八年前」任君が斯う言つて一重瞼の細い瞳を沈めた。

「特徴は？」男は前夜棠花樓のテーブルから購つてきた愛用の雪茄の餘りを、胴衣の衣嚢から摘みだして、その尖を強く噛み切つた。

「右の頬の下に唯一つ、極めて小さな黒子があつた。それに極く濃い髪を垂れてゐた」

「その他に？」

「――有つた。彼女の耳飾りは珍しかつた。眞圓な極く潤澤な翡翠を、纖巧な鈍金の編鎖で少し長く吊下げてゐた」

「語は？」

「浙江省の柔い訛。然し現在は分らない」

「儂の新聞で懸賞はしないだらうか」

「不能、銅鑛――彼女と五曳山との秘密は未だ一般に誰も知らない。發覺するのが怖しい。殊に浙江省の官憲の押收して了ふのが、猶ほ怖しい。吾等が獨りで王綾の所在を索めねばならぬ」

「探索の端緒は？」

「彼女の瑞のやうな顏、さうして全くの孤兒。其の踪跡の脈絡は分らなくても、彼女の現在の生計は槪ね想

像がつくではないか。上海か、蘇州か、南京か」
『小さな黒子、圓い翡翠の耳飾』男は獨り呟きながら、雪茄に始めて火を點けた。

▲

砒素、硫化鹽、炭素、鹽酸、稀硫酸、臭素――と、化學方程式の表面を立ちながら眺めてゐた男は、少時く沈思して、獨りで微かに呻吟した。
「爆藥の成分ではない」と、彼は先づ思つた。其の室に常にゐるべき彭可生その人は、其の時恰も不在であつた。彭氏を訪ねて來た男は、家人とも元から親しく交つてゐた爲に、その日も案内なしに、三階の彭氏の居室に、獨りで昇つて來た。小型のデスクの上に、彭氏の手蹟がインクの色の未だ酸化し盡してゐない化學方程式を、眞白な用箋紙に認めたまゝ、萬年筆と一所に載せられてあつた。其の用箋紙を取上げてみた男は少時く沈思した末に、忽ち烈しく、
「毒瓦斯の方程式に相違ない」と、閃くやうに思ひついた。

其處の三階は二間に劃られてゐて、彭氏の居間の隣りに、別の一室が續いてゐた。さうして、其の二室の間の扉は、常に閉ざゝれてゐた。それは彭氏自身が扉の鍵を常に藏してゐるのであり、その隣室で彭氏は白いエプロンを掛け指の端を黒く燒きながら、爆藥の練成に勵むでゐるのであつた。
彭氏のデスクの前に、化學方程式を書きつけた用箋紙を持ちながら、男は獨り佇むだ刹那に、烈しい好奇心が彼を一時に掩ふた。彼はデスクの上を更に鋭く視まわし始めた。そこに三十歳を越えたばかりの年恰好に見える、さうして瑞々しい體格に、健康そのものを現はすやうな血の色と、柔い彈力とを全身に具へてゐる婦人が、茶瓶と茶碗とを提げて微笑しながら小跨を徐かに刻むで入つて來た。それは彭氏の姉にあたる人であり、未だ獨身の人であつた。
その婦人は、男に椅子を勸めて、自身も其の前に腰を卸して、デスクの上に二つの茶碗を並べて濃紅な支那茶を注いで了うと、デスクの抽斗から、彭氏の雪茄

の箱を抜き出して、蓋を開きながら、男の膝の上に極めて徐かに其を置いた。

男は雪茄の一つを摘みとつて、其の箱をデスクの上に置き換えた。さうして、雪茄を持つた手を操つて、「彭君は居ませんね」といふ意味を、婦人に手眞似で尋ねた。婦人は微笑し續けながら、大きく一つ首肯いた。彼女は啞なのであつた。

男は雪茄に火を點けた。さうして、極めて佳い豐かな其の薫は、棠花樓の夜に姑娘の霞雲閣が燻ゆらしてゐたものと、同じ一つのものであるのに氣がついた。彼はデスクの上の雪茄の箱を瞥た。箱の中には總て二十本を容るべきうちに、十幾本かゞ既に用ゐられてゐた。彼は胴衣の衣嚢に挾むでゐた萬年筆を抜きとつて、デスクの端に積み層ねてある用箋紙のうへに、「昨夜彭君は不在であつた。彼は何處に往つたらう?」といふ意味を書きつけて、婦人に示した。彼は彭氏の昨夜の不在を想像してゐた。後天的の啞である婦人は、彼の萬年筆を受取つて、「彼は昨夜の九時に外出して未だ歸つて來ない。彼の所在は私にも分らない」といふ意味を、端麗な字で書きつらねた。

男は棠花樓の樓上で霞雲閣が室の隅の長椅子の上に、獨り殘つて坐つてゐた姿を思出した。また同時に、彭可生その人が棠花樓の廊下に續く何處かの一室に、既に九時ごろから潜かに忍むできてゐたことに思ひついて、男は自然に苦笑した。彼が恰も心得顏に、彭氏に近來多忙なことや、佛蘭西租界の安全地域を離れてまで棠花樓に遊びに來ることの有り得ないこと等を、寧ろ得々と霞雲閣に告げた際に、彼女は其を默りながら聞いてゐたものゝ、其の實は如何ばかりか彼の語を笑止がり、且つ危きを冒しても猶ほ彼女と相見んことを敢てする彭可生の賴しさを、彼女自身が如何に嬉しく心に享けたであらう等と、彼は更に思ひ續けて、そこに一入深い苦笑を覺えた。さうして、戯れに、「戀」と一字を書いて、前の婦人に示して快く笑つた。婦人は唇を斜めに歪めて笑ひながら、萬年筆を復た受取ると、

「熱情的子、彭靜涵」と一氣に書いた。

二人は彭君の上に就いて筆談を交はし戯れながら、互に興に乘つて、一本の萬年筆を交る〲授受し續けた。その末に、

「熱情的姑娘の名は？」と、婦人が書いて、

「霞雲閣」と、男が書いた時に、婦人は忽ち大きく手を振つて、

「鳳瑞雲」との三字を書いた。

男は其の名の字面を、其の時始めて見た。さうして、彼も手を振つて、「鳳瑞雲」の名を嘗て知らない旨を婦人に知らせた。婦人は首を僅かに傾けて彼を少時く瞶めてゐた末に起立して、デスクの別の抽斗を開いた。其の底に只だ一つ入つてゐた備忘錄を取出して、更に其のページの間から、キャビネ型の寫眞を拔き出すと、彼女は我とにこ〱しながら、男の胸前に其の寫眞を差出した。

其の寫眞に映つてゐる、美しい人の濃い垂髮と冴えた瞳と、「鳳瑞雲」との優しい筆の跡とを、男は眺めた。それは棠花樓の霞雲閣とは、全く別の女であつた。猶ほ彼の嗜好に從へば、霞雲閣の面差よりも、寫眞の上の顏容のはうが、一しほ嫋かな風情をほの〲と萠してゐて、彼は寫眞のうへの麗しさを、少時く飽かず十分に鑑賞した。さうして、豐かな雙の耳朶に穿めてゐる纖かな耳飾が、眞圓く映つてゐるのを認めた彼は、今前にM報社の應接室で、任慶來君から聞いてきた、五曳山の銅鑛を所有する少女王綾の耳飾の話を、激しく彈くやうに思ひ出した。彼は瞳の力を强めて、寫眞の上の耳飾の、其の耳朶に吊られてゐる極めて纖い曲線が、果して黃金の鎖であるべきか否かを、鋭い視線を凝らして備さに穿鑿した。その末に、それは確かに思ひなしではなく、映寫の光線が極めて微かに捩られてゐて、有るか無きかの明暗を綴つてゐる樣は、その纖い曲線が必ず鎖であるべきことを、彼の視線に確かに識らせた。彼は手頸に穿めてゐた時計を見た。その時は彼が任君と別れてから、未だ二時間とは過ぎてゐなかつた。

一偶合の奇、八十萬元、一混成支隊の編成、李烈鈞との協應、江西の覇權、五曳山の銅鑛、美少女、血と美、王綾、吶喊、戀、鳳瑞雲――」等の聯想が一氣に彼を掠めた。彼はその一時の興會に掩はれて、低級な亢奮を我と覺えながら、息を微かに跳まして、猶ほ少時く寫眞のうへの麗かさゝ艶かさとを、視まもつてゐた。さうして、吐息をついた。その咄嗟に、

「此の女を探しあてゝやらう」と、彼は忽ち決心した。決心はしたものゝ、直ぐ前に腰を卸してゐる啞の婦人や、鳳瑞雲の情人たるべき彭可生その人に、其の美しい少女に就いて訊ねることは、一切を祕かに進める爲には、最上の得策ではないやうに思はれた。また其等の方法は最後の一策として、姑く控え置くべきものゝやうに、彼は思つた。彼はしら〳〵と微笑しながら、寫眞をデスクの上に返して了ふと、彼の氣色を頻りに窺ひかけてくる啞の婦人に別を告げて、未だ殘る亢奮の氣に我と煽られながら、長い階段を強く踏み降りて、戸外に出て立つと、午後の熱い光に額を直射されて、一時に滲み出る濃い汗を、手帛で拭く爲に、未だ吸は續けてゐた雪茄の殘りを路の上に強く投げ棄てた。

▲

微醺を帶びた霞雲閣は、打ち解けて嘆つやうな姿態に、テーブルの端に兩肱をゆつたりと載せたまゝ、襟もとの小豆ぐらゐの金剛石に、白い顎を着けたり離したりして、男から問はれるまゝに、彼女と彭可生との間の物語を、片々ながら語り始めた。男は更に熱心に、霞雲閣の臙脂はなくつて鮮かな唇の周圍を、繁々と瞶めながら、悠閑とした氣分に沈着きながら、其の物語を聽き耽つた。上海の三馬路に第一の割烹店、杏花樓の樓上の一室。午後六時すぎ。

『夜な〳〵瑤の櫛を挿み、黃金の釵を髮に點じて、艶かな聲曲に喉を囀ばす樓上の吾等の多くの群は、概ね父を識らず、或は共に母をも識らず、僅かに眄容白く好かりしが親の情に克つたのであらう。親は我等を幼くして他に估つた。更に他から他に估り傳へられて、其の度ごとに吾等の値は、身の長ずると共に釐り上げ

られ、桑港の風や、奸計の礁や、その間を備な悲哀を悉く身にしめて、女性の隠微は疾く發かれ虐げられながら、東に西に流落の身を、蓬の如く轉じ絮の如く飛ぶ。一々閲しきたれば未だ尚ほ涙の盡きぬ長い禍の路を斯う言ふ現在まで過ぎてきた。其もよし、眞ある人に戀はるれば、縦ひ洞房に華燭を列ねて合卺の禮を修めずとも、相思の二人が常住に相對して笑を共にし涙を共にして、他は唱へて我は隨ふ誼愛をさへ、陋巷のうちになりとも睦み交はし得るならば、去りし禍は客窓一夜の困夢ともなれ、吾等はそこに始めて斯世の曙に會ひ、外の我と衷の我とを一つにして、我が身と我が心とを、そこに眞から我が有にすることが能きるのである。されば吾等の眞底には、男の情を操らうといふ思は微塵すらも決してない。朝に後園の芳露を掬むで、未だ殘る惡夢を夜半の脂粉と共に洗ひ去るとき、晶々たる水を手にうけて、眉の冷かなるを覺えつゝ、吾等は其朝ごとの盥嗽に、必ず男の眞情にしみ〴〵と憧憬の思を佗しく寄せる。時々に洩れて傳はる姑娘の自殺は、必ず午前に定められてゐるやうなのも、それは斯うした朝の寂しさにつまされて、生死の掟を卒かに我から冒すのであり、死にゝ行かうとする其の刹那の心は、斯く物言ふ自分にも烈しく遷つた驗しが屢々ある。白綿のやうな嗎啡啞の粉、その一封を唇に移せば、燃えるやうな血も、やがて悶えて果は凍つてゆくのに、また何の造作が要らう。

三月まへ、死にゝ行かうとする心に、一度烈しく誘はれて、胸の内側の疼くばかりの懷しさに、男の眞情に抱かれたく、かき締めたいやうな烈しい悶えに焦がされつくして、奥歯をぎつしりと噛みしめながら、唇の上の肉が纎かくわな〳〵と慄へるのを强いても止めようとしては、疾や眩みかけてゐる瞳を浸す冷い涙が、瞼に蓋はりつくのを凝と心に制へ〳〵してゐるうちに、幻と謂ふのであらうか、それとも何かは知らず、全く有りはせぬ妍夫の貌と面影が、朦朧として仄かに有るか無きかの輪廓を、遠くにか近くにか、眺めるとはなしに認めてゐるうちの其の悦しさは、側々の前の

悲しみは縹緲として消え離れ、うつとりとした無何有の郷に、甘い心をしつとり溶いて、我から辱しいまでに溢れしたゝる思ひのまゝに、心往くばかり妍夫の姿に狎れて甘へる溫柔な弄びに飽くまで耽る。その妍夫の朦朧とした輪廓は、少時く徐かに佇むでゐる。床の上に優しく揃へた其の纖い韈、さうして、すつきりと垂れた裾のあたりに、此方の烈しい懐しさは分けて一途に迸つて、縋りつきたいやうな焦がれ心地の奔るのを、乳のあたりに擁へしめながら、彼方の人の立姿を、誰憚らぬ悦の瞳に凝視める折の一時こそは、長くともあれ、短くともあれ、眞から千の黄金に代へ難い。

その妍夫の立姿を眺める心地、我と現に、幻を趁ひ往くやうな一時は、宵の燭暗かりし垂帳の奥に、濃い鴉片煙を强かに嗜むで、昏い眠の谷に降りてゆき、魔の郷に逍遙の氣を弄びつくした果の、明けた晨の一時に、屢々臨る幻境である。昏い眠は千里尚ほ杳かな彼方より、僅かに遲々と覺めてくる。覺めてくるとばかり思ふうちに、やがて濶々とした際涯のない域に出で て、そこに暫く徜徉ひたゆたひ、たゆたふうちに意識は生れて我に歸る。蘇るごとく我を認めて、喉の激しい渴を、枕もとの冷水に慰めようとするとき、口に含む水の苦さは言ふばかりない。それも苦さを嫌ひはしながら、迫る渴きの訴へに促がされつゝ、猶豫なく、口の水をば即坐に胃に下す。胃が液體に濕されたとき、あらゆる感覺は忽ち其に刺戟せられ、更に幾杯かの水の觴を、次から次へと貪りながら、濃い唾液を漸く溶いて無くする時と前後して、漸く胸を擡げるだけの力を帶びた身を、辛うじて寢臺の外に運んで椅子による。さうして、そこに悉く萎れて消えてゆくやうな果敢なさに捉はれて、犇々と四方から衝き崩しにくるやうな遣る瀨なさに掩はれる。死の甘味は此時に迎への手を差伸べて、此方の心も自然に靡く。それをも凝と一髮の末に心毅く忍び耐えて、盥嗽の水鉢に向ふとき、依るところなき心の行方は、男の純な胸に憧憬れ、其の心素より彌々滿たざる末を、死の迎への兩手は歷々と我に近く、さも嬉しさうに我が一切を抱き込まうとす

る。斯かる間に盥嗽匆々に終り、復た椅子に凭れて室内に獨り、男の毅かるべき心、死の甘さ、現在の寂しさ等を思ふともなく思ひ耽るとき、何時しか幻の見識らぬ妍夫が朧氣に佇むでゐるのを覺る。

寂しい悲しさは頼しい悦に移り、見識らぬ幻の人を凝視めてゐるうちに、ほの〴〵と新しい力は身のうちに活きてくる。さうして、幻は離れ、一切は有りのままに、始めて現實なる世界を見る。然も其の前後總てを貫いて、常に離れぬ一つの意識、悲しいかな、それは自身が唱姑娘なる異様の境に沈むでゐることである。

それにしても彭可生その人に、始めて棠花樓に聘ばれたとき、其の顏と妾と如何なる詫異であるのだらう。屢々覺える朝の幻の人、横を向いて徐かに佇むでゐる嘗て見識らぬ妍夫の其に、彭可生の俤つかはしさは、——妾は愕きの息を塞めて了つた。

幻の人が物を言ひ、觴をあげ、箸を執り、さも其の快げに、分けて妾と應酬の笑をあげる一夜の宴に、妾は始めて唱姑娘の妾が生きて効のあつたのを覺つた。さうではない。妾といふ女の有ることを悟つた。眷戀のこゝろ、明けては即ち現忘られず、暮れては即ち幻忍ばれず、幻の人、現の人——現の他人、幻の情人。然し其の相異も長くはなかつた。幻の情人は現の情人と一つになつて、その始めての滿足には現なく幻もなく、我を忘れて唯だ夫れ夢の魂ばかりが夐かに絶する彭可生が情を思へ。

妾は疾く知つてゐる。彼は常に手鎗を離したことがない。彼は民黨の人であるとを、知らずにゐる妾ではない。彼の指端は如何にも黒く焦げてゐる。彼の晝の工夫も妾に分つてゐる。其が猶更に妾の心を牽くのではないか。男よ、男は多い。萬人の男よ、男達は何れも同じやうな並の工夫に身を任せて、並に娶り並に産ませて食に生き、その趣く邊りは齊しく名利の伴ふ邊。妾が彭可生その人は——

甚麼？　鳳瑞雲と謂ふ女？　妾は知らない。甚麼？　王綾と謂ふ女？　其も知らない。妾の他に彭可生の最

愛の情婦？ 有るかも知れない。それは自然有るのであらう。然し妾は知らないし、嘗て知らうとも思はない。甚麼？ 圓い翡翠の耳飾りの女？ 知らない、知らない」

▲

第二艦隊司令官の饒懷文君は、既に陳其美氏と款を通じてゐたけれども、愈其の艦隊が陸上の革命黨と協應して、江南機器局の攻撃を開始すべき約束を、果して其の際に計畫どほりに能く實行すべきや否やは、革命黨人の間に深く疑はれてゐた。

四月十二日の夜十二時、極めて巨きな爆彈三つを爆發させる響と炎とを會圖にして、饒君が率ゐる軍艦は、黄浦江の流に錨を拔いて、先づ江南機器局の周圍を繞らす堤の上に、威嚇射撃の砲火を齊しく開き、且つ之が砲火の轟きと同時に、機器局の南にある龍華に屯してゐる歩兵第十五聯隊、機器局に西にある高昌廟に屯する歩兵第十三聯隊の主力、其他砲兵第十四聯隊の第一大隊、機關銃隊など、其等の内應部隊は夜陰に競ひ立つて、機器局を南と西とから包圍して了ひ、晨と共に如上の艦隊射撃と内應部隊との前進によつて、餘り壞さないうちに機器局全部をそつくりと、此方の掌の裡に置換えて了ふ筈になつてゐた。

その最初の會圖になつてゐた三つの巨きな爆彈は、運搬するのに豫定以上の時間を要したのと、猶ほ一つには折からの大雨の爲めに、不完全な導火索の内部までが濡れたり等して、計畫の十二時には一彈も爆發しなかつた。一時――二時――三時、三時を過ぎて漸く二彈が爆發した。然し其處に烈しく期待せられてゐた殷々たる江上の砲聲――艦隊射撃の響は、更に傳はつて來なかつた。樋を走る雨水の人を誘ふやうな小さな音と、木立の繁みを濃かに打つ雨の蕭かな音とが、室内でトランプを闘はしてゐた黨人達の憊れた鼓膜を、寂しくそゝるばかりであつた。斯くて陳其美君も其の幕僚達も其の夜に復たも獨立難の嘆きを身にしめた。

それは確かに爆彈の破裂時間は、計畫よりも少からず遲刻した。遮莫、其の附近一帶の家屋の窓硝子を、

就中三井物産會社の藤村君の別邸の窓硝子を、悉く碎き墜して了つたまでの、大きな響に四方の夜氣を遠く搖るがし、同時に天に冲する紅い炎を暗の空に高く騰げた、其の會圖に對して毫しの應へも肯てせず、錨を依然と卸したまゝ、晨すぎて晝になり、夜になつても、其のまゝに一切を沒交渉のうちに過ごさうとするやうな、第二艦隊の態度に就いて、其の前後の關係を知つてゐた黨人の誰彼は、齊しく憤激の氣を昂げて、「饒可誅」と眉をあげた。

陳其美君の幕僚に、海軍の事を擔任してゐた『宋振』君は、艦隊の敢て斷ぜざる曖昧の態度を殊に強く惡むだ末に、單身夜にまぎれて、軍艦『鏡清』號の甲板に攀ぢ登つて行つた。烈しい氣象の宋君は憤りの餘りに、鏡清艦長を躬ら詰責して、機器局に對する艦上射擊を、約束どほりに卽坐に實施させようとして、甲板の上を艦長室の方に濶步して行つた。それは餘りに奔りすぎた、且つ黨人の誰も全く知らなかつた、宋君のみの全く獨斷の行爲であつた。

甲板の上の水兵は、宋君を誰何した。その說明の何かを辨へざるうちに、宋君と水兵とは格鬪し始めた。宋君の携へて行つたブローニングの六吋自動拳銃は、群り寄る若干の水兵を斃し傷つけた。遂に宋君は甲板の上から、江の暗い面に身を躍らせた。その黃浦江の水は上と下とが流の向を異にして、常に渦を卷きながら流れてゐる。宋君は渦に卷かれつゝ溺れた。さうして、踪跡の分らなかつた宋君は死骸になつて、恰も一週間の後に、鏡清號に近い下流の岸に漂ひ着いた。

宋振君の死に遭つて、更に大きな感激に掩はれた黨人達は、軍艦奪守の强行計畫を新しく樹て始めた。それは餘り難しいことでもなかつた。さうして、彭可生君は食事の隙も惜しまねばならぬ程に、三階の奥の一室で殆ど忙殺されてゐた。

「好しいか、此處に三つの試驗管が有る」彭君は若やいだ聲を低めて、傍の男に說明し始めた。男は默つてテーブルの上に橫になつてゐる試驗管を瞶めてゐた。

「砒素と臭素とは最後になる。先づ斯う――』大きな

テーブルの上に並んでゐる硫酸鹽の一瓶を、彭君は右手に取上げて、メートルを刻むだ度量瓶を左手に透かして眺めた。房々と耳の後に撫でつけた濃い髮が、眞白なエプロンに好く映つて、若い力を現はしてゐた。

三つの試驗管に、夫々別に配合せられた三種の液體が、何れにも管の半ごろまで盛られた。其等の試驗管を、彭君は更に一際大きな試驗管の中に收めた。大きな試驗管の內部には、小さな木の枠が三つ取着けられてゐて、小さな試驗管を安置するやうに出來てゐた。大きな試驗管の周圍を、彭君は更に薄い鐵葉の板で掩ふた。鐵葉板は容易に圓くなつて試驗管を圍み、その端と端とに穿けてある小さな穴と穴とを、彭君は短い針金で巧みに繫ぎ留めた。さうして、テーブルの上に其を樹てた。最後に彭君は三つの小さな木栓を、夫々小さな試驗管の口に穿め、次に針金の吊柄を鐵葉板の上緣にある二つの穴に差入れて、右手に提げると、男の眼の前に振りながら、

「一つの出來た。之を擲げるのだ。すると中の試驗管が壞れるだらう。三つの液が化合する。白い煙が迸る。只だ是だけだ。窒息、昏倒、死。擲げる者は覆面して行くのだ。覆面器か、好しい。今見せる。僕が冠つて此處で擲げてみせようか。甚麼？ 然う、先づ二分間ぐらゐ、直ぐに窒息、忽ち昏倒、死ぬまでには先づ三時間、倒れた奴を好い空氣の所に直ぐ連れて行くならば、二時間か、先づそこらで活き復る。甚麼？ 然う、斯う臭いのは調合するときだけなのだ。化合して了へば無臭。うん、軍艦の何處かへ、がちやりと少し强く轉がして來てゝ濟むね。」彭君は其の毒瓦斯の管を、テーブルの上に置いて、佳い薰の雪茄を咥えた。

「分つた」男が瞳を輝かして言つた。

「記憶して了つたか。紙に書いて上げようか」

「書いて貰ひたい」

「好しい。但し秘密だ。君だけに敎へた。隣室に行かう。夕方までに是非とも三十本作らねばならぬ。今夜は止めた。」

「霞雲閣が待つてゐる」

「あ、よく知つてるね。然し今夜は行かない」

「鳳の方だらう」

「ファン？　誰のファン？　方か、房か、封か」

「鳳瑞雲」

「少し愕いた。先づ雪茄を喫まう。あの女は現在寄宿舍に居るのだ。君は何うして知つたのだ」

「昨日寫眞を見せて貰つた。美しいね。何所の寄宿舍に居るのだ」

「待ち給へ。隣室に行かう」

二人は彭氏の屋室に來た。激しい酸性液に刺戟せられた嗅覺は、普通の空氣を餘程慕つてゐた。

「この女だらう」彭君は寫眞を取出して、

「この女はね、死斯の製法以上の大きな秘密を有つてゐる。鳳瑞雲、勿論眞實の名ではない。待ち給へ、僕は何も言ふことが能きない。未だ少し早いのだ。然し、——僕が死んだならば、この女の祕密は、君に任せよう。僕の遺言書の中の一封に、君の名を遺して置かう。好しいか」彭君は少からず緊張しつゝ言ひ續けた。

「好しい。一つだけ訊ねたい。その女は君に屬してゐるのか」

「無論とも、僕が購つてきたのだ。女の一切は僕の有だ」

「分つた。君は何方を強く愛してゐる」

「鳳と霞とか。鳳は僕の女になつてゐる。霞は萬人の女ではないか」

「分つた。君と鳳氏との前途を祝はう」

「好しい。君は此の女に就いて何か知つてゐるらしいな。然うだらう」

「多少知つてゐる」

「好しい。此の寫眞を見たまへ。秘密を保つ爲に、臺紙を換えたのだ。何處で撮つたのか分らないやうに。好しいか、僕が死ねば君に悉く任せる。君が結婚すれば最も好い。だから君の知つてゐる此の女の事を、暫く知らずにゐてくれ給へ。僕は君への遺言書を今夜書かう。今夜は彈子房に行つてみる胸算でゐたのだが」

「分つた。僕は其の女を探さうと決心したけれども、

今から全く知らずにゐよう。女の居る寄宿舍を探しあてることは難しくはないのだから、他の者に注意したまへ。其の女の耳飾は極く稀しい」

『有りがたい。圓い翡翠か？　是だ』彭君は黑革の銀貨入を衣嚢から取出した。其の中に圓い翡翠が濃綠の澤やかな光を帶びて、金の環に穿められて鎖に繫がつたまゝ、二つ揃つて入つてゐたのを掌に受けて、彭君は始めて微笑した。

　鎖は斷られて條になつてゐた。

『彼女は別の耳飾を穿めてゐる。遺言書の中に此の耳飾と或る書類とを封じて置く。耳飾と遺言書と或る別の書類と、是だけで此の女は全く君に屬くことになる。他の者には話せない。必ず好しいか』彭君は言ひ切つて、寫眞を膝に載せた。黑く焦げてゐる兩手の指を深く組みあはせると、

『袁世凱の爺、何時まで生きてゐるのだらう。奴さへ死ねば、僕は此の女と結婚するのだが』呟くやうに呟いた。

▲呉淞砲臺の直ぐ前に、軍艦『策電』號が低い舷を、黃浦江の流に浸してゐた。

　革命黨の急進派は、上海の獨立を急いで決行する爲に、延いて呉淞砲臺を先づ脅かしてみる爲に、策電號の奪取を企てゝ、五月五日の拂曉まへ、四十名の黨人達は、小蒸汽船の『江平』に乘組むで、黃浦江の暗を下り、策電を奪りに行つた。

　何の錯誤か、江平の機關手は、砕けるまでに其の舳を、策電の左舷に驀然と衝きあてた。素破やと小銃架に馳せ集まつた艦上の水兵どもの眼前に、先頭の黨人は甲板上に躍りあがつた。それは既に機會を失つてゐた。左舷の激しい衝擊に遭ふて、甲板上の警戒兵は、齊しく黨人達の胸前に、小銃の照準を着ける餘裕を有つてゐた。それでも十九人の黨人は甲板の上に續いて躍進した。然し最初に失はれた機會を、取り復すことは遂に能きなかつた。多くの水兵は忽ち甲板を掩はんばかりに新しく增加した。

「退回（トイホイ）――」黨人の誰かゞ叫んだ。格鬪の甲板を撲つ響、迸るやうな銃聲、裂くやうな叫喚、斷續する拳銃の亂射、その間を縫ふ懷中電燈の閃々たる光、悉く破調的な其等が一時に凄じく紛糾して、江上の靜寂な暗を忽ち擾がした。さうして、碎けた舳を回らした江平は、飛び降りてくる黨人を收容しながら、はら〳〵と霰の走るやうな小銃彈を眞上から浴びせかけられて、漸く上流に溯つてきた。

江平の船底に幷べて行つた毒瓦斯の瓶は、其の一瓶をも使ひ得ずに、其のまゝに運ばれて還つてきた。

饒懷文君は第二艦隊を率ゐて、楊子江を溯り南京（ナンキン）に去つた。彼は買收費の十萬元を、前後二回に接受しながら、其のまゝ上海を後にした。

黨人達は遂に嗤つて了つた。

▲

策電號を奪り得ずに、決死と稱へてゐた黨人達が空しく還つて來てから十三日過ぎて、陳其美氏が忽ち巧みに暗殺された。

暫く上海を離れてゐた彭君の友の彼の男は、上海に歸つて來た。さうして、『彭可生變死（パンコーシンビエンス）』と、彼が使つてゐた部下の一人から、停車場に着くと直ぐに聞いた。事の仔細を訊ねても、彼の部下は只だ首を横に振つて、『風說、風說（ファンショファンショ）』と呟くのに過ぎなかつた。

男は荷物を部下に托して、彭君の宅に馬車奔らせた。彭君の家の扉は鎖ざゝれてゐて、内に人の氣配は全く無つた。彼は隣の家の扉を叩いて首ばかりを出しに來た下婢に、彭君の家の消息を質問してみたけれども、下婢は鈍い瞳を瞠るばかりに終つて了つた。

男は其處の路次に佇むで、少時く思ひ亂れた。彭君の安否、彭君と自分との間に介まれてゐるやうな鳳瑞雲なる美少女、それは恐らく王綾なる毛明容の遺子、任慶來君の話、第三革命の將來と自分、其等の思が一時に簇つて彼を襲ふた。彼は待たして置いた馬車を復た奔らせて、黨人の『殷容善』君の家を訪ねた。殷氏は彼を導いて、自室に通すと直ぐに、

『彭君が危篤だ』と、言つた。

殷君の話は次のやうに進むで行つた。

「彭君は職に斃れた。未だ死にはしない。然し彭君を明かに治療し得る醫師はあるまい。彼は深夜に爛醉して歸つてきた。彼は二階の寢室に入つた。啞の姉は其を見とどけた後に、階下の自分の室で寐た。朝がたに眼を覺ました彭君は、水を飲む爲めに階下に降りてきた。さうして、厨の暗い隅の水道の栓を開いた。然し其處の溝の上に、試驗用の毒瓦斯の瓶が置いてあつた。姉の筆談によると、その日の夕方に鼠を實驗する爲に、彭君は厨まで其の瓶を提げてきた。さうして、豫め捕つて置いた鼠の入つてゐる鐵籠を探す爲に、瓶を其のまゝ其處の溝の上に置いて、彭君は裏口の方に出て行つた。鐵籠は裏の扉の下に有つたけれども、中の鼠は何うにかして逃げて了つてゐた。厨まで歸つてきた彭君は姉の室に行つた。鼠の居なくなつたこと、その毒瓦斯の瓶を三階の奥の室に收めて置いて貰ひたいこと、自分に今から翌朝まで外出すること等を、彭君は姉に知らせて、裏口の扉から出て行つた。

翌朝まで歸つて來ない筈の彭君は深夜に歸つて來た。姉は毒瓦斯の瓶に觸れるのさへも、平常から强く畏れてゐた。さうして、水道の栓の傍に、彭君が置いて行つた瓶をも、彭君が歸つて來るべき翌朝まで、其のまゝにして置く胸算でゐた。また彭君に其の事を知らせずにゐた。姉は彭君が二階の寢室で、翌朝まで熟睡しとほすことゝばかり思つてゐた。

水道の栓から水を受けやうとした時らしい。彭君は脚の傍の瓶を覆した。さうして、其處に昏倒して了つた。

朝まで姉は何も知らずに眠つてゐた。起きて厨に來たときに、彼女は彭君の倒れてゐる姿を見た。瓶の壞れてゐるのを見た。彼女は泣きながら、隣家の同志の「張」君の家の扉を擲きに行つた。

起されて來た張君は、彭君の姿と瓶の破片を認めるや否や、自分の家に馳せ還り、策電を奪りに行つた同志から預けられてゐた覆面を提げて戻つてきた。

覆面を冠つて張君は彭君を扶けだした。さうして、

彭君はS病院に擔がれて行つた。其の容態は極く惡い。瀕死のまゝ今日まで三日間も睡つてゐる。その中毒を中和させるほどの醫師も藥も、あの病院には無いらしい。また別に吾等としては、彭君の家の中の一切を、殊に三階の藥品や材料を、秘密に運び出して、兎に角他に移轉させなければならぬ」

殷君は話して了ふと、始めて其の癖の右手の爪を嚙み始めた。

▲

既に一封の電報を受取つてゐた男は、一刻も速かに、上海と離れなければならなかつた。彼は最も迅速な方法を選擇して、上海を離れる爲に要する一切の仕事を濟ました。S病院を訪ねた彼は、白い病床の上に彭君が、骸のやうに何も知らずに眠つてゐるのを視た。啞の姉は彼を仰いで、涙を流した。彼女の彈力に充ちた好い輪廓にも、少からず瘦せが見えてゐた。

男が上海を離れる時に、船室まで迭つてきた「凌」君は、

「君の識つてゐる姑娘が今朝死んだ。モルヒネを飲んだのだ」と、男に教へた。

「それは霞雲閣と謂ふ女ではないか」

「然う」凌君は彼を凝視めた。

男は、彼女霞雲閣が語つた「幻の人」の現狀と、彼女と新しい死とを、一つに纏めて考へ始めた。そこに、

「それに妙なことがある」と、凌君は更に言つた。「雪茄を三本、乳の間に載せて、寢臺のうへで死んでゐた」

□

「上海」と別れた男は、船室の寢臺の帳の蔭で、甲板の籐椅子の上で、或は植物室の棕梠樹の傍に立ちながら、喫煙室の革椅子に凭れながら、舞踏室の蠟石の柱に身を寄せながら、其等の時々に、直前に繋がるいろ〳〵の生々しい追懷を、一つ〳〵鮮かに査べてみた。

「彭可生の生命は？」斯の懸念に、彼は屢々捉へられた。「翡翠の耳飾をしてゐた少女――孤兒――五輿山の銅鑛・――八十萬元――彭君の遺言狀――李烈鈞君――」

甲板の欄干に頰杖をついて、彼は靜肅な水平線を久しく凝視めてゐた。姑娘の『霞雲閣』の死顏が偲ばれた。またては麗かな『鳳瑞雲』の物言ふ唇の動きかたが映つたりした。「彭可生の生命は？」彼は復た思つた。熨をかけたやうな靜かな海の、東の方の水平線は暮の色に燻つて、舳は東へ東へと、音なしく進むでゐた。

□

船を上つて八日目に、男は次の意味の書簡を、上海から受取つた。――彭可生は今危篤である。その生命の爲に一切の方法が既に盡された。彼は絕對に安靜を保たれながら、寢臺の上に仰臥してゐる。樟腦油とスパルテインの注射が、既に幾度か行はれた。彼の心臟は其の注射によつて現在纔かに活きてゐる。幾リートルかの酸素も、呼吸誘導法によつて、彼の胸に送られてゐる。然し憾むらくは彼は肺の併發症を起してしまつた。彼の病室には、盥の中で絕えず湯が沸騰してゐる。ウーカリプトルとゴメオールの少量が、盥の中の湯に混入されてゐる爲に、其の蒸氣は病室の溫度と濕度とを完全に保ち、猶ほ名づけ難い一種の香氣を發散してゐる。然し彭可生の容態は愈々眞に險惡である。醫師は默つてゐる。彼の姉は默つて泣いてゐる。吾々も常に其の傍にゐる。彭は君が上海を去つたことを、未だ知らない。眞實を言へば、彭の生命は數日のうちに奪られて去くだらう。彼の親友たる兄臺は、彼が一切の方法を盡されつゝ尙ほ且つ簀を易ふるの竟に餘儀なきことを覺悟し給へ。吾々一同は彼の爲に成し得べき總ての道を成した。而して、兄臺が斯くの如き書信を披き見る表情に、切に齊しく同情する。希くは吾々の表情をも亦深く諒とせよ――

更に三日經つた。上海からの支那暗號電報を、男は急いで披いた。數字を綴つた一語づゝを譯して行くのにつれて、

――彭可生本日午前三時十分鬼籍ニ上ル」「臨終ノ遺托全ク無シ」「彭ノ遺言書開カレ吾ガ總理ハ其處理ニ着手中ナリ」「兄臺宛ノ一封正ニ發送ス」「袁逆遂カニ奪ハレ方今益多事」「兄臺匆々來滬セヨ」如何――

男は電文を譯しながら悲しむだ。「匆々來滬セヨ如何」彼は悲しみながら寂しく微笑した。

電報を受取つてから、また一週間の後に、男は量の重い書留郵便と、小さな書留小包とを送られた。

彼は浙江省の全圖を披げて、銅鑛の所在を今や確かに知ることが能きた。鳳瑞雲に就いての一切も明かにされた。密封された朱漆の小箱を開いて、彼は翡翠の耳飾を掌のうへに受けた。

彼は上海の親友の一人に、更に長文の暗號電報を打つた。その返電につぐ返電を、彼は幾度か打つた。第一信から第七信までの間に、彼は自信し得る最善の方法のもとに、且つ最も周到に、彭可生の遺托を全うすべき準備を先づ滿足に整へることが能きた。さうして、縱ひ其等の秘密を解いても、必ず差支のないまでに、彼は根柢ある保障を握つて了つた。

□

夏の雨霽れて地は燥き、湯のやうな風を袂に拂ひながら、彼はS銀行を訪ねた。鳳瑞雲に關して彭君の遺した一切の書類と、翡翠の耳飾と、往復電文と、彼が最近に得た證書とを、S銀行に保管を托して、彼は歸路についた。彼は袂の中に上海から持つてきた雪茄を一本入れてきた。街の上で彼は其の雪茄の薫を懷しむだ。纔かな滿足が其處にあつた。

「第三革命」といふ語の感じが好い爲に、斯の革命は必ず成ると、晩餐ごとに悅んでゐた、かの彭可生その人の死を通じて、彼に預けられた鳳瑞雲、その少女からの書信が、最近に彼の机の上に載せられた。その筆蹟は、彼女が嘗て彭君に與へた寫眞の上に自署したものに比べて、餘ほど上手になつてゐる。その文章は、一篇の趣致悉く淡靜に、彭君を失つた彼女自身の上を哀しむでゐるのに、それを繰りかへし見る彼の悲しみもまた新しく、彼は直ぐに彼女にあてゝ、委さに返書を認めた。其に對する彼女の返書が更に折かへして來た。

鳳瑞雲は、今ゐる上海の寄宿舍の學校を退いた。さうして、彼女は彭君の姉の啞の婦人と共に、彼が電報

を交換した彼の親友の一人に伴はれて、近く彼の傍に來るといふ。

京阪見物印象記（下）

田村俊子

島原の太夫

京都へ行けば、必らず見なければならないものにして居るこの島原へ、私も一夜伴はれて行きました。島原と云ふ一廓が、京都の何の方角に當るのかも知らずに、風のひどく吹く晩に、小さな岐阜提灯の吊るしてある自働車に乘つてこの廓へ行きました。大門に見返り柳があると注意されて振返ると、ひよろ〳〵とした貧弱な柳がその入り口にありました。

私の心があわたゞしかつた爲か、私はこの古風な暗い遊廓に入つて見た時、さして深い情趣も覺えませんでした。何となく廢滅の影をにじませてゐる遊女屋の暗い軒を幾つか過ぎて、そうして角屋と云ふ家へ着きました。入り口に、呼ばれた太夫の衣裳葛籠が重ねてあつて、其れに太夫の名を記した札を掛けてあるのが目に付きます。玄關には昔の儘に金物細工の刀掛けが備へてあります。燭臺を持つた仲居が私たちを案内して二階へ行きました。衝立の蔭には四つの燭臺が四本柱のやうに据ゑてあつて、蠟燭の火がちろ〳〵と暗い一と間に昔の遊樂の名殘りを見せながら燃えてゐます。仲居が「御酒にするかビールにするか」と云ふ樣な事を聞いて、やがて小さな膳に日本酒を燗けて持つて來ました。そうして暫らく經つと衝立の蔭から太夫が現はれて、仲居の持つて來た盃臺から盃を取ると例のいかしの式と云ふのが初まりました。

島原の太夫には、もつと美しいのも居るに違ひないと思ひますが、不幸にして私の見た晩に出て來た太夫は、何れも御座の醒めるやうに豚のごとくに太つた太夫さんばかりだつたのです。丸く太つた肩のぎごちなさ、足の短さ、それでゐて顔ばかりが大きく見えたのも情けないやうでした。この太夫が一向に形も付かずに反り返つて盃を駱すやうな式をやつてゐましたから、私は思はず失笑しました。仲居が傍にぢつと座つてゐて太夫の名を名乘ります。式が終ると肩から裲襠を滑らかしながら、ずつと立つて又衝立の彼方へ入つて出て行つて了ひます。其の時の形の不恰好に醜いのに驚きました。島原の太夫は、もつと容姿が美しくなくては、このかしの式は引き立たないと思ひました。蠟燭の淡い灯影に、斯う云ふ太夫さんの顔や姿を照すのでは一向に情趣がありやうもありません。それでも斯うした女たちに光人太夫だとか吉野太夫だとか云ふ太夫名が付いてゐるのです。松の太夫の位も恐しく下落してゐるものだと思ひました。

靑貝の間、松の間、扇の間など、木口は眞つ黑に煤けてゐながら、贅澤な凝つた普請の座敷を、一とつ一とつ仲居の手にしてゐる燭の火で見て廻り、さすがに古るい都人の風雅な戀を忍びながら玄關へ出ると、赤い前垂れを狹んだ仲居が裾をかゝげながら片手に提灯を持つて其の門を行つたり來たりしてゐます。雨催いの夜を灯の入つてる門の燈籠、其れに垂れた柳など、見てゐる内に其邊の景に風情がこまやかになつて來ます。男の連れは後に殘り、女の連れは其所を見捨てゝ直きに島原を出ました。

奈良の興福院

大阪に滯留してゐた間に、一日大阪から奈良へ行く電車に乘つて、この興福院の尼寺を訪れた事がありました。この電車は生駒山のトンネルを五萬間ほどもかゝつて拔けて行きます。そうして河内平野を走ります。大和に近付くほど、見渡す限り靑い色が一層美しく、小さい湖のやうな水面が柔らかな靑草の繁みから鏡のやうに現はれてくる頃には、法隆寺の五重の塔、藥師

寺の三重の塔が右に新緑の梢頭を割つて空に聳え、左の方には大佛殿の屋根が低く新緑の間に沈んで眺められます。千年前の尊い藝術の一とつがこの新らしい緑の色に包まれて、そうして其の尖端を今日の日光に輝かしてゐるのを見た時、私の胸は何とも云へない喜びの情に戰えました。塔はだん／＼に眼前から見え隱れして、その古るい歴史の面影を再び新緑の内に沒してしまふ迄、私はぼんやりと我れを忘れてゐたのです。奈良の明るい停車場に着くと、其所から車を走らして市の郊外にある佐保村の興福院へ行きました。

麥畑の靑々とした間を通つて、一とつの畦道を貫つ直ぐに突き當つたところに、白い土塀を繞らした一寺が興福院で、門前には二本の松が亭々として立つてゐます。庭には赤紫の躑躅の花が盛りの遲れた色を見せ、緣からは靑い絨のやうな三笠山の側面の半腹が眼前に近く流れてゐました。本堂へ渡る廊下から小さい中庭を眺めると、池の暗い水に緋鯉の脊が浮いて水際に紅うつぎの花が盛りに咲いてるのも尼寺と云ふ連想が哀れに媚めきます。泰山さんと云ふ六十ほどな年輩の洒脫な尼さんが方々を案內して呉れました。本堂には別にこれと云つて見るやうな物もなく、御靈屋の方の襖に始興の描いたと云ふ四季の畫を見ましたが、これはまことに美事なものでした。桃山百双の內の一双だと云ふ屛風、打敷の繡ひの結構なのを見て、三笠山に向つた細長い座敷で晝の膳の馳走になりました。木立の奧の方から蟬の聲が聞こえるばかりで軒には小鳥の囀る音もなく、寺內が森と物憂く靜かで、何も彼も全く浮世とは離れた感じです。二十四五だと云ふ院主さんが挨拶に出られましたが、小供々々した愛くるしい顏をして、紫の衣を着けた容子が人形のやうな方でした。この方が七才の時とかに初めて院に入られて尼になる式をされた時、薄田泣菫氏が其の樣を垣間見て詩作をされたとか云ふ話などを聞きながら、院主さんの去られた後の庭の面に目をとゞめてゐると、頻りに淋しい思ひが湧いて來ます。弟子衆の中には吉井氏の歌や私たちの名などを知つてゐる人があると云ふ話でし

たが、其の若い尼さんは恥かしがつてゐるとかで出て來ません。給仕に出た若い尼さんもにこ〳〵と愛嬌深い顔をしてゐました。我たちの訪問の間に外國人が一人やつて來ましたが、年老りの尼さんが「外國さんが見えた。」と云つて泰山さんを呼んでゐたのを面白く思ひました。此家を出る時、今日の訪問に顔を知つた尼さんたちが皆玄關に出て再遊をすゝめる言葉を幾度も繰り返しながら私たちを見送つてゐました。

奈良

奈良への途中

京都の停車場に東京へ歸る人を見送つて、旅に出てから初めて一人になつた私は直ぐに其所から奈良へ行く汽車に乗りました。長らく近接してゐた人間同士の感情の交渉が全く私の身邊から失くなつて了つて、私の魂は何の煩ひもなくこの自然の中に呆氣たやうになつて蕩けて行きます。旅に出てから十幾日の間只管に私は斯う云ふ日の來るのを待つてゐたのでした。自分一人の思情に浸つてそうしてたつた一人で思ふ儘に自然に親しむ日を私は待つてゐたのです。私は今日の日を喜びながら、淋しいが然し靜にこの旅路に降る雨を窓外から眺めつゝ行きました。すべての自然の景は獨りになつた私の旅をなつかしみ親しんで呉れるやうに、そうして慰めてくれるやうに、いかにも和らかに溫く私の心にひそ〳〵と觸れてゆきます。

宇治の川を渡り浮島の塔を思ひ出の内に眺め、木津川で裸體の男が二三人白い布を曝してゐたのも興が深く、やがて新田を過ぎる頃には雨がます〳〵斜に降りそゝいで、山は霧に隱れ水は淺黄に烟つて、模糊とした風景の中に綠ばかりが鮮かな色を點描してゐます。山城との境界を越えて大和に入るほど、四方の風物がすつかり野趣を帶びて來ました。其の野趣の中に何となく古代的な寂びのあつた事が忘れられません。白壁で圍まれた、一寸見ると堂宇のやうな正方形をした田舍家に、茅葺の家根が恰好よく深く垂れて、其の周圍の笹藪が煙りのやうに雨に靡き崩れてゐるのも、大和

の田舎ばかりに見得られるやうな趣きを感じます。桐の花の雨に惱んだ紫も、こゝらで眺める其の色は一層古るめかしく、大宮人の萎えた袖の名殘りの色とも思はれるのに懷かしさが籠ります。私は斯うして窓外の景色にも感が一々深く、又頻りに夢の國の憧れる心をときめかしたりして、二時間ほどの汽車の行程の間おそろしく不思議な興奮に心が疲れ、少しぼんやりとした頭腦になつて奈良の停車場へ着きました。

春日神社

新開地のやうな奈良の新らしい町を通つて行くと、猿澤の池に直きに出ます。物哀れな采女の傳説も、池の周圍にごた〳〵とした現代的な建物が背列してゐて、すつかり池の詩情を破つてゐるので佗びしい氣がします。其所を去つてだん〳〵に春日の森の方へ近付くほど、鹿の寐姿を若草の上に見付けたり、道傍に遊んでゐる鹿が馴れ〳〵しげに車の傍へ歩み寄つてくるのなどに出合つて、初めて奈良に遊んでるやうな心地になつて來ます。春日の森には老杉の間に、殆んど仰いで見るやうに高く藤が咲いてゐました。一の鳥居を潜つて春日燈籠の無數に並んだ間を何町か過ぎて行くと、正面の石段の上に高く、所謂春日作りの社殿の家根が美しい反りと千木の丹塗りとを、黑い森を背景にして浮んでゐました。私はそこを車で一通りして行くのが惜しく、下車して鹿にパンをやりながら歩きました。

春日の巫女を見やうと思つて、少しの寄附をすると、十二三ぐらゐの醜い女の子が二人で出て來て舞ひました。前挿しのかんざしは奇麗ですが、生際を六角の線の一端のやうに際取つて白粉を塗つてあるのを可笑しく思ひました。あれは面のつもりで化粧をするのではあるまいかと私は其れを見ながら一人で解釋してゐました。餘り見榮えのしなかつた巫女に失望しながら、春日の神社内に列べてある寶物を見ました。天文頃の作の面などが並べてあり、元信の彫刻したと云ふ珍らしい木彫の釣燈籠などがありました。

東大寺

奈良はまた芝生の美しいところだと思ひながら、春

日の神社を出ると、雨が止んでるので梘を拂つて東大寺に向ひました。南大門の運慶、快慶の作と云ふ其の雄大な仁王を見、大佛殿に參じて大佛を見ました。重衡の兵火後再度の燒失に逢つてこれは元祿年間に建てられたもので、蓮坐だけが天平の創建當時の儘に殘つてゐるのださうですが、この大佛の顏が鎌倉の大佛よりも遙に劣つてゐる事は私の眼にも分ります。多聞天王、如意輪觀音などの彫像の並んだ金堂の內は木の黴のやうな暗い匂ひが蒸れてゐます。大佛殿を出てから池を前面にした其の殿堂を振返つて見た時、丁度、それはほんとうに幾前世の過去の中から滲染んできたやうな淡い日が、射すともなく漏れるともなく、杉の梢頭を越えて地上にひろがつて來たのです。大佛殿に低く垂れた眠つてゐるやうな薄墨色の空は、その幽な光りに動かされて色射してきました。私は思はず引き込まれるやうな心地になつて光りの射してくる方を何所ともなく仰ぎながら暫らく佇立んでゐました。空には何の影もなく、地には何の音もない。そうして千年の夢がこの幽な光りの中から次第に深く私の眼前にひろがつて行かうとした時に、光りは忽ち過去の扉を閉ざすやうに土の面に果敢なく消えてしまいました。私はぼんやりと其所から、二月堂の方まで歩きました。法華堂（三月堂）の內には結構な彫刻の數多あることを聞いてゐた私は、其れを見せて貰ふことを賴む爲に再び大佛殿に引つ返して社務所で其の手續をしましたが、何の紹介もなしに行つた私は大層其所で八かましく云はれ、漸く御膳料寄附と云ふ名目の下に三月堂の寶物拜觀を許されました。

　其所から三月堂まで又再び引つ返した私は、角立つた今の交渉ですつかり疲れてしまつて、一層茫としながら暗い三月堂に導かれて入りました。そうして幻のやうに數多の彫像の並んだ前に立つた時は眩惑するやうに思ひましたが、やがて案內の小供が彼所此所の扉を開いて薄い光りを外から取り入れた時には頭がはつきりとして來ました。そうして其の彫像を一とつ〳〵見て行く內に、これらの彫刻の上に凝つた偉大な力の

藝術を感じ、又、これ等作家の絶倫な藝術的意力の美に打たれて、私は唯驚歎の中に暫らくは其の傍を離れる事が出來ませんでした。三尊の天蓋を打仰いではぼんやりと立盡し、日光月光の梵天帝釋天の前に立つてはぼんやりと立盡してゐました。私は殊に梵天帝釋天を結構なものに思ひました。地藏菩薩の顏もよく、其の襞襀のあたりは巧妙を極めてゐます。秘佛の厨子の前に据ゑてあるコマ犬（一尺五六寸ぐらゐのもの）は美しいものでした。案内人を何時まで待たせて置く事が氣の毒になつて私は思ひ切つて其所を出ましたが、三月堂は奈良市唯一の最古な建築だと聞いて、其の天平遺物の堂の前に長らく立ちました。そうして千年を恙なくして保たれたこの三月堂の運命が、私には却つて頻りに悲しくなつて來ました。手向山八幡、聖武帝の御剃髮の毛を埋めたところと云ふ柵を繞らした前に立つて一拜し、それから興福寺に向ひました。

興福寺

奈良の公園を抜けて、青葉の下を行く頃には又雨が降り初て鶸色の芝生に雲の影が落ち、幌を外した私の肩や髮が濡れてゆきます。師範學校の内から漏れてくるピアノの音が、不思議に調和を持つた音律を漂はしてこの空へ消えて行きました。興福寺へ行つては、東大寺の例にならつて先づ寄附について東金堂内や、三重の塔内の壁畫を見せて貰ひました。この塔は鎌倉を少し前の建築だと云ふ事ですが其の恰好が美しく、如何にも小ぢんまりと上品だと思ひました。塔の内の壁にかかれた畫は藥師千體で、其れも大方は剝落してゐてところ／＼手や足などが薄く殘つてゐるばかりです。古く黑ずんだ柱や天井に描いた模樣にも、青い繪の具、朱の繪の具とその色彩をわづかに見分けるほどに薄く殘つてゐるところが有りました。三重の塔の外にはこまかい雨がはら／＼と降り、塔の周圍に茂つてる雜草が濡れてゐました。金堂の中では迦葉尊者の作と云ふ吉祥天女を好いと思ひ、東金堂の內では藥師如來の月光日光の像を傑れたものだと思ひました。運慶の作だと云ふ文珠普賢、金堂には同じく運慶の藥王菩薩があ

りましたが、運慶の寫實ばかりで行くこの作格がひどく下品な感じを與へてゐます。一度鎌倉の鶴ヶ岡八幡で運慶の作の辨財天を見て、其の表情の生き〳〵としてゐるのに驚いた事がありましたが、奈良へ來て優れた諸作に接しると、矢つ張り日本人は日本人だと云ふやうな氣がします。そうして運慶と云ふ人が鎌倉時代にあつて、大いに力の藝術を意味し、頻りに意氣軒昂して大作をやつた其の心持などが、何だか悲しい同感を持つて思ひやられる様な氣がします。

南圓堂には何にも見るものはありませんでした。堂の入り口に金柑が美しく生つてゐました。この堂の觀音に參詣人が夥しく、私の見物した日にも多くの男女が線香を供へ花を供へて參詣してゐました。北圓堂も鎌倉初期の建築だそうですが、其の外廓も大方朽ちかけて、彼方此方と破れてゐました。然し南圓堂の圖の取れないのつぽうな建てかたとは違つて、北圓堂は雅致を含んでいかにも好い建築だと思はせます。其の押し付けたやうな平たい、そうして家根の長く開いた恰好は、さま〳〵な寂びと味とを含んで高雅に見えます。五重の塔も實に好い恰好です。奈良へ來て氣の付く事は古るい時代の建築ほど、樓門でも殿堂でも、其の構圖が大きければ大きいに從つて、その高さと、四方に開いた家根の伸びと反りとの調和が如何にも美事に恰好よくいつてる事だと思ひます。(私は東京へ歸つてから谷中の五重の塔の形が見つともなく、見ることが厭になりました。各重の間隔と、裳層の軒の長さとの釣合の間の拔けたのが初めて私の目に付いたのも、奈良で恰好のいゝ五重の塔を見た爲でした。)建築などに對してはまるで無智な私にもこれだけは見分け得られます。そうして空に伸びた其れ等の建築の線を私は限りもなく美しい事に幾度頭をめぐらして眺めた事でせう。

新藥師寺

野山、かな山の雨中の新綠を眺めながら、一面に麥畑の畦道を車で走つて、新藥師寺へ行つて見ました。寺内の築地が破れ、其れに蔦が絡んで、まるで廢寺のやうに、一見荒凉とした尼寺で、四邊は雨の音ばかり

で閑寂をきはめてゐます。十六七の尼さんが案内して本堂の内を見せてくれました。日光月光は木彫で、同じく木彫の十二神將があります。これは實に素晴らしく好いものだと思ひました。劍を持つてるもの、鉾を持つてるもの、又は無手のもの——さうして悉く形と表情が違つてゐて、力に充ちてゐます。この寺の本尊の藥師如來は、丈の小さい、所謂小品ですが結構なものです。これは近頃盜難に遭ひ、何所とかの山に捨てゝあつたのを發見したのださうです。その折に削り取られて了つたと云ふ事で、この如來の兩足が失くなつてゐました。

奈良の一夜は、安堵村の富本さんの家で明かし、翌日雨の降りしきる中を法隆寺を見物しました。法隆寺は再び項を別にして書かうと思ひます。金堂の壁畫は大部分剝落してゐる上に、雨の日の暗い光線では思ふ樣にはつきりと見る事は出來ませんでしたが、其の薄光の中で見た聖觀音の聖淨な崇高な美しさは何と云つて好いか分りません。これを見ては西洋の聖畫などは誠に人間臭くて見られないと思ひました。壁にはひゞが生じ其の崩れを防ぐ爲に板を打ち付けて支へてある所などがあつて、顏面の全く見えない畫などもあります。この世界にも稀れなものに云はれてゐる尊い壁畫が、遂ひには磨滅して行く其の時と云ふものゝ力を考へると悲しまずにはゐられません。殊に現に其の畫が大方は剝落し薄れて了つた壁を見たものには其の感が一層深いのです。近頃この壁畫の保存法に就いてやかましく云はれてゐますが、この壁畫を何うして猶數百年千年の後までも保たせ得るでせうか。無限、永遠の生命のもとに生きるこの偉大な藝術も、それには無限の時がなく、遂に永久の日月のもとには必然に消滅して行くことを思ふと、すべてを果敢なまずにはゐられません。

滯支十七年（三）

小山田劍南

唐紹儀と唐紹怡

唐紹儀は宣統帝即位後、清國の定法に依り、帝の御名溥儀の儀字を敬諱して、字音相通の便を藉り、紹儀を改めて紹怡と爲し、滿洲朝廷覆滅して、共和民國之に代るに至つて、再び舊名紹儀に復したり。而して唐が紹儀より紹怡と爲り、紹怡より復た紹儀と爲りたるまでの時日の間に於て、支那の大勢は幾多の變遷を經たるが、唐は躬親く此大勢の變遷に關與して少くともワキ役を勤めたるは事實なり。滿洲朝廷の重臣たりし唐紹儀はやがて滿洲朝廷打破を幇助したる唐紹怡と爲り、袁世凱を大總統たらしむべく南北意思の疏通に努力したる唐紹怡はやがて袁世凱が皇帝の位に即かんとするの企望を排擊するの唐紹儀と爲れり。唐たる者、閑天寂地偶ま其名の關聯する所に想到することあらば、能く多少の感慨無きことを得んや。

唐は今猶ほ袁勢の餘燼を打消すに鋭意するもの丶ごとく、其段内閣に列するを肯んぜざるは、段が國會に諮ることなくして肆意に内閣を組織したるは、明かに民國の約法を蹂躪するものなりとの理由に據れるが、詮ずるに舊帝制派の遺孽所在に勢力を蓄へ、中央政府は動もすれば其左右する所となり、看て政府の實質に到れば、宛然たる群雄爭權の政治にして、眞個の立憲政治と相距る甚だ遠きを以ての故のみ、而して唐がしかく出所進退の節度に嚴正なるは、果して其本性なるか、將たしは衷心衣冠の榮を願はざるにあらざるも、南方同伴者への手前、一時を糊塗せざるべからずして、勉めてしかく裝へるものなるか、由來支那人は一般に

心事の顚覆常なく容易に信を措き難きを以て、此事亦た容易に判斷すべからざるも、兎に角立憲政治の完全に行はれたる上ならでは肯て入閣せずとならば、唐は終に得て入閣を諾すべきの機會に逢着せざるべき歟。何となれば立憲政治を支那に行うて完全ならんことを期するは、之を其國柄に照らして到底不可能事に屬すればなり。唐は第一次革命の際袁と南方派との意思の疏通に斡旋したるが、其目的實に立憲政治の襄成に在りしこと、彼れの聲言の如くなりしやも知れず。而して彼れが今日南方派と段との妥協を幇助するを拒斥しつゝあるも、其意圖亦た立憲政治の襄成に外ならざる者の如くに見ゆ。然れども吾人は唐が今日段の願望を斥けて北上せざるその意圖は、彼れが當年袁の囑托に由りて南下したる其目的と同じく、全然心算外の結局を齎らすなきやを疑はざるを得ず。質して之を言へば、君主專制政治の寧ろ支那の國柄に適應したる政體にあらざる無き乎、立憲政治は到底支那に行はれ得べからざる者に非ざるなき乎、是れ吾人の一考を要すべき問題ならずんばあらず。

明治三十五年十二月、南京攻擊聯合軍が、一戰して防將張勳を擊破し、所謂中華共和民國の臨時政府を兵馬倥偬の際に樹立し、孫逸仙節を南京に留めて臨時政府の大總統となり、次で參議院の開設となる。當時發表せられたる臨時政府組織大綱に就いて、大總統及び參議院に關する規定の主要なる者を見るに曰く、

第一條　臨時大總統、副總統は各省の代表者より之を選擧す。投票總數三分の二以上の得票を以て當選と爲し、代表者の投票權は每省一票を以て限と爲す。

第二條　臨時大總統は全國を統治するの權を有す。

第三條　臨時大總統は陸海軍を統率するの權を有す。

第四條　臨時大總統は參議院の同意を得て、戰を宣し、和を講じ、條約を締結するの權を有す。

第五條　臨時大總統は官制官規を制定し、並に文武職員を任免すること を得。但し官制を制定し、國務各員及び外交專使を任免する場合は須く參議院の同意を經べし。

第六條　臨時大總統は參議院の同意を得て、臨時中央審判所を設立するの權を有す。

第八條　參議院は各省都督府より派遣する所の參議員を以て組織す。

第十一條、參議院の職權左の如し。

(一)第四條及び第六條の事件を議す。
(二)第五條の事件を承諾すること。
(三)臨時政府の豫算を議決す。
(四)臨時政府の出納を檢査す。
(五)全國統一の稅法、幣制及び公債發行に關する事件を議決す。
(六)暫行法律を議決す。
(七)臨時大總統より附議せられたる事件を議決す。
(八)臨時大總統より諮詢せられたる事件に答復すること。

成文に由つて之を觀るときは、人民の參政機關たるべき參議院は、立法の大權並に行政司法の監督權を附與せられ、元首は僅かに人民の公僕たるに過ぎずして、一見堂々たる立憲民主政體ならずと謂ふを得ず。然れども翻つて之を共運用の事實に觀れば、吾人は支那には立憲君主政體すらも適用し得ざるの的證を徵するに難からず。況んや共和政體に至つてをや。

各省に都督なる者ありて、地方の政柄と兵權と併せて之を掌握し、生殺與奪殆んど其專斷に任かせざるなく、居然として割據の勢を爲せる、此事既に民主政治の本義と相容れざること甚し。此等都督の專横なる勢力の下に在りて、無雜作に製造せられたる參議院議員が、地方議會の議員と同じく、實際人民を代表して之と緊切の交涉を有する者にあらざるは言を俟たずして明かなり。人民も亦た國家の政治を視ること秦人の越人の肥瘠を見るが如くなるを以て、參議院は全く人民監視の外に在りて、無責任なる少數白面の書生が勝手氣儘に口舌を弄ぶ芝居たるに過ぎざるを得ず。今夫れ天下の大事を擧げて此等小兒輩の玩弄するに任かせて猶ほ能く失態なきを望むは、所謂木に緣て魚を求むるの類にあらざるなきか。久からずして天下其弊に苦めば、則ち望を英傑の出現に屬せずんばあらず。而して國家の政令は一途に出でざるべからざるを以て、統治の大權は群雄の分掌を許さず。必ずや一個專制君主若くは非立憲的大總統の出現するに非ずんば大局の拾收を期すべきにあらず。人若し足一歩支那の內地に入つて親く其文化の程度を目擊すれば、議員選擧などの到底今日の此邦に行はるべき者ならざるを看取するに

難からざるべきなり。Man is by nature a political animal支那四萬の生人に至つては、吾人其の能く衣食するの動物たるを見る、未だ其の政治を解するの動物たるを見ず。

宣統帝退位の條件にて南北の妥協成り、孫逸仙は臨時大總統の職を辭し、袁世凱を參議院に推薦して大總統たらしめ、唐紹儀が新大總統の下に内閣を組織すべく自ら總理の任を受け、政權授受並に閣員の撰任等の折衝に當るべく明治四十五年五月南京に赴いて孫總統の公館に賓たりし當時、僕一日唐を其行臺に訪うて相把晤することを得たり。其の久しく米國に留學したるの人なるの故を以て、僕特に試問するに北米合衆國の政體は移して以て支那に適用し得べきや如何を以てしたるに、彼れは全然同一なるを期すべからざるも多少の添削を施さば必ず適用し得べきを信ずと答へたり。僕は彼れの此言を聽いて、彼れが革命派の少壯政客と同じく、支那は純然たる共和民主國ならざる可らずとの見解を把持する者たるを知ると同時に、彼れは決して久く其地位に安如たるを得ざるべきを想定するに至れり。何となれば僕は當時既に中華共和民國なる者の根帶極めて薄弱にして畢竟沙上の樓閣に過ぎざるを看破しゐたればなり。越えて數日僕は參議院に出場したる唐紹儀を見たり。演說のヒントを携へて悠揚として演壇に立てる颯爽たる其の態度風丰今猶ほ歷然として目に在り。鼻下の髭頭上の髮理め得て美しく、フロックコートを格恰好く着コナしたる好個のレフアインド、ジエントルマンは議場を睥睨して後徐ろに口を開き、新内閣の施政の方針を些の澁滯なく極めて莊重なる調子を以て說明し、僕をして覺えず天晴れ立憲國の内閣總理たるに恥ぢざるを三歎せしめたり。而して僕は之を支那の國情に考へて巨人の鐵血政治が刻一刻と參議院の背後に肉迫しつゝ有るべきを氣遣ひ、延いて唐の如き立憲的政治の實行を主張する人物が早晚權勢より躱開するの必定なるべきを思はざるを得ざりき。蓋し支那は一時立憲政治を眞似するを得べきも、到底立憲政治を實行し得べからざるの因柄なればな

り。現に群議決を采るの政治を以てしては、中央政府の威令容易に地方に行れずして一龍濟光の處分にすら手古摺れるに非ずや。要するに支那の統治に對する唯一の保證は鉄血の裁斷にして口舌の紛爭にあらざるなり。況んや今日の如き群雄爭權の時代に在りては、唐にして縱令其共和主義を放棄すとするも、猶ほ且つさまで重要なる活動を爲し得べきにあらざるや必せり。何となれば彼れは亂世料理の適材に非ずして平時吏治の適材なればなり。

唐は民國第一期内閣に總理として財政救厄の任に膺り、英、米、佛、獨四國借欵國を出し拔いて白耳義シンヂケートより一千萬兩の借欵を爲したるを以て、四國シンヂケートは唐の不信を憤ること甚しく、唐にして局に當る間は、六億兩の大借欵中より焦眉の急需に充つべき前渡金の如きは斷じて之に應ぜざるべしと決議し、形勢頗る險惡に陷りたるが、唐は狼敗しながらも猶ほ能く縱橫の計を施して首尾好く難關を切拔けたるが、其手腕に至つては彼れの決して凡庸の器にあらざるを證して餘り有るを見る。而して彼れが一部人士に依て起されたる外債反對並に愛國公債の强烈なる運動に避易して、遂に無屆辭職を決行して天津に遁れたるが如きは、適ま以て彼れが撥亂反正の技倆を有する人物にあらざるを見るべきにあらずや。又た彼れの奉天巡撫たりしとき、米人と謀つて南滿洲鉄道の中立を計策し、次で米濟同盟を唱導して日本に楯を突きたるも、日本の鎧袖一觸、事忽ち敗れて復た抗爭するの勇氣なきに至つては、亦た以て彼の乾坤一擲的の大賭博を敢てするの人物にあらずして畢竟立憲治下の吏才たるか、然らずんば則ち其名紹儀を改めて紹怡とせざるべからざるが如き君主專制國の能臣たるを見るべきにあらずや。

唐紹儀は廣東番禺縣の人。年齡六十。幼にして穎悟、鄕黨目するに神童を以てせり。甫めて十歳、笈を負ふて上海に游び、親く外人に就いて英語を學び、十四歳の時、兩江總督李鴻章が人材の急需を感じ、有爲の子弟を海外に留學せしむるや、撰拔せられて米國に赴き、

二十二歳にして歸國し、班を李鴻章の帷幕に列して、南洋大臣の通譯官となり、袁世凱が朝鮮公使たりしとき、其書記官に任ぜらる。唐の官海に成功したるは、袁の推挽の力與つて多きに居り、兩者の間一時親分兒分の觀ありしが、此關係は實に此時より胚胎せり。日清戰役後仁川總領事となり、幾くもなくして北洋鐵路局に轉じ、庚子拳匪の役、山東巡撫たりし袁世凱の幕中に賓たり。明治三十五年二月天津海關道に任じ、次で在京待命となり。兼て副都統銜を賞給さる。同三十七年英清西藏問題解決の全權大臣に任ぜられ、英國の全權と撙俎折衝して獨特の技倆を振ひ、善く清國の爲めに有利なる結果を齎らすを得たり。翌年十一月署理外務部右侍郎となり、三十二年本任となり、滬甯鐵道及び京漢鐵道の督辦を兼任し、併せて稅務大臣の職を奉ず。當時彼れが久しく外人の手に壟斷せられたる關稅の利權を奪還して自國に回收したるは、彼が外務在任中禁烟の實行を英國と商議して成就せること、西藏に關する英清紛爭問題を解決せること、及び義和團事變賠償金の中米國に對する分を免除せしめたることと併せて唐の四大功績と稱せらる。同年十二月郵傳部左侍郎に任ぜられ、仍ほ外務部侍郎を兼ぬ。彼れは此二年間に於て北京外交界に活躍して得意の辣腕を揮ひたり。四十年五月滿洲の行政組織改革せられ、徐世昌第一回の東三省總督に任ぜらるゝや、彼れは三省首班の奉天に巡撫となり、徐を助けて外交多難の局に當り、徐をして能く治績に大過なきを得せしめたり。翌四十一年米國が庚子事件賠償金支拂を寬免したるに對する謝禮使として派遣せらるゝや、窃かに米清同盟の計策を懷いて日本を經て渡米したり。同年秋光緖帝と西太后と相繼で崩御し、宣統帝の登極となり、帝の父醇親王起て監國攝政王となり、宣統元年袁世凱が攝政王の忌諱に觸れて北京より驅逐せらるゝや、有力なる後援を失ひたる彼れは忽ち秋風落寞の身となり、同年七月奉天巡撫を免ぜられ、侍郎候補にて待命仰附けられ、爾來廣東、上海、天津等の地に放游しゐたり。宣統二年徐世昌軍機に入るや、彼れを拔いて署理郵傳部尚書

の任を授けしも、彼れの北京政治界に於ける關係は昔日の如く適意なる能はず、期月ならずして病と稱して掛冠し、天津に隱棲して、河南の草廬に風雲の際會を窺ひゐたる袁項城と機謀を通じ、袁と彼れとの共同政敵たる盛宣懷が郵傳部尙書と爲つて、鐵道國有、及び外債政策を行はんとするを見て、窃かに民間輿論の反抗を鼓動し、以て盛を窮地に陷れ、併せて亂機の釀成に腐心して其功を奏したり。袁の再び天下に立て功名場裡に呼號し、而して革命の亂形益々猖獗となり、政敵相次で勢を失ひ位を去るや、彼れは擧げられて郵傳部大臣となり、南北の和議芽すに及んで媾和使となり、北京政府の全權を帶びて南下したるが、飜覆して寄托に反し、却て南方革命派と事を共にし、滿洲朝廷を倒ふして袁世凱を新共和國の大總統たらしむべく畫策して奏功し、明治四十五年三月自ら總理の任を受けて左の如き各部總長の顏振れにて內閣を組織したり。

外交部　陸徵祥、內務部　趙秉鈞、陸軍部　段祺瑞
海軍部　劉冠雄、敎育部　蔡元培、財政部　熊希齡
交通部　施肇基、商工部　陳其美、農林部　宋敎仁
司法部　王寵惠、參謀總長　黃興

此內閣は袁派及び南方革命派の分子を程よく調味したる者なるが、兩派は次第に圭角を露はして勢力爭奪の暗鬪劇烈となり、唐は漸く其操縱に困み、而して唐は當時全く孫逸仙一派の同盟會に籍を措いて純然たる南方派と爲りゐたるが、袁は動もすれば南方派を壓迫して自己の勢力を增加するに沒頭し、唐をして屢ば信を南方派に失するの苦境に陷らしめたるを以て、唐と袁との多年の交誼はこゝに破裂の端を啓き、袁が孫、黃等の推薦に係る王芝祥を直隸都督と爲すべしとの約束を違へたるに及んで、終に堪忍袋の緖を切つて全く袁と絕交し明治四十五年六月十八日袂を拂つて內閣總理の職を辭したり。袁の野心漸く顯著となり、帝制問題の發生するや、唐は起つて之に反對し、「此首斷つべし、帝制贊すべからず」と絕叫して、伍廷芳、湯化龍、張謇、湯壽潛、張繼等文治派の牛耳を執り、極力袁世凱の擊滅を計つて以て今日に及べり。彼れの立憲政治の

爲めに致たせる勞働や實に大ならずと謂ふべからず。然れども吾人は支那の大勢が寧ろ第二第三の袁世凱の出現を促しつゝあるにあらざるなきやを思ひ、從て唐の竭蹶の終に徒勞に歸するなきやを恐れざるを得ざるなり。唐たる者、時にその紹怡時代を追憶して、能く襟懷の安からざるを覺ゆる無きを得る乎。

趣味の旅行記

健堂生

其一

吾輩は、近年、發見した旅行記の中では、伊能忠敬の西游記が尤も興味があると思ふ。日本民族の誇とす可き世界的大家の眞面目が、躍如として、此の旅行記の中に見へて居る。且つ彼は、其の學問事實の上から、旅行は其の性命である。彼は、一面に於ては、大旅行家であらねばならぬ。伊能忠敬の名を識る者は、必ず彼の旅行ぶりを想像する。旅行中に於ける伊能忠敬先生の態度は、何人にも、廣く興味を與ふ可き問題である。

旅行中に於ける伊能忠敬先生を闡明するは吾が文明史家の責任である。然るに、從來、斯の科學的天才に干する人物研究は、太だ粗漫であつた。彼の人物性行の眞相は、全く、世上に知られ無かつた。寧ろ誤解されて居る。斯人の眞面目は、多分、世人の想像に反して居る事が少くは無かろう。試みに其の一端を申せば、測量及び地圖の大家たる彼は、强健なる旅行家たる可く想像せらる。彼は實に、旅行を好み、旅行家である。然れども決して强健なる旅行家では無く、健脚にも非ず。弱い旅行家である。是等の眞事實は、悉く此の西遊記に明らかにせられてある。且つ彼の趣味及び性格

の全班が、旅行中の態度に、遺憾無く、曝露されて居るのである。元來、人物を研究するは旅行中を第一とする。而して伊能忠敬の人物研究に就ては、此の西遊記ほど面白い材料は無い。

此の西遊記は、漢文で、非常な名文といふほどでは無いが、流暢で、飽くまで伸びた筆致である。忠敬の文章に非ず、彼の親友久保木蟠龍が、忠敬と同行して、詳かに記述したものである。蟠龍は、忠敬の大知己であり、大助力者であり、實に斷金の親友である。此の人の書いた忠敬と同伴の旅行日記は、全然、忠敬自筆の旅日記といつても差支無い位である。著者蟠龍の動機も亦た自分の爲に書き、併せて忠敬の爲めに書いたものと認むる事を得る。

吾輩は、近年、此の旅行記ほど、面白い旅行記を讀んだ事は無い。幸ひ、今年は、伊能忠敬の百年祭に相當する。此の好機會に於て、此の日記を、他の趣味ある二三の日記と比較評論して見度いと思ふ。

其二

土佐日記は古雅であるが、滋味が足らぬ。入蜀記は、行文簡勁にして力あり。簡勁の中に趣味も有りて、文章が無韻の詩になつて居る。紀行の間に評論、考證も交へて、吾が國の近世の紀行は、此の文體を祖述して居るのが多い。入蜀記の著者陸放翁は、田園詩人であり、慷慨家である。憂國の志を詩に寓して居る。彼が詩人としての面影は、悉く入蜀記に現はれて居る。而して入蜀記が散文である丈けに、更に、詩よりも自由、放膽に、表現されるから、入蜀記を讀めば、彼の詩集を讀むよりも面白い。然るに、後世、入蜀記を祖述する記行家は、放翁ほどの詩情もなく、學力も筆力も無く、畢竟熱情無くして徒に其の文體を模倣するから、感興は索然として、見るに足るものは無い。忠敬の西遊記は、やはり入蜀記を祖述するものである。然れども筆者久保木蟠龍が小藤樹といふ評を受けたほどの、品格、學識もあり、詩情もあり、熱情もあり、尊王愛

國の志、事に觸れ、物に觸れて勃發する。唯だ是れ丈で考へて見ても、彼の日記が、紛々たる記行文家の群を拔く事を想見するに足りるのである。況んや此の時、彼は、伊能忠敬と同行して居る。此の性情の高尚にして、全く相反せる方面に特長を有する二大家が、色彩を異にする觀察鏡を二つ並べて旅行するのだから、其の旅行記が、感興の磅礴せるものである事は、言ふ迄も無い。而して此の旅行記には、議論も、考證も交へてあるが、餘り煩雜では無い、到處にあるが、目障になるほどの事は無い。

其三

此の西遊記の著者、久保木蟠龍は、利根川の流域が嘗て產出した顯著なる德行家の一人である。彼は、香取神宮の前の大鳥居の立つて居る津ノ宮の人である。今は、唯だ宅址が存するばかりで、家は無い。彼の生前には、富裕であつた。

蟠龍は、忠敬と莫逆の友人であつたのみならず、忠敬の大事業の上に、離る可からざる關係を有する人物である。蟠龍は、忠敬よりも十二歲の年少であり、勿論後輩である。併し、忘年の親友である。忠敬を中心とする地方有志家の一人で、其の錚々たる者であつた。此の二人は、趣味を以て交つた。蟠龍は漢學者である。忠敬も漢學には造詣がある。當初は、蟠龍が忠敬の啓沃を受けたであらう。然れども此の西遊記を書く頃には、蟠龍の漢學は忠敬の下では無かつた。或は、能く其の上に出たかも知れぬ。蟠龍は孝經を專攻し、彼が漢學の目標は孝の一字であつた。彼は風貌、氣品の、近江聖人に似たるのみならず、其の學問も似て居た。而して彼が、孝經に於ける造詣は、忠敬の參考になり、忠敬を裨益した事は少くないと吾輩は思ふ。併し蟠龍が忠敬の事業を助けた所以のものは、此の外に澤山ある。

忠敬は至つて無器用な性質の人であつた。吾輩の研究するところに據れば、彼は、數學的の天才、實に、驚嘆に値するものがあるが、畢竟、其の頭腦は極めて

明晰、而して其の手は甚だ無器用であつた。尋常人に比して、甚だしく其の手が劣つたか如何か、分らぬが、尋常以上では無かつたようである。彼の數學的才能の發達に對照すれば、其の手は、實に低能であつた。彼は、大地圖の創製者であるが故に、製圖も自ら手を下したものと想像せらるゝ。原本は、彼が手を下したであろう。併し其の製圖は、彼の手では成就しなかつた。種々の助手があつた。蟠龍も其の一人である。此の記念す可き伊能忠敬の大地圖の製圖に、漢學者が參加して居るといふ事は、歴史上、頗る興味の有る事實である。

蟠龍は、頗る多能な人であつた。書も畫も見事である。書は殊に立派だ。彫刻も篆刻も中々上手である。彼は德行の君子であると共に、才藝の人である。尤も手藝の巧みな人であつた。忠敬の製圖に就いて、細字を書き入れたものは、蟠龍であつた。時々、忠敬の地圖に序文を書いて居のるも蟠龍である。蟠龍は其の文章、文字と手藝とを以て、忠敬の製圖を助けた。忠敬の測地に就いては、蟠龍は關係無し。然れども其の製圖に就いては、逸す可らざる關係者である。

其四

伊能忠敬の西遊は、寛政五年、則ち彼は年四十九。久保木蟠龍は三十二才であつた。一行は、親族知友で、忠敬と蟠龍とは、各、一人の僕を携へた。一行主從併せて七人、忠敬を推して盟主とし、二月廿八日、吉日をトして佐原から、纜を解いて利根川を溯り江戸に向つた。蟠龍は微恙の爲に、一日後れて出發した。小網町の旅籠屋に泊つて旅行用具を取揃へて、三月四日、早曉、同行七人勇々しく西遊の途に上つた。

此の旅行は、東海道を上つて、名古屋から左轉して、伊勢參宮をして、志摩へも入り、再び轉じて、泊瀬路から大和に入り、大和巡りを試み、吉野山に登り、吉野川を降つて、高野山に登り、熊野路の探險は、忠敬の反對の爲に止めて、和歌山に出で、和歌浦を見、京阪を一見して、直ちに灘より播州路に入り、播州巡を

試み、讃岐の金毘羅に參詣するつもりであつたが、連日風濤の爲に、遂に志を果さず、引返して京阪淹留し、十分に見物して〃木曾街道を經過して信濃に出で、江戶に歸つた。往復百日許り、當時としては、中々の旅行であつた。其の間、駕輿に乘つた事も少くは無かつたが、大體に於ては、膝栗毛に鞭つて、山川を踏破した。此の旅行記に依つて見ると、隨分、氣樂な旅行であつた。扮裝も相應の威儀を有つて居る。贅澤では無いが、潤澤な旅行であつた。無用に非ず、閑散に非ず、閑日月の中に研究を含んだ自由な旅行であつた。高山彥九郎や、蒲生君平の旅行は、研究的であるけれども、金が無かつた。金は有るがツマラヌ旅行をした者は、古來無數である。伊能忠敬の如く、金もあり、日程もあり、研究もあり、趣味もあり、自由、潤澤な、旅行を爲し得た者は少かつた。彼の西遊記の興味は、是丈けの見地からでも想像する事を得ると思ふ。

忠敬は、かねて旅行の志は有つたかも知れぬが、多く旅行した人では無かつた。蟠龍も亦た嘗て遠遊した事は無い人であつた。故に、此の旅行は、忠敬及び蟠龍の爲に、生來第一の大旅行であつた。此の日記は、感興の磅礴して居るのも、一つは其の爲である。

忠敬は、此の年が、名目上、彼が酒屋の主人としての最後の年であつた。事實に於ては、此の時、既に隱居して居たのであろう。彼の前半生は、家道興隆の爲に全力を注いだのであつた。此の頃に至つて、家道は、最早、安心の出來る境遇に立ち至つたので、彼は、測地學實習の準備の爲に、旅行の途に上つた。旅行して見たら、地學は、ます〳〵面白くて堪らぬ。此に於て、彼は、斷然、隱居となつて、專ら地學に從事することゝなつた。謂はゞ此の大旅行は、地學者としての伊能忠敬の爲に、瀨踏みの旅行であつた。

其五

維新前の旅行記の中では、橘南溪の東遊記、西遊記が尤も面白いものゝ一つである。記事本末體であるが、科學的の趣味もある、民俗研究の趣味もある。此の日

記が、興味ある所以の一つは、假名交り文であるからだらうと思ふ。日本人の旅行記は、假名交り文で無ければ、文章が自由ならず、隨つて思想も十分に發表せられず、辨當の料理のような、或は儀式の料理を食うような、定まりきつた、型に篏まつた、自由も趣味も無い、面白くないものばかりである。非常の名文家といはれた人の旅行記でも、漢學者の漢文記行に、面白いもの無しと謂つても差支無い。日本人が漢文を作る事が下手であるといふばかりでは無く、元來、漢學者が、矯性、僞善の風に捕はれて居るから、面白がる可き筈の旅行記が面白く無い。漢學者の書かない漢文には往々、面白いものが有る。久保木蟠龍は、捕はれざる學者であつた。且つ此の旅行には、伊能忠敬といふ大立物が居るから、此の記行は漢文ではあるが、非常に面白い。此の意味から言ふ時は、伊能忠敬の西遊記は、漢文旅行記中に稀に見る傑作である。

併し、吾輩の想像するところでは、若し此の西游記が漢文で無く、假名交り文を以て、書かれて居たらば、其の興味は、今、一層豐富なるものであつたろう。此の漢文は頗る自由に書かれて居る。但だ假名交り文に非るが爲に、則ち漢文であるが爲に、書き度い事を書き殘したといふ缺點が有りはせぬ乎。

其六

今日より百年前の旅行記に、特色あるものが、三つあつた。其は忠敬の西遊記の外に、高山彦九郎の日記と、古川古松軒の日記とである。彦九郎の日記は全く別趣味である。古松軒は旅行家として著はれて居る。それも皆中年以後の旅行記であるが、興味よりも觀察を主として、而して興味は自から觀察の中に存して居る。古松軒と彦九郎とは、共に假名交り文を以て書いた。寛政三奇士は悉く趣味の旅行記を留めた譯では無い。若し三奇士に對して、寛政三旅行記を擇ぶ時は、忠敬と彦九郎と古松軒とが共である。彦九郎には歌あり、忠敬の西遊記には、詩も歌も無し。三つの中で滑稽が無いのは、古松軒である。則ち三人の中で、尤も

實用的、常識的の人は、古松軒であると見える。吾輩に興味を與るのは、唯だ古松軒の觀察如何を見るのである。

吾輩は、古人の旅行記を見ると、人物研究と旅行記との關係の少からざる事を思ふ。而して其の間に、また少からざる興味がある。忠敬は科學的大天才である。古松軒には、多少、文雅の面影が有るだらうと想像されるが、旅行記に依つて見ると、古松軒は沒趣味である。但し旅行記其のものは、趣味ある材料である。旅行記に現はれた。古松軒の人物には面白味が少い。忠敬は理窟詰めであるだらうと思はれるが、却つて滑稽もあり、茶目もある。百世の大科學者たる伊能忠敬先生が、思の外、茶目坊である事は、實に面白い事である。而して其の事實は、旅行記に依つて始めて見られるのである。

吾輩は、「もしほの關路」に現はれたる古松軒と、西遊記に見たる忠敬とを對照して深い興味を感ずる。古松軒の地理學といふは、譬へば本草學の如きものである。其の旅行記も全然、本草日記のようなものである。面白味は、其の雜然たる觀察に存するのである。古松軒の本草に忠敬は則ち植物學と謂ふ可きである。古松軒には好事家の面影あり、忠敬は大科學者の態度がある。若し忠敬をして自から筆を執つて、旅日記を書かしめば、全く測地學日記の如きものを作つたかも知れぬ。併し、必らず趣味ある日記で、其の簡雅なる事、或は土佐日記の面影が有つたかも知れぬと思ふ。忠敬の旅行記ではあるが、蟠龍が書いた丈け、忠敬の側面觀を書いた興味が有る。

其七

耶馬溪の洞道は、古來有名なものである。此の洞道の創成記が、古松軒の「もしほの關路」に載せてある。古松軒は大旅行家にして、耶馬溪を通過したが、耶馬溪の名は、彼に依つて著はれ無かつた。併し古松軒が書いた耶馬溪の觀察記は、頼山陽よりは遙に詳細である。此の人は、歌を詠み、また畫も描いた。風景の面白いところ、其の外いろ〳〵のスケッチを試みた。描寫は忠實である。彼が旅行家としての價値の一部の、此のスケッチにありと言ひ得る。

古松軒の說に依れば、耶馬溪の洞道を作つた人は、江戶、淺草の善海といふ回國坊主が喰ひつめて、耶馬溪に來て、羅漢寺に入り込んで、遂に、此の洞道を掘

ひ付いた。洞道は、川端の山際に道をつけ、所々を切拔いて、道とした。東の切拔凡そ百廿間ばかり、西の方は二三間。所々に明り取りの穴あり。此の善海と云ふ者、大山師の慾張り坊主にして、此所に四十年許も住して八十八歳の長壽を以て死んだ。此の洞道は、所々、勸化をして、金を集め、洞道成就の後は、人一人に二文、馬一頭に四文宛の通行税を取つた。此の善海坊は金持になつた。併し仁心毫も無く、高利貸をなし、至つて評判が惡かつた。最期に及んで、其の蓄財を、村の富豪どもに依托して置いたが、死後に、何時の間にか、其の人等の所有になつて仕舞つた。古松軒が羅漢寺に來た時は、善海坊が亡後恰も十三年くらゐであつた。羅漢寺の前の茶店で、彼は善海物語を聞いた。

吾輩が此の稿を書く時、別府の日名子太郎君が上京して、來訪して、耶馬溪の洞道の話をした。彼は、此の洞道の創成者は、彼地方では大功德者として、其の人物を追慕されて居る。此の如き慾張坊主であつたといふ事は、古松軒の旅行記に依つて始めて知つた。或は之に由つて眞事實が闡明されたのかも知れぬと言つた。或は彼の說の如く、古松軒に依つて、一部の眞實が闡明されたかも分らぬ。併し、此の如き事業家には好評と惡評と相伴ふものであるから、古松軒の記事を以て、直ちに眞實なりと斷定する譯には行かぬ。善海坊といふは、或は伊勢の月僊の如く、或る救世慈善の目的を抱いて、蓄積して居た慾張坊主であつたかも知れぬ。則ち其の慾張坊主たる所以は、大慈善家たる所以である。彼僧は大慈善の志を果さゞる中に、慾張坊主といはれて死んだ慈善坊主であるかも知れぬ。

古松軒は、北九州、殊に豐後の事は、委しく觀察して書いて居る。併し、豐後の人間に對して、彼は好感を有たなかつたらしい。態々、有心故意に、惡評をするといふ事は無い。彼には惡るく見えたのであらう。其の中に、三浦梅園の評判を書いた一條は面白い。村醫者の話を記して、此の邊に、三浦安貞といふ天文に委しい人が有つた由を書いてある。

其八

忠敬の西遊記は、眞事實の中に、自然に、滑稽がある。忠敬は、大科學者に不似合に、信仰もあり、迷信もあり、所謂大のかつぎ屋であつた。而して極めて短氣な性質であつた。故に、忠敬の旅行には、眞の、滑稽、突梯な事が多かつたらうと思ふ。彼が短急にして

精悍、而して弱兵であつて、腕力は固より少く、急坂に掛れば、一番先きに息を切らす人であるところは、如何にも關東人の面目を發揮して居る。彼は利根川兒である。利根川が嘗て産出した中の、尤も偉大なる者である。而して此の大なる利根川兒の面目は、此の西遊記に曝露されて居る。

天眞爛熳たる伊能忠敬は、西遊記に見えて居る。吾輩は、此の尊敬す可き西遊記を讀んで行く中に端無く十返舍一九の東海道膝栗毛を憶出して、ひとり微笑した事もある。忠敬が、尊號事件で東下された勅使中山、正親町二卿の西歸の行列の先驅と誤解せられて、岡崎の町外れから、度々、町役人に、お辭儀をされる。初の中は、不思議な事と思つて居たのが、後には、其と分つて、圖々しくなり、失敗した奇談などもある。これも彌次喜八が大名行列に紛れ込んだのと相似て居る。當時、中山卿の一行の中に高山彦九郎が變裝して加つて居たといふ風説が、幕末頃までも殘つた。若し果して眞なりとすれば、伊能忠敬と高山彦九郎と顏を見合せた位の事はある筈だ。併し此の説は風説丈けで、事實では無い。

忠敬は、大和巡をして、丹波市へ泊つて、試みに木賃で泊りたいと言ひ出した。宿屋の主人は抗議を申立てた。貴方がたは旅籠のお客であると言ひ立てたが、強ゐて木賃にして貰つた。蒲團代、部屋代、いろ／＼のものを拂つて、不自由を忍んで、結局、不廉な宿錢になつたといふ笑話もある。それから奈良の大佛に參詣した時、柱根の孔くゞりといふ事がある。彌次郎兵衞が潜ぐろうとして、脇差が横腹に閊へて、大困難をした柱の穴である。忠敬の僕が一寸坊であつた。其を、忠敬等が命じて穴潜りをさせた。餘り小男であるので、柱の穴の中に入つて仕舞つた。手が穴の口に屆かず、足は既に入つて居る。一寸坊が柱の中に漂うて、大聲を擧げて救を求めた。忠敬等は手を拍つて笑つた。前から引張り、後から押出したら、苦も無く出て來た。伊能忠敬は、偉大なる茶目である。

吾輩は、此の如く膝栗毛の名案が、續々、忠敬の旅行記の中にあるのを愉快と思ふ。膝栗毛は趣味の旅行記である。併し、大醇にして大疵なるものである。

(七月二十一日、風立つ日、小窓より森の梢を望めば、遠く海濤を望むが如し。)

安達謙藏論

人物評論（七十五）



▽安達の長所短所

閑々學人

安達の特色は其數理的智能にある、數理的と云へば世間の事に迂濶でありそうにも思はるれど、安達の興味は凡て政黨の懸引、選擧の勝敗如何と云ふに在れば、迂濶どころでなく餘り世事的過ぎて、世事の外少しの『ゆとり』もなきことが彼れの缺點である、彼の腦髓の働きは凡て探偵的探求的でありて、彼は政治上の日々の出來ごと、人物の出處進退等に付き常に深酷の注意を拂ひ反對黨に出だしぬかるゝ樣の

ことなきを最大の誇となすものである、彼れはどこまでも打算的であり、誠にぬけ目なき人物である、彼れ一身の去就進退より政界のかけ引に至るまで細大とも少しのぬけ目もない、彼が平素友誼を重んずる心懸あるに關はらず往々舊友等より深大の怨を買ひ天下の大薄情者と罵らるゝことあるも、ツマリ其あまり打算的にして友誼上の行爲も利害得失の範圍を脱せぬからであらう、彼に取りては善も惡も打算外の事は出來ぬであらう、其クセ安達は決して性來の惡黨に非ず、人に親切なることもあり、人の世話もする、金錢上の問題に付ても、一家生計の法はキチント立て居るけれども剛慾に金もうけを仕樣ナドの考は持たぬ樣である、其で其政敵より惡むべき姦物とせられ、その友人後輩より敬愛せられざるは必竟彼が餘りに打算的にして、少しも天眞爛熳の大樣なる所なきが爲であらう。安達が大浦と意氣投合したるは必ず其性情嗜好の似たるものあるが爲めで、其加藤と好きもまた打算的性行に於て互に相許す點多きが爲めであらう、獨り故佐々に信頼されしは佐々の大樣と安達の打算的なると長短よく相吻合したからであらう、佐々には策士と云ふ觸れ出しに似ず何となく大樣迫らざる處あり、馬鹿らしき處あり、人に騙され易き所あり、安達には少しの馬鹿らしき所なく、人に騙されぬと云ふが彼れの一大誇りであらう、是れ蓋し彼が佐々の女房役に成功し、未だに佐々に代り國士たる能はざる所以であらう。

政黨の選擧委員長として、又は官僚治下の警察總監として安達は蓋し得難き人物であらう、若しも政黨の眞の領袖となり又は大臣の椅子をも占め樣との野心あらば、尚ほ大に修養鍛錬の餘地があるであらう。

▽安達君の人物

早川鐵冶

▽我輩が安達君と知り合ひになつたのは、我輩が同志會に轉じた時からである。其以前安達君は始終政治屋になつてゐた人で、所謂大浦の直參として大浦流の肌合の男であると思つてゐた。經歴は能く知らないが別段新らしい學問を受けた人ではないやうである。尤もほんの少し許り獨逸語がやれるさうであるが、是は昔熊本に醫學校(其學校には當時獨逸人の教師が居た)があつたから安達君も或は其學校で學んだことがあるからであらうと思ふ。元來醫者にでもなる心算であつたらしいが、何時の間にか政治屋に變化して、朝鮮に王妃事件が起つた時には、連類者として廣島の牢獄に投ぜられたこともある。

▽友人の言ふ所に據ると、安達君は佐々友房の許に食客をして居て、雄本の國權黨の壯士をして居つたこともあると。佐々と云ふ男には我輩も二三回しか會つたことがないから、明確な判斷は下せないが、容貌も押立しも堂々とした東洋流の君子で、人の上に立つて行けた人物であつたやうに思はれる。然し仕事を爲る上から云へば、佐々或は安達君に及ばなかつたかも知れない。安達君はアノ通りの容貌で、人格の上から分數

すれば全然馬來人種に屬するものである。皮膚と云ひ、顔付きと云ひ、眼のぎよろつく具合と云ひ、臺灣邊りへ行くと安達君の兄弟や親類が澤山居る。そこへ行くと佐々は姪からして由緒ありげで、風采の上にも名古屋邊りの所謂上國の種らしい所が表はれてゐた。秀吉時代に肥後を亂した佐々成政が詰腹を切らされたので、其一族が舊領地に殘りて加藤や細川に仕へて家祿となつたものゝ後裔であるかも知れない。だから自ら安達君の熊襲種とは其選を異にしてゐた。加之に佐々は如才のない、人を撫けることの上手な男で、我輩が武富と親しい仲であるのを知つて、我輩の前で盛んに武富を褒める。佐々の讃辭を武富に通じてやれば、冷靜な人でも他人から褒められて惡い心持のする筈はないから、武富だつて悦ぶ。とまア言つた風の遣り方をする男であつた。安達君には此點は全然缺けて居る。然し職務には熱心で、上官の命令は忠實に馬車馬的に遵守する。此點は酷く大浦と似てゐる。陰險な所のあるのは馬來人種の特色なんだから已むを得ない。佐々には陰險な所は尠かつた。

▽今日では同志會も兎に角新勢力となつて來て、國民黨から馳せ集まつた政治家も澤山ある。此連中は皆人格の良い穩かな、而して雜誌や新聞に關係したこともあるので、文筆や口舌に一角の技術を具へた者が多い。唯惜しい哉皆事務に熱烈な所がない。安達君にはそれがある。安達君は此等の諸氏が有するものを有せず、諸氏が缺いてゐる所のものを有つてゐるのである。加之人に取入ることが極めて上手である。大浦が失脚すれば直ぐに奔つて加藤君の所へ行く。尤も國民黨の連中は皆御領袖で、孰れも加藤君よりは先輩である。加藤君が秘書官時代に既に改進黨の錚々たるものであつた。一向政權にありつかないで貧乏はしても、眞逆に加藤君の處へ頭を下げては行けるものぢやない。不肖早川だつて若槻や一木が大臣顔をしてゐる所へ、腰を屈げ辭を低ふして出入は仕兼ねる。其處へ行けば安達君などは立場が違ふ。新參ではあるし、今迄別段目星しい政治的經歷がある譯でもないのであるから、加藤君の所へ伺候するには恰度適當に出來てゐる。加藤君だつて御辭儀をされるのだから惡い心地はしなからう。加藤君には藤澤幾之助と言ふ御氣に入りがあるが、藤澤の他には信賴する程の乾兒もないから、安達君の如きでも頤使することが出來れば結構に違ひない。加ふるに安達君は前に申した通り、事務に懸けては馬車馬的に熱心な所があつて、而かも人間は冷靜と來てゐるから、加藤君の信任を博したのものである。

▽陰險は馬來人種の特色であると言つたが、安達君は蓋し此特色を多分に有つてゐる人であらう。「穢多」村時代から種々の術策を弄して人を陷れたものである。中村彌六や臼井哲夫も矢張「穢多」仲間であつたか、二人共御辭儀は下手な癖に仲々覇氣があつて、而かも安達君よりは先輩であつた。安達君は如何いふ理由からか種々の手段を講じて彼等二人を排斥した。彼等を旨く利用しやうとしないで却て排斥したのは、安達君の度量が寛濶でない事を示したものである。

▽安達君は選擧學者だと言ふ噂がある。先頃の選擧で政府の與黨が大多數を占め得たのは、一に安達君の力であると隨喜の涙を流して貰て居る

ものもある。淺學なる我輩は不幸にして未だ「選擧學」とは如何な學問であるか知らない。然しあれが安達君の力だとは思はない。一體日本の各地方警察の署長や部長程其職務に激勵するものはない。當局の命と云へば熱心忠實に遵奉して、一寸それに背戻しないやうに努力する。然かる警察の署長部長輩を、大浦の信任ある安達君が手足の如く頤使するのは、實は何んでもない日常茶飯事で、冷靜な人間で普通の判斷力が有つたなら誰にでも出來る仕事である。それを重寶がつて誇大な讃辭を奉られては、安達君も聊か恐縮するであらう。

▽同志會は今日では政界の一大勢力である。安達君も元との「穢多」組ではなくつて、堂々たる天下の大政黨員である。事によると三菱あたりが盡力して加藤君を總理大臣に押立てないとも限らない。實際今日のやうに政界に人の無い時代には、加藤君の如きでさへ總理大臣になり得るかも知れない。萬一そんな夢が實現された曉には、安達君は差詰め内務大臣に出世して、若槻の大藏大臣藤澤の遞信大臣と相並んで廟堂に立つことが出來ないものでもない。安達君たる者此際折角自重して、努力加餐して然るべきである。

▽何にしろ學問と言へば片言の獨逸語が出來る位で、旨く行けば大臣にでもなれやうと言ふのは、皆立憲政體のお蔭である。敎育が有らうが無からうが、世界の大勢に通じてゐやうが、通じてゐなからうが、そんなことは立憲政體には毫しも差支へがないのである。唯同類や乾兒の顔役となつて、黨閥の力を藉に衆愚の人望を得さへすれば、如何なる無學無能な人間でも大臣宰相になれるのが憲政の有難さである。今日現在するイカサマ大臣、變節宰相、或はせひ〲村長位しか勤まらないやうな田舍漢の、國政大臣の地位を汚すも皆是れ立憲政體が齎らした産物である。尤も是は今日に限つたことではなく、政友會の時代でも然うであつた。檢事局へ廻されたら戸籍の上へ靑印を捺されさうな文部大臣も政友會時代には居たのである。

▽我々が經營する會社で、假りに今日の大臣と呼ばれてゐる人間を雇入れるとしても、迚も支配人などには任用することは出來ない。强て使へば交際係りであるが、それですら腰の重い彼等では、若い者の力を藉りなくては滿足に勤められさうもない。そんな人間が六千萬の國民の興望を荷つて廟堂に立つて、臆面もなく國政を執る事が出來るのであるから、立憲政體程結構極まる制度はない。尤も玆に結構極まる制度と言つたのは彼等政黨者流の側から觀たので、我輩を以て觀れば憲法は十八世紀末から十九世紀に渡つて發生した政治上の疾病である。此政體によつて賢良な宰相を得、善政を布いて國家國民の利福を増進し得るものだとは、此早川鐵治には到底思へないのである。現に此黴菌を養成繁殖せしめた英吉利でさへ、今度の戰爭に遭遇して初めて憲政も亦理想的な制度でないのを自覺するやうになつたではないか。近時我政界は著るしく輕跳不眞面目の色調を帶びて、日を追ふて墮落の途を辿りつゝあるのを目しては、我輩も甚だ憂慮に堪えないものがある。故に偶々安達君の批評を徵せられたのを機として、廣く江湖の三省を促したいと思ふ。

▽算數的話振の人

田川大吉郎

◎安達氏の話振は先づ算數的と謂へやう、その流儀の中でも、特にその答へのみを語る趣がある、だから話すことが少く、短く、その話に山がなく、味が無く、艶が無い、キチンとして居て、善く分る、單に用向を語る相手としては、上乘の分である、然し乍ら永い、下らない、暇潰しの話を好む一般の流儀から言へば、不足を訴へ、不快を感じ、遂にその無愛敬を咎むるに至るも止むを得ない、現にそのやうな非難を往々聞く。

◎從來、常に蔭の人、隱れたる人として働いて來た、同志會總務といつたやうな晴の舞臺、表面の位置に立つて堂々と働くのは、今回が殆んど初めてゞ有ると謂つても可からう、曾て大同倶樂部の時代は、安達氏の名よりも寧ろ臼井氏の名が傳へられて居た、然も大同倶樂部のどこかに安達氏の潛んで居ることを誰も認めざるを得なかつた所に氏の實力があり、又、氏のやり口ありを思はれた、今日、策士一流の名を負ふて、政黨の總務なるもの、別に岡崎氏あり、氏と好乎の對照を爲す者であらう、岡崎氏の才は、安達氏のよりも浮いて居る、安達氏のは岡崎氏よりも沈んで居る、岡崎氏に逢へば、その開口の一語で、直ぐ奇才の人だと氣がつく、その容貌も種々の表情に富んで居るが、安達氏は然らず、その語に何の奇も無く、その說に何の變つた所も無く、その容貌は何等の表情をも現さない、一般的に評すれば、岡崎氏も、安達氏も陰性の人で有らうけれど、兩人だけを比較すれば、岡崎氏は陽の人で、安達氏は陰の人で有らう。

◎人を操つるの、率ゆるのと、そんなことに苦心して居る人とは思はれない、そんな風な機略はない、たゞ信ずる所を眞つ直に述べて、それに他の同意を求める、容れらるれば幸なり、容れられざるも、自家の所信は自家の所信なり、多く讓歩せず、但强ゐて衝突もせず、徐かに時の推移を待つといふ類の人らしい、あせらぬ所がある、激せぬ所がある、忍び得る所がある、桂公は曾て政治家の第一要素は忍に在りと言つたが、その忍の心得に於て、安達氏は相應深い所がある、一寸考の有るやうな顏付で、實際默々として深く考へて居るやうであるのに、時に何の考へも無いのか知らん、全く無思慮、無意見、無主張の人士と謂はるゝが如き所は、氏に於ける忍の一端である、此點から思へば、氏は自ら制し得る人とも謂はれ得る。

◎大浦子とは、多年相得て、水魚の如き間柄とさへ稱せられたが、近來、加藤子と相得て居る深さも尋常で無いらしい、加藤子と大浦子とは同型の人では無いけれど、同型らしい所も幾分か有る、加藤氏は一言にして地味の人だ、地味の人は正直な者だ、正直だから地味に爲り得る、地味で無ければ正直に爲り得ない、加藤子は自家の地味な所から、安達氏の地味な所を愛して居るので有らう、若し然りとすれば、安達氏は大浦子の下に於てよりも、加藤氏の下は於て一層働き易い所が有るで有らう、多

分、安達氏は、その生涯の中に於て今が一番働き易く感じて働きつゝあるだらう、その働きに今が一番油が乘つて居るだらう、然も加藤子と安達氏は殆んど同型の人である、若し蹶づく折が有るとすれば、兩人は相共に倒れる、兩々相助けて相支へることが殆んど出來まい、大浦子の下に於ける安達氏は必らずしも然らず、彼等は相支へることが出來た、出來たか否やは知らず、實際に於て相支へることの出來得べき性格の出合に爲つて居た。

◎元來加藤子は西洋流の人である、その意向趣致は多く西洋から得來つて居る、安達氏は寧ろ東洋風に育つた人である、而して此の如く同調の人と爲り、相得て相許しつゝある所以は安くに在るか、疑はしいと言へば疑はるゝ點も有るには有らうが、熊本には由來西洋派と東洋派と有る、神風連も此地に興り、日本基督教の一派も此地に興つた、熊本は奇體に東洋と西洋の思想の極端的に蔓延した所である、安達氏は其の間に人と爲つたので、育ちは東洋的で有つたらうけれど、その割に西洋の思想にも觸れて居る、その平生を觀るに、所謂慷慨氣を負ふて立つといふ東洋の志士的浪人風の概は少く、而して頭腦は緻密に出來て居て、話は算數的で浮かず、飛ばず、逡巡せず、そこが加藤子に相得た所以で有らう。

◎同志會にどんな理想を有たしむるか、それは加藤子の任である、安達氏の仕事で無い、同志會をどんな風に結束して往くか、それは加藤子よりも彼の任である、氏の今日ある、策に由る所少かつたと思はるゝだけ、その地歩は較々堅い、然し乍ら既に議院第一の大團體と爲つた、氏の今迄の如きやり口一點張で、これが結束して往けるものか、問題で有らう、然も第一やり損こなつた所で、氏は至誠全力を盡した、少しも油斷はし無かつたと確信をして言ふであらう、そこらに氏の面目が有るらしい。

◎毀譽褒貶を氣にするがいゝか惡いかとなれば、氣にする方がいゝと思ふ、然し乍らそれは正當な毀譽褒貶の行はるゝものとしてゞある、若しその褒貶に何等の根據なく、何か爲にする所あつて、勝手に毀譽するもので有るとすれば、多く氣にするにも及ぶまい、氣にしやうにも、氣にしやうが有るまい、安達氏も隨分毀譽褒貶の烈しい人と謂はれて居る、而して氏は一向毀譽褒貶に頓着しない方の人に數へられて居る、氏は當世の毀譽褒貶を如何に看て居るか、曾て語つたことが無いからその點に就ては知らないが、然し僕の一評語を下せば、隨分困り物である、殆んど當になる毀譽褒貶が少い、これは當世の一缺點であるとまで思ふて居る、安達氏も亦或は左樣に思ふて居るかも知れない。

▽安達總務と誰彼の比較

鐵拳禪

一

確か**肥塚龍**も新に同志會の總務になつた筈だが、同志會の總務と云へば、世間では**安達謙藏**一人のやうに思つて居る。實際今日の彼れは最早

昔日の彼れでは無く、彼れ一人で同志會を切廻りして居るやうである。公桂が同志會を創立し、子大浦兼武、男後藤新平、河野廣中、大石正巳の四常務で玄關を張つた時は、阪本金彌が幹事長で、彼れは平の幹事に過ぎなかつた。然るに、公の歿後、男後藤が飛び出し、子加藤高明が一躍總裁となり、河野及び領袖格の人物は大臣や議長となり、一再の内訌で阪本も大石も去つて了つた後は、藤澤幾之輔等第二流の人物が總務に据るやうになつた。總務は即ち創立當時の常務の名の改つたのだが、其の顔觸から云へば、貫祿も稍下つたやうに見えた。新人物と云へば新人物とも云へない事もなからうが、新人物の匂ひが稀薄で、新しい古物のやうな感があつた。然らば同志會自體が小さくなつたかと云ふに、却て所屬代議士の頭數は倍加し、黨員の數も非常に殖えた。全盛時の政友會にはまだ及ばぬが、政友會と地を換へる程の膨大を致したのである。夫れが何となく小じんまりした様な感じを與へるのは、少くとも黨中の巨材異彩と目された人物が居なくなつたからである。奥行は伸びたが、間口が一向廣くならず、玄關なども至つてお粗末で、以前の華やかさが無くなつた。客の餘り無かつたホテルが、滿員の木賃宿に變つたやうな風である。内容の充實し、統一した割合に、外觀の偉大と、美景とが失はれて了つた。其の政界の大木賃宿の主人公が、餘り人好きのせぬ加藤で大番頭が陰氣臭い安達と云ふものだから、一層同志會を暗く見せるのである。

二

同志會今日の印象は兎もあれ、總裁は子加藤で、總務が安達と云ふは、如何にも好い配合である。其の感じから云へば似た者夫婦であるが、其の性格は全く違つて居る。一は負け嫌ひな、我儘な、そして暴君的な亭主のやうだが、一は心では絶えず反抗して居ながら、何事も陰忍して圓く治め、外から指一本差させまいとする氣丈な、そして人情を嚙み分けてる世話女房のやうである。周圍者からは、奥様などと煽て上げられもせず、一向偉くも何とも見えないのであるが、何處かに確かりした所があつて、内々怖がられて居ると云ふ風である。そこで白粉をこて塗にして、拔衣紋の艶かしい容を見せ、亭主以上に評價されたいと云ふ様な虛榮もなく、唯忠實に勞役に服する、下女あがりの細君で、家政の持ち方が上手だと云ふ手腕のみが目に付くのである。然う云ふ所が、能く子大浦に似て居る。唯彼れの如く無學で、横的で無い所が優つてるだけで、其の人物は彼れよりも小さく、其の手腕は彼れよりも劣つて居るやうである。が、彼れの頭腦は、是等の劣所缺點を補つて、大浦以上の活動振を見せて居る。

彼れは同志會では、次官級の人物である。人を率ゐるよりも、事務を行るに長じて居る。曾ては外務參政官となつて加藤外相の下に働き、今又總務となつて加藤總裁を補けて居る。彼れは世話女房風であるから、暴君的の加藤とも衝突せず、其の頤使に甘んじながら、自分を立て通して、遣るだけの仕事は遣つて行くのである。其の應對も加藤の如く木で鼻を括るやうな態度をせず、成るだけ物柔かに接觸するやうに周到な注

密を働かせて居るが、夫れで居て餘りお世辭も云はず、守るべき秘密は守るのであるから、口禍を買ふやうなことは決して無いのである。こんな所が、加藤に信を得て居る點かと思ふ。

加藤は能く條理が立つて出すべき金なら出すが、筋道の立たない金は鐚一文と雖も出さない。黨人の加藤を毛嫌するのは此の點であるが、安達は流石に長い間の黨人生活で鍛へて來ただけに、金を散ずるにも餘り條理に拘泥せず、所謂親分肌を發揮する。何時も貧乏してるので、澤山出すべき金の無い所から其様な風であるのかも知れぬが、自分を率ずる事の薄い點で乾兒の信服を得て居る。子大浦の蝮のやうに嫌はれ乍ら、一部の人々に持てたのは此の點であつた。加藤は選擧費用を貸した銘々の證文などを突き付けて、高飛車に出る事もあるが、安達はそんな手段より、赤心を他の腹中に措いて、そして魅了すると云ふ靈腕を揮ふのである。

三

然らば包容力が大きいかと云ふに、決して大きいとは云へないやうである。唯毒舌を吐いたり、皮肉を言つたりしないだけに、餘り人から憎まれないが、政黨の人々は『彼れは陰險で不可い』と云つて、深く交ることを欲しないやうな傾向がある。總て親分肌があつて、乾兒を愛する者は、自分の味方を庇護する至らざるなしであるが、然らでない者に對しては、愛憎の反對に冷酷な所業を敢てするものである。子大浦は實に其の様な人で有つたが、彼れも亦何程か其の嫌ひがあるで無いかと思ふ。で、黨内には可なり信望があつても、黨外の人々に厭がられて、其の實力の割合に名聲が揚らず、從つて政界に重きを成さないのである。

彼れの黨外の人々に厭がられる原因は、も一つある。夫れは、彼れが曾て穢多村の首領で有つたと云ふ事である。穢多村とは何を指すかと云ふに、彼れの率ゐた官僚黨の大同倶樂部及び、後改め中央倶樂部の事である。彼れは殆んど十年一日の如く、此の官僚黨を率ゐて藩閥の御用を承り、他の政黨とは多くの場合逆行し來つたのであつた。それが政界から嫌はれて、穢多村など云ふ汚名を蒙つたのである。が、善かれ惡かれ、幾十かの頭數を結束して、下院の一角に據り、其の黨勢を支持して來たのは、馬鹿や惚け者では出來ない仕事である。國民黨の犬養は天下の名士となり、其の淸節を唄はれて居るが、彼れが映えれば映えるほど黨員が減ずる。今後更に大に映えるに於ては、腹心の徒僅三人になるでは無いかとの掛念もある。政界が腐敗し、黨人が餘りに物質的になつたからだと云へば、夫れ迄であるが、安達が天下の非名士を以てして、あれ程の頭數を纏めて來たのは、何處かに一種の力があると思ふ。夫れは彼れが官僚に映えもせず、噛み付きもせず、尾を俛れて默つて居たからだと云ふが、滿更其の服從の怜悧だけでも無いやうである。

四

彼れの政界に多少知られたのは、明治二十九年の頃、熊本國權黨官新

門に挙げられた時にある。其の以前は朝鮮で小新聞を經營して、怪しげな氣焔を吐いて居た。尤も佐々友房などの感化もあるであらうが、夙に志を政治の方面に向けて居た。夫の朝鮮王妃殺害事件の嫌疑を受け、諸名士の中に彼れの名も見えたので、安達謙藏は忽ち疑問の人となり、問題の人となつた。若し彼れを少してき大きく見せた抑々はと云へば、即ち此の事件なのである。けれども、彼れは事件の中心人物ではなく、寧ろ其の附錄の觀があつた。併し附錄でも何でも事件は事件であつたから、彼れも亦一廉のやりてのやうに思はれ、政界に將來ある人物として指目されたのであつた。

此の時分から大に浪人と交り、國士を以て任じて居たなら、或は穢多村などと惡口されずに濟んだかも知れぬが、何う云ふものか、彼れは柴四朗等と、河岸を換へて官僚黨となつたのである。佐々の後繼者となるには、佐々が薩軍に投じて傚諮しながら、後に長閥の品川彌二郎に降參したやうな容となつた、其の故智を學ばねばならなかつたのかも知れぬ。然うする事が彼れの政界に乘り出すに便宜て、地方的勢力を自分に集中する都合が好かつたのであらう。何と云つても、熊本は國權黨の地盤で、其の系統の者で無いと勢力を得難いのである。彼れの今日、熊本の政界に雄視し、選擧の時にも思ふ存分に猛威を揮ふことの出來るのは、全く之が爲めである。

夫れに彼れは、選擧運動に掛けては、一種の冴えた腕を持つて居る。能く各候補者の意見や、地方有志家の進言を聴いて、ちやんと一個の必勝的計畫を立て、夫れを遂行する爲めには、必勝的の一切の手段を講ずるのである。解散後の總選擧に於て、政友會の多數を打破つたのは、畢竟するに此の計畫と手段とに外ならぬのである。尤も伯大隈の人氣と、我黨内閣の威光の選擧界に影響した事勿論であるが、其の趨勢に乘じて必勝の算を立てたのは、彼れ安達と子大浦との二人者の能力に歸せざるを得ないのである。郷里に於ける彼れ自身の敗衂を見て、早くも彼れの勢力の失墜なり、策戰の拙劣なるが爲めなりと斷ずることは出來ぬ。彼れの敗衂は、確かに敗衂に相違なきも、彼れの戰友の急を救ふ爲めに、自分の投票を餘りに裂き過ぎたからである。が、自分一人落選したので他の候補者は悉く無事なるを得た。究り大局の上から見れば其の勝算は歴々たるものである。後日當選者の一人が辭したので、彼れは日比谷に其の姿を現はすことを得た。今の所、同志會では、選擧長の適任者として彼れ以外には無いやうである。

要するに、彼れは仕事師である。總務は丁度政務次官であり、幹事長は事務次官であるが、彼れは其の何れにも適する人ある。で、何か仕事の相談となると、領袖連は何でも安達君！安達君!!と、彼れを押立て、彼れを扱き使ふのである。

▽運勢より見たる安達謙藏

黒頭巾

其一

●將來の安達謙藏は如何。試に彼の運勢をトするは政壇の好話題たるを失はず。彼が今日あるを致すは、人をして、幸運の寵眷に依るを思はしむ。彼は、將來も、尙ほ能く運命の神の心を繋ぎ得るや、如何。

●今日の彼は、政壇に於ける一の立物なり。彼が、此の如く地歩を占め來れるは、專ら、同志會内閣の出現、及び其の繼續の効果に歸す可し。則ち彼は、尤も多く侯大隈に感謝す可き一人なるべし。

●若し夫れ今の内閣をして、長く繼續せしむるほど、侯大隈の聲名は、次第に削減するなる可く、安達の信望はますく〜確實なること致す可し。則ち侯大隈が全く失墜するの時、同志會に於ける安達は蔚然として其の地盤を築き成さん。春秋の筆法を以て言へば、侯大隈は身を殺して、安達を養成する者也。

●然れども一面より見れば、侯大隈が能く其の内閣を繼續するを得るは、同志會の結束に依る事少からず。而して同志會の結果には、安達の力、與つて多し。一日も長く首相たらんとするは侯大隈の志なり。則ち侯大隈こそ、却つて安達に感謝す可き第一人たらずんばあらず。

其二

●彼が肥後の國權黨の出身たるは顯著なる事實なり。彼は國權黨、帝國黨、而して大同倶樂部、中央倶樂部に到るまで、黨に變遷あり、彼の一身に變遷無し。彼は、終始、國權主義を以て立ち、其の進路は、つねに佐々友房の看板のかげに在り。

●國權黨の本尊は佐々なり。佐々の椅子に、繼いで坐する者は、國權系の牛耳を執る者なり。克堂の歿する時、安達が其の衣鉢を受るに於て、内外、些の異議無かりしを見れば、彼が、夙に、實力を占め來るを知るべし。

●畢竟、克堂は堂々たる金看板にして、安達は、金看板のかげに端坐せる巧智にして着實なる好番頭たらずんばあらざりき。天下、街頭に輝くものは金看板なり。而して其の實利、實勢を占むる者は番頭なり。

●克堂は、風采、威貌、辯說、文章、誠に金看板たるに耻ぢず。器局、必ずしも大ならず、然れども精彩あり。安達は、木綿を着て、端坐せる好番頭なりき。金看板のかげには此の好番頭あるを要す。而して洒落れず、氣取らず、專ら堅實に、青眼に構へたるは、此の好番頭、志、決して小ならず。

●安達が中央倶樂部の幹事たる時、實勢、其の掌中に在り。彼が幹事の名を以て、總理の實を擧げしは、執權の名に居りし北條氏の態度ありといふを得可し。

其三

●吾輩は、未だ安達の手を見ず。彼の將來は、須らく彼の骨相、表情に由つて、其の運勢を論ずべし。人間萬事、塞翁の馬なり、彼が今日の境遇、豫期せざるところに出づ。則ち將來の運勢、亦た逆睹す可らざるものあらん。

●試に彼の面貌を見る。眼は大ならず、鼻と口とは、人目を惹く。彼を表現するものは、鼻と口となるべし。然れども彼の眉目、決して閑却す可らず。

●彼の眉は「龍眉」に似て短かし。龍眉といへば、志大にして剛、一國の主ともなるべき相あり。然れども彼が眉の龍眉に似て、短きは、彼が素質實力を具して、執權の名に居る可き運勢を有する事を證す。彼は、將來、發展すと雖、執權たるを得策とすべし。執權は彼の運命ならずんばあらず。

●彼の眼は、虎眼に似たれども皆揚らず、稍孔雀眼に似たり、尤も多く鵜眼に似たるべし。彼の眼を見れば、其の心靜に、智慮に長ずることを意味す。

●彼の鼻は彼の面貌の中に於て、尤も力あり。「虎鼻」といふものなるべし。虎鼻といふは、統率、調和の器たる事を象徴す。中年、難關ありと雖、後年、運勢ますます開く可しといふ。安達たる者、明鏡に照らして、まさに其の鼻に對して、志を養ふ可し。

●彼の口は、龍口、或は虎口にも似たれども、口唇に脣厚きを以て、牛口とす可きものなるべし。牛口も、亦た中年多難而して前路の多幸なる可きを象徴す。

●彼の耳は、注目に値す。彼が耳根の位地、太だ低くして、遠く背の下に在り。此の骨相より推せば、彼の頭腦の容積は、案外に大きくして、彼の多智なる可きを推察するに難からず。

●彼の骨相を分解すれば、骨相に現はれたる彼は太だ可なり。必ずしも第一流者に非ずとするも、又た尋常人に秀出す。然れども其の全體を總合するときは、厚相にも非ず。威相、淸相、富相、貴相にも非ず。さればとて惡相、俗相には非ず。薄相といふほどには非るも、寧ろ孤相といふに近し。

●彼が耳、目、鼻、口の性相、秀出して、全體が却つて縮まつて孤相に近きは、太だ感興あり。此の如きは、彼が帝國黨、大同、及び中央俱樂部に於ける、寧ろ小黨割據の地位に處して、統率の責任と光榮とを完くせるを象徴す。則ち從來の、彼は秀出の骨相を以て、孤相の小黨に據りしなり。彼の居りし小黨が孤相なりしなり。

●彼の人格、閱歷は、今の彼の骨相を作成す。彼が、其の志操、見地に於て、一歩を進むる時、其の骨相も亦た一進せん。其の時に於て、吾輩、更に彼の運勢を論ずべし。(七月廿二日脫稿)

▽理想的の政黨員安達謙藏君

川尻東馬

一

▲猟官、漁利、賣名、衒氣、何事にも出娑婆る癖に氣骨もなければ確信もない、況して抱負、操守、自認、勇氣など、薬にしたくも生憎持ち合せのないのは、現今政黨員共通の個性である。上は首領株より下は陣笠連に至る迄、政黨員氣質とし云へば、直ちに任官の競爭を偲ばしめ、利權運動の暗闘を想はしむるもの、主として如上個性の發露に外ならぬが、さるにても彼等口を開けば、政權の分配、位置の移動を以て、天然の理法、國民當然の要求又權利と傲語するのである。成る程云分は洵に立派で、又理窟は夫れに相違ないが、爾も彼等の精神は其根本に於て、全然正反對の立場にあるから驚かざるを得ない。

▲政權獲得は、經綸を行ひ抱負を實にせん爲めならずして、情實を行ひ私曲を實にせんが爲めである、又位置占有は、國家を憂ひ民心を起さん爲めならずして、緣故相引き徒黨相榮えんが爲めである。敵味方に對する褒貶、總て此一點に出發し、相助け相搏つの原因、一に此見地から來るのである。故を以てか其爭ひやロに公事と云ふも、多くは事面に私事を包み、表に條理を標榜するもの、內實は殆んど不條理ならぬ事稀である。同志會、政友會、國民黨、中正會、公友俱樂部、之を組織するの分子は、比々として皆然らざるない程の實情であるが、同志會總務の安達謙藏君は、滔々たる是等政黨員氣質に對して、少なからず其選を異にして居る。是れ君の終ひに今日ある唯一の原因と云ふべきであらう。

二

▲中央俱樂部當時の君は、穢多村の組頭を以て輕蔑されたものである。大將大浦子は何時も黑幕の蔭に隱れ、佐々克堂君自ら陣頭に立つて指揮したが、居常帷幕の裏に畫策献議し、節制統率其宜しきを得せしめたものは實に君の力である。肥田景之君や柴四朗君は、如何にも先覺顏して傲然と構へ、臼井哲夫君や中村彌六君は、如何にも策士氣取で威張居つて居たが、何と云ふても實權の掌握者は君で、克堂君歿後の同派は、自然に君を眞實的中心人物と推擧する樣になつた。爾も同派は俗稱穢多村と呼ばれ、政治界に於ては一種の度外扱ひを受けつゝあつた爲め、君の眞價は少數政客間に認識さるゝ以外、殆んど之を歯牙にかけるものさへなかつたのである。

▲桂公の大傘下に新政黨を組織した當時も、首領株大浦子の陪臣格待遇を受け、下級幹部の一員たるに過ぎなかつた。無論重大黨務には何等の發言權なく、只僅かに大浦子を通じて建議し又寄與するのみの情ない境遇。從來政界に一種の對照語があつた。即ち『安ダ謙に木ノ謙』と稱され、君は木下謙次郎君と同格に待遇されたのである。從つて同志會成立の當初に於ても、木下君と同格同列の常任幹事で、少數知る人の間には氣の毒の境遇と同情を表されたが、世間一般の眼からしては、別段何の不思議もなかつたのである。

▲其後選擧部長なる幹事の上席格に進み、富田幸次郎君の遊說部長と並んで、准幹事長格の待遇を受けることゝなつたが、此頃からして漸次黨內に其眞價を認識せられ、幹部の諸先輩また君を重用する樣になつた。大隈內閣成立と共に、諸先輩多く入つて閣班に列し、自然黨務の實權は後進少壯者に移轉することゝなつたが、君總の務として新位置を得たのは、即ち此結果である。當時其出世の餘りに迅速なるに驚いた世間は、驚して政界の成金と云つたが、今となつては押しも押されもせぬ立派な

總務、同志會の重用黨務は、殆んど君一人の手に依て處理されると云ふも過言であるまい。

▲殊に君の實價眞骨頭を遺憾なく發揮したのは、昨年三月の總選擧である。畫策堅實、用意周到、加ふるに熱心摯實、殆んど寢食を忘れて黨務の擴張、與黨の勝利に沒頭し、身自ら鄕里に落選の憂き目に逢ふも毫も意に介せず、相談相手の富田幸次郎君は、二豎の冒す處となりて病床に呻吟し、本部樓上唯一人、電信電話書狀應對、大小緩急一切の黨務を一手に引き受けての奮鬪振りは、流石に黨内を擧げて感謝敬服の讃詞を呈せぬはなかつた。

▲況して大石正巳氏脫黨退隱後の不評を受けたる同志會として、又憲政擁護派の餘燼まだ全く滅せざるの際、二十年間政權に接近して決して離れたることなき大政黨政友會を向ふに廻しての大戰鬪、如何に抱負あり確信あり自認ありとは云ひ條、又政權我手にありとは申せ、其難戰苦鬪は實に外間の想像以上である。否な外間の大多數は、大敵政友會と同數の代議士を獲得せんか、是れ安達部長の大勝利であると評した程で、誰れ一人君の百五十名當選說を以て、誇大妄想觀と一笑に附さぬものはなかつた。然るに結果は案外にも政友會の大敗、所謂誇大妄想觀と冷評されたる君の確言が、事實全く的中したから世間は驚倒したのである。以來選擧博士の異名を附されることになつたが、少數黨を結束し操縱する能力伎倆を認めて、夫れ以上の實力眞價を知らざりし多數政客は、此伎倆手腕を實地に目擊して、初めて君の眞骨頭を知得諒解したのである。多數黨員の君に聽き君を憚る樣になつたのは云ふ迄もなく、殊に反對黨の君を重要視するに至つたのは、實を云へば此選擧以來の事である。

三

▲君は策士として傳へられて居るが、實は非常の訛傳である。堅忍不拔步一步進むの堅實主者義で、俗に云ふ石橋を叩いてから渡る石部金吉である。危險界には決して踏み入らず、策を弄して敵を術中に陷るが如きは、君の最も愼む處である。然るに世間之を解せず、動もすれば岡崎邦輔君流の人物と心得、訛傳は正傳となり、知らぬ者知つたが振りの岡評定、君として最も迷惑を感じて居るのは、此策士評である。君は惡名を被はされ、憎まれ役に廻ることを以て、一種の誇りとして居る、又平生自ら緣の下の力持ちを以て任じ、他人の嫌忌する難役を好んで引きけるが、只此策士評丈けは、事人格に關するといふので、流石に不平不服を云はずには居らぬ。

▲飽迄も實踐躬行主義を奉じ、虛名衒氣を嫌ふこと蛇蝎の如く、實力餘りあらざれば其位置に据らず、自信確固ならざれば其任務に與らざる底の謙抑保守的人物であるが、一旦決心して起つた以上は、如何なる困難辛苦も敢て辭さない、而して必ず最後の貫徹迄到達せねば止まぬ。即ち君の大資產は是れであるが、世間普通の政黨員氣質を水上に浮べる數とすれは、吾の特長は海上に浮ぶ氷山の如く、其大部分は沒して見えぬ處に絶大の基礎あり、實力あり眞價あるのである。あらゆる困難辛苦は之を一手に引き受け、實果功勞は成るべく之を他人に讓らんと心懸る美德大觀、吾人が理想的政黨員として君を推擧するのは、蓋し之れが爲めである。

▲入るを計つて出るを節するのは、君が處世法の根據である。自家の生計然り、政黨本部の會計然り、果ては先輩に勸め、友人に强ゆる等、此確信力行に至つては、殆んど何人も眞似るべからざる克己忍耐を以て、常に遂行を努めつゝあるのである。加藤總理は生涯借金せずとの主義を把持し、學生時代に在ても、曾て朋友知己間に一錢一厘の無心せること

ないと傳へられて居るが、君の守る處又之に合致して居るので、益々加藤子の信任厚き所以を知得することが出來る。此事に就ては嘗て中央派時代に面白い對照談がある。宛も中村彌六君が幹部の一員として、大に幅を利した時代であつたが、中村君は飽迄も借金主義の信仰者、所謂景氣の好いと稱する時分は、必ず借金の思ふ存分に出來る時で、不景氣と萎氣返る時代は、借金の少しも出來ぬ時である。然るに君は之れと正反對で、收入が減ずれば必ず支出を節約する、而して如何なる場合に際しても、絕えて借金の借の字さへも口にせぬのである。此一事如何にも能く兩君の志操性行を躍如たらしむるものであるが、君の如何に用意周到、飽迄堅實操守に專念たりしかは、此一例に依るも疑ふべからざる明瞭の事實と云はねばならぬ。

▲現に同志會本部の經濟は、君が立てたる此大體方針に依て賄はれつゝあるが、根本主義として(一)經常費を最小限に見積る事(二)臨時費も亦出來得る限り節約主義を執る事(三)在野黨在朝黨の時代に論なく、一定の見積額以上に支出額を增加し、若しくは夫れ以下に減額せざる事(四)經常費支出は少なくとも十年間大體一定の標準に據り、漫りに之れが增減を爲さゞる事(五)幹部役員の手當車代等は一切支給せざる事、是れ君が現に總務として實行しつゝあるを黨本部の會計原則である。黨の幹部會議之を議定し、加藤總理又之を承認し、今や不變不動の不文律として、之を遵守することに確定されて了つた。君常に誇つて曰く、我黨一度政權を失ひ、野黨の苦境に陷ること假令十年の長日月に達すると雖も、今日其儘の經濟狀態を持續して、決して苦情愚痴を訴ゆるが如き陋態を演ぜず、乃ち此恒心を發ひ確信を持するが故に、現に在朝黨としても決して贅費を消せず又附景氣に驕らずと。是れ時に政友會の朝黨たれば意氣軒昂、金錢を湯水の如く撒布し、一旦野黨となれば、悄然又萎微、常に愚痴苦情を訴ふるを冷笑詬罵するものである。

▲己を奉ずること極めて菲薄、他に待つこと案外寛大である。殊に其操守に至つては、所謂穢多村の組頭と稱されたる時代より、今の同志會總務たるに至る間、嘗て一度も節を變じ利に赴きたることなく、政界の有らゆる侮辱輕蔑に忍耐して、些の不平、些の嫉氣を示さず、他日の大成を期して、政界の暗室に陋居すること十有餘年、辛酸勞苦具さに嘗め盡して、今や漸く黨風身に稱ふ南撰に胡座し得る身分となつたのである。中央派由來穢多村の人非人扱ひを受けたりと雖も、朝に吳客を迎へて媚を献じ、夕に越客に接して笑を賣るの娼婦たりしとなしとは、能く同派所屬議員の政友會を輕侮罵倒した言葉であつたが、熟々我國の政黨史を稽ふるに、洵に以て此言又事實的辨疏と認むべき價値を有するのである。

▲政治界の醜聞沙汰は、由來政友會、中央派の專賣特許たる如き觀あつたが、此間に於ける君は、個人として決して其仲間入りをしなかつた。此一事は敵も味方も一樣に認むる處で、別に耳新しい話でもないが、彼の惡罵冷嘲を以て名高き犬養木堂君さへ、同じ穢多村でも熊本部落丈けは人種が違ふと許して居た程で、如何に此一點に君の信用厚いかは、多言を待たずして明かである。成る程君は入るを計つて出るを節する主義者であるから、別に私腹を肥やし贅澤を試みんとの野望もない筈で、少數黨ながら隱然中心人物を以て推舉さるゝに至つたのも、源に遡れば此私心曲事ないことが、第一の要素であつたに相違ない。

▲直情徑行、是を是とし非を非とする卒直露骨の態度は、今の政黨員としては極めて稀である。故を以てか動もすれ障笠陣の反感を買ひ、殊に壯士輩の不人望は、特に其極に達するといふも決して過言でない。爾も君は確信を直言して追從を卻け、善惡を差別して些の情實私曲を歸まざる處、是れ自分の主義なり財産なりと揚言して居る。是れが爲めには側

介と罵られ、剛岸と憎まるゝも、敢て辭する處でないと自負して居るが、此實例として彼の大隈內閣居据問題當時に面白き事實話がある。

▲加藤總理辭職を決心して、之を黨の幹部に傳へ、大隈首相居据に膺を固めて、閣僚の去就、如何に決すべきかの分岐點に迷へる當時の事、同志會に於ける最高幹部の會合は催された。黨員の多數は居据を懇望して止まぬ、是れ理義の如何よりも、黨として又個人としての利害問題である。加藤總理は理義に依て立ち、其間一切の情實利害を排して、他日政黨としての立脚地を如何にせんとするかと、堂々論ずる處方さに當るべからざる論鋒。兩々相持して降らず、內實或は分裂の危機に瀕せずやとの兆候も見えた程で、國民系舊改革派の面々中には、早く既に大石正巳氏の復活を策するものさへあつた。黨としては斯くの如き一大事を決すべき重要會議であるから、幹部の諸先輩誰れ一人として俄かに口を開くものがない。

▲即ち末座に控ひ居たる君、先づ發言を求めて曰く、總理の意見條理あり、又文明的政治家として徹底せるの行動、我々黨員として元より敬服措かざる處、而も首相の決心、其據りて來れる處を案ずるに、我々臣子として又十二分の考慮を要すべき重大問題なり。斯て兩々考察し來れば辭職せんとするの總理、留任せんとするの首相、其行動に於てこそ兩極の相違あれ、共に主義主張に殉じて個人の褒貶利害を眼中に措かざる處、明かに大なる一致點を發見するにあらずや。即ち總理、首相、各其主義主張に依りて行動すること、是れ共に全うする唯一の方法にあらずして何ぞ。若し夫れ閣僚の進退に至りては、各自其意見信念に依りて行動すべく、又黨としての態度決定は、之を黨員多數の意見に依りて採らん哉と。加藤總理此の直言に對しては頗る不興の顏色を以て迎へたが、所謂雨降りて地固まるの譬、以來其率直勇氣に感服し、依て以て信賴するに足るとの信用を高め、以前に倍する眷寵を被るに至つたと傳へられて居る。

▲長上に對する直言諫止の誠心勇氣は、今後益々其個性發揮を希望し要望するが、只下級に對する手加減を考へ、今少しく包容力の大と餘裕を存するの修養は、他日大を爲さんとする君年來の宿望を到達する上に於て、將さに大に反省熟慮すべき問題であるまいか。不愛想、鯁骨、鋭利、冷靜、如何にも個人として溫か味が乏しい、俗に云ふ取ッつき處の少ない人物である。其癖彼も能く義理人情を辨ひ、親しみ馴るれば甚だ味のある又懇切溫情を貯へたる人であるが、容貌からして脊軀長身、眼光鋭く頭髮漆黑、自信力の強烈と剛岸我慢力の旺盛は、自ら云はざるに先んじて、眉宇の間早く之を語るのであるから、自然に備はらざる人望力、人心收攬力、別して調和的一種の魔力に至つては、或は之を君に望むものゝ無理かも知れぬ。

四

▲秘密を守り、然諾を重んじ、些の輕浮虛飾なきの信用は、當代政治家として殆んど類例なき迄に云はれて居るが、中にも熱心勉強、黨務に鞅掌して絕えて倦怠の色なく、大小緩急の黨務一切を擧げて其掌中に處理して行く處、各黨各派を通じて唯一人の比敵者をも見出すことが出來ぬ其雄身體強健ならずして、寧ろ蒲柳の質と云ふを相當とすべく、只一の氣力に依りて生存し活動しまた進展して行くのである。若し夫れ黨務一切を處理するに當りては、曾て書類を用ひず、全國の黨勢分布、興廢盛衰の推移、悉く之れ頭腦の棚內に藏して絕えて記さず、一度案頭に其目すれば、北は北海道某郡の黨勢現狀より、南は琉球の政情事件に至る迄、悉く之れ眼前に開展し又徂徠するのである。此點に於ては現在の政黨員中恐らく唯一の天才家なるべく、漫りに努めて、決して眞似るべか

らざる或る魔力を有して居る。

▲何人も知る如く全くの道樂なして、偶々築地の北野屋に甘い物を食ふに出懸るのが關の山、酒は飲まず女は近けず、圍碁將棋歌舞音曲、殆んど其趣味さへも解せぬのである。忙中の少閑、古人の幅を掲げて之を賞玩し、刀劍鞘を拂つて暫らく凝視する位が、君としての唯一無二なる趣味的生活であらう。其他は年が年中黨務に盡瘁し、早朝俥を驅つて家を出づれば、夜半十二點鐘を相圖に門を入り來る迄、一日の事業は悉く是れ黨務である。故を以てか惡評者は曰く、無趣味の俗物、眼中政黨あるを知つて他事あるを知らず、其愍むべきは宛も井中の小魚に異ならずと。爾も君は此境遇に滿足し、安心して勇氣益倍蓰し來るのである。然り然らば君も亦個人としては、幸福羨望すべきの人と云ふべきであらう。

▲君が正面の敵として目指すものは原敬君である。故を以てか其人物研究に就ては、他の何人よりも餘程深甚の注意を拂ひ、又周密の考査を經て居るが、自然其人物評は、恐らく原君其人の眞人物を、最も能く解剖躍如たらしむるもの丶一つであらう。然り而して吾人を以て云はしむれば、君の人物又原君に酷似して居るものがある。原君は政黨の首領として、加藤子の敵にもあらねば又犬養君の敵でもない。個人としても政治家としても、共に一段宛下つて居ると云ふ迄もないが、其冷靜怜悧にして机上に事務を捌くの伎倆に至つては、恐らく加藤子、犬養君の共に比敵する能はざる處であらう。即ち此點に於ては原君又一個の天才として十分の價値を有するのである。

▲次に原君は無經綸の政治家である。故を以てか何時も大問題に逢着しては白紙說を主張し、進退駈引の餘地を作つて置くを例とするが、政黨を巧みに操縱して究極衝突せしめざるの妙手腕は、確かに運轉手の名人とも稱すべきである。殊に非難攻擊の焦點に立ちつ丶も、不屈不撓政黨の勢力を擴大隆盛ならしむる怪腕妙手、到底加藤子、犬養君等の脚下にも寄りつけぬ處である。此點は於て君は全く原君に酷似して居る。經綸の見るべきものなくして、爾も政黨を操縱すること巧妙、不屈不撓以て誹議不人氣の中心人物たるに甘んじ、爾も之れ又巧みに黨勢を擴張して、今や將さに其實權を把握する處、宛として西園寺總裁の帷幄內に於ける原總務の政治家振り其儘である。其他政治家として又政黨員としての性格行動、比々として其型を同うするもの數多あるが、只强て異る點を云へば、原君個人としては橫文字の智識あり又學問に富んで居る。此二事丈けは到底君の企て及ばざる處であらう。

▲斯て君の平素原君を唯一の標的として努力し奮鬪するもの、洵に其人を得たると同時に、如何にも自知の明あることを思はしむるが、是に於てか君に對する將來の疑問が生じて來る。君は徹頭徹尾、黨務上の首腦者として、他日の大成に甘んずるかどうか。現在吾人が知り得る範圍では、人間に夫れ相當の適所あり、又天分を忘れ素質を顧みざるの野望は、偶々以て自ら破滅を招致する基である位、確かに達觀自覺して居るらしく思はれるが、果して此見地からの行動に、將來共變動がないかどうか。兎角人間に自惚れは通有的のものである、殊に位置の進展向上は、次第に其人を慾に返らしむるものである。

▲原君が自ら顧らずして總裁の椅子に倚る、例令四圍の事情は已むなかりしにもせよ、其器にあらずして其重任に當る、是れ政友會の今日ある所以であるが、君にして若し今日の自覺達觀より脫出し、別段持合せなき經綸抱負を實行せんとして、志望を國務の重職に轉ぜんとするが如き事あらば、夫れこそ原君今日の醜態窮狀をも併せて酷似せしめんとし、自ら好んで陷穽に飛び込むと一般、其愚や到底及ぶべからずと云はねばならぬ。君幸にして原君を唯一の目標として戰ふ自知の明あり、他日間違つても前車の覆轍を踏むことなく、詰らぬ俗念に駈られて其晩節を汚さゞらんことを、今より切望し熱望して止まぬ次第である。至囑々々。

時勢の要求に應じたる

婦人公論

定價金廿三錢
郵税金壹錢五厘

東京本郷區西片町十
中央公論社
振替東京三十四番

愈々其特色を發揮せる八月號の壯觀

□新長編小説 捨子……森山草帝
（親の手から捨てられた可憐な女の子の運命は名人氣質の職人の手に拾ひ上げられて、數奇なる運命の幕を展開する。）

□續々カチユーシヤの話…島村抱月

□容貌美の普及…湯原元一

□一家和合の秘訣…鳩山春子

□女は弱者でない…澤柳博士

□夏の女の裝ひ…遠藤波津子

□主婦の家庭衛生の知識缺乏……吉岡女醫

□アメリカから歸つて……中原信子

□グラットストン夫人……矢野良曉

長編小説

□若妻（愈々佳境）長田幹彦

□役者の妻…鈴木秋風

□ヒステリーの話…福來博士

□若い女の墮落の徑路…山室軍平

□蟲の聲…西村醉夢

□關西の女…田村俊子

短篇小説

□金魚……近松秋江

□お政……岩野清子

□妖怪變化夜話……井上博士

□大正新女大學……安部磯雄

□職業調べ藝妓……一記者

□夏の富士登山……日向欣子

□新長編小説 兩國の秋……岡本綺堂
（蛇つかひの女役者が身に蛇のやうにまつはる戀のいきさつは濃艷凄艷の限を盡して讀者を惱殺せずんば已まざるべし）

杉村楚人冠先生序
大庭柯公先生序
與次郎先生跋
岡本一平畫伯裝

大窪逸人著

最新刊

幽靈探訪

四六判洋裝
正價金五拾五錢
送料金六錢

◎盆祭の記念出版◎

▼墓場＝華魁の精靈と某歩兵大佐の瓢

▽奇蹟＝一富豪邸の奥に行はれし印度古教の奇蹟とF博士の解決？

▲女難＝戀と死と生者と精靈との情話

△男難＝肅親王の王冠にありし金剛石と葭町藝者と蒙古獨立の陰謀

▲離房＝離座敷の幽女と船長の妻の死

◎著者採訪の收獲◎

遲塚麗水先生著　代田收二氏裝幀

紀行文集 **旅かゞみ**

正價五十錢
送料金六錢

貞野他見男著

十版 **大學出の兵隊さん** 價參拾五錢 送料四錢

七版 **女學校出の花嫁さん** 價四十錢 送料四錢

(中附二の三)

◎發行所　東京日本橋區鐵砲町　振替壹五〇五六番　磯部甲陽堂◎

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京醫科大學教授醫學博士

長井潛先生著

◎燦然として學界を照らす不朽の名著

人性論

定價二圓三十錢

千里の馬は常にあれども伯樂は常にあらず。偉大なる問題は隨所に横はつて居るが、併し此の問題に滿足すべき解決を下し得る人は極めて尠い。『人とは何ぞ』是れ實に人間が有てる最も偉大にして又最も興味ある問題であるが、而も之に對して一指を染むべき資格ある人は甚だ罕である。吾人は現代に於て其の第一人を求めて之を著者に得た。著者は實に

醫學を修めて生理學を專攻し、而して生物學人類學哲學文學美學に於て造詣する所淺からざる人で、眞に此の千里の馬を相すべき好箇の伯樂である。曰く地球上第一の人曰く人類の搖籃曰く男性美と女性美曰く手と人生曰く右利左利の研究曰く力士の研究曰く色彩と人生曰く何、是れ皆此の伯樂が冀北の野を過ぎて齎らし歸つた獲物であつて、燦爛として此の人性論の内容を飾つてゐる。

郵税十二錢菊判總布函入
寫眞挿繪其他七十枚入

再版

哲學と文藝

◎定價一圓二十錢郵税八錢◎四六判總布函入

帝大教授文學博士桑木嚴翼先生傑著

著者の舊著時代と哲學、性格と哲學、現代の價値等に續いて著者最近の思想を説いたもので、著者自らは之を以て全然遊戲文學に過ぎぬと謙遜して居るが、著者が寓目寓感の事に即して、半面哲學的にして半面文藝的にものせる筆の跡は實に深遠な意義を有して居る。形式は遊戲であらうが、内容は遊戲所ではない。哲學者に考量を要する問題のみである。（太陽評）

東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社出版部　振替口座東京三二六番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付二の四）

評論

内外時事評論

法學博士　古川學人

新日露協約の眞價

一

日露の接近は歐洲の戰爭以來掩ふべからざる事實となつた。兩國が何等かの形に於て其親近の事實を表はすべきことは、久しく世上の問題であつた。現に我中央公論も去年の十月、此問題に關して諸家の意見を徵したことがある。斯く久しく世上の問題となつて居つた兩國親近の關係は、本年七月三日に至り、所謂「日露協約」の締結によつて、いよ〳〵具體的の形式を採り、其正文は八日午後外務省から公表せられた。

日露協約

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ、極東ニ於ケル恒久ノ平和ヲ維持セムカ爲協力スルコトニ決シ、左ノ如ク約定セリ。

第一條

日本國ハ露西亞國ニ對抗スル何等政治上ノ協定、又ハ聯合ノ當事國トナラサルヘシ。

露西亞國ハ日本國ニ對抗スル何等政事上ノ協定、又ハ聯合ノ當事國トナラサルヘシ。

第二條

兩締約國ノ一方ニ依リ承認セラレタル他ノ一方ノ極東ニ於ケル領土權又ハ特殊利益が侵迫セラルルニ至リタルトキハ、日本國及露西亞國ハ其ノ權利及利益ノ擁護防衞ノ爲、相互ノ支持又ハ協力ヲ目的トシテ執ルヘキ措置ニ付協議スヘシ。

右證據トシテ下名ハ各其政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協約ニ署名調印ス。

大正五年七月三日即露曆千九百十六年六月二十日

彼得具羅土ニ於テ本書ヲ作ル

本野一郎

サゾーノフ

之によつて見れば、此協約の骨子となるものは、次の二大綱目である。

第一、日露兩國は其極東に於て有する相互の領土權又は特殊利益を互に擁護防衛する事。尤も細かく言へば、之には次の四つの條件がある。一つは其擁護防衛せらるべき權利利益は、極東に於て存在するものでなければならぬ事である。從つて歐羅巴露西亞に於ける、若くは極東以外の露領亞細亞地方に於けるものは、本協約の問題とするところではない。二には擁護防衛せらるべき權利利益は、日露兩國の相互に承認せるものでなければならぬ事である。たゞ如何なる權利利益を以て「承認せられたるもの」と認むべきやは、自ら一個の別問題である。三には擁護防衛義務の發生は、權利利益の侵迫せられたる場合に限る事である。四には擁護防衛の方法は相互の支持又は協力を目的として、協議上適當の措置をとるといふことである。故に必ずしも常に直に兵力的援助をするといふ譯ではない。之れ自ら本協約が同盟條約と異るところである。

第二、日露兩國は互に相敵對する政治的協定又は聯合を作らざる事。敵對的協定又は聯合の對手方が、極東に在ると否とは問ふところではない。故に例へば、日本は如何なる國とも、露西亞に對抗する意味の約束を結ぶことは出來ない。其國が東洋にあると、西洋にあるとを問はないのである。もと此協約の目的は極東に於ける恒久の平和を維持するに在るといふのであるけれども、第一條は一般的に敵對的聯合の禁止を宣明して居るから、假令歐羅巴に於ける露西亞の勢力に對抗する意味の聯合と雖も、日本は之に加入することは出來ないのである。

二

今度の此の協約に拘らず、一般に日露の和親を現實にし又は鞏固にすべき「協約」の締結が、今日の場合彼我兩國にとつて頗る時宜に適し又必要でもあることは言ふ迄もない。日露兩國は、曩に一九〇七年七月卅日及び一九一〇年七月四日を以て、已に二回の協約を取

結んだ。和親の實は已に之を以て明白に擧つて居るのではあるけれども、更に今度第三の協約を締結したといふことは、決して屋上屋を架する類のものではない。先づ露西亞の側より之を觀るに、第一露西亞が獨逸と最後まで戰はんとするの決心ある以上、彼は到底日本を無視することが出來ない。世人或は露西亞の有力なる階級の間には獨逸と單獨講和をなさんとするの風潮旺なりと說くものあり、之によつて往々露西亞には獨逸と最後まで戰ふの決心がないだらうなどゝ推定するものがあるが、之は斷じて誤りである。なぜならば、成る程上流社會の一部には親獨的傾向も一種大なる潛勢力を持つて居ないではないが、併し一般多數人民の間には專ら排獨的敵愾心が旺盛を極めて居る。戰爭の進行と共に段々下層階級の勢力の張つて來る露西亞に於て、此對獨逸敵愾心といふものを無視することは殆んど不可能である。況んや有力なる階級が全部親獨的傾向を有すといふ能はざるに於てをや。故に予は露西亞には必ず最後まで獨逸と戰はんとするの決心あるに相違ないと斷ずるのである。露獨兩國の遠き將來を推斷して、同盟を以て兩者の必然的運命なりと論ずるの說には、予も亦一應の道理ありと認めざるにあらざるも、近き將來に於て、少くとも今次の戰爭の結末を問題とする時期に於て、露獨の可能的接近を說くのは、事餘りに早計である。兎に角予は露西亞に最後まで獨逸と戰ふの決心ありと觀る。而して此決心ある以上は、彼は到底日本の好意を無視することは出來ない筈である。なぜなれば、日本は露西亞の態度次第で、共有力なる味方となり、又は最も恐るべき敵ともなる地位にあるからである。次に更に之に關聯して考ふべきは、今日國運を賭して戰つて居る露西亞にとつては、少くとも日本から後ろを覘はれざるの必要があり、更に出來得べくんば、日本より各般の助力を得るの必要がある。之れ現に今日日露兩國の實現して居るところの關係であるが、此關係が今度の第三の協約によつて、更に紙上の約束として明白にされたといふことは、露西亞にとつて決して無意義な事ではない。

獨り露西亞にとつて許りでなく、日本にとつても亦同様のことが言へる。それは日本も今次の歐洲大亂に參加した以上、戰爭の目的を十分に達せしむるを共利益とし、而して其爲めには露國の軍容をして堅實ならしめ、露國の民心をして安心せしむることが必要であるからである。今度の協約の內容たる事柄は、紙に書かなくとも、已に兩國の間に實現されて居つたと言へばさうも言へるけれども、之を紙の上に書き表はすと否とは、露國民心を安んぜしむる上に、非常な效果があることと思ふ。其上此協約は他方に於て極東に於ける日本の特別の地位を確定するといふ效力をも有するものである。元來極東に於ける帝國發展の前途を安らかにする爲めには、日露の隔意なき了解といふことが甚だ必要である。而して從來は、兎角兩國の間は隔意なき了解を披き合ふといふ程までに、十分に接近して居つたとは云ひ難い。爲めに時に依つて双方遺憾に感じた點も多少あつたが、それは今度の協約の結果として取り去られた。少くとも取り去られるの端緒を開いた。更にもう一つ考ふべきことは、今日我國の露西亞と結ぶの結果は、一部の人の杞憂する露獨の接近を絶對に妨ぐるの效果を齎らすことである。從來露獨の接近は、露の極東に於ける跳梁を來たし、常に我國を苦しめる原因となつて居つた。東洋の平和と露獨の接近とは、動もすれば兩立しない關係に在つた。從つて今度の協約が、露獨の接近を絶對に妨げ、少くとも日本の意に反して露の獨に接近するを妨ぐることを得るならば、日露協約の締結は、確かに帝國外交の立場から見ても、近來の成功と言つてよろしい。

三

然し今度の協約が果してどれ丈けの功果を實際に齎らすかは、更らに精密に其內容に立ち入つて研究しなければ解らない。此事を吟味するに際して、我々の第一着に注意しなければならぬ點は、此協約で協定した事柄は、之を「確定の效力を有するもの」と、「未確定の效力を有するもの」との、二種類に分たねばならぬ

といふことである。第一の確定の效力を有する事柄といふのは、日露兩國が互に反對聯合に加はらざることと、イザといふ場合には互に支持協力するといふことの二點である。此事は協約で明確に決められて居る。條約文面の解釋によつて、伸縮するの餘地がない。之れ予が之を稱して、確定の效力ある事柄といふ所以である。今此確定の效力ある事柄について、此協約の齎らすところ如何を見るに、今度の約束は即ち日露兩國提携して互に極東問題の解決に對する主人公たるの地位を確保し、第三者の干渉に對しては儼然たる態度を執るといふ決心を示すものであつて、從つて又自ら第三者をして極東問題に對する日露兩國の特殊地位を確認せしめんと擬するものである。日露兩國が極東に於て特殊の地位を有するとの爭ふべからざる以上、此事實を確定ならしむるを目的とするところの本協約は、固より我國に重大なる利益を提供するものと言つて差支はない。第二に未確定の效力を有する事柄と言ふのは、兩國が相互に其特殊利益幷に權利を保護すべしといふこと、及び其保護の方法については協議の上適當な措置を取るべしといふことと之れである。即ち本協約は他の一面に於て、相互の權利利益を互に擁護防衛すると言うて居る。けれども其保護せらるべき權利々益の種類及び範圍如何については何等言及して居ない。又協助の爲め執るべき措置につきては篤と協議するというて居るけれども、果して如何なる方法が協議の結果として執らるべきかは、全然協約の關知するところではない。是れ予が之を稱して未確定の效力を有する事柄といひし所以である。凡そ日露兩國にとつて最も肝腎な問題は、兩國のどれ丈けの權利々益が保護せらるゝか、又如何なる方法によつて協助の實が擧げらるゝかである。此事は元より豫め明確に極められない事柄でもあらう。兎に角條約の上では明かに極められて居ない。故に將來に於て、條約文面の解釋上伸縮自在如何樣にもなる所のものである。解釋の仕樣によつては、之が非常に活用せらるゝこともあれば、又全く空文に終らしめらるゝ場合もないではない。故に此の所

謂未確定の效力を有する事柄について、本協約が果してどれ丈けの利益を我々に持ち來たすやは、約束の文面丈けで斷定することは出來ない。日露兩國の利害關係が極東に於て極めて錯綜して居る丈け、此點は將來大に注目を要することゝ思ふ。

右述ぶるが如く、新日露協約は確に最近に於ける日露親和の徴表であり、又益々兩國の接近を深からしむる動因ともなるものには相違ない。けれども之が運用の如何によつては協約に依つて達せんと欲したる目的を十分に貫くことも出來れば、又然らざる結果を見ることにもなる。從つて今度の協約が事實如何なる效果を日露兩國の將來の關係の上に生ずるかは、豫め今より之を推測することは出來ない。ツマリ今度の協約は兩國和親の形式を定めたものである。其內容は今後兩國の臣民幷に當局の努力に依つて充實して行かなければならぬ。尤も從來とても和親の實が多少でもあつたからこそ今度の協約も出來たのではあるが、併しこの和親の實は今後猶大に開拓するの餘地はある。此開拓を怠つては、折角協約で何や彼や取り極めても、兩國で事實上大した意味を之に附せぬことゝなる。この點に關して吾人の幸に思ふことは此協約に附隨して更に各種の別約――東清鐵道一切の讓與、松花江航行の自由、滿蒙租借地に於ける相互の居住移轉の自由、ハルビン其他の露國側重要都市に於ける日本郵便局設置の認許等に關して――が兩國政府の間に取り結ばれたといふ說である。果して此風說が眞ならば我々は之によつて早く〻露西亞が如何に誠意を以て本協約の趣旨を觀て居るかを推測することが出來るのである。從つて我々は今日已に夫の所謂「未不確定の效力を有する事柄」についても、他日問題が起つた場合に露西亞は必ずや寬大なる解釋をとるであらうと想像することが出來る。果して然らば此協約は、日露の親善を全うし兼ねて日本の利益を增進する上に於て、先づ大體に於て遺憾なきに近いといつても差支はあるまい。

四

終りに日露協約の成立に對する二三外國の態度を考へて見よう。

日露協約の公表と共に、敵國側が直に之に水をさし殊に之を以て日英兩國離間の道具となさんと試みたことは怪むに足らない。英佛等の聯合諸國は之に反して何れも歡迎の辭を述べた。之も亦當然なことである。併しながら本協約が專ら日露兩國の極東に於ける特殊利權の確保を目的とする丈け、東洋に大なる利害關係を有する英國などが初め大に猜疑の眼を以て締約の交渉を傍視したことは、亦已むを得ない。帝國外務省が發表せしめたと見るべき都下の各新聞紙所載に係る協約締結顛末の報告の中には「不幸にして交渉事情外間に漏洩し、行惱を生じたるも、露國皇帝の聖斷とサゾノフ氏の盡力とにより、交渉僅かに進捗するを得たり云々」とある。之れ丈けでは固より何處と指して言ふことは出來ないけれども、吾人をして一讀忽ち英國邊の故障を意味するのではあるまいかと思はしむる。日露協約の如きが、固より英佛に無相談で結ばるべきでないことは、論を待たない。けれども餘程話の進行する迄は嚴重なる秘密の中に交渉を取運んだやうであるから、途中外部に漏洩して爲めに第三國の故障を招いだといふことも、强ち根據なき想像でもあるまい。

一體英國に限らず概して支那に重大なる政事上又は經濟上の利害關係を有する國が日露協約の締結を快しとしないのは當然の事である。英國は勿論であるが、米國の如きでも、彼等は皆極東＝殊に支那＝を以て列國共同の競爭地域となし、獨り日露兩國に對してのみ其特殊地位を認めてやらねばならぬ義理はないと考へて居る。少くとも彼等は兩國の特殊地位を認むることを欲しない。或は勢の迫る所幾分之を認めざるを得ざる事情に立ち至つても、其特殊地位なるものは出來る丈け之を制限して解釋せんと欲して居る。然るに本協約は、日露兩國が自ら堂々と極東に於ける其特殊の地位を宣明する者であり、且漠然宣明した特殊地位なるものを他の第三國をして亦承認せしめんとするものであるから、他の第三國の内心之を喜ばないのは當然で

ある。無論外交的辭令の上に於ては、或は日英同盟と相伴つて東洋の平和を確保するものだとか、或は日英同盟の目的とする所を猶一層強く裏書するものだとか贅澤な言葉を飾り立てゝ居るけれども、事實を如實に見るを職とする我々の耳には、此等の辭令は却つて僞善者の聲の如くに響くのである。流石に亞米利加は此點について無遠慮なる言論を弄んで居るやうだ。英と米とは此問題に就ては其所見を異にして居る筈はないと思ふのである。

英米兩國が日露兩國と對等の地歩に於て亦極東に特殊の地位を有すと自信して居るならば其妄謬なることは無論であるが彼等の言ひ分が假りに消極的に日露兩國の特殊地位そのものを否認せんとするに在りとするも、そは甚だ無理である。我々が極東に於ける特殊地位を主張するのは、英が印度洋に於て、米が中南米大陸に於て特殊地位を主張すると同じ意味に於て正當である。利害の打算上彼等が强て之を認めざらんとするのは穩當でない。少くとも公平でない。從來我々は餘りに自己の特殊地位の擁護開拓を等閑に附した。今頃急に騒ぎ出して圖らず他國の故障を招くのであるが、併し正當の立場を主張するのだから何も遠慮する必要はない。どんなに嫌がられても、事情の許す限り、力の及ぶ限り、どん／＼進んで構はない。たゞ正當の範圍を踏みはづさなければよい。孤立の日本は、從來餘りに此の點については、第三國に遠慮し過ぎて居つた。對支外交の不振の原因は一つには慥にこゝにある。今や我等は露國に提携することになつて、茲に大に內心に强みを感ずることゝなつた。今後は大に活躍して事實の上に、英米をして其妄を悟らしめ吾人の立場を承認せしむべきである。

然し又一方から考へれば、日露兩國は共に理論上極東に於て特殊の地位を有せしに拘らず、前述の如く從來其實をあらはす爲めの努力が甚だ足らなかつた。彼等は餘りに放抛に過ぎた。否、久しく無爲に終つた。されぱこそ、どん／＼英米の侵略を受けたのである。從つて我々は又一面に於て多年奮鬪の功を積んだ英米

に對して餘り大きな顏の出來ぬ義理もある。玆に於て我々は英米等をして心から吾人の特殊地位を確認せしめんと欲せば、今後大に活動努力して理論上に於て有する我々の特殊地位を事實の上に適確に把持することを心懸けねばならぬ。或意味に於ては我々の特殊地位なるものは仍未だ十分出來上つた形態を得て居ないともいへるのである。ソコで眞に我々が極東に於て確實なる特殊の地位を占めんとせば、今日以後我々大に之を開拓せなければならぬといふ譯になる。從來の如く、政治家も實業家も、無爲放擲の狀態に甘んずるのでは、我等の所謂特殊地位は、遂に永遠に空文に終らざるを得ないであらう。

協約の公表に對して支那が例により著しく神經を惱ましたことも亦怪しむに足らぬところである。日露の接近は、支那にとつて常に一大警報である。隣邦の二强を爭はしむることによつて始めて自國の安全を贏ち得べしとするのは、支那在來の政策であつた。偶々兩國相接近するの報に接すれば、彼等は忽ち隣强提携の手は必ずや滿蒙割取の暴擧となりて現はるゝだらうと迷信する。斯くて彼等は從來日露の協約に畏怖の念を抱き、其說の行はるゝ每に所謂風聲鶴唳の慄きを感じて居つた。本年一月露國一太公殿下の來朝當時既に支那の民心は疑心暗鬼を描いて少らず動搖したのであつた。殊に今度は、表向き發表になつた協約の外に、日本の特殊地位を獨り滿蒙のみに限らず支那全體に亘つて之を認め、而かも其全體に亘つての日本の自由行動を露國が承認するといふ意味の密約が結ばれたといふ風說があつたので、更に甚く神經を惱ましたやうである。斯かる風說を流布するに至らしめたるは確に當局の一大失態である。嚴重に之を責めなければならない。さらでも神經過敏なる支那の民心を之によつて更に大に激動せしめたことは、日支の親善をどれ丈け妨げたか解らない。幸にして目下の支那は南北妥協の混亂の最中であるが故に、案外に此事が矢釜しい問題とはならないけれども、平時であつたならば、或は再びボイコットなどの口實となつたかも解らない。然しこんな

風說が無かつたとしても、何の道、日露接近の報が到底支那をして不安を感ぜしめずして了らざることは、今日のところ殘念ながら止むを得ない。又實の所公平にいへば、日本の極東に於ける活躍に對して支那に安心して居れといふのは無理である。それでも强て支那に心を安じて貰ふ必要ありといふならば、第一に我々は我々の活躍をして常に合理的且道義的ならしむることを忘らず、第二に我々は更に退いて日支兩國民の根本的親善關係を開拓するを心懸けなければならぬ。而して日支兩國民の根本的親善は、兩國民が近來の如く專ら政治關係の方面に於てのみ交涉するのでは到底期せられない。政治的には此兩國は大體に於て利害の一致不一致相半ばする間柄にある。故に此兩國は更に一段と步を進めて、高尙なる精神的方面に於て交涉提携するの途を拓かなければならぬ。之等の點に就ては予輩に別に一個の意見あるけれども問題外なれば今は述べぬ。只東洋全體の平和の爲めに活用さるべき筈の日露協約の締結が、不幸にして支那から餘り快く思はれないのを遺憾とする旨を述べて玆に此稿を結ぶ事とする。

大隈首相挂冠の風說

大隈首相が何時骸骨を乞ふべきかは、久しい間の懸案であつた。單獨で辭職をするか、他の閣僚を率ゐて總辭職をするかは別問題として、兎に角其辭職は久しい間待ち設けられた所で、四月の本誌に於ても已に一たび「後繼內閣の詮議」を論じたことすらある。然し辭職の風說は其聲のみ徒に高くして、而してその實は今日まで更に現はれて居ない。然るに此風說は七月四日の『時事新報』が、六月二十三四日の頃を以て首相が闕下に伏して辭意を內奏したといふ報道を公にするに及んで、再びまた新らしき政界の問題となつた。而して此風說は、今度こそは本當だらうと一時相當に信ぜられたやうだ。貴族院の一部と先きに辭職の公約ありしといふやうな事、最近工場法に關する問題などについ

て政府に對する樞密院邊の通りが極めて惡いといふこと、又日露協約も出來上り閣員はそれ〳〵厚き恩賞を蒙つて、所謂功成り名遂げ、頽齢の首相としては正に引退すべき好時機に際して居るといふこと、之等の事情をいろ〳〵並べ來ると、辭職の風說は强ち根據のないことでもなかりさうに思はるゝ。之に加ふるに、例年のことゝはいひながら、七月五日寺內伯の入京したといふ事實は、其前後に於ける鎌倉の松方侯、小田原の山縣公と、東京なる宮中方面との再三の交涉、更に附け加へては西園寺侯の入京等の事實と相合して、著しくまた夫の風說を色づけた。六月卅日の新聞が、大隈內閣の瓦解後に於ける四分五裂を豫想し、豫め結束を固うするの目的を以て、公友俱樂部が新たに政黨組織を企て、其首領たるべき候補者を物色しつゝありといふ報道を傳へたるも亦、後に至つて遡つて政變の發生をいよ〳〵信ぜしむる原因となつた。

然しながら今日に至つて見れば、どうも之は眞に一片の風說に止まるものらしいやうだ。必ずしも江木內閣書記官長の打消を盲信するのではないけれども、いろ〳〵の點から觀て風說の根據が疑はるゝ。第一に內奏の事實があつたとしても、斯の如きはもと容易に外間に洩るゝ筈のものではない。外部に洩るゝ位のものであるならば、政變の端緒は夙に開かれて居ねばならぬ。して見ればあの風說は何人かの捏造に出てたものであらう。無論大隈首相に適當の時機を見て引退せんとするの考あることは疑あるまい。けれども昨今急に政變の發生を見ることとなかるべきは、其後の政界が極めて安穩なるに見ても解かる。加ふるに大隈首相が止めるとしても誰が其後を襲ふべきかについては、今日の政界に於て丸で見極めがついて居ないではないか。後繼內閣の組織者の見極めがつかずしては、現內閣の瓦解といふことは容易に之を見ることは出來まい。そこで予輩の考では或は今度も亦暫くは居据りに終はるのではあるまいかとも思はるゝ。我國今日の狀態から判斷して、予は斯く考ふるを以て寧ろ當然とすべきであると思ふのである。なぜなれば、今日苟くも政界の

實權を握るには、第一に衆議院の多數の勢力を左右し得るものでなければならず、又第二には之と同時に貴族院樞密院方面に通りのよいものでなければならぬ。然るに今日此兩樣の資格を兼ぬるものは我國に殆んどない。所謂元老軍閥乃至官僚系のものは、或は第二の資格を備へ居らんも、第一の資格は殆んど全く之を備へて居ない。從來彼等は情意投合などゝ稱して利益を以て政黨の節操を弄び辛うじて第一の資格を作つて居つたけれども、今日の政黨は最早桂公時代の政友會の如きものではない。已に時勢は一變した。之れ今日寺内内閣の將に成らんとして成らざる所以であらう。蓋し伯は今日大隈侯の下に屬する政黨的勢力の援助なくしては、到底政府に立つことは出來ない。併し若し同志會の如きが、妥協の途によつて寺内伯を援けようといふなら、寺内伯の大隈侯に代るは、何等桂公の西園寺侯に代れると異るところはない。併し今日は最早彼の時に比すれば、正に十年の進歩を遂げて居る。背水の陣を布いて潔く討死するの覺悟あるにあらずしては、寺内伯は容易に政界に乘り出すことは出來ないのである。然らば第一の資格を有するものにして、更に幾分第二の資格を兼ぬるものありやといふに、是れ亦極めて其人を見出し難い。併しそれにしても、今日は從來桂公などに見たるが如く、第二の資格を本來に有する人にして、兼ねて曲りなりに第一の資格を有し得るものが政界に立つといふ時代は過ぎて、第一の資格を本來に有して、而かもどうかこうか第二の點を纒め得るやうな人が、政權を握るといふ時代になつた。此意味に於て大隈侯は、今日のところ、天下獨自の資格を備へてゐる。侯を措いて之に類する人を他に求め得ざる以上、こゝ暫くは容易に政變の實現する氣遣はない。政變のあるべきが如くにして之なき所以は、茲にある。

政變の容易に起るべからざるの理は、即ち上述の如しとして、只兎に角大隈内閣の存續に對して、民心の一般に自ら倦怠の情を抱くに至りしこと丈けは、何人も之を認めざるものはなからう。此點は一見眞に平凡の事實の如くして、實は我々立憲政治の運用と、其運

歩とを心にかけ居る者にとつては餘程面白く觀らるゝのである。大隈內閣の何時如何にして倒るゝかは、固より一個重大の問題たるを失はぬも、然し玆に今更之を仰々しく論ずるのは政論として餘りに月並に過ぐる。予は寧ろ、成立後二年有餘の歲月を經て民心漸く大隈內閣に倦まんとするの活現象の裡に、一個重要なる憲政上の一原則の潜在するを看て、多少の興味を感ずるものである。

一體民心は何故に現內閣に倦いたか。或人は言ふ。『大隈內閣は重要なる軍國政府として餘りに貧弱に過ぐる』と又或人は言ふ。『大隈內閣には何等の經綸がない』と。又他の人は言ふ。『大隈內閣は內政外交上幾多の失政を重ねた』と。併し此等の點のみが民心倦怠を來たした根本の原因であらうか。大隈內閣を單獨にとつて之を檢するならば、以上の非難も敢て失當ではない。然し從來の諸內閣に比較して之を論ずるならば、大隈內閣のみ獨り此等の批難を蒙るべき謂れはない。或は、公平に謂つたら、近來の內閣中比較的に良い方といふべきものかも知れない。當初の放言に似ず餘りに元老に賴り過ぐるの難を除いては、予一個としては寧ろ相當に大隈內閣をほめてやりたい。大隈侯自ら時々民望未だ我を去らずと傲語するとの事であるが、一部の民間には慥に之と響應するものがある。故を以て大隈內閣を難ずるに以上の理由を以てするは理論上必ずしも失當に非ざるも、國民は此等の難あるを識りて而して大隈內閣に倦めりと斷ずるは果して事の眞相を得て居るや否や。却つて或は大隈內閣に厭きたるが故に、國民中此等の非難を高調するものを見ると解すべきではあるまいか。何れにしても疑のない點は、兎に角民心は今や變調の來るを歡び迎へんと欲するの情に充ちて居る一事である。何となく古きを厭ふて時々面目の一新を喜ぶといふ人情は、もと〳〵我々の常に認むるところである。想つた程の結構な內閣でなかつたといふ感情も一つの原因ではあらうが、兎に角二年餘りの長い間民心を驚倒する樣な破天荒の仕事も爲ないのだから、自然飽きられたのであらう。民心の倦怠と

いふものは實に不思議な作用をするものである。同じやうな主義政見を抱きながら、先年西園寺侯と桂公とが時々交代せねばならなかつたのも、畢竟此理を以て說明すべきものである。

一體民心の倦怠といふことは、一見甚だ平凡の事なるも、實は政權移動の問題の上に非常な重要の關係を有つて居るものである。然しながら、單純に民心の倦怠が自然と政變を促すものであるといつただけでは、所謂民心の政治に及ぼす影響は極めて偶發的なもので丸で道理を外づれて盲動するものであるかのやうに聞える。ところが事實は必ずしもさうではなく、民心の單調を欲せず時々變を思ふといふことは、不思議にもまた期せずして變調の起らざるべからざる自然の必要に巧に應ずることのあるものである。恰かも旱にあつて雨を呼び、雨を過ぎて天日の輝くを見るが如く、民心の變と自然の必要とは巧に相遭遇して以て社會風潮の凝滞を疏通すること其妙實に言ふべからざるものがある。

之を個人に譬ふるに、健全なる身體と健全なる精神を養ふことは、最も卑近なる意味に於て、我々の生活の理想である。西歐の諺に『健全なる精神は健全なる身體に宿る』といふけれども、然し實際上兩者の完全なる併進は、容易に之を見ることが出來ない。從つて實際の修養方法としては、交代的に時に專ら身體の修養を計る必要あり、時に專ら精神的修養を計る必要がある。併し事實上多くの場合に於て、意識して兩者の方法を適當に交代せしむるといふ人は極めて稀で、不思議にも單調を厭ふといふ倦怠の情が自然と働いて以て、兩者の適當なる交代を事實上に現はすといふのが多くの人の常態である。此不思議なる作用の行はれずして、餘りに長く一方の修養にのみ耽ける人は、身體的に若くは精神的に健全なる人ではない。國家の生活も亦稍々之に類するものがある。之を其內外兩面の生活といふ側より見れば、時として內的充實を專ら計るべき必要ある事あり、又時として外的發展を專ら心懸くべき必要のある事がある。又之を國家的制度の運用

の側から見ても、其制度を益々堅め、少くとも其組織を維持保全するといふ必要のあることがあり、又は從來の組織を打破して、一新生面を開くの必要を見ることがある。此等の必要はもと相伴つて行はるゝことによつて絶對的の價値を有するものにして、その一方を單獨に引き離しては、一時國家の益をなしても間もなく又弊害を生ずる性質のものである。從つて例へば保守的乃至帝國主義的の政治の後には、自由的乃至社會政策的の政治の行はれ、又自由的社會政策的政治の後が、保守的帝國主義的政治に依つて適當に繼承さるゝといふやうなことが極めて必要である。然れども此繼任交代は、之をその時その時の局に當る政治家の意識的道理心に訴へて之を實現せしむるといふことは絶對に不可能である。故に此事は已むなく他の力によりて强迫的に行はるゝことにならねばならぬ。然らば如何にして此事は行はるゝのであるかといふに昔時に在つては此繼任交代といふ事を來さしむるものは政治家の政權爭奪といふ野望であつた。今日の立憲政治の時代に於ては、所謂「民心の變遷」が實に右の必要を來さしむべき唯一ならざるも少くとも最も重大なる原因となつた。

　但し此所謂「民心の變遷」は、必ずしも自然の要求と相伴ふと限るものではない。尤も普通の場合をいへば自然の要求と民心の變遷とは相伴ふものが當然であると云へやう。けれども不健全なる社會に於ては、兩者の關係が合理的に現出せない場合が少くない。抑々民心の倦怠と之によりて生ずる政治上の變動とは、今日の時勢に於ても之れを避くることは出來ない。只其變遷の頻繁に生起するは、國家にとつて喜ぶべき事に非ざるが故に、局に當るの政治家は、鋭意國の爲めに計つて自家の政府の永續を計らざるべからざるも、併しそれにしても、長い中には民心をして倦ましむるに至るのは止むを得ない。而して之を止むを得ずとすれば、我々は努めて其變遷の發生をして合理的ならしめなければならぬ。何故なれば民心の變が合理的に起らざれば、之に促さるゝ政界の變動は適切に自然の要求と合

致しない事になるからである。然るに顧みて我國の狀態を見るに、我國には其れの合理的發現を妨ぐる原因が頗る多い。是れ、我々の常に遺憾とするところである。此點よりして予輩は多年、一方に於ては上流識者の進んで民間に接觸し、平素民心の開拓を計られんことを希望し、他方に於ては政黨內閣制度の政治上に於ける確立を主張し、速に二大黨派相交代して國政に當るの慣行を樹てんことを主張して來た。未だ十分に識者の了解を得ざる樣であるが、今度圖らず大隈首相桂冠の風說を耳にして再び此事に想ひ及んだ。說いて精ならざる點は更に他日の詳論に讓る事にしよう。

元老官僚閥と黨人との調和

前項にも說いた通り、最近に於ける日本政界の最大の難關は、元老官僚閥と黨人との不調和である。此不調和あるが故に、現に大隈內閣を倒してもつと有力なる內閣を作りたいと云ふ一般の希望があつても、それが容易に出來ないのである。大隈內閣を存續せしむべきや否やは、今予の問題とする所ではない。暫く之に代ふるに他のものを以てする必要ありとして、さて其必要に應ずることが出來ないとあつては、何と云つても國家の不幸である。黨人は政界に於ける過半の實力を占めて居る。而かも貴族院や樞密院と云ふ辛うじて制度上の保護に活くる惰力的階級をば未だ十分に壓倒し得ない。又貴族院や樞密院に據る所の所謂元老官僚閥は、言はゞ空名に誇るの徒で固より政界に何等確實なる根據を有するものではないから、單獨の力で天下を取るとは出來ない。一方が他方を壓倒吸收して仕舞はない以上、今日のところ兩方を股に懸けて確實鞏固なる內閣を組織するといふ事は何人に取つても困難である。それも兩者の結托が出來ればいゝが、今日の所では甚だ覺束ない。況んや政治的智見の進めば進む程、主義に於て根本的に相容れざる兩者の結托は益々困難になるべきに於てをや。かくて此結托が出來ないとすれば、內閣の交替即ち政權の變轉といふ事は、我國に於て常に政界の一大難問でなければならない。困難であるから、今の所、現に變るべくして變らずに過して居るが、それでも、どうでも斯うでも內閣が變らねばならぬと云ふ破目になつたなら如何するであらうか。假りに大隈侯の一身に絕對に政務を執る能はざる事故が起つたとして、是非とも何人かを其後任に据ゑねば

ならぬといふ急迫な問題が起つたならどうするであらうか。急迫の場合だけに漫然として時を空過することを許さない。察する所此場合には後繼者を定むる爲めに例の如く先づ元老會議の開催を見るであらう。併し乍らかね〴〵不評判の元老會議は、其會を重ぬるに從ひ、段々民間に對する權威を減ずべきは自明の理である。衆議院に於ける大多數の勢力も、何時までも〳〵其決議に盲從することは肯ぜまい。衆議院に於て兎ヶ角も多數の後援を得る見込が立たなければ、假令元老會議全體の推薦があつたとしても、誰が之に應じて內閣組織の大任を拜受するだらうか。斯うなれば遂には畏れ多いが宮中の御勢力を籍らなければ政局の紛糾を收拾することが出來ぬといふことになるかも知れない。斯くて一時を糊塗し得んも、國家永遠の立場から觀て、不祥此上もないことは言ふをまたぬ。

此際に政黨嫌ひの人は人材內閣といふことを說く。然し人材內閣と云ふ事は、有力なる政黨の存在して居る以上は決してりあ得ざる制度である。尤も今度の戰爭で、歐羅巴の諸國は普ねく各派第一流の人材を網羅して所謂擧國一致內閣を作つて居る。皮相の觀察者中には之を見て今度の戰爭は政黨政治に終りを告げしめたと說き、政黨內閣の如きは戰後には其跡を絕つだらうなどと豫言するものがある。然し之は斷じて誤りである。元來政爭の題目は特に內政上の問題に多いものである。外戰の際には內政上特に爭ふべき題目は極めて少い。且戰時非常の時機に際しては人皆固より小異を捨てゝ大同に合するの必要を意識して居るから、擧國一致內閣も特例として發生するを得るのである。只夫れ之は特例である。亂定らば再び常態に復りて舊の如く政黨對抗の狀態に戾るべきこと一點の疑はない。殊に戰後に於ては對內的經營といふ事が政界に於ける主要の問題たるべきが故に、それ丈け政黨間の論爭討議の題目が多くなる。政黨對峙の形勢は益盛とならざるを得ない。若し戰爭の結果として政黨政治の上に何等かの影響を殘すものありとせば、そは却て所謂無用の黨爭を事とするの愚を深く經驗せしめ、大問題に就ては正々堂々と爭ふといふ眞面目なる態度を益々發揚せしむるといふことにあらねばならぬ。故に一般の抽象的原則として人材內閣說を唱ふるは恐らく戰後の事實に吻合しまいと思ふ。尤も政黨の發達の後れて居る國に於ては、官僚系に屬する人材が內閣を作り。巧に黨人を操縱して政界の疏通を見ることはある。けれども如斯は十年前の日

本はイザ知らず今後恐らくは再び來るとはあるまい。

一體人材内閣などゝいふ説の起る一つの原因は、政黨其の物が未だ十分に信用されて居ないと云ふ點にも存する。我國の諸政黨は、概して之を言ふに、如何に贔負眼に見ても、十分なる國民の尊敬信頼に値しない、之には固より種々の原因があり、一々之を列擧するの遑がない。然し茲に一つ疑のない點は、政黨をして斯くの如き狀態に陷らしめたについては、元老官僚閥も亦其責の一半を分たねばならぬと云ふことである。政黨の醜穢なる腐敗は常に官僚閥の誘致操縱に基くといふことは、各國の歴史に通有なる現象である如く、又我國に於ても當て嵌まる事實である。加之假りに一歩を讓り、此種の操縱誘拐といふ事が幸にして我國になかつたとしても、元老官僚閥が從來其制度上の特權を利用し、政黨者流に對して陰險にして而かも鋭烈なる反抗を試みた事は、如何に黨人の良心を鈍らし、彼等の行動を不公明ならしめたか分らない。最近の一例を以て之を云はんに、選擧法改正の問題に關して多年擴張論を主張し來りし同志會が最近急に豹變して「擴張は我黨の宿論に非ず」などゝ、變説したのは即ち之が爲めではあるまいか。彼等は選擧權の擴張が到底樞密院貴族院邊の容るゝ所とならざるを知つて居る。彼等は貴族院樞密院の反對の陰密にして而かも極めて痛烈なることを知つてゐる。從つて彼等は之を選擧法改正案中より故らに除外せる内務省の方針を諒としたのである。若し貴樞兩院の反對が公然と堂々と唱へらるゝものならば、彼等は何も變節の譏を受けてかねての宿論を撤回するの必要はない。自らまた堂々と國民に訴へて勝負の決を貴樞兩院に決すればよい。この男らしい態度に出でぬのは、彼等の無氣力といふよりも寧ろ貴樞兩院の陰險なる反抗を恐れたる結果である。斯う云ふ例は外にも多い。現内閣も頻りに不眞面目無責任の咎を以て隨分世間の批難を受けて居るが、元を洗へば之れ亦貴族院樞密院邊の陰險なる反對に遠慮して其所信を貫徹し得ざるの結果である。所信に忠實ならずとして政府黨人にも責むべきものあるは言ふを待たぬ。然し政府又は政黨としては、年來の主張なればとて、更に其實現の見込なきに拘はらず濫りに之を曝け出したがらないのも又一面の理窟はある。

政黨政治を憲政に必然伴ふものとする論者に取つては、政黨を何處までも改善して十分國民の尊敬信頼に値するものたらしむることは、何より大事な急務であ

る。之が爲には固より政黨其物の側に反省を求むべき點は少からずある。けれども又元老官僚閥に向つて希望すべき事も極めて多い。此點に關し當今我國の時勢に取つて予輩の最も必要とするもの三つある。

第一は元老官僚のもつと謙遜なる態度を執られたきことである。彼等は一般に時勢の變遷に眼を開いて多數の意見を聽容するといふ謙讓の德を缺いて居る。彼等はもと皆新日本の建設に盡力したる當年の志士である。彼等が死生の間に奔走するに依て得たる經驗は、固より極めて尊いものである。然れども彼等の自ら識らざるべからざるは、即ち時勢に變遷のある事である。今日の世に處するに當つて彼等が仍ほ古き自己の經驗に執着し、甚しきは之を以て他人へ强いんとするならば、是れ固陋頑迷の甚しきものである。誰しも自分の通つて成功して來た途が一番いゝと思ふものである。かの有名なるビスマルクですら、餘りに自己の經驗に執着して新時代の要求を十分に看取することを得なかつた。爲めに若きカイゼルより弊履の如く捨てられた事は、今日顧みて我々の彼の爲めに大に遺憾とする所である。故に經驗練達の士にして尙國家の進運を妨げざらんとせば、ワシントンの如く國事を靑年に托して全く隱遁するか、又は多數の意見に耳を傾けて動もすれば頑(かたくな)ならんとする自己の聰明を絕えず怠らずして開拓すべきである。日本の老人は、エライ人程傲慢になり、自分の肝煎つたものは、何時迄も我物顏をして世話を燒きたがる。其熱心は誠に敬服に堪えないけれども、國家は之によつて少からず進步を妨げられる事がある。元老官僚の輩が自分の見識を以て黨人のそれよりも著るしく優等なりとするの態度は我々から觀て寧ろ滑稽に思はるゝ。

第二に予輩は元老官僚に社會的奮鬪を要求したい。彼等が多數の意見に對して起す所の不滿を好んで洩らす場所は、常に必らず貴族院か樞密院かである。玆處で孤鼠々々と文句をいふのみで、決して天下に向つて堂々と口舌文筆の論陣を張つたことはない。從て彼等の言動は一般社會とは殆んど沒交涉である。之は社會の爲めにもならず、又彼等自身の爲めにも取らざる所である。固より彼等は制度の上に於て樞密院若くは貴族院に於て大に多數の意見又は政府の方針に反抗するの權能を與へられて居る。樞密院又は貴族院に於て痛激なる反對を多數の思想に加ふるといふ事は、必ずしも常に惡いとは云はぬが、唯德義上彼等に反省して貰

ひたい事は、法律上彼等に與へられたる地位は、自ら彼等一人の意見に附與するに天下萬人の意見を覆し得るの効力を以てすることである。從て彼等は、一人の意見を以て他の一人に對するが如き單純なる考を以て輕々にその法律上の權能を行使すべきではない。反對の意見を述ぶるは毫も差支ないが、唯反對の權利を行使する事は實に非常なる道德的責任を伴ふものなる事を覺悟して貰ひたいのである。我樞密院の諸卿は果して斯くの如き重大なる責任を感じつゝ其權能を行使して居るだらうか。若し此覺悟を缺いてその權能を漫然として行使するならば、そは少くも道德上特權の濫用である。故に予輩の考ふる所では、法律上の權能の問題は暫く之を措き、政治道德の問題としては、反對の權利は容易に之を行使すべきものではない、假令之を行使しても他の一方に於て必ず其所信を一般國民に訴ふるの何等かの手段をとり、即ち國民の輿論と云ふ舞臺に上つて大に反對者と議論を鬪はし、國民をして結局の判定をなさしむべきであると思ふ。曾つて特惠關税主義を取つて閣僚多數の同意を得ざりし老チエンバレーンは、斷然冠を挂けて全國を行脚して所信を一般人民に訴へんと決心した。去年夏佛國視察の途上に病沒したロバーツ元帥の如きも亦、徴兵制度の論を以て國民の確信を動さんと欲し、南船北馬席の暖まるを知らなかつたといふ。斯くして初めて政界の長老は、社會に對し又其身に受くる所の特權に對し、道德上完全に其職責を果したものといはるゝ事が出來る。此點に於て我國の元老は餘りに君國の恩寵に狎れ、而かも之が爲めに如何に政界の圓滿なる發展を妨げて居るかに氣のつかないのは我々の甚だ遺憾とする所である。

第三に予輩は第二の方法を採るを以て迂遠なりとするものに向つて、或は自ら發起して一黨を樹て、或は政見の異同に從て既成政黨に加入すべき事を勸めたい國家の元勳の社會に對する勸めは、第一には國民一般の精神的指導者たるにある。此事は必ずしも政治に直接關係しなくとも出來る。然し若し進んで國家の運命を直接に支配するの活動をなさんと欲するならば、彼等は須らく憲政普通の政治系統に入るのが最も可い。之には政黨に加はるの外に適當な途はない。元老貴族の一部の人が、自ら皇室の藩屛と稱して政黨に加入すべからざる特別の義務あるかの如くに考へて居るのは一般人民を以て君主に敵對する勢力なりと見たる昔の謬見に基くものである。(六月十五日)

●山岳研究の第一人者小島烏水先生著

（定價金壹圓…）小包料金八錢

縮刷 日本山水論

三五判總六號振假名附
總紙數五百五十頁箱入
平福百穗畫伯意匠裝釘
口繪コロタイプ刷八葉
口繪石版數度刷三葉入

著者が多年の經驗と蘊蓄とを傾盡し、巧に科學と文學とを連接渾一して一大文章をなせるもの實に本書也。其文、華麗莊重多趣暢達、亂山曲水描きて神に入らざるなく、斜風細雨叙して奇を盡さざる莫し。時や將に三伏溽の暑、試に一書を樹下涼榻に繙かん乎、萬斛の清風腑下に湧き、千山萬水髣髴として眼前に徂徠するの想あらん、眞に是銷夏最良の書也。

銷暑清觀

田山花袋先生著

縮刷 草枕旅姿

再版

細木原畫伯口繪及意匠ポイント活字總紙數五百頁總洋布綴箱入三色版口繪‖（金壹圓送料八錢）‖

故國木田獨歩氏著

縮刷 欺かざるの記

三版

杉浦非水畫伯裝釘ポイント活字紙數七百頁總洋布綴箱入著者肖像口繪‖（壹圓廿錢送料金八錢）‖

（中付三の二）

發兌元 東京京橋南鍋町一 振替東京八五三番 隆文館圖書株式會社

涼味滿幅の八月號

早稻田文學

見よ充實せる其内容

定價廿八錢 郵税一錢五厘（半年分倍號郵税共貳圓貳十錢 一年分倍號郵税共四圓廿四錢）

▲民衆藝術の意義及び價値……本間久雄

▲武藏野の人々とその事業……白石實三

▲島崎藤村氏を訪ふ……中村星湖

▲故上田敏君に就て……馬場孤蝶

▲『婦人運動』序論……原田實

▲社會救濟者としてのアナトオル・フランス……花園緑人

▲或月の或日である……五十嵐力

田園と都市の問題

安部磯雄 大野樂舟 長谷川天溪 大山郁夫 岡田信一郎

■小説 馬鞭草……上司小劍

■小説『あゝ暑い』……水谷巖

■小説 歸り途……藤田美廣

■梅雨前後（歌）……相馬御風

詩歌七篇（貴重、德、米二、清 蛙二、規矩治、花外）

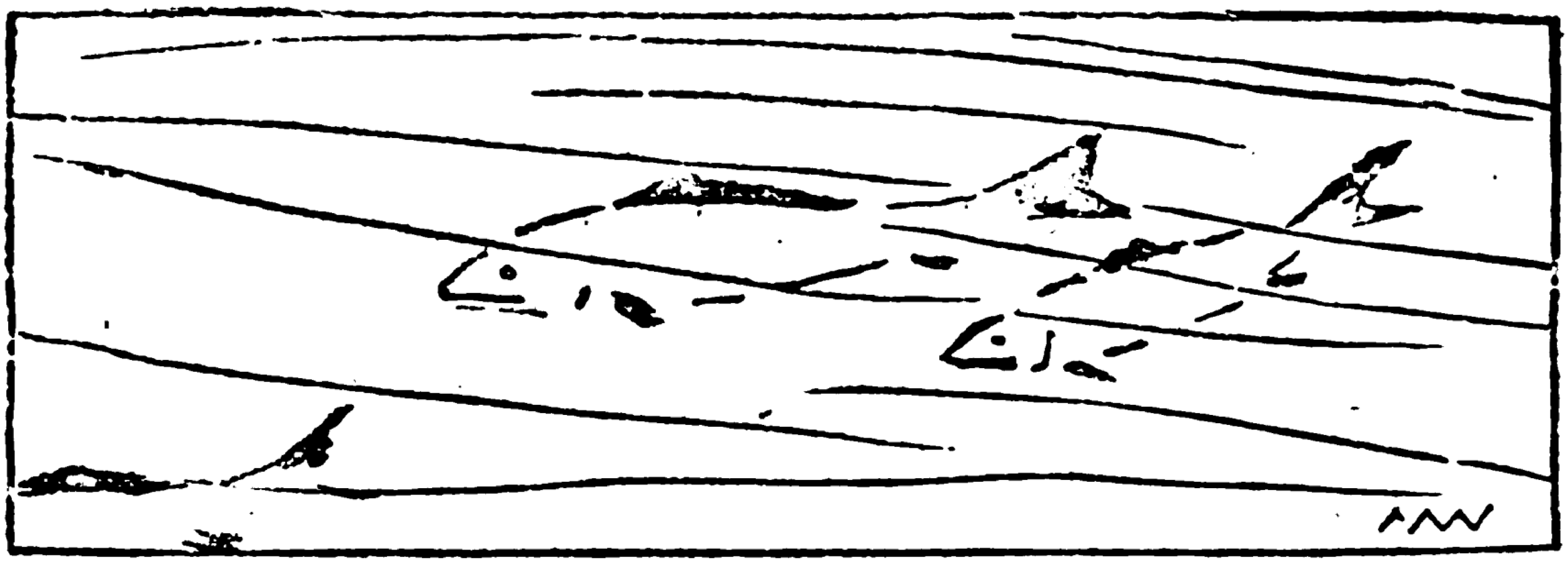
最近思潮

〔外國の部〕
愛蘭の愛國詩人
男女生存年限の差異
トルストイアン下獄事件
美術家の新保護策
逝けるダヴヰス氏

〔日本の部〕
發賣禁止に就て
我國の美學界の近狀
藝術座の「闇の力」
現代印度の繪畫
七月の文壇

發行所 東京市神田區表神保町 振替口座東京二七〇番 合資會社 東京堂

（中付三の四）



四條河原

近松秋江

表座敷の方では知らした妓が後からあとから入つて來ると思はれて、階段を踏む足音とゝもにさや／＼と衣摺れの音がして

「姐さんこつちやどすか。」

「今晩は、おほきに。」

などゝいふ柔かい聲が聞えて、つゞいて賑かな笑ひ聲が響いてくる。

中川は、板の間一つを境にしたすぐ奥の座敷で聞くともなしに隣座敷の陽氣なさゞめきをきゝながら唯一人しよんぼりとしてもう二時間近くも馴染の女妓のところから確かな返辭の來るのを待ちわびてゐた。

餘處の座敷が面白さうに騒いでゐるのを聞くにつけても焦悶かしさは格別に募つて、今までに幾度となく思ひ返へして見た厭な疑惑や邪推が、ちび／＼と傾けてゐる酒の醉ひとゝもにまたしてもむら／＼と頭を擡げてくる。そして胸を蝕

ひやうな頼りない感情ばかりが無暗に先走つて、深い淵の底にでも滅入つてゆくやうな寂しい不安に襲はれた。

先刻から待つてゐるとはいひながら、實はもう昨日の午過ぎから掛けてゐるので、その時都合よく體があいてゐたらお茶屋の女將と三人で嵯峨へゆくつもりで暫く返辭のあるのを待つてゐたけれど、屋形からは、

「きし子はん、おほかた寄せてもらはるには、よせてもらはゝりますやろけど、今留守どすさかひ會ひにいてますよつて、後ほど此方からお返辭いたします。」

とばかり、何度急いても同じ挨拶なので、

「ほんなら、あんたはん一と足先きいとくれやす。きし子はん來やはりましたら、私達二人あとからいきます。」女將がさういふので、彼は、

「ぢや、さうしませう。日暮れ方の嵯峨野の春景色を見たいから。」

といつて一人でさきへ嵯峨まで遠出をしたのであつた。そしてある旅舘にいつて仲居を相手に二人の來るのを今かいまかと待つてゐたけれど、二度までも京都へ電話をかけて見たがやつぱり同じやうな返辭で電車の刻限を過ぎても到頭女は顔を見せなかつた。尤もきし子に逢ふのは今日に限つたことでもない、この間東京から來るとすぐ逢つてゐるので、本當ならもう逢はなくつても可いのだが、何だかまだ聞き殘してゐることがあるやうな氣がするので、も一度何處か人氣離れたところにいつてしんみりと彼女の本心を確めてゆきたいと思つてそれで嵯峨を選んだのであつた。

「たうとう來やはらしまへなあ。」仲居が慰め顏にいふのを、

「なに、來ない方が却つて氣樂です。かうしてお春さんと、この靜かな嵯峨の夜さへあれば何物も欲しくない。」

「おゝ、おゝ。」

で、明日になつたら何とかいつて來るであらうと、その夜は諦めてゆつくり腰を落着けてお春が敷いてくれた寢床に一人樂寢の夢を結び、翌日は朝食を濟ますと嵐山から大悲閣の方までも上つてみたりして時を過して返辭のあるのを待つてゐたが午を過ぎても京都からは何のたよりもなかつた。彼は終に待ちあぐねてまた京都へ舞ひ戻つてきたのである。

それはいつも忙しい體であるのは知れてゐるが、この間別れる時ちよつとでもいゝからも一度逢つてゆくといつて置いたうへに、つい四日前にも電話を掛けたら機よくうちに居合して自分で電話に出たから、

「二十四日にはかならず知らすから。」

といふと、

「ほんならその時電話をかけとくれやす。」

といつて、承知してゐる筈である。その二十四日は昨日である。本人が眞實その氣でゐるならば、どんなに都合しても來られるわけである。それにかうして昨日からもう何十度となく急いてゐるのにいつも同じ挨拶ばかりで一向確かな返辭のないのは女の心の冷熱も大抵察しられる。彼はさう思つて幾度とな

く放擲けるやうに諦めても見たが、それでもまた思ひ直して、自分はたとひその氣でゐても、どうしてもはづすことの出來ぬ場合もあるのだからと、焦だつ心をじつと抑へて待つてゐるのである。

そこへ女衆のおつるが忙しさうに襖をあけて閾のそばに膝をつきながら、

「ほんまにお氣の毒さんどす。今きし子さんのおうちから電話が掛つて來まして、屋形から向のお茶屋さんに逢ひにゆきたら、少し前お客さんにつれられて大阪へいかはりましたさかい、今日はお斷りいたします。こない云はるのどすせ。」

彼はそれをきくと、さつと顏を曇らして、

「大阪へいつた?!」と、いつたきり、あと暫くは口も利かなかつたが、

「ちや、本人の耳には此方のことが入つてゐるのだらうねえ。」

「おほかたさうどすやろ。」

「昨日から知らして、今まで此方を引附けておきながら今になつてまた大阪にいたからお斷りするといふのは、まるで人を愚弄にしてゐるやうなものだ。ねえお鶴さん。」

「ほんまにお氣の毒さんどす。」

中川はそれをきくともうそこに座つてはゐられなくなつた。そして帳場のところへ降りて來た。

「ほんまにあこの屋形くらゐ怪體なうちおへんなあ。一體どないしたんどすやろ。」

おかみもあまりのことに怒ることも出來ず呆れたやうな顏をして中川の顏を見てゐた。きし子が何か中川を好かぬと思ふことがあるのか、それともまた自分の家がこんなお茶屋だから向の屋形であなづつ

てそれでこんな勝手なことをいはれるのかいふ疑念も主婦としては持つても見た。
「どうも大阪にいつたといふのは本當ぢやないなあ。おかみさんあなたどう思ひます。」
「私もさう思ひます。嘘どすやろ。」
と考へるやうにしてゐたが「一遍ほかの家の名で掛けて見まへう。」
といつて、おつるを呼んで親類つゞきになつてゐるお茶屋の名を用ゐて知らして見た。すると、
「畏りました。すぐ寄せてもらひます。」
といふ確かな返辭があつた。
「まあ、どうどす。ほかの家から知らすとあんなことをいふて返辭しよる。大阪へいたなんて嘘のこつちや。ちやんと家にゐるのにあんなことをいひよる。」
さういつて、またおつるに言ひ付けて、今名を借りたお茶屋の方へ電話を掛けて、譯を話してきし子が來たらそのまゝ留めておいてこちらへ知らしてくれるやうに賴んだ。
「おかみさん併しすぐ寄せてもらひますといふのも好い加減な嘘ですよ。本當に來やしない。あれがあその家の癖ですもの。」
「さうどすやろか。」
「見てゐて御覽なさい、來やしませんから。とにかく私手紙を一つ書かう。」
さういつて中川は、この間からかた〴〵二十四日を約束しておいたのにそれを違へたことのうらみやら、自分は今晩か明日は必ず立つて東へかへらねばならぬ。此度はもうこれ限り逢へないかも知れぬ、

逢はぬ方が自分にとつては結局幸福かも知れぬ。たよりのない薄情な京女はこれかぎり思ひ切る。といふやうなことを走り書きにして、表書には女の姓のつゞきに以つていつてうそつき様と附け加へた。

「お鶴さん度々すまないが、一つこれを持つていつて下さい。」

おつるはそれを持つて出ていつたが間もなく息を切らして駛つて戻つてきた。

「おかあはん、今きし子はんに途中で會ひました……あゝしんど。」おつるは笑ひながら苦しさうに脇腹を抱えて切ながつてゐる。

「どこで會ふたんや。」

「今そこの切通しのとこで苧姆と一緒に四條の通りを向へ越してゆくとこで會ひました。おほかた内の母家へお花にいかはりますとこどすやろ。私此方からゆきますと、きし子はんによう似た人が向へいかはると思ふてそつちい急いでいてよう見るときし子はんどしたから「きし子はん」いひましたらはつと乾驚りして此方向かはりました。はあしんど。」

「そうら大阪へいつたといふのはやつぱし嘘だつた。」中川も長火鉢の傍に寄つてきて口を出した。

「えゝ嘘や。ほてどういふた。」

「ほして、苧姆が付いてゐましたよつて、ちよつと脇呼んで今あんたはんのとこへ中川さんのお手紙持つてきますとこどすいひましたら「これからお花にいた先きから中川さんのところへ電話を掛けやうとおもふてゐたとこどす。」いふてはりました。ほて手紙は途中できし子はんに會ふたいはんゝ屋形へ持つていとおいておくれやすいはりましたさかい向へ持つてゆきました。私、屋形の女衆に今そこできし子

はんに會ひましたえいふてやりましたら、女衆「へえッ」いふてゐました。きし子はんに會ふたから早う内かへつてさういはう思ふて急いだもんやから、あゝ切な。」

おつるは息を切らして話した。

おかみは、お鶴の話すのをじつと聽いてから、

「何をいふてんのや。昨日からも、せんど電話をかけさしてしまひになつて大阪へいきましたいふておいてその通りや。こつちやから掛けたとは知らずに母家へお花にいきよる。おつるどんついでに母家にいて、お君どんにさういふとき。」

「うまく此方の手に乘つたな。」

中川は、きし子が大阪にいつたといふのは嘘でやつぱり京都にゐて、しかも此方から掛けたお花で母家へ來る途中でゐるといふのをきいてもう蘇つたやうな氣持ちになつた。そして逢つたら何といつてやらうかと考へてゐた。さうするとまたその後からすぐ杞憂が湧いて起つて今おつるが會つたお花にゆく途中といふのは、こちらに來るのではなくつて何處かほかへ行くのではなかつたかといふやうにも思はれて來た。

「おつるどん、あんたそしてお花にゆく先はどこかつて訊かなかつたかね。」

「そら訊かしまへんけどこれから、お花にゆくとこどす、いはゝりましたから大方母家どすやろ。」

「おかみさん、さうでせうか。」

「さあ、大抵こつちやどすやろ。すぐ寄せてもらひますいふ返辭やつたなあお鶴どん。」

「へえ、さうどした。」

「ちやおつるどん、も一遍御苦勞ついでに早く母家にいつてきて頂戴。」

「いてなあ、あんた屋形の芋姆に會ふたらあかんえ、そつとお君どんを蔭に呼んでお君どんにようい ふてきし子はんと一緒に連れならときい。」

おかみはさういつておつるを出してやつた。

中川がきし子と初めて知つたのは丁度去年の今時分であつた。彼女は藝といつては舞ひがいくらかまへるくらゐのもので、三味線などもあまり彈けず、話しの少い座敷の面白くない女であつたが、中川は饒舌で上つ調子の女の多い京都の女の中に無愛相といつてもいゝくらゐ、用のほかは入らぬことをいはぬ彼女の厭味つ氣のないのが氣に入つてゐた。そして去年半歳ばかりの馴染を重ねて彼が東京にかへてから後も絶えず手紙の往復をしてゐた。その手紙の中にはかへつて現在逢つてゐるよりも以上のことがいつてあつたりした。中川は面と向つては知ることの出來なかつた女の愼ましやかな感情や性格の秘密を其等の手紙を通じて解することを得た。或る時は思ひつめたやうな正直な態度で悲しい不如意な自分達の境遇を訴へてくることがあるかとおもふと、また小供のやうな無邪氣なことをいつて物を强請つてくることもあつた。一度など何をいつて來たかと思つたら、

「うづまきのきみ子孃のやうな可愛いかはい三尺くらゐの大きさのおいちま人形を買ふて送つておくれやす。奇麗な縮緬の着物をきたのをゐたのみいたします。」といつてそのあとへ、

「わたしの子供のつもりでついでに好き名をつけておゝくり下されそろ。さすれば陛上の病氣もそれ

にていさゝかなぐさまれ申そろ。」

と書いてあつた。

中川はそれを見た時眞實彼女母子のために思はず眼を潤ませたのであつた。今は親一人子一人の頼り少い彼女の老母は一昨年の秋彼女には弟に當る唯一人の息子を十八で亡くしてからは悲しみと失望とから劇しいヒステリーに罹つて、ともすれば違つたことを口走つたり、何か氣に入らぬことがあるとそこらにあるものを取つて投げたりするやうな發作を起したりするのであつた。娘はありながら僅かの錢で身を縛られて享樂の席に仇人が一座の花と眺められても肝心の母子は自由に逢ふことさへ叶はず、老いて子を失ふた獨住に起臥の伴侶となるものといつては唯可愛いかはい亡兒が遺品の手垢の附いた机や本箱ばかりであつた。

「おかあはんそんな物見るとかへつてようないえ。」

といつて彼女はなるたけ息子のことを想ひ起さすやうな物をそこらに置かぬやうにいひきかせたが、老母はその時だけはさうかと思つて從順に娘の言葉に從つてゐても、明けても暮れても獨りばかりの敢果ない寂寞を慰めてくれるものはやつぱり亡き兒の追憶ばかりであつた。そして彼女はまたしても息子が生いてゐた時分のとほりにいろんな物を飾つて、誰れもゐないのに、獨語をいつてそれに話しかけたりしてゐた。それが昂じて老女は到頭狂人になつてしまつたのである。

中川はその手紙を讀んで一度は彼女の無邪氣なねだりごとに噴出したが、終の方になつてつい泣かされたのであつた。そして彼は早速三越にいつて緋縮緬の着物を着た可愛い人形を買つて送つてやつた。

そしてからかいた、

「この人形は御老母のなぐさみにとてまゐらせそろ。私の子のつもりで名をつけてよとのことなれども おん身の子とばかりにて、父はそもいかなる人にて候や。まことは父なるお方にこそ買つておもらひなさるべくそろ。嫉ましくそろ」

彼はいつも手紙でそんなことを戯れてゐた。

去年逢つてゐるころはそれほどゝも思はなかつたのが、さうして遠く離れてゐて手紙の往復をしてゐる間に彼等の交際はかへつて自然に深くなつていつたのであつた。そして薄暗い雪洞の火影の中に瞬いてゐた彼女の黒く圓な瞳だの、涼しい川風になぶられる鬢の毛のなびいてゐるさまなどを思ひ起してゐた。そんな譯で彼が此度久し振りの入洛は去年にまさる多くの樂しい期待を持つてゐるのであつた。

彼はやゝ暫くおかみを相手に、さういふ廓に身を沈めてゐる者の數々の哀れな物語りなどをきかされながらおつるのかへつてくるのを待つてゐたが、昨日からの逢瀬がそんなにこじれてゐるのでもう少しのことも氣になつて堪えられないので、女衆と一緒に此方に來るのだつたらどんな顏をしてくるか、昨日からのことは彼女の本心で此方をさばいたのであるか、それとも屋形への都合で周圍の者に彼女がわざとそんな風にして見せたのか、彼女の樣子によつてそれをも見究めやうと思つて彼は格子先の脊闇に立ち出でた。

そして火影の明るい小間物店や繪葉書屋などの軒を並べた四條通の人ごみを分けてほの暗い川端道を歩いていつた。河岸の柳は街燈の照らすところだけ暗の中にも青く描いてゐる。おつるがさし子と一緒

に歩いてくれば此の道にちがひないと思つて彼は柳小蔭を縫ふやうにしてゆくと、案の定片側につゞいた茶屋の軒燈の火影の中を二人の若い女がぶらり〳〵と肩をならべてこちらに歩いてくる。彼はそれにちがひないと見定めると、わざと二人には氣のつかぬ風を裝つて行き過ぎやうとすると、

「ほッ」とおつるが聲をかけた。

「うむ」と、いつて彼は佇立つた。そして默つて睨むやうにきし子の顏をじつと見てゐた。意氣な銀杏返しの頭に、いつになく今宵はまた白粉を濃く粧つてゐるせいか夜眼には顏が一層はつきりして見える。地味な黒縮緬の羽織をはをつて小高く小褄をとつたまゝそこに立ちとまつた。そして中川の顏を見ながら、

「こわい顏をして」といつた。

「ほゝゝ」おつるは笑つてゐる。

中川は無言のまゝ暫く彼女を見守つてゐたが、そのまゝ笑ひもせず行き過ぎやうとすると彼女は、

「あんたはんこれから何處へおいきやすの。」

と聲をかけた。

「うむ、私はたゞ此處らをぶら〳〵散歩してゐるんだ。」

「さうどすか。」

「ほんなら內へ先きいてませう。」おつるはさういつて二人はまた歩き出した。

彼はどんなに思つてゐても今更連れ立つて歩かれもせぬので、そのまゝ遣り過しながら彼等の背姿を

眼で追ふてゐた。

あんなに化粧をして何と思つてやつて來たらう。よもや此方から知らしたとは夢にも思はなかつたらう。さう思ふと彼はどうしてもそのまゝ行かすことが出來なかつた。そして、

「おい」と聲をかけた。

「へつ？」とおつるが返辭しながら二人は後を振顧つた。

「おつるどん」と、いひながら彼はそつちへ寄つていつて「ほんなら、あんただけ一と足先き歸つて、私この妓とちつとそこらを歩くから」

「さうどすか。」おつるは躊躇ふてゐる。

「あんたはんもう何處へもゆかんと一緒にかへりまへういな。」きし子は甘へるやうにいつた。

「かへつてもいゝけど、ついでにも少し歩かうよ。」

「そんなことといはんと、もうおかへりやすな。」

「まあ、いゝさゆかう。何か食べやうぢやない。」

「私、もう結構。ほんならあんたはん一人で何か食べておいでやす。」

きし子は昨日からお客につれられて大津にいつてゐてつい先刻此方からほかの名で電話が掛つたばかりのところへ丁度かへつてきたのであつた。そして此方からもう度々電話がかゝつたことをきいた時屋形の女衆が幾なことを一と口いつたので、それで中川の方を捌いた風にして、即座にほかへゆく返辭をしたのであつた。彼女はこの頃屋形で妙に中川との間を疑はれるのをつとめて押隠さうとしてゐるので

ある。

けれどもそれは中川にはよく解つてゐなかつた。で、今きし子にさういはれたので、先刻から抑へにおさへてゐた不滿がまたむら〳〵と逆上げてきた。それを顔には出さぬやうにしながら、

「まあ、ちよつとつきあつておくれよ。」と頼むやうにいつた。

「ほんなら、私先きかへつてゐますよつて、きし子はんちよつといといでやす。」おつるが仲に入つて取做すやうにいつた。

それできし子もしぶ〳〵ついて來た。

「あんたはん、もうあんまり電話を掛けんとおきやす。私今かへつて來たら、家の人きし子はん近友から度々電話がかゝつて喧しうて晝寐しようと思ふたかて寐られしまへんいふてゐましたから、さうなうても屋形でもう變に思ふてるのどすさかい。」

「うむ、度々電話をかけるのは、此方も厭なんだけれど、近友のおかみさんが一生懸命になつてくれてゐるのも氣の毒だし、またあんたくらゐ約束の當てにならぬ女もない。君の方で昨日といふ約束をちやんと守つてくれゝばこんなに昨日からやい〳〵いはなくつても靜にしてゐて濟むんぢやないか。」

「私昨日のことなどちよつとも知らしまへんもの。」

「昨日あれほど何度も電話をかけてゐるのを知らないの。」

「知らしまへん。女衆が何もいひしまへんもの。」

「そんなわけはない。それに四日も前から約束をしておいたぢやないか。」

「約束してゐたかて、あんたはんの約束かて當てにならしまへんもの。」

「私の約束が何故當てにならぬ。ぢや君は、今一體どういふ考で近くにの家にお花に來たのだい。晝寐をしようと思つても寐られないほど電話がかゝつて喧しいくらゐなら、近友から知らしてゐるのは分つてゐるぢやないか。こちらと知つてゐながら捌いて向へいつたのだらう。」

「そんな理窟は私のやうな者にはわかりまへんけど、あんたはんの方であんまり何度も電話をおかけやすさかい。」

きし子はその晩ほかからかへつて來ると、内の者から妙に冷かされたので、わざと中川の方に對する返辭を冷淡にして見せて、近くにの方を早速うけたのであつた。けれども口數の少い彼女はそんなことを辨解らしうべちやくいふのは下手でもあるし、自分も好まなかつた。

「ふむ、ぢや、それでほかへゆく氣になつたの。」

中川はまたそれを何處までも根掘り葉掘り問ひつめねば心が納らなかつた。

「もう何もいはしまへん。」

彼女はそれつきり口を噤んでしまつた。

二人はやゝ暫く默つたまゝ柳の葉陰を歩いていつた。

「さあ、そんなことはもういふのは止さう。何處へゆかう。」彼は氣を取り換へたやうにさういつた。

「どこでもあんたはんの好きなところへ。」

中川はちよつとそこに佇立つて考へるやうにしてゐたが、やがて彼等はからころと杵屋橋を渡つてい

つた。この間三四日つゞいた春雨で急に水嵩の増した川瀨の水は兩岸の家々から射してくる無數の燈影を碎きながら音を立てゝ流れてゐる。あたりの火影が明るければ明るいほどの兩岸の家並は黑い夜の色に包まれて、星光稀れな大空の彼方には闇の中に遠く比叡山や如意嶽が輪廓だけ黑く浮き上つてさながら人間の夜をば凝視してゐるかのやうに思はれる。疏水の土手を駛せてゆく京阪電車が時々けたゝましい音響を起すほかは、四條大橋はすぐそこに見えてゐながら河の上はさすがに街のどよみから遠ざかつて、今まで賑かな人込みを歩いてきた耳には物忘れをしたやうに四邊が寂然としてゐる。橋の上にも人脚は途絶えがちである。

「好い景色だねえ。こゝに來ると何だか冷々する」中川は橋の中央まで步いて來ると、獨語のやうにさういつて欄杆に凭れながら川の上下を眺めた。黑い水は大きな波を成して流れ落ちてゐる。

と、先斗町の方の橋袂で人の通りかゝるのを待ち構へてゐた辻占うりの親子は嫖客らしい男女の人影が橋の上に立つてゐるのを認めてばら〳〵と走り寄つて來て、

「お客さん辻占買ふとくれやすな。一枚一錢買ふとくれやすな。」うるさく强請つた。

「いゝんだよ。」

「どうぞ買ふとくれやすな。」小供はなほもねだつた。

彼はたうとう一錢與へてつぢ占を手にしながら遠くの火影に透して見てゐたが其文字は「するをまつよ」と讀まれた。

「いやな辻うらだ」といひつゝすぐまるめて水のうへに投げ棄てた。

「さあもう行きまへよういな。」女は兩手に褄をとつたまゝゆきさうにして橋のうへに立つてゐた。

「まあちよつと待つてくれ、ほんとうにいつてきかしておくれ、一體どういふつもりで今日はあれほどいつてゐるのに、ほかへお花に來たのだ。」彼はまたそのことを言ひ出した。

「もう先刻一遍いふたとほりどす。」

「こちらが度々催促したからといふのかい。」

「さうどすやろ。」

「さうどすやろもないもんだ。今日たび〳〵催促したのが厭だといつたつて、お前の方で先日の約束を堅く守つてそのつもりでゐてさへくれれば、そんな催促をしなくつてもすむんだ。そりやあ昨日から大津へいつてゐたのはいづれ大事な人なんだらうが、昨日といふ約束をそのためにふいにせられるやうぢや今の辻うらがうまくいひ當てゝゐらあ。」

「……………」

「おい、人にばかりいはせないで何とかいつてくれないか。」

「あんたはんといふ人は……」彼女は呆れたやうにいつて、一歩ついと身を退きながら「もう何もいはしまへんたら。」

「さうか……おやお前今までどういふつもりで一年の間あんな手紙をくれてゐたの。」彼は追驅けるやうにきいた。

「別にどういふつもりでもないやおへんか。」さういふ彼女の聲は何だか冷笑ふやうに聞えた。彼は向岸

の燈の明りでやゝしばらくその顔をまたじつと見守つた。

「おやお前が今までいつてゐたことは、あれはみんな嘘だつたの。おまへは私に愛相づかしをいつて切れるつもりなのだな。」

「切れる切れんもないやおへんか。」

膠もなくいひ放つた彼女の顔はその時まさしく冷笑を浮べてゐた。

「あゝさうか。さうだつたのか。」

沈痛な聲がして、そのまゝ默りこんでゐたかと思ふと、忽ち暗の中にきらりと光るものがあつて夜目には殊に白さの目立つ女の襟頸目がけて突刺した。

「あら人殺し」と女は一聲高く悲鳴をあげて叫んだ。

「おい、靜かにしてくれ。私はお前を殺して、自分も一緒に死ぬんだ。死んでくれ。」

手を負ひながら逃げやうと跪く女を一生懸命捉みながら男は片息になつて口說いた。橋の上にはどたんばたんとけたゝましい物音が起つた。

遠くでそれを見てゐたさつきの辻うら賣りの親子は恐ろしい女の叫び聲をきくと逸散に橋板を踏鳴らして驅け出した。



その一日

岩野泡鳴

一

「もう、初夏だ！」亮作の獨り言は胃の腑の中にさうした氣ぶんの空氣をばかり吸ひ入れた。腹がへつてるのか、それとも、また、あたまが空虚なのか、どッちとも自分には分らなかつた。

氣の毒になつて山岡の家を出て、芝に床屋をしてゐるいとこの所へ厄介に來てから、もう、また一週間は空しく過ぎた。

「今仕事が見付かりかかつてるのですが、その間少し御厄介になりたい」と云ふ端書きを出した時から、他に行きどころのない悲しみと、野卑ないとこから受ける野卑な侮辱に對する隱した涙とが――その文面の裏には――潜んでゐたのだ。

何事も豫期して來たのだとは云ひながら、さてまた所を更へただけの同じ現實にぶつかつて見ると、新らしい嫌惡と後悔とが自分の胸へ込み上つて來ないではない。何ものに對しても或人々のやうな平氣を以つて受け流す餘裕と氣輕さとを持たぬ亮作は、知らず識らず――否、知り拔いてゐながら――ますます頑固で因循な性質のからを拵らへて、その中へ這入つて、自分の不運やら不甲斐なさを自分でさいなみ罵ることしか出來ないのである。

亮作には斯うして一日のたつのが非常におそろしかつた。一日は一日と狹いからを脊負つて狹いどぶの中へでも追ひ込まれて行くやうだ。そして自分でもいつまで續くか分らぬ生に對する不安と恐怖とが明らかにあたまの中を往來して、居さふらふ飯が少しも身にならないやうだ。

それで、けさも、朝飯を喰ふと直ぐいとこの家を飛び出したわけだ。もう、遲咲きの八重櫻も散つて、町々はなま／＼しい若葉に蔽はれてゐる。インキ色の空からは目まぐるしい日光がみなぎつて、亞鉛屋根や煉瓦塀に反射してゐる。晩春に別れる悲哀はやがて來たるべき何ものかを迎へる喜悦のやうにも受け取れるが、何を望んでもそれに近づけぬ自分には、すべて花やかな然しうそばかりの世界だ。

渠には過去の初夏の印象が悲喜こもごもの形になつて、自分の意識にのぼつて來た。そしてその時その時の初夏を背景とした自分の姿を考へて見ることが出來たけれども、それは皆今の境遇や心持ちと大した違ひがなかつた。

『僕はどこまでも――どこまでも』と、太い吐息をつかないではゐられなかつた、『斯うした運命に生れついて來たのか知らん？いつもじめ／＼した同じ一すぢ路を――何等の變化も進歩もなく――隣りの塀

越しの花や柳を羨みながら辿つて行かねばならんのか？自分から運命の開拓もしないで？』自分にはこれが事實であつたにせよ、まだ自分でさうは決定させたくなかつた。あの耶蘇敎の云ひぶんは信じられぬにしても、若し神があつて、宇宙の萬物をその神の意志によつて造つたとすれば、少くともその一部たる自分——否、うまく行けばその全部にもなれようと思はれる自分——これが何等かの意味が無くてはならぬ。然らば、自分が持つて生れた豫定の生命を終るまでの間を、何か自分に向く仕事を與へて呉れないぢやァ困る！

ところが、今まで何に當つて見ても、亮作には向きさうもない仕事ばかりだ。渠は確かに無意味に闇の中を——無茶苦茶に——歩き廻つたやうだ。そして矢鱈に物に突き當つてはね返されるばかりで、何ものも掴み得たことがない。徒らに年を取つて行くのがじれッたくなるばかりで、その結果、何事も出來ないで、いつも『斯うした運命なのか知らん——』と云ふやうな疑問に到着してしまう。

渠はそんな瞑想と共に足を進めながら、いつの間にか芝公園の、芝中學の横手なる林の中を歩いてゐた。木々の新綠は自分のあたまの上で層を成して、深く天空を覆ふてゐる。そして風が渡る度毎に、その葉ずゑ葉ずゑは意味ある謎でもささやき合ふか、輕い忍び音をもらして、その音が樹間にさし入る太陽の光線に白く輝くのだ。

渠はふと自分で强烈だと思はれる新綠の香をそこにかぎ付けて、全身に異樣な力を得た。この勢ひで行けば必らず……と身づから步を急いで林間を公番の前へ抜け、切り通し道を後藤伯の銅像わきに出て、公園本通りの電車道を横切つて、渠はおもい嚴めしい鐡の門の前に立つた。

この時は、もう、ちよッと出た今の勢ひはなかつた。鐵の門は自分の力ではどうしても明きさうではない。よしんば、思ひ切つて明けて這入つたところで、また、ぶつかつただけで何ものも積極的には得られず、わづかに得るものは屈辱と後悔とであつたら、どうしよう？お前は惰け者だ、意久地なしだと云はぬばかりに取り扱はれたら？

渠の心はいぢけてゐた――今や香のぬけた陳皮(ちんぴ)であつた。

二

午前の十時近くだと思はれた。

「矢部新太郎」と書いた、もう、古ぼけた表札を鐵門のこなたから見上げて、亮作は暫らく躊躇した。それから、二三度は門の前を行つたり、來たりして見た。

やッとくぐりを這入つて行き、玄關の外の柱についた呼びリンを押すと、奥の方でリ、リ、リンと鳴つたのだが、それが、先づ、渠には自分の胸にひやりと響いた。

摺りがらすの戸を明けたのが十六七の眼の愛くるしい娘の子であつたので、それにまた胸がどぎまぎした。

「どなたでいらッしやいますか？」聲もはき〳〵してゐる。

「………」亮作は人の家をおとづれる時いつも經驗する淡い不安に襲はれて、暫らく口をもぐ〳〵させてから、「先生はいらッしやいますか――私は田口ですが――？」

娘のお太鼓に結んだ派手なメリンスの帶の模樣があひの襖に消えるまで、じッと見つめてゐたが、渠はその心のうちで、

「へん、先生などと云はれる仲ではなかつたのだが」とあざ笑つた。

この間の晩、友人の西川と共に音づれて來た時、お茶を出したのはあの娘か知らん――あの時のはもッと小さい娘ではなかつたか、などと思ひつづけてゐるうちに、例のうすあばたの本人が出て來た、

「や、さア、あがり給へ。」

「どうも暫らく」と、わざとにもこちらで尊敬を表するつもりの挨拶が、ちよッと勢ひづいた爲めにか、同等の調子であつた。

矢部の書齋に通されてからは、また心がめいつて――亮作は出された蒲團に半分にじり上つて、もぢもぢした。そして自分がいよ／＼口に出すまでは、自分の持つて來た用件を少しだッて氣取られまいと思つて、暫らくは言葉が出なかつた。

「もう、すッかり青葉になつてしまひました、な。」矢部は書齋をくの字形に取り巻いた二十坪ばかりの庭の若葉をわれから先づ眺めて、得意さうな微笑をその小鼻に見せた。

「さうです、な。」亮作も今更らしく庭の方を眺めた。いろ／＼の樹がいろ／＼の若葉に色取られてゐる。楓、柳、櫻、桃、その他自分には名も知れない樹がごち／＼と植わつてる。

渠が初めてこの庭を見たのは、もう――ちよッとそらで數へて見ても――十何年か以前のことだ。その時分、矢部は小い××新聞の編輯長の職に就いてゐた。編輯長と云つても、無論、ひら記者や印刷職

工と同様だとは、謙遜の辭ではなく、實際の事實として本人が亮作等に語つたことであつた。
矢部は編輯長としての物好きから、その新聞の和歌の選者をもしてゐた。恰もその頃は、正岡子規の歿後まもなかつたので、歌壇の或一面に於いては、根岸派が非常な勢力を占めてゐた。日ごろ子規の歌に心醉してゐた矢部は、その選をする新歌壇に於いても、根岸派の鼓吹を怠らなかつた。亮作もその頃何々「あらんかも」と云ふやうな口調で頻りに投書をした。その緣故で歌の會がある度毎に招かれ、矢部を知り、西川を知り、友人の誰れ彼れを知り、また今でも一部の爲めには色彩と崇敬とのまとになつてる禮子さんをも知ることが出來た。
名を知つてゐても顏を知らなかつた十五六人の連中が初めてこの家に集つた時には、この書齋はまだ建つてゐなかつた。丁度今頃の氣候で、奥の六疊二間をぶッ通した座敷から眺めたこの庭は、まだ初心の亮作には如何にも歌人の住むらしい庭のやうに見えた。そして集つた連中は自分より皆えらい一かどの歌人のやうに思はれた。「苺」と云ふのがその時の歌題で、また即詠に「早苗」と云ふのが課せられた。
亮作は庭の山吹の花の上から飛んで來た虻が座敷の障子のさんを廻つてぶん〱云つてるのを見詰めながら、雨後の苺ばたけの綠の葉かげに、露にうるほふたあか瑪瑙のやうな實を想像したり、五月雨に水の溢れようとする早苗田の案山子の恰格（かつこう）や、蛙の飛び歩く光景などをあたまの中に描いたりして、頻りに苦作に耽つた。
その頃の庭の木立と――但しどんな樹木があつたのか、はッきりとは記憶に殘つてゐないが、――今

現におひ繁つてる樹木との間に、十年の歳月が流れてゐるとは、亮作にはどうしても思へて來ない。その枝ぶりのいい柳も、垣根に添ふた竹林も、山吹も、どうも昔のまゝのやうに考へられてならなかつた。否、さうにも斯う考へて置きたかつた。

あの禮子さんはその間に意地づくの結婚をして、その人に死なれて、今は未亡人であるが、それでももとの禮子さんではないか？　ましてこの庭には結婚もなかつた、死に別れもなかつた！

自分だッても――十年と云へば、一昔どころか、今では二昔とも云ふが、――その間には、無論、目まぐるしい程の境遇變化や、思想の變遷やがあつた。けれども、自分はそれ等から何等の報酬も受けて來ない。相變らず自分の内部には暗愁の思ひが湧き出るばかりだ。そして十年前にこの家を尋ねた時よりも一層見すぼらしい風をして、この頃、一二度矢部の前に坐わるやうになつた自分を、實に情けなく思つた。

三

渠は急に矢部に顔を見られるのさへおもはゆいやうな氣がした。そして自分のやつて來たその用件をさへ云ひたくなかつた。この間の晩、西川に伴はれて來て、矢部のやつてる事業に使つて貰ふやうになつたのだが、まだ具體的にはきまつたのでなかつた。

「先生、もう、かきつばたが咲いたのですか？」渠はわざと驚いたやうな顔付きをして、脊を延ばし、楓の下に咲いてる白い花に眼を移した。

「あれはかさつばたぢやない。一八ですよ。」矢部はおほやうに答へて、うすら笑ひをしながら、「いつも大分咲くのだが、今年どうも楓が蔭になつていけないのです。少し枝を切つてやらなくちやァいけない。」

　終はりは獨り言のやうになつて、あかい日光が射してゐる楓の高い枝を見上げた。

「さうですか、一八と云ふのですか？」亮作も獨り言のやうに受けながら、何だか自分の無智を見すかされるやうないやな氣がした。

「本田君に逢ひますか？」本田とは矢張り新歌壇時代に矢部の家に出入りした亮作の友人だ。

「いゝえ、ちッとも逢ひません、この頃は、もう、昔の友人にも滅多に逢ひません。皆變はりましたから、な。」

「變はるのは當り前でしよう。」

「…………」成るほど、矢部自身も變はつたと亮作は氣が付いた。否、變はつたと云ふよりも、寧ろ感傷的な詠嘆が取れて、ます〱功利の本色が出て來たのだ。

「もう、然し、子供があるんださうです、ね、本田君は？」

「え、さうですよ。」亮作は矢部の「然し」に少し共鳴を得て、皮肉な笑ひを見せながら、「金子なんて、もう、二人ですから、な。」

　少數な友人どもではあるが、亮作の友人どもは、もう、大抵妻を迎へたり、人妻になつたりしてゐる。長らく肺病の爲めに苦しんでた禮子さんも、いつのまにか七つになる男の兒の母として、今は未亡

人と云ふらくな身になつた。最近に妻を持つたのが西川で、久しく買ひ馴染んでゐた女の年期が明けるのを待つて、去年の暮れに、深川の場末で世帶を持つた。

どんな女でも細君と云ふ名の付くものを持つて、人間最大の務めが盡せるのなら、三十にしてまだ放浪してゐる自分の如きは何と云ふ意久地なし、不甲斐ない男であらう？然し自分は妻帶した友人の、平凡で無味で、姑息で因循で、自分等の現實の骨ばかりを犬のやうにしやぶつてる生活を思ふと、自分はいつまでも渠等の轍を踏まないで、斯う自由でありたいとは考へながら、その下からはまた渠等には知れまいと思はれるやうな悲哀が持ち上つて來て、渠等の犬のやうな生活が却つて羨ましくもなる。

自分等が物質的と卑しむ物にも實は精神的な努力がひそみ、自分等が精神的と高尚がる物にもまた單に物質的と見るもの以上の空疎があつて、つまり、物靈は二元でなく一元合致であると云ふ哲理もあることは、兼てから聽き知つてゐる。然し渠等の情態を見ると、物質以上の勝利者とは見えず、自分はまた精神以外に於ける敗北者としか思はれない。渠等と自分とには畜生と人間との差があるやうだ。さうかと云つて、人間は今の自分の如き寂しい、果敢ない、悲哀の敗北者でつゞくものでもなからう。

して見ると、これはただ何にぶつかつても撃退される自分だけの運命だとも思はれた。そしてこの運命の渦卷きの中にもがいてる自分を自分で傍觀する時、亮作はいつも自分のからだの不具を呪ひ、自分の精神のひねくれを呪ひ、自分の境遇の不如意を呪ふのであつた。

渠は思ひ切つて、一度、勞働者の仲間に這入つて見たこともある。或簡單な發明品の製造工場で、出來た品物を澤山入れた箱を肩に運んで、倉へ入れたり、車に積んだりするだけのことだから、あまり力

も入らず、骨も折れはしなかつたが、或時、から箱を向ふから運んで來るものとぶつかつて、荷を持つたまゝあふ向けに倒れた。そしてびツくりした爲めに心臓に故障が出來て、二週間ばかり褥に就いた。

それと云ふのも、渠は極度の近視眼だ。遺傳的に癇の強かつた渠は、三つばかりの時、自分の思ふ通りに成らないと云つてはわツと泣き入つた上げ句、いつも痙攣を起すのであつた。その結果、渠の眼球に斑衛を起して取り返しの付かぬ痼疾となつた。

小學校の三四年の頃になると、もう、黒板に書いた算術の問題なども明瞭には見えなかつた。その時分から渠は自分の運命を悲しんだ。そしてあらゆるものに對して一種の妬みと侮辱とを感じた。そして一種朦朧としてうす暗いやうな世界が自分のあたまの中にひろがつた。

小學以上の學校へ行く時、芝居を見に行く時、若しくはまた机に向つて讀書をする時、亮作は人一倍若しくは數倍の努力と疲勞とを感じた。薄い幕が絶えず渠の眼の前にかかつてゐた。そして視力の不正確から來る豫想外の過失は徒らに渠の爲めに衆人の嘲笑と憐愍とを買つた。

渠はひとりで机に向つてる時など、どんなに自分の眼疾を悲んだらう――どんなに自分の不幸を？幾たびか天に向つて自分の机をうち叩き、

『馬鹿野郎！』はすすり泣きにならうとする涙の聲であつた。賴朝の前で自分の眼を自分がゑぐり拔いた景清のことや、自分の眼玉を樓門に掛けたと云ふ伍子胥のことなどを思ひ出すと、それでも、渠等と自分とを比較して見る餘裕が出來て、自分の眼球へ絶望的に持つて行かうとしたナイフの手を差しひかへたこともある。

こんな風にして渠の年と共に成長した沈鬱で、かたくなな性質、勝ち氣で、飽きッぽく、短氣な性質が、渠をいつも世の成功から遠ざからしめた。

矢部のおほやうで樂天的な樣子を見せつけられると、この時、亮作には今更らのやうに自分の心の姿が意久地なく傍觀されるのである。

四

亮作は矢部と果して有耶無耶の間に別れた。あとで考へて見ると、何の爲めに渠を訪問したのか無意味であつた。

けれども、さすがに臆病な亮作も持つて行つた用件だけは思ひ切つてよどみ〳〵云ひ出した、――『で、そんなやうなわけで――非常に困つてをりますので――先日のお話の仕事が願へれば――非常に――結構なのです。』

『ところが、ね、君、あれはまだどうなるか分らないのだ。』矢部の無責任には呆れないではゐられなかつた。『尤も、その方へ奔走してゐる人もあるんだが、ね――ただ講演部だと云つても、基礎から固めて行かなくちやならないんだから、ね。から云ふ宗敎的事業はなか〳〵六ヶしいよ、君。』

なアんのこッた！先達ての話に據ると、もう、お膳立てがしてあつて、直ぐにも初められるやうなことを云つて置きながら！亮作は矢部のこの言葉にはむッとした。が、怒ることも出來なかつた。

『私が喋べられる範圍に於いてでいいのです』とまで、報酬のことにも立ち入つて、この間の晩は話が

あつたのだ。
「それも程度問題だが、兎に角、考へて置きましよう」と、矢部はその時答へた。それを思ひ出すと、梁は宗教的と云ふいい看板につり込んで、こちらを初めから好意づくで働かせようとするつもりであつたのか知らん？それが暗に相違したので、けふのやうな曖昧なことを云つて逃げたのぢやアあるまいか？それとも、薄弱な根據のもとにある一種の事業熱に驅られて、安受け合ひをしたが、それが思ふやうに行かないので、こんな雲を摑むやうなことを云つたのだらうか？亮作は兎も角矢部の意志を確めようとして、わざと、
「先生、さうすると、もう、あれはおやめになつたのですか？」
「いや、いづれはやらなくちやならないのだが――」矢部は少し間を置いてから、相變らず樂天的に、
「實は、まだ具體的に規則書が出來てゐないので、ね。然し信仰と努力とできッと出來る。僕は初めから小さなところなどでやりたくはないのだから、ね。金持ちから大いに寄附をさせて、先づ第一に寄宿舍を建てなくちやならない。それに一般青年の高潔な娛樂場として、青年會舘を建てる。なか／＼する事が澤山あるのだ。今やつてる努力協會もつまりそれに對する機關事業なのです。」
亮作にはいよ／＼矢部の云ふことが分らなくなつた。霞を隔てて日輪を見るやうにはおぼろげにそれと梁の心持ちが讀めないでもなかつたが、それが果して――さう呑氣さうに――實行出來ることだらうか？
亮作には矢部が耶蘇教信者であることは知れてゐた。また努力主義と云ふ地方青年相手の（實は、矢

部のドル箱になつてる古本依託販賣のカタログのやうな）貧弱な雜誌を出してゐることは知れてゐた。亮作が現に手傳はうと思つて來たのは、この雜誌の編輯や記事をであつた。ところが、矢部はその話を、どうも、ただ茫漠たる傳道的事業の方へ持つて行くのであつた。

「努力主義の方の仕事はないのですか、先生？」

「いや、それがです、片一方の事業が盛んになれば、勢ひ、雜誌の方の仕事も多くなるのです。なに、やつて出來ないことはありませんよ。キリストや日蓮を見給へ、渠等はあらゆる迫害や辛苦に耐へて渠等自身の事業を遂行したぢやないか？」

亮作はいよ〳〵驚き呆れた。本氣で物を云つてるのか、わざと惚けてゐるのか？それに對していらいらしてしまつたので、もう、口を聽くまいとした。

たとへ矢部がその云ふところの傳道的事業に實際にたづさはるとしても、渠にはそれに必要なだけの熱心な信仰と自信とがあり得ようか――大道に立つて辻說法をするだけの？泰然として十字架にかかるだけの？

亮作の見るところでは、矢部はごく冷靜な、打算的な人である。うす笑ひの中に利害の觀念ばかりを包んで、批評的話柄には富んでゐるが、情熱的な、犧牲的な精神の充實してゐる人とは思はれない。若し渠にして假りそめにも宗教上の信仰に生きようとする熱が出たのだとすれば、それは三年前に細君を失つた悲愁がたま〳〵渠の日頃の事業心に結托した臨時の現象であらう。斯う結論するのが、最も妥當でないかと思はれた。

若し信仰上のことにもパンが伴ふと云ふのなら、亮作の氣まぐれは矢部の尻馬に乘つて、また餘裕のある野次馬どもが社會主義の演說をしてまはつた時代の如く、矢部のいつかやり出すと云ふ事業にたづさはり、演說の一つや二つはやつてもおもしろかつたらう。が、亮作には差し當り、無條件のパンが必要であつた。何か知ら與へられたまゝの勞働でもいいから、自由な腹を拵らへて若葉の香を味はひたいのである。

それでも、渠は矢部の家を辭する時、

「どうかそれが具體的になつたら、何ぶん一つお願ひ申します」と、腹にもないことを——萬一實現される時があらばと賴みを殘して——口に出した。そしてそれだけ現在の空腹を增した氣がした。

五

然し一方には矢部の心のうちを見拔いてやつたやうな愉快も伴ふまゝに、元氣をふり起して芝公園を赤羽根橋に出で、橋を渡らないで電車道を横切り、川添ひに麻布を十番に出で、やがて鳥居坂をのぼりつつあつた。日光はてか／＼と片側の煉瓦塀に反射し、白く往來にぎら／＼と光つた。

渠は喘ぐやうにして坂を上りながら、ハンケチで幾たびか額の汗をふいた。帽子の中の皮はぐッしより濡れて、かぶるには氣持ちが惡かつた。

太陽はいつかあたまの上に來てゐたが、渠は空腹を感じても、別に晝飯にありつく當てもなかつた。ふところの小使ひ錢は分つてるので、實に心細かつた。

「なアに、晝飯ぐらゐ拔きにしたッて」と思ふ下から、また少しでも小使ひのある中は喰べずにはゐられないやうな氣がした。

渠は坂をのぼり詰めると、ふと立ちどまつた。そして右の手を左りの脇の下へ當てて見ると、心臓は早鐘のやうに打つてゐた。それがまだ平調にならぬうちに、肋骨のあたりに何となく痛みをおぼえるのである。

思ひ出すと、この冬、自分は肋膜をわづらつた。二日と云ふもの、朝ゆふ、しつこい熱に襲はれて苦しんだ。その頃、山岡の細君が盲腸炎を病んで病院に這入つてたので、毎日、自分は熱を押して見舞ひに行つた。そしてその歸りに富士見町の醫者へまわつて自分の注射をして貰つた。

山岡に無給で手傳つてた亮作は、それでも、自分で何とか無理算段をして一週間ばかり醫者に通つた。一日三十錢では高い方でもなかつたらうが、それが針二十本にもなつた後は、つゞいて行くことが出來なかつた。患部の痛みは餘ほど取れてゐたが、熱の爲めに夜中、あたまの破れさうな頭痛のするのが非常におそろしかつた。その時、ふと思ひ出したのは禮子さんが食養療法で非常に效果を擧げてることをだ。

そしてあらましの容態を書いた末に、その療法や手當てのことに就いて詳しい質問の手紙をかの女に送つた。考へてもぞッとするほど感傷的な手紙であつた。

禮子さんからは折り返し長い〳〵返事が來た。そしてこちらを勵ますやうな文句の末に、

「私も寐てないと、行つて見て上げてもいいのですけれど、ね」とあつた。

それがほんとの心情なら、それだけででも自分の病氣は直るやうに思はれた。誰れもたよりに思ふものもない弱い自分には、女の斯うした手紙の端々にも少からぬ感動があつた。

その後、亮作は禮子さんから敎へられた手當てを金科玉條として、自分の患部に芋ぐすりを塗つた。あたまの地肌には、胡麻油と生薑の汁とのまぜたものや、林檎の汁などを摺り込んだ。熱を取る爲めには大根おろしや椎茸の煎じたのも飮んだ。氣のせいでもあつたらうが、その晩から、破れるやうな頭痛も左ほどに感じなかつた。患部の痛みもだん〳〵忘れて行き、熱も潮の引くやうに去つた。

その後全く健康狀態に復したことは復したが、めツきり精力は消耗した。少し無理をしたり、遠みちでもしたりすると、大變な疲勞をおぼえるし、どうかすると、また、肋骨のあたりに痛みを感じ初めるのである。與へられた勞働と云つても、近視眼では出來ぬことゝこの肋骨にさわることとは斷然引き受けまいと決心した。

自分をがらんどうのガラス玉と庇ひながら、右のたなごころでそツと脇の下を押さへてゐると、肋骨の痛みもやがて消えた。渠は俄かに禮子さんに逢ひたくなつた。あの美しい、なつかしい瞳——いつも微笑を湛へて——。

六

亮作には百の說法よりもただ一人のあたたかい情とまことの聲とに接したかつた。誰れでもいいから、自分のからだと精神とを取りまとめて吳れるやうな人が欲しかつた。

電車を清水谷町で下りると、そこから禮子さんの家は直ぐであつた。

一ヶ月ばかり前に雜司ヶ谷の家を引き拂つて、かの女は一人で植物園の森が見おろされるやうな二階の一室を借りて住んだ。

『わたし、生れて初めて一人で住んで見るのですが、ね、長く續くか知ら?』を思ひ出すと、亮作はその時むしろあんな病弱なかの女がよく自炊をしてゐられるとあやぶまれた。そして○○女學校の教師として羽振りのいい姉が、あんなに妹思ひでありながら、よくもかの女を一人で放して置くと。

途々、亮作は不安に襲はれて、若しや留守では——と思つたが、それは無駄であつた。

『あら、田口さん、よくいらしつたの、ね。』

例の美しい瞳は、亮作を見てにツこりした。何か原稿を書いてゐたのらしい。亮が部屋へ這入ると、かの女はデスクの上の原稿紙へペンを置き、かけてた椅子を離れた。

『御勉强ですか?』

『いえ、ね、この間から賴まれてた筆記がありますの。ところが、なまけてて今までちツとも書かなかつたの。それをけふからぼつ〳〵初めましたのですよ。』

亮作は、かの女が立つたままこちらを見つめて、少しもいや味のない微笑をして、物を云つてるその顔つきに見入りながら、自分も微笑をしてゐた。

『まア、坐わりましようよ。』かの女は亮作に坐蒲團をすすめ、自分も少し離れて坐わりながら、『この間、遲かつて?』

「え、また戸締りを喰つてしまつたのです。」
「惡かつた、わ、ね。」
「なアに、それよりも、あの日、ひる間からあなたのお墓詣りの出さきをお邪魔してすみませんでした。」
「……」かの女はそれには答へなかつた。「きのふ、ね、お墓詣りの歸りに、川田さんのところで、千代子さんにお逢ひしましたのですよ。さうして、歸りにまた、とう〳〵、わたしのところへ引ッ張つて來て、ね、それからまた夜の十時まで話し込んでしまつたの。」
「それは愉快でしたらう——!」
「愉快ッて——わたし、この頃は、わざとにも子供のやうになつてるのよ、くよ〳〵したッて詰らないから。」かの女は大理石でも刻んだやうな小鼻へにッと笑ひを見せて、それを暫らく默つてつづけた。その間亮作も默つてゐた。「まア、お茶を入れましよう、ね。わたし、獨りでゐると、一日だッて入れたことがないの、無性、ね。」
かの女は初めて横に下を向いて火鉢の消えかかつた火をほじくり出した。ひたへは多少出てゐるが、寧ろ利口なしるしのやうで、鼻すぢが通つて、色の白く引き締つた横がほもよかつた。
「お茶よりも先づ僕は水を一杯欲しい。」亮作は心易く自分で立つて、緣がはの水のあるところへ行かうとした。

「そんなら、コップ上げます、わ。」禮子も立ちあがつて、茶箪笥の引き出しからがらすのを出して來て、
「これはよく洗つてあるのですから、大丈夫よ。」
「そんな御心配は――」亮作は無雜作にそれを受け取つたが、かの女がかうした言葉の端にまでゝ自分の病氣に關する不注意などのないことを示めして、人に嫌惡の情を起させまいとする心根を、限りなくいぢらしかつた。

七

「田口さん、もう、何時でしよう、ね？」
「さうです、ね、もう一時になるでしようか？」
亮作はこの時もとの火鉢のところへ坐わつてゐた。
「あなた」と、火を吹いてた禮子は突然のやうにあたまを上げて、「ご飯はまだ？――わたしもまだなの。あがらない――一緒に？」
「僕は、もう、たべて來たのです。」こんなうそをついてまでも、亮作はかの女のやさしく小首をかしげた姿をやアわり受けてゐようとした。この間から時々來てはその度毎に御馳走になつたのが氣の毒でもあつた。
「遠慮しないでもいい、わ。」かの女は亮作のにえ切れなかつた返事を見て取つたらしい。「別に御馳走なんてありやアしないんですよ。ですけれど、玄米のご飯ぢやアしやうがない、わ、ね。」

「僕、ほんとにいゝのですよ。」
「でも、田口さん――」少し笑ひながら間を置いて、遠慮勝ちに、「何か買つて來て下さらない――いつもお氣の毒ですけれど？」
「え、買つて來るのは何でも買つて來てあげますが――」これまでにも度々かの女の使ひはしてやつた。
　然し渠はどこまでも自分をかの女の前に上品に取り扱はうとしたのだが、先刻から感じてゐながらも、かの女の前では多少まぎれてゐた空腹が、ご飯と聽いて、俄かに承知しなくなつたのか、ひそかにぐう〳〵と中から催促するやうな氣がして、目の落ち込むで行くかと思はれるほど、亮作自身の言葉や顏つきにたわいのない空虛が出來たやうだ。それをまぎらせようとすればする程、一層われながら顏がとぼけて行くやうだ。
　渠は異性の感情から超越して眞の美と愛の極致とに禮子さんを置いて置きたかつた。そして純な聖教徒のやうな心でその前にひれ伏してゐたかつた。かの女の玉を刻んだやうな姿――盛り溢れるやうな純清な思想――崇高な花のやうな美とあしたの露のやうな清さとを有する心情――それ等が少しも僞はらないで流露するその歌――つまり、かの女に對する殆ど絕對の如き戀か尊敬かを渠が懷くに至つたのは、きのふけふのことではなく、實に、かの女を知つたそも〳〵からで――。かの女が同病相憐れんで、肺病の所天を持つてからも變はらなかつた。また、かの女がその所天を數年間看護して、とう〳〵、それに死に別れた今日でも變つてゐない。そして清い美くしい十年の交際はそこに何等の汚點もとどめ

て來なかつた。

かの女には、然し、そこまで分つてるかどうか、亮作は確めようとする勇氣がなかつた。自分はかの女に比べてあまりに貧弱で、朝日に對する朝露でしか無かつた。

『田口さん、何にしましよう、ね。あなたのすきな物をおつしやい。』

拒み難い命令をでも受けたやうになつて、うそを云つた申しわけらしく禮子さんの顏をじつと見つめると、今度は腹の蟲が相手にも聽えるほどの音を立ててぐうツと云つた。

『僕は何でもいいのですよ、買つて來るのなら――また赤飯ならあなたにもあがれるでしよう。』

『それなら、嬉しい、わ。』食養家のかの女には最も賞美される食物であるのは分つてゐた。『でも、またあんな駄汁粉屋なんかへ行くのは、あなた、おいやぢやない？』

『僕はかまひません。』何だか確かな力が出て來たやうだ。『僕等はいつも平氣で這入つてるのですから。』

『お氣の毒、ね』と、多少いたづらじみた微笑を加へながら、『そんなら、ついでに、あなたの好きなおかしわも、ね、少し――』

亮作は自分のくちやくちやになつてる袴をぬいで、禮子さんから受け取つたメリンスの燃えるやうに赤い風呂敷を片手に摑んだ。

八

『わたし、この頃、ほんとに生きたいと思ひますの。』

かの女の食事がはりの物が濟んだ時の、かの女の出しぬけな言葉であつた。亮作はいくつ目かのかしわ餅を頰張つたところなので、暫らく物が云へず、じッとかの女の奇麗に輝く眼の顏を見つめてゐたが、無理に口の中の物を呑み込んでから、

「と云ふのは――？」

「でも」と、かの女はこちらの無作法を氣にかけてゐなかつたらしく、「この美くしい初夏の日光を見ると、つくづくさう思ふのよ。この頃はどうしたのか、死にたいなんて感じはちッとも起らないの。たまにはさうした心持ちも起つて見ればいいと思ふのですけれど、ね――つまり、執着が多くなつたのだ、わ、ね。それに、また、一ヶ月前から初めた玄米がわたしのからだに大變よかつたの。」

道理でこの頃禮子さんの健康狀態が長く續くやうである。いつもなら、一ヶ月にきッと二三度は褥に就いたのが、この一月と云ふものは、亡くなつた人の追悼會に自分から出て奔走したり、いろ〳〵な意味で恩人である○○氏の兒が死んだ時にもよく働いたり、また姉さんの用で一週間ばかり田舍へ行つて來たり、いつもの禮子さんなら隨分からだの無理をしたのだが、それが別に疲勞や病臥の樣子もなく、不思議な程であつた。

「ほんとに玄米のせゐでしようか？兎に角、大變この頃はお達者になられたやうですよ。」

「え、あんな無理を度々しても、ね。」かの女は如何にも嬉しさうに、「わたしは、きッと、なほつて見るつもりです、わ。」

「そりやア、きッとなほります、さ。あなたがなほらうとなさりやア、ね。さうなりやア、もう、一つ

の信仰ですから。』何となく自分の信用する牧師の說教をでも聽いてる氣になつて、自分ながら自分の言葉にしみじみした感じをおぼえた。同時に、かの矢部の口調をでも眞似たやうに自分ながら思へた。

『あなた、赤飯がまだ殘つてます、わ。おあがんなさらない？』

『……』たべたいのはやま〳〵であつたが、自分には初めからの行きがかり上、それには手をつけないで、かしわ餅の方ばかりを澤山喰つた。その勸めにはどッちとも答へをしなかつた。北の窓の半ば明いた障子の間から外を眺めてゐた。

植物園の森の新綠は直ぐ眼の前に在つた。太陽の光線はそれにいろ〳〵の縞模樣を見せて、濃く淡く陰影を作つてゐる。谷あひには御殿町や氷川町一體の貧民窟の亞鉛家屋が、たとへば、瀞の中へ追ひ込まれたいるかの群のやうに、並んでゐる。その上や瓦屋根の上やに反射する光りの中に、きたない襦袢や猿股が白く乾されて——それでも、天空は磨き上げた碧玉のやうに美くしい。そして生の緊張した頼母しさを傳へて來た。

『ああ、僕もほんとに生きたい、そしてほんとに死にたい。』斯う亮作の胸は躍つた。渠には、實際、この外界の現象に對して生きていいやうにも又死んでいいやうにも思はれるのだ。かかるてか〳〵光る日光の裏にも常に暗い夜が潛んでるではないか？哲學者のうちには、光りと闇とを區別して考へるのはうそだと云ふものがある。また、闇は光りに無關係だとやうに考へさせるものもある。けれども、今の渠の狀態には、無論、消極的には過ぎなからうが、死ぬ方が幸福でなからうかと云ふ觀念が離れなかつた。少くとも、生きても死んでも本氣でありたかつた——殊に、禮子さんのやうな人の前にゐて。

「禮子さん、僕に自殺出來るでしようか？」
「……」かの女はちよッと驚いた目つきをしてこちらの眞面目腐つた顏を見たが、何を云つてるかと云ふやうな靜かな笑みを見せて、
「そりやア出來ないこともないでしようよ。」
「僕なんて死んだ方がましだとこの頃頻りに思つてくるのです。その癖、また滅茶苦茶に生きたいやうな――」
「おッしやい、そんな頓狂なこと！」かの女は叱るやうに云つたが、暫らく無言になつてから、全く別な沈んだ調子で、『それは誰れしもそんな氣持ちがする時があるのですよ。そりやアわたしなどもこの病氣になつてから、どんなに世間から侮辱を受けたか知れません、わ。世間は皆わたしに嫌惡と輕蔑とを以つて向つてるのでしよう。現に、ね、今でも、或人から「生きてるだけが圖々しい」と云はれた程ですもの。でも、そんなことを云はれると云はれるほど、わたしにだッても、どこまでも生きてやりたいと云ふ反抗心が出ます、わ。」

九

この間の晩、禮子さんが仲のいい千代子さんと沈んだ調子でひそ〳〵話してゐたのは、どうもこの「生きてるだけが圖々しい」と云ふ問題であつたらしい。亮作もその時それをちよッと小耳に挾んだので、何だか氣になつて、一緒に途中まで歸りながら、千代子さんに聞いて見ようとしたが、

『そんなこと、わたしからお話することと出來ない、わ。そのうち、自然とわかりますから』と云はれた。

『ね、禮子さん、生きてるだけ鬪々しいッて誰れが云つたのです？あの晩、歸りに、千代子さんが「禮子さんはあんなに亢奮してらッしやつて、今晩、お休みになれるか知ら」と云ふもんですから、僕は氣になつてたのです。』

『ほ、ほ、ほ、何でもないことなの。わたしの弟がそんなことを云つたのが、千代子さんの耳に這入つたのでしよう――』

『弟さんがまたどうしてそんなことを？』

『そりやア、やんちや坊主ですから、時々そんなことを云つて見るのです、わ。その癖、あれはわたしの事を思つて呉れて――少し熱でもあるなんて云つてやると、そりやア目の色を變へて飛んで來て、ね、「ねえやも婆アやも何をしてるんだ。早く氷を買つて來い」なんておこり散らし、自分で手當てをして呉れて、自分で滿足すると、さッさと歸つてしまうの。』

かの女の弟は帝大の醫科へ通つてゐる。

『そりやア、變な弟でして、ね、「僕は姉さんが大好きだけれど、病氣がいやなんだ」ッて、わたしがあれの部屋へでも這入つて行くと、口もきかないでぷイと出て行つてしまひます、わ。わたしはまたその弟が可愛くッてしやうがないの。ですけれど、また、さうした態度が憎らしくッて――それ、いつかあなたにお話ししましたあの人によく似てて、ね。』

かの女があこがれるやうな目つきになつて語るその『あの人』のことは、亮作もついこの間聽いた。かの女の初戀の人で、また最後の戀人と云ふやうな者だ。洋行して歸ると、間もなく醫學博士の稱號を得て、今は××病院の院長で、赤門出の秀才であつた。

まだ亮作などを知らない時のこと、――何でも新歌壇の集會があり出す二三年前のこと、――かの女は初めて咯血して、自分の郷里に近い鹽原温泉に病ひを養つてた。その隣室に醫科大學の學生が三四人勉强に來てゐた。碌な醫者とてもない山間僻地のことだから、からだに痛手のあるかの女はその學生等をどんなにか心頼みに思つたのだらう？學生等は學生等で、またまだうら若い而も美くしい處女に對して、好奇心と同情とを以つて毎日かはるがはるに見舞つたらしい。

時も丁度五月の末、したたるやうな新緑は全山を覆ふて、ほととぎすの聲が絶えず聽えてゐたさうだ。みづみづしい自然がお互ひの青春奔放の血を一層にそそり湧かせたことは、今から想像してもあまりがあらう。

禮子さんはやがてそのうちの一人を選んで、敬虔な感謝の手紙に切ない戀をも洩らした。すると、その男からも熱烈な返事が來たのであつた。そして二人は暫らく手紙の上で互ひの戀を取りかはしてゐた。

禮子さんはだんだん鹽原にはゐられないやうな切なさをおぼえて、東京の或病院へ這入つた。男の方はまたいよいよやがて大學を卒業するばかりとなつた。然し亮作が二人の成り行きを推察したところでは、男は禮子さんの病氣を、――いよいよ結婚するとなると――傳染の恐れがあるから、おそろしくな

つたのだ。かの女の容貌やその親の身ぶんから云へば、人の金で今日病院を建てさせて、その院長に成りすましてゐると云ふ男には、さう申しぶんがあるべきではなかつたらう。禮子さんが今日病氣の爲めに多少のひがみ根性があつたり、同病相憐れむの意地づくを發揮した時があつたりするのは、尤ものことだ。

いのちには少しも別條のない近眼の爲めにさへ、亮作の如き男はどれだけ世間をひがんで見るやうになつたか？まして人間のうちで最も弱い女のことではないか？

かの卒業まぎわになつた男が餘ほど冷靜になつてからは、かの女から出す三度の手紙に對して僅かに一度しか返事が來なくなつた。そして僅かに來るその一度も至極簡單に「おからだを大切にして下さい。養生次第でなほりますから」などであつた。

愛憎の念に強い禮子さんとしては、先方の態度が憎くなればなるほど、自分の肉をちぎられるほどの戀しさがいや增しに增した。逃げ腰の男は危險が刻々に身に迫るのを覺えて、大學を出ると直ぐ、留學にかこつけて獨逸へ行つた。

「あの時のことはまだ忘れませんよ。出發の日が分つてましたので、横濱まで行つて何とかひと言でも皮肉を云つてやらうとしたけれど、どうしてもわたしの入院してた院長が外出を許して呉れないので——もう、わたしは倒れて死んでもいいと思ひましたのに、看護婦がそばで離さなかつたのですもの。」

何でも、ひと晩中泣き明したその結果、翌朝、熱が四十一度にのぼつて、院長を驚かしたのが、まだしも江戸のかたきを長崎の腹いせであつたさうだ。

禮子さんはこの話を亮作にした時には、隨分亢奮してゐた。冷靜のやうで亢奮し易い、皮肉でゐて溫情に富んだ、理智的でありながら感情家の禮子さんは、孔雀のやうな誇りと鳩のやうな優しみとを持つてゐる。

『なに、ね、わたしが恥ぢをかかせられたのですから、こんなお話も出來ますの。』

それまでをくびにも出したことの無い話を、すれからしの年增同樣に、平氣でするやうになつたのも、一たび人妻たる經驗を經て來た爲めだらうと思ふと、亮作はちよッとかの女をいやになつた。が、かの女の缺點は病氣ばかりだ。病氣の爲めに比較的に自由に獨身でとほせた時の禮子さんには、殆ど男の友人どもばかりであつた。渠等の間に在つて、かの女は實に一種の女王であつた。かの女を八方から取り卷いた澤山の男子のうちで、一人としてかの女に對して戀を思はなかつたものがあるであらうか？亮作の知つてる範圍に於いても、それを露骨に發表して失戀した男は五六人もある――かの矢部もその一人であつたので、今では、禮子さんのことはちッとも口に出さない。

『わたしは誰れにでも好意を持つて、神聖につき合ひたいの。』禮子さんが一方で斯う云つてる他の一方には、

『八方美人』、『妖婦』などと云ふ惡口や怨言が聽えた。

かの女はとう〳〵結婚か自殺かと云ふ苦しいはめに落ち入つて、そんならいッそのことにと決心したのは今年で七ヶ年の同棲で死に別れたかの青年詩人にであつた。

『決してわたしから戀したわけではないのですよ。でも、夫婦になつて見ますと、奇體に愛情が起つて

來るものでして、ね。』

こんなのろ氣をかの女夫婦の前で亮作は眞面目に聽かせられたこともあつた。

一〇

自分ばかりが先き立つのはいやだと云ひながら、十分の未練を殘して永眠した所天よりも、殘酷に棄てて逃げた男の方が、今となつては、禮子さんにはもッと思ひ出されるのであらう。矢ッ張り、初戀は一番忘れられないものか? それとも、自分を棄てた男でも、いまだに生きてる方が切實に感じられるのか?

して見ると、生きられるだけ生きてゐる方が禮子さんにだッてもそれだけ接近してゐられるわけだ。と考へながら、亮作はゆふがたになつて、かの女の勸めた食事を受けた。そしてかの女が晝めしの時に殘した赤飯をも——もう、かの女は喰べぬと云ふので——自分の腹に入れた。少しは氣味が惡かつたが、かの女がそれを達てすすめるのを喰べないと、かの女の晝間からの機嫌を損じはしないかと思つたからである。

その晩も、十時近くまで話し込んで、やッとそこを出た。小石川から芝まで歩いて行かねばならなかつた。がま口の中から電車賃を片道買ふにしても、まだ一錢足らなかつた。渠は話をしてゐる間もそれが氣になつたので、今夜ばかりは早く歸らうと思つてたのに、かの女の愛相に引かされて、つい〳〵長ッ尻をした。その癖、かの女に電車賃の不足を貸してくれとは云ふ勇氣がなかつた。

渠は外に出ると、俄かに非常な寂しさに亢奮してゐた。あんな奴などと、たとへかの矢部にはあざ笑はれたとしても、もう二度と再び行くつもりはないから、かまはない。が、あの利口な禮子さんが、こちらのいつまでも長ッ尻をするのを見て、――おもてではよくもて爲して呉れるが、――矢ッ張り、こちらをあり振れた野心男と見て、人の亭主の明き巣ねらひとでも思つてはしなからうか？

そらには、十二三日頃の月がぼッとかさを着て現はれ、近く雨のあることを知らしてゐる。何となく落ち付いた、しんみりと物の考へられさうな、なつかしい夜である。どこからとなく、若葉の匂ひもかがれて、じッと耳を澄ませば、土の下を流れる泉の音が聽えさうな靜かさだ。

初めには、芝までの道程を考へてうんざりし、どこかそこいらの道ばたにでも倒れてやらうかとまで棄て鉢になつたが、街へ出るとまだ割り合ひに賑やかなので、勇氣も出たのである。

亢奮した頰のあたりを空氣がひや〳〵と撫でる。だん〳〵と氣持ちよく歩かれた。すた〳〵歩きながら、自分の横や後ろからさす光りが投げる自分のうすい二つ三つの影法師を見ると、それがもッと、もッと澤山に分れて行つた時が自分の死ではなからうかと思はれた。影法師は絶えず自分に伴つてるのだが、それもいつかは一度この地上から消える時があるのだ。然しそれが消えたからとて、依然として笑ひ、興じ、飲み、喰ひしてゐるものはあるだらう。默つて死んで行く者の身が如何にも馬鹿〳〵しい。

『僕はどうしても生きて働く。死んでたまるものか？少くとも、まだ禮子さんよりは健康だ！』こんな奮發も、然し、ただ一瞬間のことであつた。亮作の眼の前にはこれから歸つて行くいとこの家のありさ

まがあり〳〵と見える。

むさ苦しい四疊半、垢でうすぎたなくなつた唐草模樣の煎餅蒲團、いとこの侮蔑の顏、不潔な床場——それが自分の身を休める世界かと思ふと、矢部や禮子さんの前で高尚な尤もらしいことを云つた自分を恥かしくなつた。

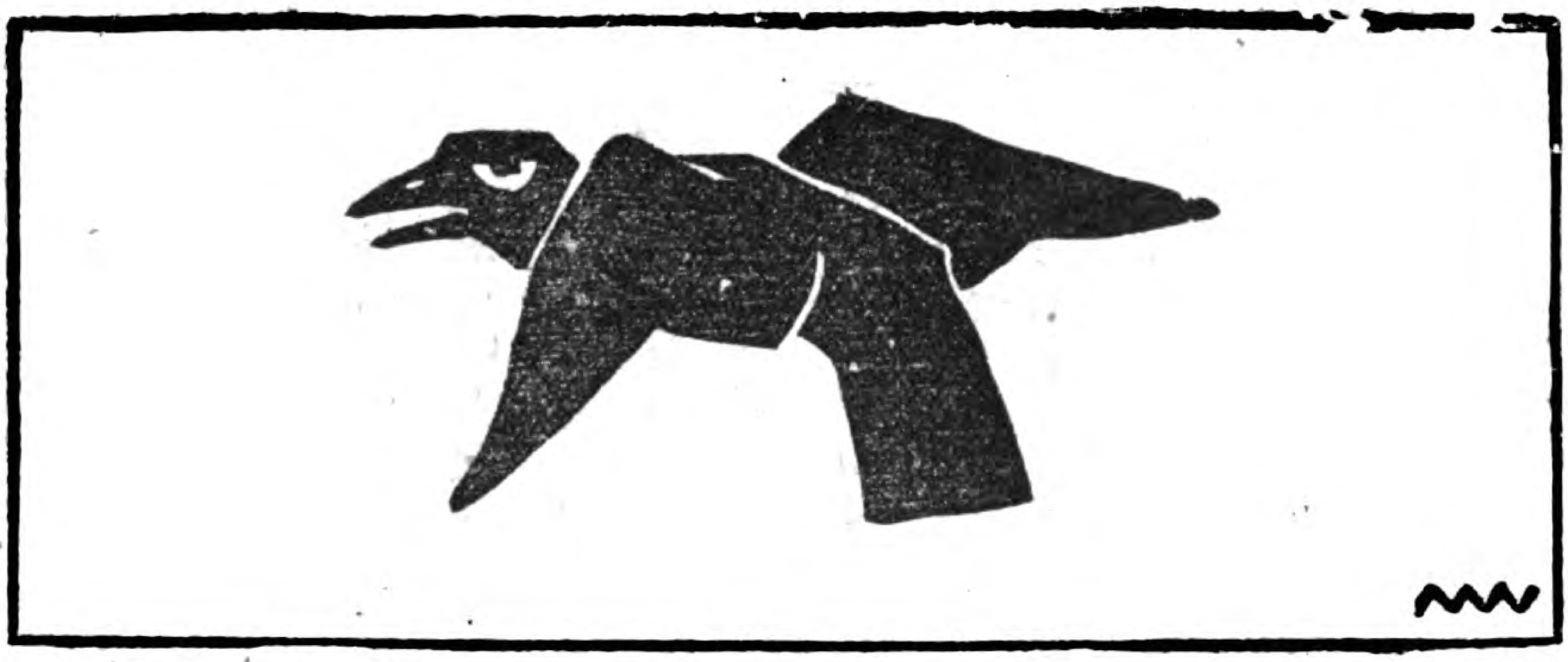
そしてけふ一日にしたことや云つたことがすべて餘計なことであつたやうな感じがする。

全體、自分はこんなことで——

『あッ！』思はず出た叫びは、外へは低かつたが、自分のどん底から天邊まで響き渡つた。穿き物の鼻緒が切れて、横ざまに倒れ、いやと云ふほど左りの胴ッぱらを地上にうち付けた。

『ふ、ふん』と笑つて、通り過ぎた男があつた。その男をうす暗がりの中からにらみ付けて見送りながら、そッと自分のつまづいたあとを見ると、道ばたに横たへた材木のはじであつた。自分は道の眞ン中を歩いてるつもりでそんなところへ片寄つてたのだ。

起きあがつて、ぬげた方の下駄を拾ふ時、くら〳〵と目まいを感じた。で、かたわらの材木に腰をかけ、じッと暫らく目をつぶつてゐたが、脇ばらがしく〳〵痛み出したので、そこへ手を當てると、自分の心臓の激しい鼓動がその手に傳はつた。（完）



自畫像を描くまで

小川未明

一

差出し人の名が書いてない手紙が、何處を何う廻つて來たものか、幾枚かの附箋によつてやつと彼の下宿に着いて、其の手に渡つた時、彼は窓際に凭つて茫然と赤く太陽の熱に色づけられた夏の空を眺めてゐた。

其の手紙はぐちや〳〵になつてゐる程、多くの人手に渡つたと見える。封筒の表はうす黒く汙や、手垢が付いて汚れてゐた。而して、墨色のうすい、醜い異様な形をした文字を一層氣味惡く感じさせたのである。彼は自分の姓名がはつきりと書かれてゐたので、まさしくこの手紙は自分に宛て誰からか出されたものであると思つて、兎も角も封を切つて、中を檢ためて見た。

封筒の中には、色の變つた數種の半紙の小片に、一寸見たゞけでは分らな

「知らないよ」と彼は言つた。

「先刻、お前を負つたり、抱いたりして遊んでゐたでないか。あれから榮吉は何處へ行つた？」と祖母は、やはり聲を少しく和げて、顏を差し覗きながら問ふた。

「知らないよ」と彼は同じく答へた。而して彼は子供心ながらに、榮吉が歸る時、何となく悄ぎ込んで下を向いて、元氣なく町の方へと行つた後姿を思ひ出して、祖母が榮吉はゐなくなつたと言づたのと考へ合せて、不思議に感ぜられたのである。而して、其れには何か深い仔細があることゝ思つた。

　榮吉は其頃三十二三の若者であつたが、親類中での怠惰者として、皆なに除者扱ひにされてゐた。榮吉を產んだ眞の母は、彼がまだ其の母の顏を記憶に止めない幼兒の時分に死んでしまつた。而して榮吉は繼母の手によつて生長したのである。けれど學校も中途で退いてしまつて、何もすることなく、每日ぶら〳〵として遊んでゐた。而して、店で商ひした金を持出しては女を買ひ、酒を飮むことを習つて、いつしか其れに溺れるやうになつた。親類の人々は時々榮吉の家に集會して、皆なの口から、皆なの前で彼に對して意見をしたことも一度や、二度でなかつた。最後に彼は其の町の郭にゐる女を受出して女房にしてくれと賴んだ。其時は既に彼の父親は死んで此世にゐなかつた。繼母はこれを親類に謀つたのである。しかし何れも昔氣質の人々等で、この話を聞くと不埒な奴だと言つて、中には家から勘當してしまへと息卷いた者もあつたが、其れをするに至らぬ前に、榮吉はたゞ一通の遺書を置いて、何處へとなく姿を隱してしまつたのである。其の遺書の中には、自分はもう死んでしまつて、此世に居らぬものと思つてくれいと書いてあつたさうだ。ちやうどこの日のことである。祖母は彼方、此方をたづねまわ

つて。——咽喉を涸らしながら、

「あんなにお前を平常可愛がつてゐた、榮吉が何處かへ行つてしまふと言つて、見えなくなつたのだ。先刻まで、お前を負つたり、抱いたりして遊んでゐたでないか。お前に何處へ行くとも言はなかつたか？」

と祖母が幾度も重ねて聞いたのである。

「知らないよ」と彼は全くさう答へるより他に返答が出來なかつた。

「榮吉の姿を見たら、默つて、直に家へ知らしに來てくれよ」と祖母は言ひ殘して、二たび慌しげな樣子付で町の方へ引き返して行つた。後に獨り殘されて、彼はいろ〳〵なことを思つた。

祖母は平常に於ても、比較的他の人々のやうに心から榮吉を憎んでゐないことを彼は知つてゐる。而して、草原の中に茫然として立つてゐると、もう夏の日も夕暮方に近づいて、羽子の飴色がつたのや、純白に透いて見えるのや、さま〴〵な蜻蛉が幾つも、幾つも空を飛び廻つてゐる。彼は頼りなく其の影を見上げながら、あの頭髮の柔かく縮れた、圓額の眼の珠の黑くて大きい榮吉の顏貌を心の眼に描いてゐた。入日は鐵道線路の上に赤い炎の色を染めて、やがて其れが夕風に洗はれるやうにうすれると、だん〳〵紫色の花の上が暗く蔭つて行つた。而して、彼方では電信柱の上に高く圓を描いて飜へりながら、燕が啼いてゐる。而して、其の日も永劫に變りのない夏の夕暮方のやうに、北西の沖の方の空の色が淡紅に色づいて、靜かに、悲しげに暮れて行くのであつた。

「小父さんは可哀さうだな。何處へ行つてしまつたのだらう」と彼は眼に一ぱい涙を溜めて誰に向つて訴へるともなく獨りで言つた。而して、時々家へ遊びに來ては負つたり、蟬を捕つてくれたり——も

し自分がちやうど晝寐をしてゐる時だと、そつと自分を起さないやうにして枕許へ、眼が醒めた時に自分を喜ばせるために捕つて來た蟬の上に味噌漉を被せて置いて歸つた――榮吉のことを思ひ、胸が張り裂けさうになつて、大きな聲を出る限り出して、

『小父さん！　小父さん！』と呼んだ。

けれど、この子供の叫聲は、廣の空の下で眞に僅かな響きしか傳へなかつた。彼方に立つてゐる木立には、其の聲が全く聞えなかつたもの丶やうに、やはり木立は他の空想に耽つてゐるらしく默つて、昵としてゐた。而して、遙か入日の其の後に落ちた國境の山々は、さながら紫水晶を碎いた塊の如く、其の色が冴え渡ると共に、自分を手招きして、莞爾として微笑む姿が濕れた瞳の中に映つて來た。

　榮吉の行衛が全く分らなくなつてから、數年の後に、繼母は病氣に罹つて死んでしまつた。店の方は榮吉と腹ちがひの弟が立て行くやうになつた。其の弟は無口な素直な性質で人々から愛せられた。左の眼の下に小さな黑子のあつたことを彼は覺えてゐる。――しかしこの弟も彼を抱いてくれたことがあつたが、何となく榮吉に對する程の親しみを感じなかつた。

二

『……皆な女で失敗するから、お前もどうか女で失敗しないやうに、……』と書いてある紙片の上を昵と見詰て、彼は過去を追懷したのである。

　下宿屋の庭頭には、朝顏の葉が垣根に絡んだま丶凋れてゐる。紫色の小さな花が獨り生々として、夕暮方を待つてゐるやうに次第に、衰へ行く日の光りを浴びながら、空を見上げて立つてゐる。ちやうど

此時まで止んでゐた涼風が微かに吹いて來て、すべての草木を訪れると共に、其の紫色の花の咲いてゐる草の葉を動かした。蜩の啼聲も聞えて赤銅色の雲の峯がます〳〵東北の空に擴がり始めた。

彼は机に向つて、今、自分はどんな境遇にゐるだらうかと兩眼を閉ぢて考へた。彼の女が去つてから、全く深い底の知れない憂鬱な沼の中に全身が陷つてしまつて、脇見も出來ずに今日まで其の女の事ばかり思ひつゞけて來た。自分は今迄のやうに勇氣もなく、感激もなく、また何も手に付かず、毎日することもなくたゞ重い煩はしい惱ましい日を送つてゐる。而して、このまゝに暫らく過ぎるなら、たゞ墮落するより他に自分の運命の途はないことが考へられた。

『我族の統は皆な女で失敗するから、お前もどうか女で失敗しないやうに……』と書いてある榮吉の手紙を見ると、今更のやうに怖しさに體が戰くのである。彼は思ひ出しても恥かしいやうな、自分のこれまでの物狂はしい態が眼に見えるのである。

ヒステリーの症狀が見えてから後のことであつたが、彼女は何かの時頭髮を亂しながら騷ぎ廻つて、塗箱の中に入れてある寫眞を持ち出して來て、彼女の姿の寫つてゐるものは一枚殘らず悉く寸々に引裂いてしまつた。其等の中には、彼女がまだ十三四の時分、故郷にゐて妹や、弟と共に撮つたのもあれば、また東京に來てから、未だ彼と互に知らない前に撮つたのもあつた。彼には女の昔の姿が哀れを帶びてゐるので一層戀しかつた。女が其等の寫眞を引裂くのを見て、彼もまた怒つてゐる上に怒つて、『なんで寫眞を引裂くのだ。其れが何の役に立つといふのだ』と罵つたけれど、彼女の爲すがまゝにして置いて、これを傍で見てゐるばかりで止めなかつた。

「妾が居らなくなれば、寫眞など殘して置く必要がないから、皆な引裂いてしまひます」と熱した息を赤い唇から吐きながら女が言つた。しかし其の時の喧嘩は無事に收つたのであつた。なんでも其の爭ひの原因は、ちよつとした言葉の行き違ひからであつたやうだが、彼女は既に二人の間がこの先き長くつづかなからうといふ疑心のために狂つたのであつた。彼女は血を吐いてから、男の感情が日にまし離れて行くのを感じたのである。

「あの時、なんで寫眞を皆な破つてしまつたのだ」と、後日になつて、彼は女に言つたことがある。而して、彼はあの時、無理にも女の手を押へて止めればよかつたと後悔した。其れ程、彼女の十三四の時分の姿や、まだ彼女を知らない前の彼女の姿は優しく、可憐らしくて、寫眞にあつた面影を忘れることが出來なかつたのである。

「あんなものいりませんよ。昔の寫眞があつたつて、何うしませう」と其時彼女は答へて、却つて美しく若く、生々としてゐた空想や夢の多かつた時代を怨むやうな樣子が見えた。而して彼女は急に鬱いで、下を向いて何か考ふるやうに默つてしまつた。

つひに女と別れてから後、彼はまた彼女に似た女を見なかつた。たまたま西洋の雜誌の中にある女の寫眞などで、眼許だけが彼女に似てゐるのを見たこともあるが、人種が異つてゐるせいか其の寫眞の女に對して、何等の愛着を惹かなかつた。彼はまた賑かな明るい夜の公園から脫け出て、狹い深い暗い巷に足を踏み入れて、軒毎に居並んだ、白粉を塗つた若い女の顏を覗いて、彼女に似た女を探したけれど、其の勞も空しかつた。

町の繪はがきやといふ繪はがき屋を獵つて、店頭に飾つてある女の寫眞を見たら、彼女に似た顔がないものでもない。――形がなく、たゞ幻影だけでは、彼女を描くことが出來なかつたのである。其れから、彼は殆んど日課のやうに、寫眞屋の前に立つて、其處に懸つてゐる額の中に挾んである女の寫眞を眺め、また町から、町へと繪はがき屋を探し歩いて、數多き女の寫眞に見入つた。

かうして街を歩き廻つて、下宿に歸る時には、いつも二三枚の女の寫眞を袂に入れて來た。彼は宿に歸つて二階の自分の室に坐ると寫眞の入つてゐる袋を机の抽斗に收つて、またぼんやりとして眼の前にちらつく捕へ難い影に憧がれて欝ぎ込んだ。夜になつてから、彼は抽斗の中から先刻町で求めて來た女の寫眞を取り出して眺めた。この寫眞の女は何處の者とも、また其の名すらも知らない。また感情の上からも、生活の上からも、全く自分に交渉のない人間で、たゞ女であるといふだけであつて、仔細に見入れば、何處一つとして彼女に似てゐるところがなかつた。彼は繪はがき屋の店頭に立つて、この寫眞を見た時に何處となく彼女に似てゐると思つた自分の觀察眼を疑つたのである。いづれも卑しい女等の顔であるが、中には二度と見るのも厭らしいやうな下卑た賣女の寫眞を買つて來たこともあつた。大抵彼が彼女に憧がれて、似てゐると思つて買つて來た寫眞は引裂かれて、机の傍にあつた屑籠の中に入れられてしまつた。而して、彼はいつまで經つても、彼女の面影を偲ばしめるやうな描くべきモデルに出遇はなかつた。

既に去年の秋となつた。彼は街を歩いてゐるうちに日が暮れかゝつた。一軒の繪はがき屋から外に出た時は、彼の足は痛んで心は疲れてゐた。彼は自からこの色情倒錯狂に似かよつた自分の姿を哀れにも

また淋しくも、また傷ましくも思つたのである。冷かな秋風は淅瀝として巷を吹いてゐたが、いつしか細い身に染みるやうな雨が風に混つて降り出したのである。彼の著物は黒く雨が染み徹つて、濕れ鼠のやうになつて、しばらくある家の軒下に佇んでゐた。燈火の光りは四邊の店頭を彩り、また電車路に添うて、人々の姿が慌しげに亂れてゐたけれど、其等に關係なく何處か心に刻み込むやうな暗い愁しみが襲つて來た。

彼は其處に立つて、眼の前に映る雨の秋の暮方の街の景色を眺めてゐるうちにも、彼女の面影がちらついてゐた。彼はこの社會に何れ程多くの人間が住んでゐるか知れないと思つた。而して、單純な心で其等の人々を眺めた時には、何の人も同じやうにしか眼に映らなかつたが、心して見る時には、一人として同じ顏をしてゐる人もなく、また一人として同じ感じのする人もなく、彼等は悉く異つた意志と、感情を持つ人間であると知つた。斯くて、彼は人生の孤獨であること、而して、彼女以外にこの世界に於ては、同じ彼女を見出すことが到底出來ないことを感じたのであつた。白いうす絹のやうな靄は、一面に街の建物の突き出た處、落込んで窪んだ處を這ひ廻つてゐる。此時、彼は雨を透して、白い靄の中に霞んだ時計臺の仄白く硝子の面の陰りかゝつた盤面に瞳を向けて、二本の黒い針で示された時間を辛うじて讀み分けたのである。而して刻々に無限の未來に向つて遠く過ぎ去りつゝある彼女との關係を思ひ返して、心の矛盾と疑惑と愛着のために泣いたのであつた。

其れは、實に彼女と別れてから、未だ半年と經たない後のことであつたのである。彼女は別れる時に、「妾はこの東京に居ません」と濕れた眼を此方に向けて言つた。

「何處へ行く」と彼は其時問ふたのである。
「何處へ參るか知れませんが、東京にだけは決して居りません」ときつぱり言つたのであつた。

三

彼は眼を閉ぢて、もう決して二たび歸り來らない昔を思つた。女には赤い袖口の色と、紫ばんだ紺色の絹の着物との映りが非常に好かつた。二人は、ある靜かな場處のある古びた家の離れ家を借りてゐた。二人はかうして一しよになるまでには、相應の心配と苦しみと努力があつた。けれど其等はかう二人が一しよになつてしまつた後ではすべて消え果てた惡夢のやうに、今となつては壓す程の力もなかつた。其の代りに彼の心には新たな惱みが湧いて來た。

彼は女があてもなく一處を見詰て思ひに沈んでゐる樣子を見た。其れはたしかに彼女の心を惹く目に見えぬ力が何處かに存在することを思はせたのである。この樣子を時々見た彼は、自分等二人の間には何の秘密もない譯である。其に女がかうして、時々何をか考へ、思ひ、默然として鬱いでゐるのには仔細があることであつて、打ち開け難い何等かの秘密があるのだらうと思つた。而して、彼は自身の場合を考へたのである。自分は思つたこと、考へたこと、またすべきことについて、殆んど彼女に對して秘してゐることは一つもない。其だのに、彼女には自分に對して、何か秘密を胸に抱いてゐるとしか考へられなかつた。

「お前は、何を思つてゐるのだ」と彼は險しい眼付で、橫合から突然彼女に向つて詰つた。すると彼女はこの聲で驚いたやうな樣子をして、

『いえ、何も思つてゐません』と淋しい笑ひを無理に造つて言つた。
『お前には、何か俺に對して隠してゐることでもあるのだらう。俺はお前にすべてを打ち開けた筈だ。何を考へてゐたのか皆な聞かしてくれ』と彼は疑惑に胸をわなゝかせながら言つた。
『だつて何にも思つてゐないんですもの、よくかうしますのは、妾の癖なんですもの』と彼女の顔色は青ざめて、睫の長い眼の中は青い星のやうにうるんで來た。
『何か思つてゐるのと、たゞぼんやりとしてゐるのと、其れ位のことは俺に見別が付く。お前は時々かうして、何か思つてゐる。いつか一度お前に開かうと思つてゐたのだ。皆な其の秘密を聞かしてくれ。』と彼はしんみりとした調子で言つた。
『妾はあなたのことより他に思つてゐるものはありません。ねえ、そんなことを何うか言はないで下さい。』
『お前は、眞に俺を愛してゐないのだ』
『………。』
『お前は他にも思つてゐる人があるのだらう……』と彼は眼の中を眞赤にして叫んだ。
女は此時たゞ默つて、泣いて彼の膝の上に俯伏した。
彼女がかうして時々、茫然として、物思ひに沈んでゐるのを見ると、彼の心は堪らなく疑惑と不思議な嫉妬の念に責えたのである。而して、二人がいつしよになつてから、笑つて、平和に日を暮らした日

よりも、悶えと惱みと苦しみに送る日の方が多かつた。

開かれた窓から覗く五月の夜の空は濃紫色に匂つて、しかも何處やらに不安の瞳を潜めてゐる。彼女は日暮方になると、窓の處に立つて、遠い空を眺めて、物も言はずに默つてゐた。彼方に建物がある。其の壁板の蔭に桐の木があつて、黄昏の空氣に其の花の甘いやるせない情をそゝる香りが漂つて居た。女はいつまでも窓の處から動かなかつた。彼はまた燈火も點けずに、描きかけた畫の前に坐つて、女の樣子を見守つてゐると、いつしか、女の立つてゐる窓から覗いた夜の空色の美しさに心が魅されたのである。――自然は和かで、永遠に窮りなく美しい。眞に僞りなく常に誠を語つて自分を慰めるものは、たゞ自然あるばかりである――と思つた。同時に彼は秘密を抱いて、打ち開けない女の可憐らしい姿を見ると斷ち難い愛着の餘りに堪へ切れない怨みと怒りの炎は燃えた。彼はいきなり走り寄ると女の黑髪を掴んで、其處に捻ぢ伏せて、力まかせに擲ちつゞけた。

『さあ、秘してゐることを皆な言つてしまはないか。默つてゐると殺してしまふぞ』と彼は熱い息が咽喉に燒付くやうに感じながら叫んだ。

いくら擲つても、また賺しても、女はたゞ默つて、闇の中で泣いてゐるばかりであつた。彼は女の心を何うすることも出來なかつたあまりに、胸を壓し付けた暗い重い鉛のやうな愁へに沈んで、自分もだん／＼氣が遠くなつて行つた。

其後も、彼女が何か心に秘してゐることがあるといふ疑ひのために、彼は女を責めた。しかしいつも其れは徒勞であつた。彼は漸く二人は全く異つた自由な魂を持つた別々の人間であると氣付いたのであ

る。

から考へると、たとへ二人は同じ家にいつしよに住んでゐても孤獨である。而して、いついかなる出來ごとで、また互に別れて遠く隔つた處にゐるやうになるかも知れないといふ不安の念が、肉を刻むやうに彼を苦しめたのである。

蒸熱い夏の夜であつた。うす暗がりの中で罵る男の聲だけが聞えてゐた。室の隅に置かれた鏡臺の硝子の面だけが仄白く底光りを湛へて、窓の外のうす青味を含んだ空に音もなく立つてゐる木立の緑を冷たく映してゐた。赤い夕燒が消えて、蟬の聲が遠くに去つて全く聞えなくなつてから、あまり時は經たなかつた。

男の聲が杜絕れて、しばらくすると、

「そんなに疑ひ深いのは、きつとあなたにもさういふことがあつたからなんでせう。あなたは過去に他の女を知らなかつたと誓ひなさつたけれど、皆な妾を騙したんだわ。」と女が言ふ聲が聞えた。

「おや、お前の秘密を白狀してしまへ」と男が迫るやうに言ひ寄つた。

「妾は他に誰も思つてゐません。ほんたうに妾の腹を斷ち割つてご覽なさいよ。いつそ妾は頭髮を切つてしまふか知らん」と女は齒をぎり／＼さして言つた。

「切るなら、勝手に切つて見せれ」と男は皮肉に言つて、冷笑つた。

ガタ／＼と鏡臺の傍に驅け寄つて抽斗を開いたかと思ふと、常に元結を切る時に使つてゐる鋏を手に取つた氣はひがしたので、彼は慌て女の爲ることを止めやうと自分も走つて行つたが、もう遲かつたの

で、五寸ばかりも女は手早く頭髮を解いて、髮を半途から切り落してしまつた。而して、彼女はこの髮の束をば男の前に投げ出した。疊の上に髮の束が落ちた重みのある音が男の耳に氣味惡く入つた。

彼は、怖しいものにでも手を觸れるやうな氣持で、其の生々しい黑髮の一束を取り上げた。而して、つい刹那の前の今まで女の肉から生いてゐた黑髮であると思ふと、其の髮の切口から、ねば〳〵した血が吹き出てゐさうに感じて、指頭に付いてゐはしないかと疑ひながら、彼は髮を持つた五本の指を拳に固めて、徐ろにまた指を解いて見た。

「俺が惡かつたのだ。許してくれ」と彼は急に聲を震はして、女の前に頭を垂れた。

四

二人はこれから互ひに疑はずに仲よく暮らさうと心から打解けて語り合つた。而して、其夜、二人は女の切つた黑髮の捨場處に困り苦しんで、いつそ河の流に沈めてしまつたら忘れられるといふ考へで、町の外郭を流れてゐる河まで捨に二人は家を出かけた。女は自分の體に着いて朝夕手に觸れて、喜びと悲しみのある毎に撫て來た黑髮を、今は切り離されたけれど、やはり自分のものだといふ心持で彼女は白の半紙に包んで大事さうに抱いてゐた。

燈火の明るく點いた町の中を歩いて行くと、だん〳〵と燈火が疎らになつて、町の中が暗くなつて行つた。空を仰ぐと、もうやがて秋にもならうとするので、無數の星影が遠い遠い奧深い靑い空の彼方で輝いてゐる。人々が町の中に立つて處々に黑く集つて、空を仰ぎながら、何か指して語らつてゐる。彼は始めて、新聞にちやうど今頃から、西北の空に當つて、五十年目に天の軌道を廻つて來た彗星が現は

れると書いてあつたのを思ひ出した。二人もまた歩きながら、空を仰いで見たが、無數の金星、銀星が默々とし瞬いてゐるばかりで、彗星の姿が眼に入らなかつた。而してたゞ白い天の河が帶のやうに天體を圓く廻つてゐた。

二人は町を行き盡してから、淋しい暗い田や圃の間の小路に差しかゝつた。やがて、前に當つて、草や、雜木の影が黑く浮き上つてゐる下の蔭にさゝやく水の流を聞いた。彼女は佇んで、下を見詰てゐたが白紙に包んだ黑髮を水の底に向つて投げ入れた。其の時、二人は耳を澄して、水に當る音を聞き取らうとしたが、其の音はあまりに微かであつたと見えて耳に入らなかつた。

『あの髮は何處へ流れて行くだらう。』と彼は歸り路にかゝつた時、獨り言のやうに言つたのである。女はこれには答へなかつた。

不意に、女は、

『あれご覽なさい。あれが彗星ぢやないこと』と言つた。彼は、びつくりして其の方を振向いた。あちらの黑い森の頂きから三四尺離れた處に、暗い空に、黃色な一固りの霧のやうなものが現はれてゐた。彼はこの不思議な大空の現象を凝視してゐた。けれど萬象は永遠に秘密を語らずに四邊が聲もなく、寂寞としてゐた。彼は今夜、この彗星を見るのを何かの凶事のある前兆でないかと思つた。而して、二人の間もいつまでつゞくだらうといふやうな不安な感じが抱かれた。彼は暗い心のうちを彼女に向つて語ることを何となく空怖しく思つた。

『この邊まで來れば、よく見えるものを、誰も來て見てゐるものはありませんね』と彼女はやはり、白

い顔を其方に向けて、しばらく彗星を見守つてゐた。彼はうす闇を透して見える白い顔を冷たく感じた。

「この次にあの星がこの世界を照らす時分には、二人とも居らないのだよ」と彼は言つた。

彼は垣根の際に植つてゐる青木の實が色づくのを見た。外には寒い風が吹いて、秋も老けたのである。彼女の顔色は日にまし青白くなつて、血の色が頬から消えたかと思ふと、また際立つて花のやうに冴えることもあつた。この頃ではあまり彼は女と對ひ合つて話もしなくなつた。女は獨りで火鉢の傍につくねんとして、涙ぐんで考へ込んでゐる日が多かつた。ある日彼は無理に女を醫者にやつた。歸るとやはり胸の病だと聞いた時から、彼は女の病氣を怖れるやうになつた。

彼は獨りで机に向つて、庭頭の垣根に吹く寒い北風が、枯れた草の葉を搖るのを見詰ながら、死のいかに暗黒であり、絶望であり、惨酷であるかを考へてゐたのである。彼は戀よりも、愛よりも、死の力を怖れたのであつた。

窓の外に降る冷かな雨の音が聞えてゐた。一間の裡を明るく照らす燈火の影は、たえず脅えるやうに獨りでに戰いて、力が弱かつた。この時、女は急に咳入つたが、白い紙の上に鮮紅な一固りの血を吐いた。紙は血の色で其のまはりだけが、濕つてぼんやりと染んだ。彼に傍にゐて、これを一目見ると身の毛が慄つて、暗く心を締め付ける怖れのために顔を反けたのであつた。

「ねえ、あなた妾はもう直に死ぬんですよ」と女はしんみりとした聲で彼に話しかけた。

其れから四五日目に、彼女は剃刀で咽喉を切らうとしたのを、彼は危ふく其の手を押へて剃刀を採ぎ

取つたのである。其時、女は泣きながら、

「あなたが妾に故郷へ歸つたらなどゝおつしやる心は皆な分つてゐます。こんな病氣にかゝつて、あなたに嫌はれると知りましたから、妾から別れて何處かへ行つてしまふかと思つてゐたんです。えゝ、ご心配なさらなくとも別れて上げますよ」と疊の上に俯伏して、いつまでも〳〵氣が滅入るまで咽んで居つた。

彼女がヒステリーになつてから、彼は一層別れた方が却つて、氣が休まるかとも思つた。而して、其等の感情が遂に二人を不自然にも永遠に遠く隔てしまつた。

彼女と別れてから、三日目の晩方、町の藥屋の角で、彼はよく彼女に似た女の後姿を見たので、往來のはげしい人々を分けて、其の後を追うとしたが、其れと知つたものか、何處にか其の影は隱れて、見失つてしまつた。其れ以來、彼れ是れ一年にならうとするけれど、全く、彼は女の消息を聞かないのである。而して、今では寸時も彼女のことを心から忘れることが出來ない。

榮吉から手紙を受取つて、「どうかお前も女のために失敗せぬやうにしてくれ」とあつたのを見た時は、流石に胸がぎくりとなつたが、そんなことで、彼女の面影は彼の眼から取り去ることが出來なかつた。

依然として、彼は仕事も手に附かず、未練と愛着の裡に日を送つてゐる。而して、女の行衛が分らないまでも、彼女に似た女にめぐり過つて、この心の悲しみをしばしでも慰めやうとするはかない希望に繫がれて、夢遊病者のやうに、烈しい日に白く晒らされた路上にうろつき、巷の間をさまよつて、形のない影を追つてゐる。彼の藝術は日に荒んで行くばかりであつた。やがてまた秋の展覽會は近づいたけ

れど、彼は新しい氣勢を驅つて、清新にして氣概に滿ちた作品を描かうとはしなかつた。

彼は街の中を歩いてゐた。頭が重く、氣持が鬱陶しかつた。何を考へるとなく、いろ〳〵の空想に耽りながら歩いてゐた。彼と同じく路を歩いてゐる人は多かつた。けれど、誰も彼に對して注意するものもなければ、また彼がどんなことを考へつゝあるかといふことを知るものもなかつた。彼はこゝに思ひ至ると自分の存在といふことも、たゞ自分一人の意識に過ぎないと思つた。自分がこの世界から去つても、またかうして其等の一人として加はつてゐても、其處に何の變りも反響もないことを思ふと、眞に自分といふものゝ存在がこの自然界に對して殆んど無價値の如く考へられた。

此時、彼は目下の自身に何等思想上の冒險も無ければ、生活上の特異もないことを眞に恥かしく感じた。この世界には、はぢめから天才といふものもなければ、優れた人間といふものもない筈である。彼等はたゞ努力と精神上の冒險とによつて超越した力を勝ち得た結果であつた。彼等は刹那の生に於て眞に永遠の眞を掴み得た人々であつた。しかるに斯く感じながら、今、自分にはそんな勇氣も出ない。また希望も起らない。自身を考へて意氣地がないと思ひながら、この胸の女に對する苦痛を何うすることも出來ないのだと思つた。

彼はしばらく足を止めて、黑く水の腐れた濠の景色や、彼方に鬱然として、石垣の上に立つてゐる常盤木の森や、其の森の間に聳えた頭の枯れた老木の姿や、また濠の上の荷物を積んだ船や、水際の低地に重ねられた材木や、土管や、其他のものや、其の邊の一帶に白い埃を浴びた疲れた乾き切つてゐる瓦

甍の屋根や、狹苦しい建物などを心ありげに眺めた。是等から縺れ合ひ、溶け合つて空中に漂つてゐる一種の壓迫するやうな氣持をしみ〴〵と經驗した。而して、彼は心の裡に畫として描いて見たが、直に彼の燃えるやうな感情は其れを打壞した。

「藝術よりも、もつと自分の要求してゐる實感があるではないか。彼女も、戀も、華かな幸福もすべてこの短かい生きてゐる間の、しかもこの若い間のことだ。俺はこれがために墮落してもいゝから徹底して、飽まで醜い煩惱の犬とならう」と彼は自身に向つて言つた、燃えた瞳を上げた時は、この世界は眞紅な色で彩られて見えた。

電車通りについて、午後の光る路の上を來ると、日蔭のない四角の處に、燒けた煉瓦造りの建物の壁に脊を凭せて、赤文字で今晩の活動寫眞の外題を書いた燈籠を負つた、大柄なやはり人目に立つやうな赤の縞の着物を被た男が、額際に汗を結んで、鬱陶しさうに眼を暗くして往來を見詰てゐた。彼はこの人間の廣告を見るたびに、酷たらしく人間から自由を奪ひ、言葉を奪ひ、手足を束縛して、全然物言はぬ機械と化る文明の殘忍を呪はずにはゐられなかつた。

彼は眩しく光る空を望みながら、牛込の下宿の方へ歸つて行つた。中途で坂を上りかける左側の狹い店頭に五六人立止つて、炎天に頭を晒らされながら、何か覗いてゐるのを見た。彼は其の方へ歩き寄つて自分も覗くと、硝子の箱の中に幾疋となく蛇が木に絡んだり垂れ下つたりしてゐた。彼は近頃になつて出來た蛇屋であると知つた。つい先日まで此處を通つた時には、まだこの店を見なかつたと思つた。時勢はいつしか山中に棲む蛇まで都會で商ふやうになつたと考へながら、尚ほ其處に立つて、其等の人々

と共に眺めてゐると、箱の中に置いてある淺い水の中に、するくと木から下りて來て、細い黒い舌を閃つかせながら體を浸すのもあつた。其のたびに一固りとなつて木に絡んでゐる蛇の珠が、うどんの箸から解けかゝる時のやうに身動きをし始める。而して、其等の中には山で捕へられた時に傷がついたものか、もしくは互に咬み合つて怪我をしたものか青味を含んだ下腹の白い膚が破れて、赤く血が染んで肉の爛れてゐるのもあつた。青臭いやうな一種の惡臭がこの狹い店の裡に蒸れ返つてゐた。彼はまだ其の前を去らうとせずに、奥の棚の上に幾つとなく並べた硝子の罎の中に眼を注いでゐた。其の罎の中には赤い腹を出してゐもりが水の中を泳いでゐたり、また黄色な太いうなぎに似た河蛇が眠として罎の中にとぐろを卷いてゐた。またかたつむりや、ひるや、やもりや、とかげなどもうよくとして、皆んな罎の中で暑さのためにだらけてゐた。

此時、ちやうど小僧が外から紙に刷つた引札を幾百枚か重ねたのを店頭に持運んで來た。眼のぎよろりとした痩せたこの家の主人が其れを受取ると、店頭に立つてゐる人々に一枚宛渡したのである。彼は其れを見ると開店の披露で、是等の蟲類の功能書を仔細に書いてある。讀んで見ると、大抵は胸の病氣にきゝ、また子供の癇にきくと言つてある。中にも蛇は肺病の妙藥と書いてあつた。彼はこの店頭を去つて、歩きながら紙の上に眼を落して、この都會に蔓延する肺病のために、いかに其の患者が多くなり行きつゝあるかを知ることが出來た。而して、こんな商賣が遂に成立つに至つたのを知つた。しかし人間が蛇の生膽を呑むなどゝいふことが、果して進歩か、迷信か、異樣に感ぜずにはゐられなかつた。

彼は彼女ばかりがこの病氣に罹つてゐるのでないと思ふと、其のために彼女と別れたのを後悔する心

が湧いた。彼の女に對する未練はます〳〵募るばかりであつた。彼はどうかして女にめぐり合ひたいと思つた。而して共に短かい吾等の生を戀のために朽ちて行かうと考へた。
「どうせ人間は、いつまでも生きるものでない。仕事なんか何うでもいゝ。刹那の生をたゞ滿足に愛する女と共に送ることが出來れば、自分の幸福は窮りないであらう」と彼は思つたのであつた。

五

逝く夏を傷むやうに、うす綠色に冴えた空に何處か――寺のある邊の――森で鳴く蜩の聲が、磬を叩くやうに響いて、晝間の熱さで垣根の際に生ひてゐる草の葉が凋れてゐる上を訪れる風にも、昨日まで見えなかつた悲しげな細い冷たい光りがあつた。彼は下宿に歸つてから、窓際に來て、汗を拭きながら机の上を見ると、一通の封書が載せてあつた。彼は誰から來たのかと思つて、直に其れを取り上げて見ると榮吉の義弟から來たのである。
先日、彼は榮吉が小樽から、十幾年振かで便りをして、腦が惡くて難儀をしてゐる。ついでの折、故鄕の方へさう言ひ傳へてくれとあつたので、早速、彼の義弟に宛て手紙を出したのであつた。彼は恐らく、其れについての返事であらうと考へながら、封を切つて、窓際に腰をかけながら讀んだ。
――兄はもう死んだものと思つてゐました。家出してから、幾年になりますか其の間一度のたよりもありませんかつたので、兄が家出した日を命日と思つて、毎月其の日には燈火を捧げてゐました。しかるに先日あなたからのお手紙によつて、兄が北海道に生きてゐると知りました時は、驚きやら、なつかしやらで、全く夢ではないかと疑ひました。しかも腦病で難儀をしてゐると聞いて、早速、旅費なり、藥

を飲んで養生する金なりを送りたいと思ひましたけれども、たゞ小樽としてあるばかりなので、何處へと送る見當も付かず、其内には此方へなり、またあなたのところへなり二度便があらうと思ひ、其れを待つことにいたしました。ところが、四五日前、小樽から、兄の知つた方だといひまして、突然兄の死を知らせて來たのでご座います。

兄はもう二三月前から、氣が狂つてゐて、普通の容子ではなかつたさうです。其等について、別に委しいことは書いてなく、全く知り兼ねますが、たゞ平常から兄はたとへ苦しいことがあつても故郷はもう無いもんだと思つてゐると言つてゐたさうです。而して、其の手紙には、兄が死んだ日のことが書いてありました。

其の日は先月の二十一日で、小樽は非常に熱かつたさうです。其の日の午後三時頃、火のやうな赤い雲が空に流れてゐる頃、兄はある橋の上で腦溢血で倒れて、其の儘になつたのださうです。なんでも其の橋の上は常から人通りが多い處ださうで、兄の周圍に黑い人山を築いたといひます。其の中に兄の顏を知つてゐる者があつて、兄といふことが分りましたさうです。其の手紙の文面によりましても、兄は長らくの病氣の上に一定の職もなく困つてゐた樣子が分ります。其れで日頃から兄を知つてゐる二三の人々が死骸を引取つて火葬にして下されたことが分りました。僅かの兄の遺物とお骨が包になつて、其の手紙と同時に其の方のご親切で私共の處にとゞきました。たゞ兄から私に當て一本の手紙の來なかつたのをかへす〴〵も殘念に思ひます。あなたの處へ參りました手紙は兄が氣が狂つてからで、恐らく絕筆であつたやうに考へられます——と榮吉の義弟の手紙に書いてあつた。

彼はこの報知に接して、榮吉の哀れな最後を知ると共に、何となく胸を締め付けられるやうな悲しみを感じた。少なくも彼にとつては、この地上に起つた傷ましい、忘れ難い出來事であつた。この社會に住む他の百人の死よりも、彼一人の死の方が曾て感ぜざる怖しい意味と、深い暗示を彼に與へた。而して榮吉が氣が狂つて死ぬ時まで自分を思つてくれたことに對して、彼の精神は鞭打たれ、眼醒めずにはゐられなかつた。而して人間の靈魂が、靈魂に傳へる響きの嚴粛であつて、犯すことの出來ないのを知らずにゐられなかつた。

彼は机の抽斗を開けて、榮吉が戒めて書いて來た、色の變つた數種の引裂いた紙片を眼の前に出して、この世界に於て虐げられて、今は地下に眠る薄幸の知己に對しても、自分は奮闘して何か力強い足跡をこの人生に殘す、强者とならなければならぬと思つた。

彼は机の上にあつた鏡の面に自身の顔を映して、其の姿を睨んで言つた。一人や、二人の女のために墮落するやうなことで何うする。これから先はまだ長い。自分の身邊に起るどんなことにも打勝たなければならぬ。而して、飽迄自分の意志を押し通さなければならぬ。毅然として、人生の上に高く立たなければならぬ。而して、この刹那の生に於て、いまゝで誰でもが企てゝ限られたる少數者よりは握り得なかつた無窮の力を摑まなければならぬ。――斃れるまで奮闘をつゞけなければならぬ。自分は、今、このことを地下の榮吉――自分に對つて、よくも女のために失敗してくれるなと言つてくれた――彼の永遠に死せざる靈魂に誓つた。

彼はしばらく、自分の顔を見詰てゐた。すると忽ちいろ〳〵の姿と化つて、苦痛や、誘惑や、冷笑や、

侮辱や、破壞や、攻撃が旋風の如く自分の體の周圍に降りかゝり、渦巻く幻影を見た。而して、其の裡に飽迄毅然として動かずに堪へて、最後まで押し通して行く意志の自分を見た。

この自分を、俺は描くより他に、描く何があらうと彼は叫んだのである。——彼はうす暗くなつて行く、室の裡で、默つていつまでも自分の顔を見詰てゐた。

——一九一六、七作——

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區銀座三丁目　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立盛堂
京都市七條停車場前　三共社
仝　間之町七條　大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵劵代用必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直に其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正五年七月廿八日印刷納本
大正五年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話[illegible]下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

